

超常戦隊サイコレンジャー

ロッシーニ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テストをすれば即満点、ギャンブルをすれば大当たり。

滅法強い第六感のお陰で順風満帆バラ色の人生を歩んできたエリート大学生、北神龍我。

そんな彼がある日、エスパ―としての才能を見いだされてヒーローになることに！

オリジナルの戦隊モノ

過去に『にじファン』で連載していた作品を再構成しています

目次

登場人物紹介(その1)	1
用語集	5
第一話 超能力で大儲け	
プロローグ	7
競馬場	9
察知	18
変身! サイコレンジャー	20
合体! サイコバスター!	27
エピソード	34
第二話 戦士の休学 (前編)	
プロローグ	36
アスピョン	37
退学届	41
バトルin本郷キャンパス	51
第三話 戦士の休学 (後編)	
三つのヒント	58
秘密	61
家紋	64
調査	70
戦う理由	75
犯人	79
v s リンゴ型超力獣	84
エピソード	88

第四話 憎しみのパイロキネシス (前編)

プロローグ 90

再会 95

護衛 100

夜道 103

握手会 106

麗子の部屋 109

沸騰 113

第五話 憎しみのパイロキネシス (後編)

出動 117

純の回想 (1) 120

純の回想 (2) 135

謎の少女 142

独白 146

凌と純 151

翌朝 153

炎の決戦 155

エピローグ 166

第六話 食卓の騎士 (前編)

プロローグ 168

当番 171

牧村隼雄の超聴力 174

買い物 179

美食アカデミー 181

暗闇のバトル 184

第七話 食卓の騎士 (後編)

弁当屋

実食

海鮮弁当

突入

築地決戦

エピソード

第八話 サイコロレンジャーの秘密! (前編)

引越し

宝来邸

迷い道

宝来源三

火葬

vs 犬型超力獣

第九話 サイコロレンジャーの秘密! (後編)

倉庫前

捜査 (1)

捜査 (2)

捜査 (3)

真相

山道

エピソード

第十話 夢は氷のように (前編)

プロローグ

雄真の回想

274 270

267

260

254

249

246

241

235

232

227

220

217

214

210

208

203

197

194

192

188

狙われた少女	284
ロツカールーム	289
V S羊型超力獣	292
第十一話 夢は氷のように (後編)	
聡美の過去	296
シヨートプログラム	302
雄真と麻由美	305
V Sスチール缶獣	310
エピソード	315
特集	
登場人物紹介(その2)	322
第十二話 恐怖のポルターガイスト (前編)	
砂川響子の日常	327
悪だくみ	333
私立第一中野学園	335
清浄寺	341
警視庁特殊犯罪対策課(1)	344
警視庁特殊犯罪対策課(2)	348
第十三話 恐怖のポルターガイスト (後編)	
来客	355
議論	358
加賀谷陸	368
V Sモグラ型超力獣	372
エピソード	380
第十四話 帝都震撼! 国会大爆破! (前編)	

プロローグ	384
情報収集	389
龍我と凌	395
中島健吾	399
V S 雑誌型超力獣	409
第十五話 帝都震撼！ 国会大爆破！ (中編)	
凌の推論	415
荒川区区民公園	418
金さん	420
作戦会議	428
新垣次郎	434
V S オオムカデ型超力獣	440
懐中時計	443
サイコメトリー	446
第十六話 帝都震撼！ 国会大爆破！ (後編)	
国家公安委員長・宝来祐二	452
暗殺命令	456
議事堂潜入 (1)	459
議事堂潜入 (2)	463
議事堂潜入 (3)	468
激突！ 健吾と凌	477
決戦、永田町！	488
記憶破壊 (メモリーブレイク)	491
第十七話 サイコロンジャー暗殺計画 (前編)	
プロローグ	498

松岡医院	503
ルシヤ・クレシツチ	508
イエローvsバイク型超力獣	515
磁力(マグネティックフォース)	522
狙われたイエロー(1)	526
狙われたイエロー(2)	529
第十八話 サイコレンジャー暗殺計画(後編)	
超能力者・草薙新の災難	537
V S 包丁型超力獣	545
切り札	553
絶体絶命	559
サイコゴールド	566

登場人物紹介（その1）

☆サイコロレンジャーのメンバー

◎北神きたがみ 龍我りゆうが／サイコレッド

年齢：21歳

身長：176cm

特徴：童顔、やや丸顔、クリつとした大きい目

学歴：東京帝国大学文学部3年（第2話より休学）

プロフィール：

テストをすれば即満点、ギャンブルをすれば大当たり。持ち前の運と勘の強さでバラ色の人生を歩んで来た東大3年生。ある日からサイコロレンジャーの一員、サイコレッドとなつて悪と戦う事に。自らが超能力者である事にすら気づかない能天気な性格だが、高学歴なだけあつて知識は豊富。

能力：予知プレコグニション

未来を予言するような類いのもではなく、本人曰く「ただ、勘がよいだけ」。サイコロレンジャーたちと出会うまで、それが超能力であるとさえ認識していなかったが、その「勘」こそが彼の能力の真骨頂。研究が澄まされた第六感で戦闘においては相手の動きを先読みし、探索においては必ず敵の気配を感じて見つけ出す。選択肢のある問題ならば正答率は100%。競馬等のギャンブルでは数十億円を稼ぎだし、大学受験の際のマークシート式試験では満点を記録した経験がある。じゃんけんでは今のところ生涯無敗。

◎風祭かざまつり 凌りょう／サイコブルー

年齢：20歳

身長：175cm

特徴：中性的な顔、色白、スリム体型

学歴：中学校中退

プロフィール：

読心術の使い手で、その能力を生かした客観的分析力はサイコロレンジャー随一。冷静そうに見えて意外に短気。正義感が強く、人の心を

傷つける人間は決して許さない。

能力：マインドリーディング読心術

一般的には仕草や視線等から相手の思考を読みとる技術をそう呼ぶが、凌の読心術は別種。彼の読心術は他人の思考を言葉と同じように聞くことができるというもの。能力のONとOFFが切り替えられないタイプで、常に周囲の人の思考が聞こえている状態。その為、人混みに長時間いると自動的にエナジーを大量消費することになる。無敵の能力に思われがちだが、いくつか攻略法はある。読み合いを得意とするタイプなので、あまり考えずに攻撃してくる知能の低い超力獣とのガチンコバトルは大の苦手。

◎一色 いっしき 里菜 りな / サイコイエロー

年齢：23歳

身長：165cm

特徴：栗色・セミロングの髪、クツキリとした目鼻立ち

学歴：特になし（宝来財閥にて教育を受ける）

プロフィール：

メンバーが戦死等により次々入れ替わる中で唯一残ったサイコロエンジャー創設メンバー。現在は実質的にリーダーをつとめる。ややお堅い性格で「くだ」という断定的な口調が特徴。

能力：サイコキネシス念力

物体を遠隔操作する能力。直接的な戦闘に長けた能力で、周囲のモノを飛ばすなどして攻撃することもあれば、相手に直接かけて動きを封じることがもできる。超能力の中では比較的ポピュラーな能力だが、里菜のサイコキネシスはパワーの強さが特徴。並の超力獣なら押し負けないというレベルのサイコキネシスを使えるのは稀な例。ただし、その力の強さ故に身体に異変が起きている…？

◎ひがき 松垣 ゆうま 雄真 / サイコグリーン

年齢：23歳

身長：184cm

特徴：ツীবロックの髪型、きりつとした眉毛と目

学歴：中学校中退（自称）

プロフィール：

かなりの熱血漢。過去にボクシングでプロを目指した経験があり肉弾戦ではサイコレンジャー随一の実力を誇る。チーム内では能力を生かして、相手の居場所を割り出したり、敵能力を分析することを期待されているが、細々した事を考えるのは苦手。年長かつ勢いのある性格なので、里菜がいなきときはチームの指揮を執ることが多い。

能力：念サイコメトリー視

物体に残る人の残留思念を読みとる能力。少年時代は能力のコントロールができず、触れるもの全てから思念を読み取ってしまった。いた時期もあったが、現在ではほぼ完全にコントロールできていて、サイコレンジャーの安定した情報源になっている。ただし、死体そのものの残留思念を読むのは苦手。できないのではなく、恐ろしい映像が見えてしまうから。

◎百瀬ももせ純じゆん／サイコピンク

年齢：19歳

身長：152cm

特徴：黒髪ストレートのロングヘア、黒目が大きい、色白

学歴：中学校卒業

プロフィール：

見た目が幼いので少女の様にも見えるが年齢は19歳。いつもは優しく大人しい性格だが、敵と見なした相手に対しては好戦的な一面を見せることもある。

能力：念力パイクネシス発火能力

その名の通り、炎を発生させる能力。彼女の能力は怒りの感情と密接なつながりがあり、怒りが頂点に達すると能力が制御できなくなったり、また、反対に能力を使った後はやや好戦的になったりする節がある

◎アスピよん

サイコレンジャーの基地に住み着くウサギの人形。言葉を話し、歩き回る。テレパシー能力があり連絡係も務める。謎の少女とのつながりは…？

☆国生一派

◎国生 こくしやう あきでら

一派のまとめ役を務める背の高いオールバックの男。自分達、超能力者を「人類の救世主」と位置づけて、一派を組織。「神の力」を得るために、超力獣を使って人間のエナジーを狙う

◎真鍋翔太 まなべ しやうた

一派の最年少幹部。自分達の計画を邪魔するサイコロレンジャーに対して並々ならぬ対抗意識を持つ。普段は14歳の中学生

◎砂川響子 すなかわ きやうこ

金髪ショートカットが印象的な若い女。「○○なんですけどおー」などやる気の無い話し方が特徴。なお、普段は食品会社に勤めていて、事中だけは丁寧語を使う

◎五条巨 ごじやう わたる

ヤクザ風の派手な格好が特徴。粗暴な面が目立ち年下の翔太や響子にからかわれる事もあるが、仲間のピンチはほっておけないナイス

ガイ

◎早乙女神楽 さおとめ かぐら

巫女装束に身を包んだ国生一派幹部。能力と役割の関係上、基本的にアジトの外には出られないので、いつも暇潰しのネタを探している

用語集

☆サイコレンジャーの装備関連

◎サイコレンジャー

世界屈指の大財閥、宝来財閥によつて組織された、対超能力者戦闘チーム。能力を悪用するエスパーの逮捕および撃退が目的。また、時には能力者の生み出した怪物、「超力獣」との戦闘もこなさなくてはならないので、各員には身体能力を数十倍にも高める戦闘スーツが支給される。メンバー加入の条件は『超能力者であること』。これはエナジの扱いに慣れた人間やエナジの質が高い人間の方が戦闘スーツの制御に向いている為である。

◎サイコチェンジャー

サイコレンジャーに変身する為の腕時計型アイテム。変身機能の他に通信機能、GPS機能、収納機能が備え付けられている。

◎エナジーソード、サイコガン

サイコレンジャーの基本装備。一人にそれぞれ一つずつ与えられた武器。普段はサイコチェンジャーの中に分子化されて収納されており、変身後、その名前を叫ぶことで対象のサイコレンジャーの手に出現する。

◎デルタストライカー

複数人で力を合わせて使うサイコレンジャーのバズーカー砲。今のところ技は「ファイアストライク」と「エアロスライサー」「デッドプラズマ」の三種類。なお、ファイアストライクは純の能力に頼るところの多い技なので彼女がいない時は使えない。

◎サイコバスター

サイコレンジャーの戦闘用ロボ。普段は飛行機の姿(サイコフライヤー)で長距離移動に活躍するが、五機が合体することで巨大ロボツトに変型する。合体はメンバー五人揃わないとできない。

☆超力獣関連

◎超力獣
ちようりきじゆう

超能力者が生み出す怪物。基本的にはモノや動物に超能力者がパワーを与えることで生まれるが、高位の超能力者は自ら変身することも可能。

◎超力獣の親

超力獣を操っている人間。実際に超力獣をつくった人間である場合とつくった人間から超力獣を授けられた人間である場合の二通りがある。

◎エナジー

人間の生命エネルギー。オーラ、気、チャクラなどという場合もある。超力獣はこれを狙って人間を襲う。エナジーは人間なら誰にでもあるモノで、その生まれもった質や量は多くの場合、第六感や芸術的素養に反映される。なお、超能力者はこれを能力の発動に使う場合が多く、逆にいえば『エナジーの使い道を超能力に転化できる人間』こそが超能力者と言える

☆超能力関連

◎超能力

普通の人間では持ち得ない特殊能力のこと。作中ではサイコメトリ、パイロキネシスなどが実在。人によっては同じような能力を使うこともあるが、能力の威力や発動条件、制御方法、パンクの状態、健康へのリスクなどはそれぞれ全く異なる。

◎パンク

超能力者が能力の使いすぎで一時的に気を失ったり、体調を崩したりすること。

第一話 超能力で大儲け プロローグ

とある高級マンションの一室。

薄暗い室内で男女合わせて7人程が熱い眼差しでTV画面を見つめている。

画面に映し出されているのは戦争のドキュメンタリー映像。銃弾や爆弾のけたたましい音と眩い閃光、焼けただれた死体。そんなシーンの連続の後に作品のエンドロールが流れ出すと部屋の中央にいたオールバックで長身の男が立ち上がり語り出した

「人は愚かだ。争い、憎しみ合い、殺し合う。そして自ら滅びの道を歩もうとしている！　だが、神は人間に最後のチャンスを与えた。我々、超能力者は人類に残された最後の望み…。我々は愚かな人類を導かなければならない。人の力を超えた者として…」

「でも、国生さん。まだ信じられないよ。本当に僕たちにそんな力があるのかな」

部屋に集まった人間達の中から背の低い中学生くらいの少年がそう呟くとオールバックの男、国生は優しく答える

「今は、まだない。だからこそ、手に入れる。今よりさらに強い力を。神に等しい力を」

「そんな事…どう…やったら…!?!」

やや興奮気味な少年に対して軽く微笑む国生

「それは簡単だ。人間のエナジーを集め、それを我々の力に変えるんだ」

そう言う国生は部屋の隅までゆっくりと歩いていく。

そして、そこにあるペット用ケージの中から白いハツカネズミを一匹、慈悲を込めるように優しくつまみ出して机の上に置いた。

突然、巣穴から放り出されたネズミは戸惑ったように真っ赤な目をギョロギョロ動かしながら、机の上を円を描くようにクルクルと回

る。

一体、何が始まるんだろう？

一同がそんな疑問を抱いて身を乗り出していく。

少年はそこに出遅れた。

黙って立ち止まってしている間に、大人たちの大きな背中が邪魔で前が見えなくなってしまうのだ。背伸びをしたり、前の人の頭の間からムリヤリに前方を覗きこめば、何が起きているか位はなんとか把握できそうだった。しかし、それでは納得できなかつた。

今からこの場所で起きるであろう出来事はしつかりと自分の目に焼き付けなければならぬ。そんな気がする。

少年はそんな想いから他の者たちをかき分けて前進する。そして、少年が最前列へたどり着いたその時であった。

—— ドンツ！

大きな音がした。

国生が、先程、ネズミを取り出した時の優しい手つきとは正反対の乱暴な動作で机の上を動き回るネズミの身体を押しえつけたのだ。

強く握りしめられたハツカネズミはもがき苦しみ、四本の足をバタバタと激しく動かす。国生はそんな些細な抵抗すらもはねのけるように、ネズミを押しえる左手に更に力を込める。

そして、反対の右手をその上にかざして念じる。

するとネズミが青白く発光し始めた。

そしてカツと目を見開き、一同を見る国生

「諸君、見たまえ。これが超力獣だ。我々はこれを使って、凡人たちからエナジーを吸収し、自らの力とする…!!」

そして、国生の手の中のネズミの姿が奇妙に変形していくと、その場に集まった面々が次々に驚嘆の声をあげた

「おお、なんとということだ…。」

「これは！」

競馬場

ファンファアレーがレースの始まりを告げるとゲートが開き16頭の馬が一斉に飛び出した。

府中競馬場に馬の蹄の音が一斉に響きわたる。

スタートの直後、馬上の騎手たちが馬に鞭を入れると、最初、集団でスタートした馬達の距離が徐々に離れていき、いくつかの集団が形成されていく。

今日の府中競馬場に駆けつけた一万人以上の観客達は皆、一様に息を飲んでそれを見つめていた。

競馬場の観客席というのはお世辞にも上品な人々の集まる場所とは言い難い。現に、今日来ている観衆のほとんどもそうだ。髪を金色に染め、ドクロのあしらわれた派手なTシャツを着たガラの悪い若者。ハゲ散らかした頭から太い血管が浮きでている、いかにも気の短そうなオヤジ。明らかにみすばらしく金の無きそうな格好をしているのに、何故か大量の馬券を購入してそれを固く握りしめるホームレス風の男。見渡す限り、そんな下品なクセに口だけうるさそうな連中ばかりだ。

ところが、レース中の場内は奇妙なほどの静寂につつまれていた。皆、話す余裕すらなくらいレースの内容に見入ってしまったているのだろう。ある者は馬券を、ある者はスポーツ新聞を、ある者はハンカチを。グチャグチャにしながら、血眼でトラック内の様子を見つめている。お金のかかったレースというのはそういうモノなのだ。

序盤の主導権争いが終わり、レースが中盤を迎えたところでトップに立ったのはゼッケン1番・ブロッケンエースだった。各スポーツ紙がこぞって1位予想をした今日の本命である。

猛烈なダッシュ力を持ち、逃げ切りが得意な馬。一度波に乗れば誰にも止められない。

それが競馬ファンや専門家たちの持つ、ブロッケンエースのイメー

ジであった。今日、ブロッケンエースに騎乗する中山雅志騎手にもそれがわかっていたのだろう。だからこそ、中山騎手はスタート直後から今までずっと鞭を入れて、ブロッケンエースに全力ダッシュを続けさせていた。

序盤で後方の馬を全て大差で引き離す。そして最後まで逃げ切る。そういうレースプランだったのだ。

勿論、全速力で走り続ければ一番人気のブロッケンエースとて最後まで持久力が持つかはわからない。でも、あまりにも絶望的な大差がついた時、反撃する気力すらなくなるのは人も馬も同じだ。中盤まで後続を引き離せていれば問題ない。ブロッケンエースは今までもそうやって勝ってきた。

そろそろいい頃か。リードが十分なら念の為、終盤に足を残しておきたい。

そんな考えもあつただろうか。ブロッケンエースの馬上にいる騎手はチラリと後方を確認した。しかし彼はそこでいつもとは違う、見慣れない光景を見た。

ゼッケン8番、ムテキセンタイがすぐ後ろをピッタリとついてきていたのだ。

それに慌てたのか、ブロッケンエースの騎手は激しく鞭を入れてムテキセンタイを突き放そうとする。しかし、そう簡単にムテキセンタイは離れない。ムテキセンタイが頑張っているのもあるが、序盤から飛ばしてきたブロッケンエースに疲労の色が見えてきたというのが大きかった。

試合はマッチレースの様相を呈し始めた。ムテキセンタイがブロッケンエースを追い抜いたと思えば、ブロッケンエースも負けじとムテキセンタイを追い抜く。馬と騎手達による激しい攻防が続いた。すると静寂を保っていた場内がにわかになぎわめきだす。理由はゼッケン8番・ムテキセンタイにあつた。実はこの馬、デビューから百戦無勝で有名な馬なのだ。そんな馬がブロッケンエースにここま

で付いていくなんてこと、予測するのはほぼ不可能とっていい。

ゴクツ―

そんなざわめいた場内の観客席。新島剛と坂田雅彦は身を乗り出し食い入るようにレースを見つめながら同時に唾を飲み込んだ。そんな二人の表情は喜びと不安と緊張が33.33333333%ずつで混ざり合ったような、なんとも不可解なものである。

何故、新島剛と坂田雅彦がこんな妙な顔つきをしているのか。それは二人が不可能を可能に変えていたからであった。なんと新島剛と坂田雅彦は今日のレースを1位ムテキセンタイ、2位ブロッケンエースと予想し、馬券を購入していたのだ。それも、今月の生活費全てを賭けて。

二人は、今日一緒に来ている『もう一人の友人』のように奇妙な強運を持っている訳ではない。今日の予想は現役東大生である二人が馬の状態、練習環境、会場のコンディションなど様々な状況を一月以上リサーチして考慮した上で判断した結果なのである。だから、この予想を外してしまつたらその努力が全く無に還ってしまう。

「頑張れ…、頑張ってくれ…。俺はお前に今月分の全財産を賭けたんだ…」

「頼む頼む頼む頼む…」

金儲けに異常なまでの執着を見せる新島剛と坂田雅彦は、自分の賭けている馬の勝敗など全く気にしていないかのよう。「すごいねー、大接戦だあー」などと言いながらただ無邪気にレースそのものを楽しんでる『もう一人の友人』をあからさまに無視して拳を握りながら呟く

そんな事を言っている間にレースはクライマックスを迎えた。最終コーナーを回ったところで体一つ抜け出したのはゼツケン8番・ムテキセンタイだ。そして一方、そのムテキセンタイとマッチレースを繰り広げていたゼツケン1番のブロッケンエースは序盤の飛ばしすぎが祟ったのか、徐々に迫りくる後方集団に飲み込まれつつあった。

「うお、うお、うおお…！」

「このまま、このまま、このままいけば…！」

「うおお…、行つけえー!!」

二人が勝利を確信し始めたその時だった。ムテキセンタイに後方から忍び寄る影。ゼツケン7番サムライレンジャーが最後尾からもの凄い勢いで追い上げて来たのだ。

そういえば忘れていた…。

二人だけでなく会場全体がそう思った。

ゼツケン7番・サムライレンジャーは今日の本命、ブロッケンエースの対抗馬、一番手としてあげられていた有力馬で、レース終盤、後方からの追い上げを得意とする馬である。

ただ、このレースに限っては序盤から中盤にかけてのマッチレースに気を取られて誰もがその存在を忘れていた。

しかしサムライレンジャーはその間、ずっと我慢して後方で力を溜めていたのだ。そして終盤、国内きつての実力者である自分を忘れていた観客たちに怒りを示すが如く、猛烈な追い上げを開始したのであった

「オイオイ、マズいゾ、マズいゾ」

「逃げろく!!」

しかし三馬身、二馬身、一馬身…と段々その差は縮まっっていく。そしてゴール直前、ついにサムライレンジャーはムテキセンタイを追い越した

「ギャー」

「ヤメロー!!」

叫びは届かずそのままの順位でゴール。

その瞬間、二人はその場に崩れ落ち、膝をついた

「そんな…。僕の計算は完璧だったはずなのに…」

「大穴狙い…成功だと思ったのに…。まさに悲劇だー!!」

「うわーん」

「うえーん」

人目もはばからず泣きじやくる二人は明らかに周囲からひかれて

いる

二人を避けて段々と周りに人が少なくなっていく中、横にいた青年は平然と新島の肩を叩いた

「ねえねえ」

しかし、新島が気づく様子はない。

「ムムツ、聞いてない…。ようし…」

青年は新島の耳に手を当て大声で叫んだ。

「ねーねーってバアア!!」

「ギアアー!! うるせー!!」

あまりのうるささに思わず耳を覆ったた打ちまわる新島。彼に代わって坂田が呆れるように今日一緒に来ていた『もう一人の友人』に対して返事をした

「おい、龍我。いきなりなんだよ」

龍我と呼ばれた童顔の青年はトラック中央にある今のレース結果が表示された巨大な電光掲示板を指差して言った

「あれってさあ、7番が1位、8番が2位、1番が3位って事？」

「ああ、そうだろ」

「じゃあ、これって当たってるよね？」

龍我は坂田に馬券を手渡した。

「ん？ あ、え、ええー!!」

坂田は大きく目を見開いて何度も馬券と掲示板を見直して、その驚くべき事実を確認すると、驚きのあまり、かけていた眼鏡をずり落としながら絶叫した。

「あた、あた、当たってるううー!!」

「やっぱりそうか。じゃあ、お金に替えてこよつと」

絶叫する坂田のテンションとは裏腹に龍我はあっけらかんと言い、予め脇に置いてあった旅行用トランク2つとショルダーバックを持ってその場を立ち去っていった

「おい、おいちよつと待てよ」

未だ放心状態の新島を引きずるように引き連れて坂田も龍我に続く

「おめでとうございます。配当金は二億三千万円です」

換金所の係員の女が満面の笑みを浮かべて言う

「じゃあ、これに詰めてください」

龍我はトランクを差し出した。

「見ろ、お金がドンドン出てくる…」

「すげ…」

新島と坂田は大金に見とれているが龍我は金の詰まったトランクを引きずりながら足早に歩き出した

「うーん、重いなあ。ちよつと二人ともさあ、一つずつ持ってくれない？」

「いいけどさ…」

坂田は遠慮気味に言う

「あのさ、お前って本当に競馬初めて？」

「うん、そうだよ」

「本当に何の知識もなしに選んだのか？ 誰かに聞いたとか、そういうんでもないのか？」

「だからそうだって。なんとなく、勘だよ」

「言っただろ？ こいつ、昔から勘がいいんだよ」

新島は呆れたように言うが、坂田はそれを聞いてもまだ納得できない様子だ

「いや、噂には聞いてたけどさ…。ジャンケン負けた事ないとか、勘だけで東大受かったとかさ。でもここまできるとちよつと異常だよな…」

「うーん、自分でもよくわかんないだよねえ…。なんで毎回こんなうまくいくのか…。」

龍我は自分でも不思議そうだったがすぐに表情を切り替え笑顔でピースサインをしてみせた

「でも、なんかラッキーだから、まあいつか!!」

「あれは、黒だな」

換金所の行列から約10メートルほど離れた場所にある、コンクリートでできた柱の裏。競馬場から立ち去ろうとする龍我たちの後ろ姿を見ながら女は呟いた。

やや茶色がかった髪の毛を風に靡かせながら物陰に立つ彼女。目鼻立ちがクッキリとしていて、更に背が高くスレンダーな体格なので、同年代の若い娘が恋人や友人と会話する時に見せるように、こやかな表情を作りさえすれば相当な美人のはずだ。

でも、そんなことには誰も気づかない。

レースが終わったばかりの競馬場には人が溢れかえっている。

しかも、そのほとんどは男性客だ。

それなのに、彼女とすれ違う人々は彼女に声をかけてくるどころか、まともに目を合わせようともしない。

まるで、そこにいるのが、若く美しい女性ではなく、学校の前に立つ二宮金次郎像かなにかだった時のような無関心な態度で通り過ぎていく。

彼女の『標的』を狙う眼光は、その美しさをかき消してしまうほどに鋭いモノだったのだ。

一方、彼女の方も周りのことなど気にしてはいなかった。

彼女が、その鋭い眼光を向けるのは『標的』のみ。

一挙手一投足を注視し、親の敵であるかのように遠くから激しく睨みつける。

さて、『標的』は今ちようど、人並みに揉まれながらも、競馬場の出口までさしかかったところだ。

そろそろ、追いかけないと、奴を見失ってしまう。

十分に距離はとった。さあ、尾行再開だ。

そんな考えから、彼女が一步目を踏み出そうとすると、後方から「アイツ、どうやら黒みたいだぜー」

とやや低い声が聞こえてきた。

それに気づいて後ろを振り返ってみると、そこには髪の毛の短い男がいて、縦長に丸めた紙で手のひらをポンポンを叩きながらつつ立っていた。

眉毛がキリリと整っていて、こちらもまた、美男ではあるのだが、右の方に重心を傾けた体勢がなんとなくなく、見る者にだらしない印象を与えてしまっている。

別に自分のパートナーに美男を望んでいる訳ではないが、現在は『任務中』なのだから、もう少し自覚をもって、締まった表情をしていて欲しいものだ。

女は男にわざと聞こえるように溜息をついてから言った。

「雄真か。何故こんな所にいる？ お前にはあの男の素性を調べて欲しいと言っておいただろう」

「もう調べ終わったんだ」

雄真と呼ばれた男は胸を張り、自慢げな表情を見せた後、先程から手のひらの上で野球の応援グッズのように雑に動かしている丸めた紙を女に差し出した。

「なるほど、仕事が速いな。実に感心だ。だが、貴重な資料を雑に扱うのはやめて欲しいものだな」

女は雄真から紙を受け取ると、それを丁寧にまっすぐ伸ばして内容を確認しだした。

「北神龍我。21歳…。ほお、東大生か」

女の呟きを聞いて、雄真はニヤリと笑った。

「そこからして怪しいだろう？」

「ああ、全くだ」

「それにこの男、これまでに数回ギャンブルやクイズ番組で一千万円以上の賞金を荒稼ぎしている。これはもう確定だろ。里菜、お前は どう思う？」

雄真に里菜と呼ばれた女は静かに頷いた。

「間違いない。ヤツも我々と同じ超能力者だ。このまま後をつけて、一人になり次第捕捉する！」

察知

ゴロゴロガラガラー

龍我たち三人は金の入ったトランク2つとシヨルダーバックを引きずりながら帰宅中だ。

「あ、俺こっちだから」

曲がり角にさしかかかって龍我がそう言った

「そうか。じゃあこれ」

二人は龍我が先程、競馬で獲得した賞金の入ったトランクを手渡す「大丈夫？ 一人で持って帰れる？ かなり重いけど」

坂田が龍我を心配する

「確かに…。もう、家すぐそこだし大丈夫だとは思うけど…」

困った表情を見せた龍我

「あっ！ そうだ！」

そう呟いてから思いついたように言う

「これ山分けしない？ 持って帰る分も少なくなるし」

しかし、新島はやや動揺したように手を素早く横に振る

「いやいや、いらないうってー」

それを聞き、首を傾げる龍我

「なんで？」

さつきまで自分たちの賭けた馬をあんなに必死に応援して、お金を欲しがっていたのに。今月分の全財産を賭けたんだからしばらく生活にも困るはずなのに。龍我にはそれが疑問だった。

しかし、新島にその真意は伝わらなかつたようだ。呆れてものも言えない新島に代わって、坂田が言う

「さすがにこんな大金は貰えないっしょ。コレじゃあご祝儀どころの話じゃないし」

「そっか。残念だなあ…。じゃあ、またね。フンツ」

龍我は唸り声をあげながら荷物を重そうに持ち上げて、また歩き出した

「お前、大金持ってるんだからな!! 強盗に気をつけろよ!!」

新島が龍我の後ろ姿に向かって叫ぶと坂田がその頭を叩いた
「声がデカいんだよ！ みんなに知らせてどうする!？」

「ターゲットが予定通り一人になった」

「よし、次の角を曲がったところで捕まえるぞ」

物影に隠れて雄真と里菜が腕時計型の通信装置で連絡を取り合う。
そこへ一歩ずつ近づく龍我。

「よし…」

計画通り。そう思った雄真が飛び出す準備をしていると里菜から
声がかかった

「待て雄真。様子が変だ」

そう言われ様子を見ると龍我は立ち止まって何やら考え事をして
いる

「何やってんだよ、アイツ。早くコツチに来い!!」

慌てた雄真は物陰から静かに叫ぶが、それが龍我に聞こえるはずも
ない

「うーん、なんだかコツチは嫌な感じがするな…。よし、アツチの道か
ら帰ろう」

そんな独り言を言って、龍我は雄真と里菜が待ち伏せていた道とは
逆の方向へ行ってしまった

「あ、コノヤロ!! なんて勘のいいヤツ!! これもヤツの能力なのか
!？」

雄真がただただ驚いていると腕についた通信装置から里菜の声が
聞こえる

「雄真、私が言ってるのはソツチじゃない…!」

「どういう事だ…? まさか…!!」

「ああ。凌と純にも至急来てもらおう」

変身！ サイコロレンジャー

「ああ、お金って量が多くなるとホント重いよな…」

二人の友人と別れた後、そんな事を呟きながら一人歩く龍我。あれから5分程歩いて、龍我はあることに違和感を感じていた。自身の住む家からほど近い、いつも歩いている道。

そこを歩いているだけなのに、何故だかいつもより足取りが重く感じられたのだ。

何でだろう？ 重い荷物を持っているからかな？

龍我は自らに問いかけてみたがそれも違う気がした。

そういう物理的な意味で足が進まない訳じゃない。

この道、さつきからなんだか嫌な予感がするのだ。

やっぱり、さつきの所、まっすぐ行けばよかったかな…。

龍我はそう思った。

さつきの曲がり角でも、誰かに見られているような、そんな感じかして思わず道を代えたのだが、あれはここまで嫌な感じじゃなかった。

今感じている『気』にはもの凄く邪悪なモノを感じるのだ。

強盗か何かにつけられているのだろうか。

とはいえ、ここまで家の近くまで来ているなら、早く家に帰って鍵を閉めているのが一番安全だろう。

そう考えた龍我が歩く速度をやや上げた瞬間だった。

後方から龍我に声をかける者がいた

「オイ、貴様、待て」

明らかに脅しの入った言い方、そして暗く冷たい威圧感のある声だった。

しかし、それでも龍我は冷静だった。

それはこれから起こる事を既に予測していたからでもあり、予測していなかったからでもあった。

「ああ、やっぱり」

声をかけられた龍我はまず、そう呟いた。

誰かつけてきてる気がしてたんだ……。ここで引きとめられるってことはやっぱり強盗だろうな……

自分の思考の中で勝手にそう結論付けた龍我は碌に相手の姿も確認しないまま、振り向きながら、半ば決め付けたように言う

「あなた強盗さんですよ？ お金に困ってるなら半分くらいあげますよ……って……？？ ん？ あ？ ええー!!」

龍我はそれを全て言いきる前に叫び声をあげた

なぜなら龍我の目の前にいたモノが、明らかに人間のカタチをなしていなかったからだ

信じられない……。

そんな思いから目をこすり、改めて相手の姿を足元から確認していく龍我

普通の人間の二倍は太いかと思われる、ドツシリとした足。隆々とした筋肉の上にフサフサと柔らかそうな白い毛の生えたアンバランスなボディ。鋭く尖った爪。そして顔面を見ると、頬まで裂けた口と出っ張った鼻、上方向に伸びた耳。更に印象的なのは赤くつぶらな瞳だ

龍我の目の前に現れたのは巨大なネズミの怪物だった

「ネズミ……？？ デカイ……!!」

思わず声を上げる龍我

「キシヤー」

怪物は戸惑う龍我に構わず、そう唸り声をあげながら近づいてくる

「えっ、えっ!! なんなんだよ、コイツ……」

どういう事だ？ どういう事なんだ？

徐々に近づいてくる怪物から後ずさりしつつ、頭の中で考えを巡らせる龍我

必死の思考の末、彼はある結論にたどり着いた

龍我は目を見開き、その結果を怪物に向かって叫んだ

「マスク……!! そうだ！ あなた、マスクかぶってるんですよ。強

盗だから!!」

「どうだ! まいったか!」

龍我はそう言わんばかりの表情で怪物を見た。

しかし、怪物の様子に全く変化は見られない。

あれ? おかしいな…。

これ以上、考える事すらできない龍我は徐々に近づいてくる怪物を見つめながら、ずっとそんな事を思っていた

そして遂に、怪物が目の前に迫った

その間合いはおそらく30cm程。手を伸ばせば届く範囲だろう

その距離に立つと、龍我が怪物の顔を眺めようとするとはぼ真上を見上げるようなカタチになった。龍我の身長が170cm台後半だから、怪物は身長2mはあると考えていい

やっぱり、デカイな。怖い。

そう思うと、龍我はなんとなく自分の死を予感した。

そして、先程からフリーズしていた思考が走馬灯のように動きだし、さつき自分が考えていた事への違和感にも気づき始めた。

「あれ…? 強盗なら顔だけ隠せばいいのに…。なんで体まで完璧に仕上げてるんだろ? そんな必要ないよな…」

緊張からか、自分でも何故そんな事を言ったのか、わからないままに、あまりにも場違いな言葉を口走った龍我。怪物はそんな龍我の身体をももの凄い勢いで殴りつけた

「ぎゃあああ!」

腹部に強烈な痛みを感じると共に、自分の身体が宙を舞ったのに気づく龍我

そして次の瞬間、「ドン!」と脳に響くような音が聞こえ、背中にも猛烈な痛みが走った

どうやら、背中から地面に落下して、アスファルトに身体を打ちつけたみたいだ

「つく…。痛ツ…。」

これまで味わったことのないような痛みを感じつつも、「倒れていたら危ない」という思いが龍我を必死に立ち上がらせる

顔を上げると、あれほど大きかった怪物の姿が半分ほどに縮んでいた

違和感を感じて周りを見渡す龍我

龍我の立っている場所は、先程、怪物に殴られた場所から5m程の場所にある道の端のゴミ捨て場だった

ということは、龍我はあの一撃のみでここまですっ飛ばされた事になる。

それを把握すると、現実を直視できていなかった龍我也ようやく自身に迫りくる危機に気づいた

「すごい力だ…。ただの強盗じゃ…ない!!」

「感じるぞ…：貴様の中から。尋常ならぬ量のエナジーを…」

背を向けて必死に逃げようとする龍我だったが、怪物はいとも簡単にそれに追いついた。そして龍我の身体を持ち上げて口の辺りに手をかざす。

「ふ、ふぐぐ!!」

もの凄い力で龍我には抵抗もままならない

「貰うぞ、貴様のエナジーー!」

もうダメか…：龍我が思ったその時だ

龍我の耳の後ろから「ハアツ」という聞き覚えのない誰かのかけ声がある。すると、ひとりでに怪物の体が後ろに吹っ飛んだ。

何が起こったんだろう？

呆然とする龍我の身体の横をすり抜けて怪物に向かっていく二人の姿。

背の高いモデル風の女と髪の短いスポーツマン風の男

「サイコチェンジャー!!」

そう叫ぶと二人の姿が光に包まれ、一瞬にして変わった。

その姿は昔TVで見ていた特撮ヒーローそのもの。二人とも顔を覆う頑丈そうなフルフェイスのヘルメットをかぶり、女の方が黄色、男の方が緑の戦闘用スーツを身にまとっている

「いくぞ!!」

「おお!!」

「エナジーソード!!」

二人が同時に叫ぶと手元にどこからともなく剣が現れた。

「え、何?! どうなってるの、これ!?!」

勘のいい龍我もさすがに理解しきれない。

二人はその剣で怪物に切りかかる。

「ギャー」

怪物は奇っ怪な叫び声をあげて後方へ吹き飛ぶが、獣のような動きですぐに体勢を立て直し、地面に手をかざす。するとアスファルトからなにやら黒い戦闘員数十体が浮き上がってきた。

「チチチチチ…」

奇怪な声を上げながら、気味悪く動作を続ける戦闘員達。

「行けえ!」

怪物から指令が出ると、数十体の戦闘員が一気に二人の戦士に襲いかかった

「チツ、アルファイターを生み出せるタイプか…。面倒な!!」

黄色い戦士はそう吐き捨てて戦闘員を迎え撃つ。

「デイリヤァ!!」「ハアアァ!!」

二人はそれぞれ叫び声をあげながらそれをバツタバツタと切り倒していった

「すげ…」

龍我はしばらく二人の剣技に見とれていたが、突如緑の戦士から声がかかる

「オイ、早く逃げろよ!! 一匹ソツチに行つたゾ!!」

そう言われてよく見てみるとアルファイターが一匹、二人の攻撃を

すり抜けてコツチに向かってくる

「逃げなきゃ…くっ…痛ッ…」

走り出そうとするも先程、打ちつけられた時の傷が痛んで動けない。

その間にもアルファイターは龍我に迫る。

今度こそ、ダメか…。

そう思った時、またも龍我は救われた。

突如アルファイターが青白い炎を放って燃えだしたのである。

「ギギギ…」

アルファイターがうなり声をあげて灰化していく。

そして次の瞬間、どこからともなく現れた、冷たい目の青年が苦しむアルファイターの脳天を真横から剣で突き刺した

「見られたのか…」

青年は龍我を見下ろしてそう呟くと続けた

「君さあ、もう大丈夫だと思っから終わるまでそこで待っててくれな
い？ 君の処理はそれから決めるから」

「はあ…はい」

事情が飲み込めない龍我には気の抜けた返事しかできなかつたが青年は満足したようだ。それを聞くと共に現れた黒髪の少女に声をかけて共に怪物へ向かっていく

「ああ、じゃあそういう事で…。じゃあ、純。僕らも行くか」

「うん!!」

「サイコチェンジャー!!」

先程の二人と同じかけ声をあげて腕についた機械のボタンを押すと、その姿はそれぞれ、青年が青い戦士、少女がピンク色の戦士になった。

青とピンクの戦士が加勢すると数十体いたアルファイターはたちまち数を減らしていく。しばらく戦うとアルファイターはついに全滅し戦士達の敵はネズミの怪物だけとなった

「さあ、トドメをさしてやる!! デルタストライカー!!」

黄色の戦士が叫ぶと剣の時と同様に戦士の手元が発光しだし、どこからともなく巨大なバズーカ砲が現れた。

そしてそれを四人で抱えると全員が同時に叫んだ

「デルタストライカー、フォーメーションA!! ファイアストライク!!」

バズーカ砲からプラズマ弾が発射されて怪物は爆発、消滅した。

合体！ サイコバスター！

怪物を撃破した四人は皆同様に、腕の部分を軽く叩く
すると、たちまち変身が解けて四人の姿が変身する前のものに戻っ
ていく

「超力獣自体は大したヤツではなかったが、アルファイターを召還す
るとはな」

まず、黄色の戦士に変身した長身で髪を茶色く染めた女が言った。
すると、青い戦士に変身した冷たい目の美少年と緑の戦士に変身し
たスポーツ刈りの男が応える

「うん。かなりレベルの高い超能力者がつくった超力獣だろうね」

「あーあ、面倒くせえ事になりそうだな。とにかく、帰って『アスピよ
ん』に報告だな」

「ま、彼女の事だから言うまでもないかもしれないけどね。今の戦い
も見てたかもしれないし」

「とにかく、帰ろ帰ろ」

緑の戦士に変身した男が言うとき青と黄色も続いて歩きだそうとす
るがピンクに変身した見るからに大人しそうな黒髪少女がそれを制
止する

「ちよつと、ちよつと。彼はどうするの？」

彼女はそう言って道に座り込んでいる龍我を指差した。

「あ、忘れてたぜ！ この極悪人の事を！」

緑が思いだしたように言うとき、四人が恐い顔をして龍我を囲む
「ん？ あ、あの…。私、何か悪い事をしましたかね…？」

龍我が言うとき黄色が応える

「ふん、白々しい。知らないとは言わせんで、この罪人が!!」

「えっ、俺が!!」

龍我が言葉の意味を理解できない内に青が続ける

「それに、僕らの姿も見ちゃってるしね。ただで帰す訳にはいかない
よ」

「そんなあ…。全然、意味がわからないよ」

「さあ、話は後でゆっくり聞いてやるからとにかくコツチへ来い!!」
緑が龍我の腕を強引に掴む。

その時、「ドンツ」という音と共に大きく地面が揺れた

「えっ、何!? 何なの!!」

「オイ、あそこを見ろ!!」

ピンクと黄色が順番に叫び、一同が黄色の指差した方向を見てみると、そこには先程の怪物が巨大になった姿が建物の隙間から垣間見えていた。

「えー!! 何だよ、あれ!!」

驚いた龍我が叫ぶ

「巨大化か…。まさかここまでの能力者が相手だとは…。凌、サイコバスターの方はどうなってる?」

黄色の問いかけに青に変身した男、凌が応える

「うん。里菜と雄真が彼を調査してる間に最終調整も完了したから進はできるよ。でも…合体はサイコレンジャーが五人揃わないとできない…」

「合体しないで…勝てるかな…」

「かなり無理っぽいな」

「くそっ…」

ピンクの純、緑の雄真、黄色の里菜が順に発言して地団駄を踏む

そんな混乱の中、唐突に凌が龍我を指差した

「あのさ、彼、使えないかな?」

「え、俺!?!」

龍我は自分自身を指さし、目をパチクリさせる

雄真が怒鳴る

「なんでだよ、コイツは素人の上に罪人だぜ!?!」

「だから罪人って言うのやめてよ…」

龍我の嘆願を無視して凌の話は続く

「でも、この状況で超能力者がここに落ちてたら使うしかないでしょ?」

凌の発言に対しても、里菜は顎に手を当て沈黙を保っている。

「どうやら相当迷っているみたいだ。だが、しばらくすると溜息をつき、

「ふむ…やむを得まい…。オイ、北神龍我。コレを使つて変身しろ」
と、ポケットのの中からもう一つ、彼らが腕につけている腕時計型のアイテム「サイコチェンジャー」を取り出し、龍我に投げてよこした
「えっ、全然状況が読み込めないんだけど…。てか、超能力者？ 俺そーいうんじゃないんだけどなあ…。あはは」

「この場に及んでまだそんな事を…。ええい、この際、それはどうでもいい。我々に協力するのか、しないのか。早くどつちか言え!!」
「えー、いきなりい？ そんなあ…」

龍我の脳天気な反応に里菜はかなり苛立っているようだ。

「貴様あー！」

そう叫んだ彼女がおもむろに拳を振り上げたので、龍我は覚悟して思わず目をつぶった

——バシツ

しかし、そう音がした後、しばらく待っても覚悟した痛みがなかなかやつて来ない。

違和感を感じた龍我が目を開けて状況を確認すると、そこには振り上げた里菜の手をガツチリとつかんだ凌の姿。

「どうやら、彼が里菜を止めてくれたらしい」

凌は里菜の目を見て言う

「里菜。言いだしっぺの僕が言うのもなんだけど、いきなり言っても難しいよ。一旦、落ち着こう。こんな時だからこそさ」

凌はその言葉を受けた里菜が腕を下ろすのを確認すると、今度は龍我に語りかける。

「ごめん。混乱するのも無理はない。でも今、起きてる事は全て現実だ。信じられないかもしれないけど、全て受け入れて聞いてほしい」
凌の静かな口調で龍我もなんとなく落ち着けた。龍我は意を決して頷く。

それを見た凌はまず、建造物の谷間から覗く巨大化したネズミの怪物を指さした

「まず、あそこで暴れまわってるアレなんだけど。あれは超力獣っていうんだ」

「ちようりきじゆう?」

龍我は聞きなれない単語に首を傾げるも、凌は満足そうだ

「そう。超力獣。超力獣っていうのは超能力者が自分の生命エネルギー“エナジー”をモノや動物に分け与えて、それを凶暴化させた生物なんだ。ここまでいい?」

当たり前だが、信じられない。信じられるはずがない。しかし、聞くと決めた以上、龍我もそれを事実として受け止めるしかなかった
「うん」

「僕たちは、超能力犯罪対策の為に結成された武装組織・サイコレンジャー。普段からああいう超力獣や超能力を悪用するエスパーと戦ってるんだ」

「なるほど、はい…」

納得できないところはいくつもある。だが、わかるはずもないので、龍我は適当に相槌を打つ。凌も苦笑いして、それに気づいている様子だったが、さすがに全ての疑問に構っている暇はないのだろう。話を続ける。

「で、今の状況なんだけど。超力獣を操っている人間は、その力量によつては、超力獣は巨大化させる事ができるんだ」

「それが、アレって事なんだね…」

龍我が先程の彼と同じように大きくなった超力獣を指すと凌も頷く

「超力獣が巨大化した場合、僕たちは“サイコバスター”っていう合体ロボを使って対抗するんだけど、合体はサイコレンジャーが5人揃わないとできない…。でも、僕たち4人しかないんだ。だから君の力を貸してほしい」

そう言われ、彼ら全員の顔を改めて見渡す龍我

青い戦士に変身した凌。黄色の里菜。緑の雄真。ピンクの純

確かに4人しかない

「なッ、なんでちゃんと人数揃えておかないの?!」

龍我のツツコミに、また苦笑いを浮かべる凌

「えーと。サイコレンジャーも危険な仕事だから人手不足で…」

思わず口ごもる凌に代わって、一番深刻そうな顔をしていた純が必死に言う

「てゆーかね、おととい、一人死んじゃったから人数が足りないの!」

「え! 死んじゃったの!」

龍我は驚愕した。

龍我が今日起きた出来事を体験して抱いていたのは「なんだか特撮ヒーロー番組の世界に迷い込んだみたいだ」という思いだった。しかし、子供の頃に見ていたヒーローモノでヒーローが死んでしまった番組なんてあっただろうか。

それはまあ、現実的に考えれば危険な仕事だというのはわかるのだが…。

それを言われてしまうといくら協力してほしいといわれても急に決心するのは難しい

その様子を察したのか、雄真は「余計な事いいやがって」とばかりに純の身体を押しつけて龍我の目の前に躍り出る。

「あのな、サイコレンジャーになるつつつてもな。誰でもいいってわけじゃないんだ。超能力者としての資質がなければ、サイコレンジャーの戦闘スーツは使いこなせない。だから頼むよ。今日一日だけでいいんだ!」

「それなら余計にムリだよ! 俺、超能力者とかじゃないし!」

龍我の発言を聞いて里菜が痺れを切らした

「いいか、アレを見ろ! こうやって迷ってる間にどんどん街が破壊されていく! お前なら救えるかもしれないんだ、この街の人達を!

どうする、やるのか、やらないのか!」

里菜の指差した方を見ると巨大化した怪物が街を好き放題に壊しているのが見えた。

先程、凌に言われてアレを見た時より、心なしか、周りの建物が減っているような気がする。あの怪物に破壊されてしまったのだろうか。

仕方なく頷く龍我

「わ…わかった、やるよ…」

「ホント!? わー、ありがとう」

純がお礼言うが龍我は不満げだ

「てゆうかこんな風に言われたらやるしかないじゃん…」

「いいか? 変身の方法は…」

里菜が説明しようとするが、龍我は最後まで聞かずにサイコチェンジャーのボタンを押す

「さいこちえんじゃあ〜。」

龍我の身体が赤い戦士に変わる

「こうでしょ? さつきから見ただからわかるよ」

「とにかく、これで頭数は揃ったな。サイコバスター出撃!!」

雄真が叫ぶと小型飛行機が五機、龍我たちの真上まで飛んできた

「よし、飛びのれ!!」

「サイコチェンジャー!!」

里菜が合図を出すと他三人と里菜はすぐさま変身しながら飛行機に乗り移るが、初めて変身した龍我はどうしていいかわからず一人取り残される

「うわあ、あの人たちジャンプ力高ッ!!」

「そうやってただ感心しているとサイコチェンジャーから里菜の声が聞こえてきた

「オイ、驚いてる場合じゃない。お前もジャンプして飛びのれ。強化スーツによってお前の身体能力は数百倍にパワーアップしてるから、飛んでみる。できるはずだ!」

その声に促されて龍我も一足遅れてサイコバスターのレッド機に飛び移る。

五人がそれぞれ乗った飛行機は自動操縦により進んでいき相手の後ろ側につけた

「よし、この辺りでそろそろ合体しよう。北神龍我、よく聞けよ。合体はレッド機の主導で行われ…」

「うーん、これかな。よいしょっと」

龍我が里菜からの通信を聞きもせず操縦席右側のレバーを引くと五人の飛行機が変型を始めて、たちまち巨大なロボットになった

「はあ…」

里菜はため息をついて腕組みした。続いて雄真が怒鳴る

「オイ、お前さあ、人の話を聞いてからやれよ！ 壊れたらどうする！！」

「あ、ごめん。なんとなく、勘でわかったからさあ。俺って電子レンジとかも説明書読まないで使っちゃうタイプなんだよね…」

「そんなもんと一緒にするなツ!!」

「ねえ、揉めてる場合じゃないよ。前を見て、前を」

凌の声に従って前面のモニターを見ると怪物がこちらへ駆け寄って来るのがわかった

「あ、やばッ！ ええい、これか！ これか！」

慌てた龍我が手当たり次第にボタンを押しまくる

「オイ、だから話聞けよ!!」

雄真が叫ぶが龍我が操縦されたサイコバスターは次々に技を繰り出して怪物を追い詰めていく

「すごい…操縦の仕方なんて教えてないのに…なんで?！」

純の疑問に里菜が答える

「どうやらこれがコイツの能力ならしい。一種の予知能力だな。本人曰わく物凄く勘がいいそうだ」

「食らえ、食らえ、食らえー!!」

龍我は一人で怪物をダウンさせてしまった

「よし、トドメだ！ ここからは僕に任せてもらうよ…龍我！ エナ

ジーソードDX!!」

凌がそう言うときサイコバスターの手元に剣が現れる

「ハァ!!」

剣を振りかざすと怪物は大爆発を起こした

エピソード

「あー疲れたあー。ホント何なんだよ、これ……。でも勝ったから、まあいつかあ」

超力獣を倒した後、レッド機から出てきた龍我。
未だに何が起きたのかわからない。

龍我は頭を掻きながら千鳥足で地上に降り立った。

そんな龍我に向かって、一足先に降機していたサイコレンジャー達の内、サイコピンクの純が駆け寄る。

「すごい、すごい、すごいよお、初めてなのにあんなにうまくサイコバスターを動かせるなんて!!」

彼女がものすごく目を輝かせながら褒めるものだから、龍我もちよつとやぶさかではなくなってしまった。少し照れながらも彼女の言葉を素直に受け取った。

「え、そう？ えへへ」

「うん。本当に大したものだよ」

そして、純の次に近づいてきたサイコブルー・凌がそう言うのと、続いてグリーンの雄真、イエローの里菜も駆け寄り、龍我を口々に褒め称えた。

「いや、今日は本当に助かった。お前がいなかったら正直ヤバかったかもな」

「この件に関しては素直に礼を言うべきだな。ありがとう、助かったよ」

里菜など、そこから更に右手を差し出し握手を求めて来た。

変身する前や戦闘中は龍我に対して一番厳しい態度で接してきて、鉄拳を振るおうとすらしめた彼女がそこまでしてくれる。

怖い人かと思ったケド、話せばわかってくれる。本当はいい人だったんだ！

感動した龍我は里菜の手を堅く握り返した。

「いや、俺は本当に場の空気に流されてやってみたら、たまたま勝っちゃったって感じで、何もしてないっていうか。いやー、そんなに誉

められると照れるっていうか。あはは」

そうして、しばらく見つめ合った後、龍我はそろそろ手をひこうとしたが里菜がなかなか離してくれない

「いや、そんな強く握られたら余計照れちゃいますよう〜」

龍我の反応を見ると里菜は満面の笑みで言った

「今日は本当に助かった。でも、それとこれとは別問題だ」

里菜は懐からおもむろに手錠を取り出したかと思うと、次の瞬間、合気道のような動きで龍我の腕を捻りながら身体の後ろに回り込む。

そして、ガチャッと龍我の腕に手錠をかけてしまった。

「あの、これはいったい…?」

龍我が恐怖と疑問と腕を締め付けられる苦しみで声を震わせながら問いかけると、里菜は表情を一変させ、龍我のことを睨みつけながらキリツとした声で叫んだ。

「北神龍我、超能力を使い不当に金銭を受理した疑いで拘束する!!」

「えー、しよんなあー!!」

龍我の情けない声が戦闘後の夕焼けぞらに響き渡っていく。

そして、里菜に加えて雄真が龍我の動きを抑え込む。

龍我は二人に襟首を掴まれて引き摺られながらどこかへ連れ去られていってしまった。

第二話 戦士の休学（前編） プロローグ

暗い病院の一室。ベッドに眠る女性の上に手をかざす人影。その手が発光し部屋全体を照らし出すと、その光を浴びた鉢植えの中の枯れた花が生氣を取り戻していく

「もうすぐ、もうすぐだ…」

人影は呟くがそこでガクリと崩れ落ちた

「ダメだ…力が足りない」

そこへ一人の男が歩み寄る

「お困りかな？」

「あなたは？」

「君の力を高める方法を知る者…その人を救う方法を知る者とも言うっておこう」

「え…母さんが助かるんですか!? どうやって!」

「君も超力獣は知っているね？」

「はい」

「超力獣を使い他人のエネルギーを吸収する。そうすれば君の能力は急激に高まるだろう」

「え…でもそれじゃ、他の人を犠牲にする事に…」

「お母さんを助けたくないのか」

男は微笑む

「もう答えは出てるだろ？ 誰を犠牲にしても助けたい人がいる…違うか？」

人影は声を震わせる

「はい…そうです…母さんを…母さんを…助けたい…」

「いいだろう。君の願い、受けとった」

男はお見舞いの果物の上に手をかざし念をかけ始めた

アスぴよん

「だ、か、らッ！ ホントにホントに超能力者なんかじゃないんだってばあ!!」

ソファと机、冷蔵庫など必要最低限の物だけが置かれ、飾りといえばソファ後ろの棚の上にウサギのぬいぐるみ一つあるくらい。その他、白い壁やフローリング模様の床には装飾の一つもない殺風景な部屋の中。そこに龍我の声が響く。

ここは東京都内のある廃ビルの中にある貸し事務所。サイコレンジャーの秘密基地である。

龍我は昨日、超力獣を倒した後、サイコレンジャーから「超能力を使い不当に金銭を受理した疑い」などという身に覚えのない罪に問われ、ここへと連行されていた。

堅いソファの上座り、里菜と雄真による取り調べをほぼ徹夜で受け続けてきた龍我。そろそろ、頭がクラクラして気分も悪くなってきたが、里菜はそんなことにはお構いなし。脳にガンガンと響くような大声で龍我に尋問する。

「賭博や投資、クイズ番組出演などでお前がこれまでに稼いだ額は約40億円にもものぼる！ 何故疑問に思わない!? これでも自分が超能力者であると自覚していなかったと言えるのか!？」

「もう、なんで信じてくれないかなあ。確かにちよつと不思議には思ってたけど…自分に都合のいい事が起こる分には問題ないし、気にしてすらなかつたんだよッ」

「だいたいお前、稼いだ金は何に使ってるんだ？ どうせ遊び呆けるんだらうー!」

「まさか。半分位は寄付しましたよ。世界の恵まれない子ども達の為に」

すると、今度は雄真。彼はやや芝居がかったやり方をした。

「えっ、そう…なのか…。何ていい話なんだ！ 感動した！ うえーん…つてごまかされてたまるかあ!! お前まだ20億持つてるじゃねえか!!」

里菜と雄真による激しい尋問が続き、雄真は時折机をダンダン叩いて龍我を威嚇している。

そこへ事務所二階から階段を降りて、凌と純がやってくる

「ちよつと、そんなに怒鳴ったら可哀想じゃない。龍我君脅えてるよ」
純が眉を下げて心配そうに言うと、雄真はその言葉に反発して凌に同意を求めた。

「全然だよ、コイツ、ケロツとして反省の色もねえ。凌、お前もコイツに言っつてやっつてくれよ。そろそろ素直になれつてさ」

「あのさ、その人、嘘は言っつてないと思うケドな…」

凌がボソリと言うと、雄真は今までの厳しい顔つきを一変させた。

眼球をギョロギョロと動かして、「マズイ」と思っつているのが一目でわかるようだ。顔色は青ざめているようにすら見える。

「えっ、そうなの？」

「ああ、僕にはわかる」

凌が目を瞑りながら頷くと、その場に沈黙が続き、雄真は更にバツの悪そうな顔になった

そして、里菜がため息をついた

「凌が言うのでは仕方ないだろう。取り調べは終了だ」

急な展開に驚く龍我

「えっ、おしまい？」

「そうだ。おしまいだ」

里菜にそう言われて首を傾げる龍我

今まであんなに激しく責め立てていたくせに凌が一言言っつたらもうお終いな…？

龍我はこの奇妙な事の流れに違和感を覚えたが、持ち前の能天気さがそれ以上の事を深く考えさせなかつた。

「おしまいって…でも、まあいつか。容疑が晴れたんだし」

龍我がそう独り言を言っつた瞬間である。後ろの方から幼い女の子の声が聞こえてきた

「そうね、ここは無実が証明された事を素直に喜ぶべきね」

「ん？」

あれ、ここにはサイコレンジャーの4人と自分しかいないはず…。なんで女の子の声なんて聞こえるんだろう？

疑問に思っただけの方向を見てみるが、そこには誰もいない。あれ、物が何一つ入ってなくて必要あるんだかないんだかわからない棚と、その上に妙に目の位置が離れた間抜けツラなうさぎのぬいぐるみが一つ置いてあるだけ。

「あれ、誰もいない…」

気のせいだったのかな…。

龍我が首を傾げてまた別の方向を向くと、再びあの声が聞こえてきた

「ちよつと、ここのよ、ここの」

そこで龍我はもう一度後ろを振り返り、棚の上をよく見てみる。すると、先程のうさぎの人形が二足歩行で歩きながら喋っているのに気づいた。

「しゃ、しゃべった!!」

思わず人形を持ち上げて叫ぶ龍我

「ちよつと、うるさいわね」

人形は迷惑そうだ

「ちよつと、ちよつと、この人形しゃべるんですけど…」

龍我はメンバー達に異変を訴えたが凌が至って冷静に返す

「ああ、それしゃべるんだよ」

「しゃべるんだよって…。それで済むの？」

「ちなみにその人、ここで一番偉い人だからあんまり乱暴に扱わないでね」

「そうなの…？」

龍我は思わず人形に聞いた

「そーなの。私、アスピよん。よろしくね」

人形は偉そうにそう言った

取り調べから解放され、廃ビルから外に出てきた龍我。

ビルの下での駐輪場で時計を見て眩く

「ふう。思ったよりは早かったかな。この分ならゼミは休まなくて済みそうだし」

龍我は張り切ってスキップするように走り出した

退学届

「おっはよー!!」

東京帝国大学文学部・岡部ゼミ研究室。龍我はそのドアを元気よく開けた。

研究用の本棚に囲まれた教室の中では既に小さな机を7人ほどの学生が囲んでおり、その周りで背が高い坊主頭の青年が忙しなく動き回りながら資料を配布している。

おそらく、今日の発表で使うものだろう。

「田中君。遅くなって悪いんだけど、そのレジユメ、俺にもくれないかな？」

研究室に入ってから第一声、龍我が資料を配布する青年・田中にその声をかけた。

すると、皆一様に下を向いて資料に目を通していたゼミ生たちがやや不思議そうな顔をして一斉に龍我のいる方を見つめ始めた。

みんな、どうしたんだろう？

俺の顔になにかついているのかな？

龍我はそう思って自分の顔面を両手でペタペタと撫でまわして感触を確認してみたが、少なくとも自分では特別いつもと変わったところはなないように思える。

では、なぜ彼らは自分の事をそんな目で見るのだろうか。

事情がわからない龍我。彼らに負けず劣らずの不思議そうな顔で固まっていると、ドアから一番近い席に座る、色白で餅のような肌をした女性が首を傾げながら声をかけてきた

「ん？ あれ、龍我くん？」

彼女はいかにも驚いたような高い声を出してこちらに何か言っただけのような態度をしているが、それだけでは龍我にも彼女の意図が掴めない。

「ん？ あ、えっと、おはよう。絵美ちゃん」

とりあえず、普段通りに挨拶してみるものの、やはり彼女の表情に変化はない。

どうやら、お互いにお互いの事情が掴めていないらしい。
そう判断した龍我。

「あれ？ みんなどうかしたの？」

と声に出して聞いてみると、先程の色白な女性・絵美の隣に座る、つけまつげとマスカラで目の周りを真黒にした派手なメイクの女性が言った。

『どうしたの？』じゃないよ。今日来ないんじゃないの？』

「え…？ 何言ってるんの、多恵？ 一体、誰がそんなこと…？」

ますます訳がわからない。龍我が聞き返すと、また別のゼミ生が返事をした。

答えたのは髪をやや長く伸ばし、オレンジ色のフレームの眼鏡をかけたチャラチャラとした印象の青年。この前、龍我と一緒に競馬場に行った坂田雅彦だ。

「いや、さっきお前の知り合いって言う人が来て、そう言っただけど…知らないのか？」

「うん…」

龍我が頷くと、坂田も顎に手をあてて深く考え込むような仕草を見せた。

額に皺を寄せて深刻そうなその表情からは、龍我のことをとても心配してくれているというのが伝わってくる。

事情はよくわからないけど、なんか、みんなのことを心配させて悪いな…。

龍我は坂田の様子を見てそんな風に思ってしまったが、そんな心境を知ってか知らずか。ゼミ生の中にそんなムードをブチ壊すように大声で発言する者がいた。

「そうそう、それでな、龍我！ お前の用事を伝えに来た二人組の内の一人なんだけどな。それがなんかモデルみたいな超美人じゃねーか！！ お前あんな美人といつ知り合ったんだよー、今度紹介してくれよー！」

年の割に厳つい印象を与える、ゴツゴツと骨の張った顔面を最大限

までほころばせながら語るの、坂田と同様、昨日、龍我と一緒に競馬場に出かけた新島剛だ。

「オイオイ、龍我が怪しい奴に付きまとわれてるかもしれないってのにお前なあ！」

と、龍我のことを心から心配している坂田は新島に説教を始めようとする。

だが、むしろ彼は少数派だったみたいだ。

坂田の発言は、先程、龍我に多恵と呼ばれた派手なメイクの女性の大声にかき消されてしまう。

「じゃあ、私はもう一人のクールな感じのイケメンね!! 龍我君、今度紹介して!! ね、ね!!」

どうやら、心配してくれていたのは坂田一人だけだったらしい。

龍我は先程、『みんなのことを心配させて悪いな…』なんて考えたことをつくづく後悔してしまった。

でも、そんなことはどうでもいい。彼らはいつもこんな感じで騒がしい。

龍我はそれよりも、自分が来る前にこの研究室にやってきて、自分の欠席を伝えて行ったという二人組の正体が気になっていた。

ゼミ生たちの証言をまとめると、二人組の内の一人は『モデル風の美人』もう一人が『クールな感じのイケメン』だという。

龍我は彼らの正体に心当たりがあった。

昨日から今日にかけて自分の身柄を拘束した『サイコレンジャー』の内の二人。サイコイエローの里菜、サイコブルーの凌がまさしくそんな印象だった。

数週間前から自分の事を超能力者だと疑い調査していたという彼らなら、自分の細かい経歴や最近の行動も知っている。自分がここに来る前に先回りすることも容易いはずだ。

でも、それならそれで疑問がある。

先程まで続いた取り調べで、なんだかわからないが自分への疑いは晴れたはず。

どうして今また、彼らが自分の周りをウロチヨロとする必要がある

のだろうか。

そんな風に思つて、新島や多恵のおねだりを無視するように立ちつくしている、ゼミ生たちが囲む机の向こう。研究室の奥から声がかかった。

声の主は小柄で頭に白髪が目立つ60代くらいの男。このゼミの担当教授、岡部教授であった。

「あのさあ、北神君。今日そんなに大した事やらないから。他に用事があるならそんなムリヤリ出席しなくてもいいよ。出席点はおまけしてあげるから」

どうやら教授はいつも温和な龍我が新島たちのマシンガントークを無視しているのを見て、龍我の身体の具合がどこか悪いのだと思つたみたいだ。

「ああ、はあ…」

正直、出席を免除してもらえらるなら授業をサボるのもやぶさかではないが、人の好意を利用するのはどうなのか。

龍我が怠け心と良心の間で迷つてやや曖昧な返事をする、龍我がここにやってきてからずっと一人で教室の中を動き回っていた坊主頭の青年がおもむろに近づいてきた。

「先生、ダメですよ、帰らせちゃ。なんてったって今日は僕の発表なんだから。はい、龍我君」

そう言つて彼は『鳥羽伏見の戦いについて 田中利保』と題されたレジュメを渡す。15枚組になった分厚い資料だ。龍我はそれを受け取り、そういえば、前回の発表の時も長々とした話を聞かされてウンザリしたと思ひ出す。

「うわあ。悪いけどちよつと興味ないかも…田中君、話長いしな…」
龍我が聞こえないように呟くと、

「ん？ 北神君なんか言つた？ どうする、出るの？ 出ないの？」
教授が龍我を急かしたので龍我は遂に決断した。

「えーとじゃあ今日はお言葉に甘えて帰ります」

「えー！ 残念だなあー」

龍我は肩を落とす田中に対して

「えへへ、田中君ごめん。」

と満面の笑みで謝罪する。

これから地獄のように長ったらしい発表を聞かなくてはならない他のゼミ生たちが恨めしそうな表情で睨みつける中、龍我は

「じゃあ皆さん、さようなら」

と元気よく部屋を出て行く。

「結局、いったい誰があんな事を…どういう事なんだろうなあ…？」

龍我は首を傾げながら東大・赤門をくぐりぬけた。

田中利保による長い長い発表を聞かなくてよくなったのは嬉しいが、やはり、自分の欠席を伝えるに来た二人組の正体は気になる。

このままではせっかく降って湧いた休みなのに、楽しむこともできそうにない。

二人は本当に自分の予想したように、サイコレンジャーのメンバーなのか。

そうだとしたら、何をしに来たのか…。

考えても考えても全く持ってわからない。

サイコレンジャーの事務所ビルにまで戻って問いたざすことも考えたが、できれば彼らには、あんな危険なことには、もう関わりたくないというのが本音だ。

「わっかんない！ とりあえず、家にかえるか…」

結局、何の解決方法も見出せなかった龍我はそう独り言を言って、自宅に戻る為に門を出たところを左に曲がる。

房総半島の南端の街にある実家を出て、現在、一人暮らしの龍我。

昨日のことは忘れ、誰にも邪魔されず、もう今日は一日寝て過ごそうと決めたのだった。

大学前の大通りを数分歩くと、大きな交差点に差し掛かった。

そこを曲がらずにまっすぐ行つて裏路地に入ると龍我の暮らすア

パートがもう目の前にあるのだが、残念ながら、龍我はそこから先にとどり着けなかった。

交差点の前で信号待ちをしていると

「おーい、龍我!!」

と、唐突に声をかけられたからだだった。

その声に従って、道の反対側を見てみると、黒い車が一台止まっていてその両脇に若い男女がいる。絵に書いたような美男美女なので、周囲の人たちはドライブ中のカップルか何かかと思っっているかもしれないが、二人の関係はそうではない。

悪の超能力者から世界を守る組織の仲間同士。

サイコブルーの凌とサイコイエローの里菜であった。

龍我からすれば、正直、あまり会いたかったとは言えない相手だったが、声をかけられたのだから仕方がない。逃げたりでもしたら、また、変な言いがかりをつけられかねない。

それに、凌と里菜がここにいるということは、やはり研究室に現れたのは彼らだったということだ。ついでに理由も聞いてこよう。

そう考えた龍我。渡ろうとしていた方向とは別の方向へ横断歩道を渡って、凌と里菜が待つ場所へ近づいていく。

「二人共、なんでこんな所に?」

龍我が声をかけると

「丁度よかった、学生課はどこだ? 用があるんだ」

と、里菜はその質問に答えず言う。

やや腹の立つ言い草だが、今更そんな事を言っても仕方がない。彼女はもうやらこういいう話し方をする人らしい。

龍我はそう判断して、おとなしく彼らを学生科まで案内することにした、

「ああ、じゃあ案内するよ。車は龍岡門の方に駐車場があるからそこに止めてね」

さて、龍岡門から敷地内に入り、通路をまっすぐ進んだところ。ここに東京帝国大学・御殿下記念館がある。

外観は構内にある他の建物と同様に赤レンガの伝統的デザインだが、それとは裏腹に内部は近代的だ。トレーニングジム、プール、クライミングウォール、研修室などの設備があり、また、脇には芝生のグラウンドが併設されている。

その御殿下記念館の地下一階。龍我は里菜と凌を連れて、そこにある学生支援課窓口までやってきた。

里菜は窓口につくと、おもむろに胸ポケットから一通の封筒を取り出し、そこに腰かける係の女の目の前に置いた。

この大学の学生でもない里菜がこんなところに何の用があるんだろう？

さつきからずつと疑問に思いつつも、直接的に質問することを躊躇していた龍我。彼女が係員に手渡したそれが一体何なのか気になって、思わずその手許を覗き込む。

すると、封筒の真ん中には衝撃的な三文字が記載されている事実に気がついた。

『退学届』

「ちよーつと待ったあ!!」

龍我は封筒を急いで取り上げた。

それもそのはず。

「あの、これってもしかして…」

「そうだ、お前の退学届だ。学生課に提出したら、学科窓口にも提出しなくてはならないそうだから一通も作ってきたんだ。全く骨が折れる。」

悪びれる様子もなく頷く里菜を見て、やっぱりか、と龍我思った。

『退学届』とは、つまり、学生が在学中、何らかの理由で自発的に学校をやめる際、それを願う出る為の書類だ。里菜や凌はこの大学の学生ではない。

ならば、この場で学校に退学届を提出できるのは自分だけということになる。

「なに勝手な事してくれてるんですか!？」

「いいじゃないか、どうせ試験でも能力使ってズルして合格したんでしょ」

凌が言うのと係員の女鋭くが反応する。

「え、ズル!？」

「いや、違います!!」

龍我はすぐさま否定して里菜を問い詰める

「どういう事だよ」

「さつき、お前の量刑が決まったんだ」

「量刑!？」

「違います!!」

龍我はまたも勘違いした係員を注意して続ける

「なんでだよ、無実は証明されたんじゃないの!？」

「いや、証明されたのはお前に自覚がなかったという事だけだ。お前の罪が消えたワケではない」

「え、罪!？」

「だから違います!!」

龍我はいちいち過敏に反応する係員の女にペースを乱されているが、凌が里菜に続いて説明を続ける

「で、量刑は一年間の社会奉仕って事に決まったワケ」

「働いてもらうぞ、しっかりな」

「つまり、そういうことか…」

里奈と凌のいう「社会奉仕」がサイコロレンジャーとして戦う事だと予想はついたが場所が場所なので言えない。

「その間は学校来られないでしょ？ だからいつそのこと退学して仕事に集中したらどうかと思ってさ」

凌が当然だとも言うような口調で言うので龍我も思わず熱くなる。

「いや、なんでそういう話になるの!？ 学校くらい通わせてよ！ そ

うだ、国民には学ぶ権利というものがあつてだな…そつちこそ法律…いや、憲法違反じゃないか！」

それに対して、里菜は胸を張って答えた。

「知るか。我々は皆、中学校もまともに通っていないぞ」

「自慢する事じゃないでしょ！ 中学校は義務教育だよ！」

再び、窓口で封筒が提出される。

「退学届け」の「退」の字に×がつけられ横に「休」という字が書かれている。

龍我はサイコロンジャーの二人との交渉の末、なんとか退学を免れ、一年間休学し、その期間で『社会奉仕』の処分を受けることになったのだ。

「これで満足か？」

里菜の問いかけに龍我は口を尖らせる

「全然満足じゃないよ、一年も休学しなきゃいけないなんて…留年決定じゃん…」

「ま、仕方ないよね。君が悪に手を染めるから」

凌がいうと学生課の係員はまた反応した

「え、悪?!」

「あのさ、凌。ワザとでしょ」

書類を提出した後、反対を向き歩き出す龍我に里菜が声をかける

「どこへ行く?」

「帰るよ、休学中だから授業ないし」

「それならもう一度、事務所に来い。サイコロンジャーの心得を叩き込んでやる…。あ、あとこれだな」

そして、里菜は龍我にサイコチェンジャーを渡す。

そんなことしていると、突如、あの幼い声が聞こえた

「ちよつと待って…」

「ん？ アスぴよん？」

声の主を探してキョロキョロする龍我に凌が言う

「探してもいないよ、これテレパシーだから。僕らの頭の中に話しかけてて、他の人には聞こえない」

「明日香、どうした？」

里菜が姿の見えないアスぴよんに問いかける。

「その辺りに超力獣の気配がするの…」

「何!? 正確な位置はわかるか？」

「今日、能力の調子がちよつと悪くて…。でも、大学の構内にいる事は間違いないわ。雄真と純にもそつちへ向かってもらってるから。里菜達も探ってみて…!」

「わかった」

里菜は一息ついてから言う

「北神龍我、予定変更だ。実地訓練に移るぞ」

バトルin本郷キャンパス

アスピよんからの奇妙な通信によって、大学のどこかに超力獣が潜んでいるとの情報を受け取った、龍我、里菜、凌の三人。

大学構内の地理に精通する龍我の案内に従って、超力獣の探索を続けていた。

「いいか、超力獣とは超能力者がその能力によって生み出すモンスターだ。当然、それを撃破するのが今日の作戦目的だが、撃破対象である超力獣の姿がまだ見えない以上、我々はまず超力獣の親である能力者を探して…」

里菜は凌、龍我と共に構内を忙しなく歩き回りながらも、今回の任務について新人の龍我に対して真面目に説明している。整った顔立ちでいながら、愛想を少しも感じさせないピリリとした表情が里菜が任務にかける真剣さを感じさせる。

しかし、彼女のそんな思いを受け取らず、龍我は丁度食堂に通りがかったところで、呑気な言葉で里菜の説明を遮ってしまった。

「ここが学食。あ、あれが赤門ラーメン。とつても美味しいんだよ」

龍我の指差す方向には、食事が出来るのを今か今かと待ちわびながら並んでいる学生の列と、その先頭から赤いソースのかかった中華麺をお盆にのせ満面の笑みで机に戻っていく体格のいい学生の姿があった。

時刻は丁度、お昼時でお腹が空いてくる頃だ。

凌は思わず、

「ホントだ。美味しそう」

と龍我の話にノツてしまう。

そんな様子を見た里菜は少し呆れ顔だ。

「北神龍我、我々は大学の見学に来たワケではない」

そして、大きく溜息をついた後、続けて言った。

「しつかりしろ。明日香の調子が悪くて、雄真もない今、探索で頼りになるのはお前の勘だけなんだ。どうだ、嫌な感じのする奴はいない

か？」

そんな風に言われても、龍我にピンとくる節はなかった。

「うーん、別にいつも通りだけどな……」

「くそつ、ここも白か。オイ、もう少し人が少なくて身を隠すのに適した場所はないのか？」

「うーん……」

「えい、役に立たん！」

里菜がそう言った丁度その時。龍我の脳裏に稲妻の様な衝撃が疾走った。龍我は感じ取ったのだ。

龍我達の後方。食堂の入口の前の階段のそのまた向こう。

その方向から若い女性の「キヤー」という高い悲鳴が聞こえた『気がした』

「今、何か聞こえなかった!？」

気配を感じた龍我が里菜と凌に問いかけるが、二人は首を傾げるばかりだ。

「いや、何も聞こえなかったと思うが……」

「龍我には何か聞こえたの？」

凌が聞くと、龍我は軽く頷いて後を振り返る。

「どこへ行くつもりだ!？」

龍我が態度を豹変させた事に違和感を覚えているであろう里菜が、今にも走り出そうかという龍我に対して、叫ぶように語りかけるが、龍我は一切コチラの話を聞こうとはしない。

そのまま、入口前の階段を三段飛ばしで駆け上がって行ってしまった。

その様子を見て、里菜と凌は互いに顔を見合わせ頷きあった。

きつと、龍我の第六感が超力獣の気配を感じ取ったに違いない。

その認識を確かめあった二人も龍我に続き、食堂の出入口を飛び出していった。

「マズい、たぶん今の絵美ちゃんと多恵の声だ…！」

龍我は階段を登りきり、大学敷地内の石畳の通路を走りながら呟いた。

「絵美？・多恵？ 知り合いか!？」

突然の固有名詞でよく事情がわからない里菜が龍我に併走しながら尋ねると、龍我は吐き捨てるように言った。

「ゼミの友達!!」

三人が必死に走つてとある講堂の裏にある細い路地たどり着く。

そこには座り込む色白の女とその横に這いつくばり倒れるギャル風の女の姿。

「絵美ちゃん！・多恵！」

龍我が彼女らの名前を叫びながら駆け寄ると、色白の女性・絵美だけが身体をガタガタと震わせながらコチラの方を見た。化粧の濃いギャル風の女性・多恵の方は地面に倒れたまま動かない。

「絵美ちゃん！・大丈夫!? 多恵はどうなってるの!？」

必死になった龍我はやや放心状態にある絵美を気づかう余裕もなく、大きな声を出して彼女を問いたがす。

絵美は喉に詰まった言葉をムリヤリ吐き出そうとする様に辿々しく答える

「私は、大丈夫…。多恵はよくわからない…わからないの。いきなり怪物に襲われて…頭打つて…。でも、今はとにかく！ アツチを！ アツチを助けてあげて！」

そして、絵美は人差し指で真っ直ぐ前を指した。

その方向には、林檎の面影のある超力獣に掴まれる男性が二人。これまた龍我の友人、新島剛と坂田雅彦であった。

「剛！・マサー！ くそっ、サイコチェンジャー!!」

龍我は絵美や坂田、新島が目の前にいるにも構わずサイコチェンジャーを使用。

サイコレッドに変身すると、一目散に超力獣に向かっていった殴りつける。

超力獣はその衝撃で地面に倒れ込むのと同時に新島と坂田から手を離れた。

「みんな、大丈夫!?!」

2メートル以上はある超力獣の手から離れて地面に落下し、地面に叩きつけられるカタチになった坂田と新島に龍我はそう声をかける。すると、二人は目を丸くした。いきなり、怪物に襲われて、しかも助けに来た赤い戦闘用スーツに身を包んだ男が、自分の友人の声を発したのだから無理もない。

助けられた坂田はサイコレッドに変身した龍我に声をかけられて思わずこぼした。

「ええ！ 龍我!?! お前、どうした、その格好!?!」

その様子をやや離れて見ていた里菜と凌。

両目を手で覆い呆れた様子だ。

「ああ…」

「アイツ、こんな人の見てる所で変身するとは…」

そうして、凌と里菜が変身を躊躇っているところへ一足遅れて現場に向かっていた雄真と純が到着した。

「おい、そんな事言ってる場合じゃねえだろ。サイコチェンジャー!」

雄真は、一人が見られてしまったんだから後は何人見られても同じだろう、とでも言うように二人の事を追い越して堂々と変身する。

それを見て里菜が叫び声をあげた。

「チツ、仕方ない。我々も行くぞ」

凌と純もそれに続いた。

「サイコチェンジャー!」

「ヤァ!」

龍我に続いて四人が殴りかかると超力獣は勢いよく後方へ吹き飛び、建物の壁に激しく衝突した。

「純、雄真。お前らは被害者を頼む。超力獣は私と龍我、凌の三人で相

手をする」

「わかった」

超力獣が怯んでいる隙に里菜が指示を出すと純と雄真が被害者達に駆け寄る。

超力獣に向かい合った里菜と凌は間合いをとり、臨戦態勢で相手の出方を注意深く確認しているが、それに構わず、龍我は一人、暴発するように超力獣の丸い身体に突き進んでいった。

「お前…許さないぞ!!」

龍我はエナジーソードで超力獣に切りかかると、面白いように連撃が決まって、超力獣はもがき苦しんだ。

「凄い、戦いの勘も一流だ…」

龍我の戦闘を見て、凌は感心する。きつと、彼は能力で相手の出方が何となくわかるのだ。そう思ったからだ。しかし、里菜は不満そうさ。

「あのバカ、あんな滅茶苦茶に切りかかったら連携がとれないじゃないか…」

「食らえ！ トドメだ！」

一方的に超力獣を傷めつけて、追い詰めた龍我が相手にトドメを刺そうと飛び上がった瞬間、サンドバックにされていた超力獣が突如「ドウルルル！」と鳴き声をあげる。

「待て！ 龍我！ 危ない！」

それを見て、里菜はとっさに叫んだ。

龍我自身も妙な胸騒ぎを感じ、空中で咄嗟に身体を捻るようして方向転換しようとするが、既に遅かった。

超力獣の口から光弾が発射され龍我にヒットする

戦いを見つめる被害者達と純、雄真

「あの…これなんなんですか？」

色白の女、絵美がやや朦朧としながら聞く

「ごめんなさい、今は言えないの…。そんな事より雄真！」

純がそういつて互いに頷くと雄真は変身を解いて倒れている多恵に手をかぎす

「あの、何してるんです!?!」

「いいから見てて」

純が坂田に言う

「くっ、きたきた、きた、きたぜ…」

雄真の脳裏に多恵の記憶イメージが浮かび上がる…

「うわああー！」

光線を食らって里菜と凌の足下まで吹き飛ぶ龍我

「北神龍我、気持ちはわかるが落ち着け！ そんなザマでは奴に勝てない！」

「くそっ…」

立ち上がって再び臨戦態勢になる龍我とそれに続こうとする里菜と凌だったが、超力獣はそれを見ると敵に背を向けて逃げ出した

「待てっ！」

三人はそれを追うが曲がり角に入ったところで超力獣の姿を見失った

「どこだ!?!」

「行くな、深追いは危険だ」

さらに道の奥まで追っていかうとする龍我を里菜が制止する

「くそっ…」

龍我は膝を叩いた

—ピーポーピーポー—

戦闘から数分後、救急車のサイレンが鳴り響く中、絵美に付き添われて多恵が搬送される様子を見守る雄真と純の元に三人が戻ってくる

「超力獣は？」

「すまん、逃がした」

「そうか…」

そう言う雄真に凌が尋ねる

「ところで被害者の事、サイコメトリーしたんでしょ？ 何か見えた？」

それを聞いて雄真はニヤリと笑う

「ああ、ばつちり見えたぜ!!」

第三話 戦士の休学 (後編) 三つのヒント

再び、東京帝国大学中央食堂。

先程、龍我、里菜、凌が立ち寄ったお昼の時の混雑にも一段落つき、食堂内の人の入りは疎らになっている。

そこで、龍我を除くサイコレンジャーの4人。里菜、凌、雄真、純は机の空いたスペースを利用して作戦会議を行うことにした。

今は丁度、雄真がメモを取り出して、そこに何やら奇妙な図を描いているところだ。そんな彼を他の3人がとり囲むように席についている。

「これだ、これが見えたんだ」

雄真はそれを書き終えると、早速メモの切れ端を机の上に置いて他のメンバー達に示してみせた。

それを里菜が早く手にとって眺めて、凌と純は紙を彼女の横から覗き込む。

「何、これ？」

純が呟いて、図を書いた雄真に説明を求める。

紙には逆三角形の配置で黒い丸が三つ、そしてその下に長い線が引かれていた。

「何って…。見えたモノをそのまま書いただけだから、俺にもよくわかんねえな。でも、顔じゃねえかな？」

説明を求められた雄真が、自分自身で首を傾げつつも自らの予測を話していく。

「まず、これが目」

最上段に描かれた二つの黒丸を指す

「で、これが鼻」

真ん中の丸を指す

「で、これが口だよ」

最後に長い線を指した

「まあ、そう見えなくもないけど…」

雄真の曖昧な説明に純は不満そうだ。

「ふむ、仮にこれが雄真の言う通り、何かの顔だったとしてもそれだけでは全く手がかりにはならんな。他には何か見えなかったか？」

里菜がいうと雄真はもう二枚紙を差し出した。

「後はこれとこれだな」

一枚の紙には丸い形のなかに×マークが入った図、もう一枚には縦長の鯉幟のような絵が書かれている

「何これ？」

今度は凌が聞く。

そして雄真はまたもよくわからない説明を始めた。

「さあな。サイコメトリーなんてちよつとしたイメージを探るだけのものだからな。俺にもわかんねえ。これは○と×、これは縦に吊された鯉幟。俺にはそうとしか見えないなあ」

「もうちよつとちゃんと伝えてくれないとわかんないよ…」

純がイライラしながら呟くと雄真が言う

「これ以上は何とも…そうだ、凌。お前なら俺とイメージを共有できるんじゃないか？ 俺の代わりにみんなに説明してくれよ」

「僕は映像までは読み取れないよ」

凌が雄真を冷たく突き放す

そんな様子を見て、里菜はため息をついた。

「全く。お前の能力は見事なまでに宝の持ち腐れだな」

「なんだとー」

雄真は里菜の辛辣な批評に声を荒げるが、里菜はそれを冷静に論破していく。

「そうだろう。サイコメトリーしてイメージを探る事ができても、全く推理力がないから自分では真相に辿り着けない。それが出来ないなら出来ないでこちらに上手く伝えてくれれば問題ないのだから、お前は絵も下手だし語彙力もない。お前も北神龍我と同じように大学に通って勉強でもしたらどうだ？ 少しは頭がマシになるかもしれん。どうだ、反論はあるか？」

「大学の前に高校も出てねえよ。悪かったな、中学校中退でッ」

「え、中学校って中途退学できるんだっただの!?! 私もしたかったなあ
…」

純が雄真の言葉を真に受けているので凌が訂正する

「いや、本当はできないんだよ」

秘密

一方、サイコロンジャーの4人とは別行動をする龍我。

彼は友人の坂田雅彦、新島剛と共に広場に設置されたベンチに座って話し込んでいた。超力獣と交戦しているところを目撃されてしまった彼らにこれまでの成り行きについて、一部を説明していたのである。

「休学!? お前、それ本気かよ!」

龍我の休学という事実を知って驚いた新島は右手に持っていた缶コーヒーを投げ捨てながら叫んだ。

龍我は彼のテンションとは正反対の沈んだ声で神妙に頷く。

「うん、どうしてもやらなきゃいけない事があってさ」

「やっぱり、さっきの怪物絡みか…?」

今度は坂田が聞くと、龍我は先程と同じように首を縦に振った。

「うん…」

新島は納得いかない様子で、さっき叫んだ勢いのままに大きな声で問いかける。

「そもそもさあ、お前、あの怪物はいったい何なんだよ? それに何でお前があんなのと戦ってんだ?」

龍我は、それについては首を横に振った。

「それは…言えない」

「コノヤロ…! 何だよ、俺達にも言えないってのかよ!」

「おい、新島、よせよ」

興奮する新島を坂田が抑えた。

だが、新島のイラダチも御尤もだ。龍我は超能力のことやサイコロンジャーのことについて他のメンバーから堅く口止めされていた。

だから、彼らに伝えられるのは、自分も昨日、超力獣に襲われてひよんなことから彼らに協力することになってしまったこと、そしてしばらく学校を休まなくてはならなくなってしまったことの二点だけ。後の事は、何も聞かず、胸の中にしまっておくように頼むことしかできなかつた。

新島にも坂田にも龍我の抱える事情はわからない。

ましてや、自分自身も危険なメにあつたのだから、説明してほしいというのは当たり前なのだ。

感情が先立ってしまい、まともに話す事が出来ない新島に代わって今度は坂田が言った。

「なあ龍我。俺達、何も生半可な好奇心とかで聞いてるんじゃないんだぜ。もしもお前が大変な事に巻き込まれてるんなら何としても助けてやりたい。恩をきせるつもりはないけどさ、俺達なりにお前を心配して言ってるんだ。話してくれないかな？」

坂田の発した柔らかな言葉からは龍我のことを気づかう気持ちが痛いほど伝わってくる。

その坂田は勿論、新島だつて人の事を全く考えられないような人間ではない。

龍我の事を心配しているから事情を知りたがり、それがわからないからイラついているだけなのだ。

彼らの想いやりになんとか応えたい。

龍我はそんな想いに駆られるが、首を横に振ってなんとかそれを断ちきった。

彼らを危険なことに巻き込む訳にはいかない。

彼らの想いを感じれば感じるほど、それと同時にそんな気持ちが湧き出て来たからであつた。

「ありがとう。でも、言えない」

『ダンッ』と新島が音をたてて立ち上がる

「何でだよ、何で話してくんないんだよッ！ 迷惑かけられても、危ないメにあつてもそれでいいって！ 俺達その程度の仲かよ！」

新島の至極真っ当な怒りに、龍我は下を向いて謝ることしかできない。

「ごめん」

「くそ…」

そう捨て台詞を吐いて新島はベンチから立ち上がり、龍我に背中を

見せて立ち去っていく。

それを見て坂田も席を立った。

「新島！ ちょっと待てよ！ あのさ、龍我。新島には俺から言っておく。なんだかよくわからないけど頑張れよ、龍我！」

龍我にそう一言、言い残して新島の後を追っていく。

家紋

新島、坂田と一旦別れて、他の仲間たちが集まっているという中央食堂に再びやってきた龍我。

そのほぼ中央の席に固まって机を囲むサイコレンジャーのメンバー4人を見つけ、

「いた、いたー！ みんなー！」

と声をかけてから、駆け寄った。

席に陣取るメンバー達に近づくと、里菜は腕組みをし、雄真は頭を抱え、純は両手で頬杖をつき、凌は眠ったように目を瞑っている。そして皆が一様に「うーん…」と低音で唸り声をあげていた。

どうやら、みんなで考え事をしているようだ。

何をそんなに難しい顔をしているのか。

当然、気になった龍我はそれを聞き出そうとして

「あの、みんな、何でそんな…」

と、いうところまでを口にしたが、全てを言い切る前に里菜が龍我の言葉を自分の声で打ち消すようにして言った。

「どうだ、あの二人、口止めできそうか？」

非常にウンザリと力の抜けた言い方だった。

どうやら里菜はこれ以上、答えを考えることが面倒だったから、反対に龍我に対して質問をしたらしい。

堅物で融通の効かない里菜にも意外とそんなところがあるのだな、などと考えつつも龍我は答えた。

「うーん、片方は…」

その含みのある答え方が気になったらしく、純がついていた頬杖を外して聞いてくる。

「もう片方は？」

「俺が説得できた方の友達が説得中」

龍我がそう簡潔に説明すると、里菜は天を仰ぎながら、はっきりとした口調で言った。

「そうか、説得できるといいな。こっちも手荒な事はしたくない」

「え、手荒？」

里菜の穏やかではない言葉に思わず反応した龍我。

戸惑っているのを見て、凌が補足説明してくれる。

「記憶を消す超能力者を使って今日の事を忘れてもらうのさ」

「そんなつ…人の頭の中いじるって事？」

「実際、これが双方にとって一番幸せな方法なんだよ。コッチは秘密を守るし、目撃者もこれ以上巻き込まれなくて済む。でもなるべくそんな事はしたくないからいつも一応説得するワケ」

「そんな事言ってもなあ…」

龍我が凌に言われて思い出すのは、超力獣に襲われた際、友人の絵美が浮かべていた表情だ。

普段は穏やかでいつも笑顔を絶やさない彼女が、顔を青白く変色させ、歯がガタガタと音をたてるくらいに身体を震わせていた。

余程、怖い思いをしたのだろう。きっと、その恐怖を忘れるには、とても長い時間が必要になる。いや、もしかしたら、その記憶はトラウマになって、一生彼女に纏わり続けるかもしれない。

そう考えると、凌が言うように、超能力者に記憶を消してもらおうというのも一つの手なのかもしれない。

でも、いくらなんでも極端過ぎないだろうか。

それに、その『能力』というのが龍我にはまだ信用できなかった。もし仮に人の記憶をキレイさっぱり消す事のできる超能力者がいるとして、狙った記憶だけを都合よく消すことなんて出来るのだろうか。もしかしたら、その人にとって大事な記憶まで一緒に吹き飛んでしまうことはないのか。

そういう風に難しく考えていると自然に頭が下がって、視線が下の方へ下の方へと行ってしまふ。そして、頭が45°ほど下がったところで、龍我はふと、気がついた。

サイコロレンジャーのメンバー達が囲む机の真ん中になにやら変なマークの書いた紙が置いてあるのだ。

「何これ？」

「ああ。俺が被害者をサイコメトリーした時に見えたイメージだ」

雄真は龍我にとっては聞き慣れない不思議な単語を使って、そのように答えた。

「サイコ…メトリー…？」

まだ不思議そうな龍我に里菜と凌が順に説明してくれる。

「モノや人…対象は何でも構わないが、触れる事によって、それに残された強い思念を読み取る超能力の事だ。雄真にはそれができる」

「特に犯罪者や超力獣の悪意なんてのはとても強い思念だからね。被害者や現場遺留物をサイコメトリーすればほぼ確実に犯人に繋がるヒントが浮かび上がるのさ」

そんな説明を受けたところで、人間にそんなことができるだなんて、龍我にとってははにわか信じがたい。しかし、先日から続く摩訶不思議で受け止めがたい現実。それを目の当たりにした今、やはりこれも事実として認める他ないだろう。

「へえ。そんなことが…」

龍我が感心してみせると、純が

「あ、そうだ！」

と何か思いついたように口走った。

「龍我君もコレ見てみてよ。私達には何なのかさっぱりわからなくて…。でも、龍我君は東大生だもん。きっと何か思いつくよ」

そして、純は龍我に対して雄真が初めに提示した図が書かれた紙を手渡す。

サイコメトリーをした雄真本人が「何かの顔のイラストではないか」と予想した、一文字の上に黒く塗りつぶされた丸が逆三角形型に3つ配置された図だ。

「あー、ムリムリ。東大生だったって能力使ってズルで合格したインチキ東大生だもん。ちよつと見ただけで…」

雄真は現役東大生の頭脳に期待する純を馬鹿にして、そう言いかけた。しかし、純から図を提示された龍我は紙を受け取ってから間髪入れずに雄真の言葉を遮って言った。

「これさ、家紋じゃないかな？」

「あ？ カモン？」

「ん？ come on？」

「うん、毛利家の家紋。知らないかな、毛利元就とか。三本の矢…サンフレッチェ」

雄真と純が首を傾げるので、どう説明したらいいのか考えつつ、龍我は図が書かれた紙を再び他のメンバーに示してみせる。

しかし、それを見た雄真が眉をひそめた。

なぜなら、龍我が今まで4人が見ていた方向とは図を反対向きにしてみんなに示していたからだ。

「バーカ。それは反対向きに見るんだよ！」

やっぱり俺の言った通りじゃないか、とばかりのハイテンションで雄真が得意げに叫ぶ。

しかし、他の3人、特に里菜の反応は違った。龍我の手から紙をひたたくって何度も領いた後、テーブルの上にあるもう二枚の紙に書かれた図も確認してから言った。

「いや、そう考えるとコツチも合点がいくぞ！」

里菜は残った二枚の内、○の中に×が書いてある紙を斜めに傾ける。

すると○の中のマークが×ではなく「十」に見えるようになる

「島津家の家紋ってこんなだったな」

里菜が確認すると、龍我が肯定した。

「うん、そうそう」

すると、話が進んできたらしく、続いて凌が言った。

「毛利と島津か。それぞれ幕末に活躍した二大雄藩…長州藩と薩摩藩の大名だよな」

「うん、そうだよ」

やっと、話に進展が見えてきて、一回、盛り上がり始めたところだったのだが、そこで凌はトンデモナイ事を言った。

「じゃ、龍我のゼミの関係者を当たるのが一番手っ取り早い…か」

「なっ、何でそうなるの!？」

慌てる龍我とは反対に凌は冷静だ。眉一つ動かさない。

「だって龍我のゼミって維新史が専門だろ？」

龍我は一瞬、なぜ知っているのか不思議に思った。

でも、よく考えたら、今日ゼミに自身の欠席を伝えに来たのが彼だった。

その時にわかったのだろう。

「え、龍我君って歴史が専門なの？」

「似合わねー」

そんな風に茶化す純と雄真に

「そう？　だって格好いいじゃん。龍馬とか…って違うー！」

と反応しつつも、納得できない龍我は反論した。

「そんな…もしかしたら別に専門じゃなくたってさ、ただ単に歴史が好きな医学部の人かもしれないじゃん。なんでもいきなり俺のゼミの関係者って事に…。俺の仲間にはそんな悪い人いないよ」

凌は首を横に振った。

「龍我。君が普段一緒に勉強してる仲間を信じたいってのはわかるけどさ。実際、人間なんて見た目いい人っぽくても何考えてるかわかんないモノだよ。僕にはわかる」

「でも…」

「まだそうと決まったワケじゃない。そう感情的になるな」

まだ反論したそうな龍我を里菜が説得する。

「順序の問題だ。確かにお前の言う『歴史好きの他学科生』というのもいい筋かもしれない。だが、これだけ多くの学生や職員がいる中、学科も住居もバラバラな時代劇好きを探して回るのも大変だ。やはり専門の学生や教員からあたった方が効率がいい。時間がかかればそれだけ新たな被害者が生まれる可能性も高くなる」

そんな風に言われると、龍我はもう何も言えない。

「で、でも調べてみたら犯人いなかったって事もあるから！　最初に調べればそれだけ疑いが早く晴れるかもしれないよ！」

純は重くなった空気を変えようと必死に龍我を励ますが、それでも話はその方向に進んでいった。

「ま、ともかく調べてみないと始まらないって。龍我、お前、ゼミの名

簿とか持つてねえの？」

自分の仲間に犯人がいるだなんて思いたくないけど、仕方がない。純の言う通り、仲間の疑いを晴らすという気持ちで捜査を試みよう。

龍我は意を決して雄真の質問に答えた。

「俺は持つてないけど、担当の岡部先生に頼めばくれると思う」

「じゃ、その岡部先生って奴の所から回ろう！」

雄真の号令に従って全員が勢いよく立ち上がる。

そんな風と一緒に、気合が入る中、凌だけは立とうとした瞬間に足元がフラつき床に膝をついてしまう

「凌……？ 大丈夫!？」

いきなりの事に驚いた龍我はやや慌てながら凌の身体に手を添える。

「すまない、能力がパンクしたみたいだ」

「パンク……？」

またしても登場した意味の分からない単語に龍我が疑問を聞き返すのを余所に雄真が龍我に指示を出す。

「そうか、大学の中、人が多かったから……。龍我、悪いけど、凌の様子を見てやってくれ。ここならそんなに人も多くない」

調査

東京帝国大学・中央食堂の入口になっている階段を昇って地上に出て来た雄真、里菜、純の三人。

龍我と凌と別れてから、彼らはまず、食堂すぐ近くにある広場に立てられた大学構内の地図で、龍我のゼミの担当講師である岡部教授の研究室の場所を確認しようとしていた。

しかし、このキャンパスは大学に通った事がない3人が当初考えていたより、ずっと広大なものだった。研究室の場所が全くわからず、一同は揃ってその場に立ちつくしてしまっていた。

「雄真、一つ聞いていいか？」

場所がわからない事で互いにイライラしているのか、里菜が無愛想に言うのと、雄真もぶっきらぼうに答えた。

「ああ、いいけど。なんだよ？」

「確か、北神龍我を凌と一緒に残したのはお前の指示だったな？」

「だったら、何だ？」

雄真が発言の意図に気づかないようなので、里菜は眉をピクピクと動かしながら吐き捨てるような口調で説明する。

「何故、あんなことを言った？ アイツがいればこんなことにならなかったじゃないか。それに、アイツがいた方が調査対象に接近しやすいぞ。岡部教授とは顔見知りですらない私たちだけで、どうやって奴に近づくんつもりだ？」

至極ご尤もではあるのだが、雄真には雄真の考えがあった。

「あ？ アイツはまだこの仕事に慣れてないじゃねえか。いきなり知り合い相手の捜査は酷だろ。だから置いて来たんだよ！」

それを聞いた純は飛び上がって雄真の肩を叩く。

「雄真君、優しいー！」

「そうだ、俺はいつも優しい」

誇らしげな雄真に対して里菜は呆れたような表情で言った。

「自分で言うな。さっきまで高学歴は嫌いだとか言ってただろ」

さて、それから一時間ほどが過ぎた頃。

三人は構内で散々道に迷った後、結局、学生課まで行って係員に道を聞き、やっとの思いで岡部の研究室までやってきた。

里菜が部屋をノックすると、岡部はなんの警戒もなくドアを開けた。

そして、純が自分たちを龍我の友人であると名乗ると、いとも簡単に三人を部屋の中に入れてお茶まで出してくれた。

「北神君、休学するんだってね。」

自分の分も入れて4人分のお茶を淹れ終わり、席について一息つく
と、岡部はまず第一声、そう言った。

この初対面の三人に対する警戒の無さやもてなし具合も、龍我の事が気になっていて、彼の『友人』から事情を聞いたかたからに違いない。

「はい、それでしばらく会えなくなるから、みんなの連絡先を知りたいと……」

「うん、わかった。じゃあ、名簿をあげればいいかな？」

「ええ、はい」

里菜が要件を伝えると、岡部は三人に背を向けて探し物を始めた。
「えーと名簿名簿……」

「オイ、雄真……」

本やら資料やらが山積みになった机から名簿を掘り出そうとしている岡部の様子を見て、里菜が顎で指図した。具体的な言葉はなかったが、その意図は雄真に伝わったようだ。彼はコクリと深く頷いてから、岡部に静かに近づいていく。

そして、十分に距離が縮まると、その背中に触れない程度の距離で左手をかざした。これが、雄真のサイコメトリーだ。

彼は、ゼミの学生を当たる前に、まずは講師である岡部から情報を

引き出そうとしていた。

雄真の脳内に流れ込む岡部の記憶のイメージ――

まず、初めに飛び込んできたのは、岡部の自宅であろうか。

この研究室と同じく、研究用の本棚に囲まれた部屋の映像。

ただし、この研究室のようにモノが散乱しているような感じではない。

家族、あるいは大学教授である岡部の自宅であればお手伝いさんがいるのだろうか。それをしているのが誰なのかはわからないが、明らかに岡部教授本人とは違う人の手で手入れがされている。

床にゴミが落ちている様子もないし、窓際には花瓶まで飾っている。

そこへ、男の叫び声が響いた。

【お前は失敗作だ……！　こんなモノ……こんなモノ！】

雄真たち、三人を出迎えてくれた時の穏やかな口調からは想像できないくらい、迫力がある声なので、俄かには分かりづらいが、おそらくこれは岡部本人の声だ。

それに続くのは、

【やめて、やめて……！　お父さん……！】

という若い女の悲痛な叫び。

『お父さん』と声をかけていることから、岡部の家族……年齢から言っておそらく娘であることが推測できる。

そして最後に、

【ガシャーン】

という何かが割れるような音

なんだ、これ？　コイツ、ヤバい……！

そう思った所で雄真のサイコメトリーが解けた。

「あの、君、君！ 大丈夫？ 何やってんの？」

その声で意識が現実の世界にもどったので、目を見開いて正面を見つみると、岡部が不思議そうな顔をしてつつ立っている

「あ、それはその…」

雄真はなんと言いつい訳しようか、迷ってしまったが、岡部はそれ以上気にしなかった。

「はい、名簿。」

と、雄真にゼミメンバーの名前と連絡先が書かれた紙を手渡してくれた。

「ありがとうございます！」

目的を達成してお礼を言うサイコレンジャーたちに岡部は一言付け足した。

「くれぐれも北神君によろしく。事情はよくわからないけど、『僕もゼミのみんなも、いつも君の味方だから困った事があつたらいつでも戻ってきてね』と伝えておいてくれないかな？」

研究室を出る雄真、里菜、純の三人。

「どうだった…？」

ドアを閉めて岡部教授の姿が見えなくなった途端、即座に純が、岡部をサイコメトリーした結果を聞くと、雄真は冷や汗を垂らしながら、慌てたように早口で呟いた。

「ヤバい…ヤバいぞ、あいつ！」

「何が見えた…！」

雄真の口ぶりに里菜も思わず表情が強張った。

「奴が何かを破壊していて、それを娘が必死に止めている…。そんなイメージだ。だが、途中で止められたから最後までは…」

雄真が口惜しそうに自分の腿を叩くと、里菜は自分が着ている黄色と黒を基調としたサイコレンジャーの隊員ジャージの胸ポケットに手をつっ込んだ。そして、そこから古びた万年筆を取り出す。

「そうか…ではこれをサイコメトリーしてみろ」

「それ、何？」

「万年筆だ」

里菜があまりにも漠然とした答えしかくれないので、純はもう一度聞きなおした。

「それ、里菜のじゃないよね？ 誰の？ それ、サイコメトリーしろってどういうこと？」

すると、里菜は悪びれもせず、胸を張って言った。

「奴の机から盗んだ！」

「それ、泥棒じゃん！」

純は人差し指で里菜の事を指しながら非難するが、里菜はあくまでも堂々としていた。

「そう言うな。巨悪を倒す為の小さな悪事という奴だ。いかにも年期が入っていてサイコメトリーの対象としてはもってこいだろ」

「えー。」

戸惑う純をさて置いて、雄真は、そんなことどうでもいい、とばかりに里菜の手から万年筆を受け取った。

「さあ、いくぜ…」

そして、雄真は万年筆に手をかざす…。

戦う理由

「凌、大丈夫？」

里菜、雄真、純の三人が超力獣の調査に出てから一時間ほど後。

凌の顔色がだいぶ落ち着いてきたみたいだったので、龍我は確認がてら、その声をかけた。

「ああ。だいぶよくなってきたな…」

そう言う凌。発音や息の仕方も実にスムーズで、どうやら本人の言っている通り、もうそんなに具合は悪くないらしい。

そう判断した龍我は、先程から少し気になっていた事を聞いてみた。

「もしかして凌って田舎の出身？」

それを聞くと、凌は首を傾げて不思議そうな表情を作ったが、龍我は真剣そのものだ。

意図がよくわからない凌が

「いや、別にそうじゃないけど…なんで？」

という風に聞くと、

「だって人ごみが苦手みたいな事言ってたから…」

と龍我が答えたので凌は笑った

「そうじゃない。能力の副作用だから」

「副作用？」

「だからその…」

と、凌は一瞬躊躇ってから語り出す。

「まあいい。この際だから話しておこう。僕的能力は読心術。つまり、人の心を読む能力なんだ」

「あ、だからあの時…」

そう言っつて龍我は今朝まで続いた取り調べの時の事を思い出す。

確かあの時、里菜は凌の『彼の言っている事は本当だ』という一言でいとも簡単に龍我を解放した。龍我は彼らのやりとりに違和感を感じていたのだが、これで合点がいった。里菜や雄真は心が読める凌の証言だったから信用したのだ。

そして、そんな尋問にピッタリの能力を持つ凌が当初取り調べに参加していなかったという事を考えると、もしかしたら、彼らは初めからそういう手筈を考えていたのかもしれない。主に里菜が質問を担当して、凌は怪しまれないように少し離れたところから相手の心を読み、言葉からはわからない真実をえぐり出す。

さらに言えば、凌の『龍我の言っている事は本当だ』という趣旨の発言に本気で焦っていた雄真は、その意図すら読ませない為の囃か。彼ら曰く、自分には『予知能力に近い第六感』があるそうだから、その力を警戒するなら、それくらいやりかねない。

そう考え、そこまでの話について納得した龍我に対し、凌の説明は続く。

「僕の能力は基本的に常に発動してる状態で自分では最低限のレベルでしか手加減できない。だからたくさんの人の中に長い時間いたりすると、自然と多くの人間に対して能力を発動する事になるから、体力を消耗してああいう状態になってしまうんだ」

「そうなんだ…大変なんだね」

「そうでもないさ。超能力者はみんなこんなもの。君みたいに完全ノーリスクで自分の能力に気づきもしないってのは本当に珍しいよ」

「そうなんだ…」

凌はさらに続けた

「いい機会だから遠慮せず全部言わせてもらう」

「え、何を？」

「僕らと君って多分、一生相容れない」

「どういう…事？」

龍我はいきなり言われて驚きを隠せない。

「僕はね、君がいい奴だって事はわかってる。長い間、人の心を見てきたけど、君くらい裏表がない人は初めて見るよ」

「じゃあなんで…」

「君はあまりに純粹すぎる。いや、あえて悪く言おう。君は超能力者として傷つくという経験をしていなさ過ぎる…。サイコレンジャーのみんなはさ、多かれ少なかれ超能力者として制約と宿命を背負って

生きてる。つまりサイコロレンジャーって帰る場所のない人間の寄せ集めなんだ。でも、君は違うだろ。今日、大学での君を見て確信した。君にはこんなに素晴らしい居場所がある。わざわざ危険に飛び込む必要もなければ、何もかも全部捨ててしまう必要もない。辛い事があつたら言ってくれ、君がいるべき場所に帰れるよう僕からもかけあうから。今日だって超力獣の件で友達と喧嘩しちやっただらろ？」

「なんでそれを？」

「聞こえたんだ、君の心の声が。僕にはわかる。さっきからずっとその事と襲われた被害者の事ばかり考えてたでしょ？」

「そっか。全部お見通しだね…。でも俺、だから辞めたいなんてちっとも思っただけよ」

龍我は続ける。

「俺、本当はやりたくなかった。サイコロレンジャーになんてなりたくなかった…。でも今日の事で決心がついた」

凌は微動だにせず話を聞く。

「俺、友達が襲われてとても悲しかった。超力獣やそいつを生んだ超能力者が許せなかった。もう誰かが傷つくのは見たくない。どこかで誰かがこんな想いをしたりするのも嫌だ。俺、やるよ。サイコロレンジャーとして戦う。サイコロレンジャーとしてみんなの心を守る…その為に戦いたい」

「君は本当に…本心で言ってるよね」

その言葉に頷く龍我に対して凌は吐き出すように言った

「やっぱり、わかってない。君は何もわかってないよ…！」

凌は立ち上がり、龍我に背を向けて続ける

「そのうち君も思い知るさ、この力がどういうモノなのか！」

凌は早足で去っていく

「ちよっと待ってよ…って、ああもう…忘れ物だあ…」

龍我は凌を追おうとするが机の上に雄真がサイコメトリーのイメージを書いた紙が放置されているのに気づいてすぐ引き返す。

龍我は凌を追う為、散らばった紙を急いで集めるがそこである事に

気づく

「あれ、これって三枚目まであるんだ…」

龍我は雄真が『縦に吊された鯉幟』と言った図を眺める

「これどっかで見たなあ…。あっ、もしかしてツ…」

龍我は鞆の中をガサゴソと探り始めた

犯人

再び、東京帝国大学中央広場のベンチ。

龍我と別れた後、新島と坂田は再びそこへ戻り、二人で話し込んでいた。

目の前の広場では競技に用いる独特のスティックを持った女子ラクロス部員たちがボールを追いかけて、また、後ろの通路ではカップルと思われる男女が楽しげに談笑しながら通り過ぎていく。

ついさつきまで自分たちも謳歌していた、どこにでもある青春の風景。

そこへ暗雲が立ち込めている。

大学内に突如現れた、謎の怪物。

仲間の内の二人が襲われ怪我をした。

そして今、またもう一人、友人が何かに巻き込まれようとしている。心配でたまらない。

なのに、彼は何一つ相談してくれない。

仕方がないからコチラから聞いても答えてくれない。

そんなイラダチから新島は、小一時間ずっとグチグチと不満を呟き続けていた。

坂田は、新島が一旦、愚痴をある程度言いつくしたと見ると、そのタイミングを見定めて、優しく問いかけた。

「あのさあ、新島。あの龍我がさ、自分の都合とか気分で隠し事すると思っ？」

すると、新島はやや自分の斜め上、天を仰ぎながら低い声で言った。「しねーよ。わかってる」

少しいじけたような言い方だった。そんな彼の様子に坂田は溜息をつく。

「じゃあ何であんな風に言うのさ」

「さあな。俺はお前と違ってそこまで人間できてないからな。いつもいつも理屈通りの行動はできねえんだよ」

「知ってる。それが新島の悪い所でもいい所だよ」

坂田がそう言つて笑顔をみせると、その後、新島は少し考え込んでからまた話し出す。

「俺、龍我に謝った方がいいのかな…」

たぶん、謝った方がいいよ、と言つて欲しいんだろう。

坂田には龍我と並んで最も親しい友人である彼の思いがよくわかつていた。

でも、いつも相手が望む通りの答えを与えられるほど、自分は優しくない。

坂田はそんな風に思いながら言った。

「それは新島の気持ち次第。龍我が学校に戻つてくる頃には俺達、もう卒業だろ。龍我の事を大学での遊び相手、卒業したらもう用はないよ。そう思つてるなら謝る必要なんてないよ。」

一方、文学部塔。龍我のゼミの担当講師である岡部教授の研究室前の廊下。

共に調査を担当する里菜と純の両名が固唾を飲んで見守る中、雄真は里菜が岡部の机から持ち出した万年筆をサイコメトリーしようとしていた。

「いくぜ…」

そうかすれるような声で呟いてから、ゆっくり床に置かれた万年筆に左手を近づけていくと、雄真の脳裏に、それに残された記憶イメージが浮かび上がる…

【この失敗作め！ 壊してやるツ！ こんなモノ、こんなモノ！】

【やめて、やめてよ、お父さん…！】

再び、暴れる岡部と泣いて止める中学生くらいの娘の声が聞こえてきた。

やはり、先程のサイコメトリーに間違いはなかった。

そして、それに続いて、

【ガシャン！ ガシャン！】

【タタタタタツ】

と、陶器かガラスのような何かが割れた大きな音と、部屋の外から誰かがかけてくる足音が順に聞こえてくる。

【ガタン！】

岡部の部屋のドアが開いて、入って来たのは、若い女性…。

でも、岡部と共にいる少女よりはわずかに年上…。大学生くらいだろうか。

もしかしたら、少女の姉かもしれない。涼やかな目元に共通した面影がある。

彼女は部屋に入るなり、

【お父さんツ…！ あなただって人は…あなただって人は!!】

と甲高い声でヒステリックに叫んだかと思うと、続けて、腰に手をあてて呆れたように言い放った。

【あのさあ、お父さん。陶芸が趣味なのはいいけどさ。失敗した時にぶん投げて壊すのやめてくんないかな？ 何なのこれ？】

【えー。だってその方が芸術家っぽくない？ カッコよくない？ 結構ストレス発散にもなるし…】

そう言った岡部は若い女性アイドルのように『てへっ！』とグーで握った拳をこめかみに押し当てる。

ダメだ、コイツ。

そう思ったかどうかはわからないが、彼女は大きなため息をつき父親の説得を諦めて、今度は妹に言った。

【それに花子！ アンタ、何泣いてんの！】

【だつて…。私も壊してみたいって言ってるのにお父さんが全部壊しちゃうよ。うえーん】

そうして、少女は大きな声でワンワンと泣き続けた。

「…ぐっ。これは一体…」

サイコメトリーのイメージから解放された瞬間に絶句する雄真。序盤と終盤で全然イメージが違う。これでは単なる親子の戯れではないか。

「どうした？ 何が見えた!？」

里菜と純が鬼気迫るような表情で雄真の顔を覗きこむ。

どうやら、戸惑う雄真の様子を見た二人はサイコメトリーで余程すごい結果が出たのではないかと思っっているらしい。

「あのさ…」

と、その雰囲気察して言いづらそうに一旦口ごもった雄真。

『ゴクツ』と唾を飲み込む二人に勇気を出してこう言った。

「あのさ、ごめん。全ッ然違うわ」

「は？」

「いや、違う。さっきのと違う。前半までは一緒だったんだけど…」

「は？」

三人がかみ合わない会話をしていると、そこへ遅れて凌がやってきた。

「あれ、まだ一人目？ 遅くない？」

不思議そうな顔をする凌に雄真は

「あの…。色々ありました…」

と、曖昧な言い訳をしたが、そのせいか彼が更に顔をしかめるので、

「ところで龍我は？」

と話題を逸らして見せた。

「ああ。もうすぐ来るんじゃないかな？」

後ろを振り返って言う凌に従って、一同が凌のやってきた方向を見ると、予言通り龍我が廊下を走ってやってきた。

どうやら結構長い距離を走ってきたらしく顔を歪め、

「ゼエハア、ゼエハア」

と大きく肩を動かしながら息をしている。

そんな彼は四人の下に近づいて暫くの間、息を整えると、誰もが予想していなかったことを言った。

「みんな、俺、犯人が…超力獣の親が…誰かわかった!!」

龍我は先程、食堂で雄真がサイコメトリーの結果として提示した三枚の紙の内の一枚を他の4人に示してみせた。

龍我が見せたのは、雄真が『縦長の鯉幟』と表現した図である。

「これ、鯉幟じゃなくて、縦長の旗なんだ。錦の御旗。」

「何だ、それ?」

雄真が問い、凌と里菜が答える

「たしか官軍だけが使える旗だったよね」

「昔の人にとってはそれが公の正義の証だった」

龍我が頷く。

「そう。幕末において錦の御旗が一番クローズアップされるのが鳥羽・伏見の戦いなんだけど…それをかなり詳しく研究してる友達がいる…」

「なるほど…」

純は納得して呟く。しかし、龍我本人はその推理にまだ自信を持ってずにいた。

「でも、それだけで犯人って言えるかどうか…」

その言葉に反応したのは雄真だ。何故だか、彼は推理をした龍我よりも得意気な表情をしている。

「確かにな。そもそも根拠は俺のサイコメトリーだけ。それが証拠だって言っても犯人はしらばっくれるだけさ」

「でも調べる価値はある」

里菜が言うのと凌がニヤリと笑う

「犯人の目星さえつけば充分。僕的能力なら犯人かどうかは一目瞭然。あとは相手が動くのを待って現行犯逮捕さ」

V S リング型超力獣

さて、時刻は20時を回った頃。

大学近郊の細い道を歩く男女の二人組。

どうやら二人は恋人同士らしく、他に人通りがないことをいいことに、互いに腕を絡めあったり、顔を近づけて何やら囁きあったりしながら歩いていく。

互いに互いのことしか考えられなくなっているようで、周りのことなど何一つ気にせず、フラフラ、フラフラとよろめきながら、二人は進む。

もしかしたら、若干、アルコールが入っているのかもしれない。

だから二人は、後方にある電柱の陰から自分たちを見張る男の存在にも全く気付かなかった。

男は、暫く彼らを見張り、彼らが自分に対して全く注意を払っていないことを確認すると、深く目を瞑って、離れた所にいる自らの下僕に指示を送った。

「襲え、襲え。エナジーを奪い取れッ！」

すると、男がいる場所とは、そのカップルを挟んで反対側。つまり、カップルの前方の物陰から彼らの目の前に、昼間、龍我たちと戦った林檎の超力獣が現れた。

「ワーッ！」「キヤーッ！」

カップルは同時に叫び声を上げて、まず、男が腰を抜かしてその場にへたれ込んだ。

「こ、こ、こひひ、こひはぬげた…、助け…へえ…」

『腰が抜けた、助けて』とカップルの男の方が、女に懇願するが、女はそれを気にも止めず走り去ってしまった。

「しょんな、非道い…」

男は小便でズボンを濡らしながら、逃げていった女の薄情さを訴えるが、超力獣は勿論、そんな事に同情などしてくれない。

一步、また一步と男に近づいていく超力獣に、電柱の陰からその様子を見張る男はヒステリックに絶叫しながら指示を出す。

「やれ、エナジーを奪え！」

カラフルな戦闘用スーツに身を包んだ三人の戦士が超力獣に襲いかかったのは、丁度、その時だった。

「ハァー」「ヤァー！」

上空にホバリングさせたサイコバスターから降下してきたサイコイエロー、サイコグリーン、サイコピンクに次々殴られた超力獣はその勢いで後方へと派手に吹っ飛んだ。

「何!?! 奴らまたしても邪魔を…!」

超力獣の親は物陰で地団駄を踏んだ。

「いけ、サイコレンジャーを叩き潰せッ！」

超力獣とサイコレンジャーとの戦いの観戦に思わず力が入った超力獣はこの時、後方からせまる人物に気づいていなかった。

「田中君…」

と、突然後方からかかった声に驚いて振り向くと、そこには見慣れた一人の青年が立っていた。

北神龍我…。

特徴的な幼い顔つきをした青年の姿を確認して、超力獣の親は背筋が凍りつくような戦慄を覚えた。

大学の同学年でゼミの友人。普段なら自身とは気の置けない仲にある彼。

だが、昼間の戦闘でこの青年が只者ではないことを超力獣の親は既に確認していた。

龍我が後ろから声をかけたところ、彼は

「や、やあ。龍我君。こんな所で奇遇だよね…」

と、何事もなかったかのように話しかけてきた。

目の前で起きている出来事を必死に見ないフリをして誤魔化そうとしているようだが、その一言で龍我は推測通り、彼が超力獣の親であつたということを確認した。

あんな訳のわからない怪物と戦闘用スーツの集団がドンパチを繰り広げているというのに、今、ここであれを初めて見た人間がこんな冷静な反応で返してくるはずがないからだ。

彼の名前は田中利保。

龍我のゼミ仲間の内の一人で、今朝も『鳥羽・伏見の戦い』について発表しようとしていた学生である。

「君が超力獣の親だったんだね」

龍我が悲しみに顔を歪めながら言うと、

「え、何？ 何の事かなあ？ わかんないなあ…」

と田中は坊主頭を左手で掻きむしりながら後ずさりする。

そして、ある程度、龍我から距離をとったところで、右手をポケットに手をつっ込んだが、そこで

「おっと。やらせないよ」

と声がかかった。

言葉を発したのは、危ない場面に備えて、龍我と田中を見張っていた凌だった。

彼は田中の後ろから不意に現れてポケットに突っ込んだ手を捻る。

「いって…い」

すると田中の手からバタフライナイフがこぼれ落ちた。

どうやら、隠していた凶器で龍我を襲って危機から逃れるつもりだったらしい。

「田中君…。なんで君がこんな事を…。君は真面目で、優しくて…。いつも友達に勉強のアドバイスなんかしたりして…。こんな事、できないような人じゃないじゃないか！ 一体どうして…？」

抵抗する力を無くした田中に龍我が歩み寄る。

すると、田中の身体がワナワナ震えだした。

そして開き直ったのか、田中は態度を豹変させて半ば狂ったように叫んだ。

「お前に、お前に何がわかる！ いつもいつもヘラヘラしやがってお説教か！ 俺には力が、力が必要なんだよ！ クソヤロー、バカヤ

ロー邪魔すんじゃないやねえよ！ テメー絶対許さ…」

「もういいよ」

言葉の途中、いたたまれなくなつたのか、凌が田中の首筋に手刀を入れて気絶させる

——ドサツ

と、崩れ落ちる田中の身体を凌が支える。

「田中君…」

感傷的になっている龍我に凌がワザと勢いよく声をかける。

「さあ、親は確保した。里菜達に加勢するぞ」

「わかつたよ、サイコチェンジャー!!」

二人は変身しながら超力獣に向かつていき蹴りを入れると、親が気を失つた影響なのか、いとも簡単にその場に崩れ落ちた。

「よし、これで全員揃つたな。トドメを刺そう」

弱つた超力獣を見てチャンスを感じ取つた里菜が言つて、龍我が叫ぶ

「デルタストライカー!!」

すると、五人が構えた場所に、大型のバズーカ砲が現れた。

5人は力を合わせてデルタストライカーを抱え、そして同時に叫ぶ。

「デルタストライカー フォーメーションA ファイアストライク!!」

放たれた光弾が超力獣に命中する。超力獣は大爆発をおこした。

エピローグ

戦闘が終わって、変身を解く五人。

戦いの疲れから、それぞれが膝の手をついたり、腰に手を当てて天を仰いだりしながら一息ついていると、そこへ

「おーい、龍我!!」

と手を振りながら坂田と新島が駆け寄ってきた。

「マサ、剛…」

そんな二人に龍我は気まずそうに何か言おうとするが、それよりも先に新島が張り裂けんばかりの大きな声で叫んだ。

「龍我、さつきはごめん!」

「いや、いいんだよ。そんなの…。俺も、何も言えなくて…」

互いに謝る二人の横から、今度は坂田が語りかける。

「龍我。お前がしばらく休学したってさ。俺達が友達じゃなくなる訳じゃない。会いたくなったら会いにくし、電話もするしメールもする。それにお中元とお歳暮と年賀状に暑中見舞いも…」

「マサ…!」

大切な友人二人から嬉しい言葉をもらった龍我は思わず、顔をほころばせるが、そこへ横槍が入った。

「ダメだ」

そう言ったのは里菜だ。

「え?」

「はい?」

そんな言葉に龍我と坂田が同時に妙な声をあげる。

里菜は二人に溜息をつきながら説明する。

「こちらの情報を漏らさない為に友人関係は全て遮断される。だが、不自然さを無くす為、離れて暮らす家族のみ、あちらからの連絡に限って会話を許可する。それが我々が龍我に対して決めた処分だ」

「あんた、そりゃないでしょ…。事情はよくわからないけど、そこまでやったら人権侵害ってヤツでさあ…」

と反論しようとしたのは坂田だったが、それを制止したのは意外に

も、普段から彼に色々と言われることの多い新島だった。

「わかった」

「わかったってお前…」

戸惑う坂田を余所に、新島は龍我に語りかけた。

「龍我、坂田の言う通りだ。休学して、しばらく会えなくなったって、友達じゃなくなる訳じゃない。こんなことで、終わったりなんか、絶対にはないんだ。」

そして、新島はここからを更に力強く言った。

「この仕事が終わったら絶対連絡くれよな。そうしたら、また一緒に金儲けしようぜ！」

「ああ、そうだな」

「うん！」

新島の言葉で、新島、坂田、そして龍我の心はまた一つになった。

3人は小さな円陣を組んで、その中央で固く手を取り合った。

そして、訳のわからない叫び声をあげて互いの友情を確認しあう。

「いくぜ、金儲け！」

「うおおおお！」

そんな理解しがたい友情を冷ややかに見守るサイコロレンジャーの面々。

そのうち、純が

「お金儲けってまたギャンブルとかかな？」

と、首を傾げながら言うと、雄真が溜息をつきながら答えた。

「ああ、そうだろう。こりや休学解けた瞬間にまた社会奉仕一年延長だな」

第四話 憎しみのパイロキネシス (前編) プロローグ

先日、大学での事件でサイコレンジャーに捕えられた田中利保。彼が枯れた鉢植えの上に手をかざし、念じる。

するとその手が発光。放たれた光を浴びた鉢植えがみるみるうちに生氣を取り戻していく

「これが僕の実力です」

田中が言うと、サイコレンジャー事務所にあるガラス張りの取調室内で、彼と机を挟んで向かい側に座った里菜が納得したようにうなづいて言う

「なるほどな。この能力で病気の母親を回復させたかった…。だが、それにはまだ力が足りない。それで他人のエネルギーを吸収して、能力を強化しようとしていた訳だ」

「その通りです」

田中が素直に認めるのを見て、里菜は尋問を続ける。

「あの超力獣はお前が作ったのか？」

「いえ、僕の力では超力獣をつくる事はできないから…」

「では他の誰かが作った超力獣を使っていたという事か？」

「はい。超力獣がエネルギーを吸ってもそれは直接の親のエネルギーになるだけです。僕は相手を超力獣で気絶させて、抵抗できなくなった所を直接、自分で吸収するという方法をとっていました」

「なるほど。先日、被害者となった里村多恵がエネルギーを吸収されていなかったのはその為か…」

そして、里菜は核心に迫った。

「それで、その、お前に『超力獣を与えたのは人物』というのは誰なんだ？」

田中はゆっくり口を開く。

「病院で会った男です。名前は聞いても名乗りませんでした…」

「では、男の特徴は？」

「背が高く髪型はオールバック…」

里菜が、田中を取り調べる様子をガラス一枚隔てた部屋から観察する龍我、純、雄真、そして凌。

「その男…一体何者なんだ？」

雄真が呟くと純が続く。

「田中さんが言ってるのと同じ人物かはわからないけど、最近同じ様なケースが多いよね。誰かに超力獣を与えられ、そそのかされて、犯行に及んだってケース…。数年前まではこんなこと滅多になかったんだよね？」

それに答える為、雄真は再び口を開く。

「そうだな。俺がサイコレンジャーに入った頃なんかはどんな強力な能力者でも大概は単独犯だったな。たまに組織犯があつても小悪党の猥褻とか窃盗とかだったし…。そもそも『自分が超能力者だ』なんておっぴらに言える事じゃないしな。超能力者同士が横のつながりを築くのは難しい。特に能力が強ければ強いほど。でも、もし奴らの言ってる事が本当なら裏で今までとは違う何か動き始めてるのかもしれない…」

と、そこまで言ってから雄真は急に語り口を変えた

「とはいえ、奴らの言うことなんかアテにならないけどな。自分がなんかやらかした時に他の奴のせいにするのは悪党の常套手段だろうな、龍我」

雄真は龍我に同意を求めると龍我は全然関係ない事を口走った

「田中君…。病気のお母さんの為に人を襲ってたんだね…」

「ああ」

「うん。可哀想だよな」

雄真と純が同意する中、凌が鋭く言う。

「龍我、君は彼に同情してるのかい？」

「え？」

「凌…？」

龍我と純は凌の攻撃的な口調に驚いて順番に声を出した。

凌はそんな二人、特に龍我に対して、自らの怒りを理解させようとしてか、説明するように丁寧に突っかかる。

「君はさあ。彼を捕まえる前にこう言ったんだ。『友達を襲った奴が許せない』ってね。なのに彼には同情するのかい？ 知り合いだったから？ 事情を知ったから？ 理由は知らないけど、とにかく矛盾してるんだ、君は！」

「ちよつとやめなよ！」

純が割って入る。

「だって、その時はまだ犯人がどういう事情でやってたかなんてわからなかったんだもん。だから仕方ないよ。ね、そうだよね！」

凌は龍我と雄真に向かって言う純を鼻で笑う

「まあ龍我、君は彼の事をよく見ておいた方がいい。彼もまた、自らの力に翻弄された人間の一人さ。なまじ半端に超能力なんて持たなきゃ、彼もこんな事しないで済んだんだ」

それだけ言って凌は、彼の端正な顔つきに似合わない乱暴な所作でドアを開け、そっぽを向きながら部屋を出て行った。

「なんか凌、機嫌悪くない？ ねえ雄真君」

と、彼の様子を不審がって純が言う。と雄真は腕組みをしながら答えた。

「いや、俺は凌が言ってる事も少し分かる気がするぜ」

「え？」

「やっぱ、同じ超能力者でも龍我は俺達とは全然違う。育ってきた環境からなにからな。龍我はいいヤツだ。わかってる。でも…違うモンは違う」

そこまで言っていると、雄真も凌の後を追いかけるようにドアノブに手をかけ、

「ああ、だからと言って追い出そうとか言うんじゃないから。俺は凌とは違う。そこは心配すんな」

と言いき残り雄真はボタンとドアをしめた。

二人が去って行って、そこから数秒間、部屋に気まずい沈黙が流れた後、純は必死に彼らのフォローを始めた。

「あ、あのね。凌も雄真君も本当はスゴくいい人なんだよ！　ただ、過去に色々あったみたいだから、素直に人間を信用できないってトコがあつて…。ほら、龍我君と私達、まだ出会って日が浅いから、人見知りしてるだけ。うん」

そんな純の様子に龍我は苦笑いする。

「いや、いいんだよ…」

だが、純は首を横に振った。

「ダメダメ。私、サイコレンジャーのみんなはもつと仲良くなるべきだと思うの」

そして、純は龍我の方へ身を乗り出す。

「龍我君だって超能力者として今まで辛い経験を色々してきたでしょ？」

「ああ…あのさ。俺、そういうのが全然なくてさ。それでこの前、凌からも怒られちゃったんだよね『君は傷つくという経験をしてなすぎ』とか何とか」

しかし、純は龍我の言葉を素直には受け取らなかった。

五本の指をしつかりと組んで続ける。

「うん、うん。分かるよ、龍我君。忘れたい程に辛い経験だったんだよね」

「ん？　あれ、違う…って。おーい」

龍我の言葉を見無視して語りに語る純。

「普通の人のの中では絶対に受け入れて貰えない、超能力者の五人がこうして揃って一緒に暮らしたり、仕事したりしてるんだよ。これってとても素敵な事だと思わない？　同じ超能力者ならもつと分かり合えるよ、信じ合えるよ、愛し合えるよ！」

純は龍我の手を握る

「龍我君も協力してくれるよね!?　見たところ龍我君は人あたりも良さそうだし…助かるなあ」

龍我は目をパチクリさせて呟く
「ありやあ…何言っても無駄かあ」

再会

どこともしれない暗い部屋。

床には赤い絨毯が敷き詰められ、壁際には背の低いタンスが5つ程あり、その上をいかにも少女趣味な可愛いぬいぐるみが埋め尽くす。

その部屋のほぼ中央に設置された頑丈そうな椅子に目を瞑り座る少女。

身につける高級そうな赤いドレスと綺麗に整えられたロングヘアーが彼女が良家の娘であることを示している。

室内が蝋燭の炎でオレンジ色の照らされる中、彼女の閉じられた目がカッと開かれる。

「来た…!!」

その瞬間、彼女は鋭い目つきでそう呟いたのだった。

「みんな、街に超力獣が出現したわ。今すぐ現場に向かって…!」

サイコロレンジャー五人のメンバーの頭の中にテレパシーでアスピよんの声が届く。

雄真と凌は自室からそれぞれ出て行き、ロビーで取り調べの様子を見守っていた龍我と純は互いに頷きあって玄関の外へ出て行く。

そして、ガラスを一枚隔てて向こう側の取調室にいた里菜も、ガタリと大きく音を立てながら、椅子から立ちあがりそれに続こうとする。

だが、その途中で彼女は思い出したかのように立ち止まり、取り調べ相手の田中に声をかける。

「田中利保。一応言っておくが私たちがこの場にいなくなつたからと言って逃げようなどとは考えない事だ。この部屋の鍵は特殊な構造でな、並大抵の衝撃ではビクともしない。それにこちらには、千里眼“が”いる。お前の行動は丸わかりだし、もし逃げられたとしても居場所はずぐにわかるぞ。丁度もうすぐ警視庁の人間がくる頃だからそ

れまで大人しくしている」
それだけ言い残して里菜も急いで事務所を後にする。

ロングスカートを靡かせながら人通りの少ない道を歩くスタイルのいい女性。ツバの長い帽子をかぶってサングラスをしているので一見顔はよくわからないがスタスタ歩く姿は妙に堂々としていて、なんだか誇らしげにすら見える。

そんな彼女の前に物陰から突如、蜘蛛型の超力獣が現れる。

「え？ 何なの…コイツ？」

そう呟いて動きをフリーズさせる女性。

超力獣は彼女が豆鉄砲を食らっている隙に一つ飛びで距離を詰め、その喉を掴んだ。

女性は苦しそうに咳をする。もの凄い力で首を絞められた女性は呼吸困難に陥っていた。

「ケホッ、ケホッ…。やめ…て」

「貰うぞ、貴様のエナジー！」

超力獣が女性を手にかけてしようとした瞬間であった。

「待て！」

五つの人影が超力獣に襲いかかる

「エイッ、ヤァ！」

女性から手を離し吹っ飛ぶ超力獣。

女性と超力獣の間に立つ五人の若者たち。

「みんな、いくぞー！」

「おおー！」

と、里菜の叫びに呼応する四人。

「サイコチェンジャー!!」

すると、五人の身体が眩い光を放つ粒子に包まれて、直後、その姿が戦士に変わる。

「サイコレット、北神龍我！」

「サイコブルー、風祭凌！」

「サイコイエロー、一色里菜！」

「サイコグリーン、桧垣雄真！」

「サイコピンク、百瀬純！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

その姿を見て一瞬怯みながらも超力獣は

「邪魔をするな！」

と五人に襲いかかっていた。

五人はそれぞれが腰を低く保った態勢で迎え撃つも、凄まじい突進の威力に弾き飛ばされてしまう。

宙を舞う五人の身体。純と凌は背中から、里菜は腹から、龍我に至っては頭から地面に叩きつけられてダメージを負ってしまう。唯一、雄真だけが足からの着地に成功していたが、かなりつよく突いたようで、地面との衝突の瞬間「うっ！」とややこもった声をあげた。

攻撃を受けて、相手の強さを直に感じた凌が思わず叫ぶ。

「コイツ、強い！」

「怯むな！」

里菜に鼓舞され再び超力獣に向かう五人

「エナジーソード！」

まず龍我と凌がサイコチェンジャー内の粒子を剣へと実体化させて切りかかるが、攻撃が当たるよりも早く身体を振り払われて、返り討ちにあう。

「サイコガン！」

今度は里菜、雄真、純が超力獣を狙撃するがビーム弾をはじき返されて、攻撃は三人の足下に当たってしまう。

「うわぁ！」

倒れこむ五人を尻目に

「ふん、こんなものか」

と誇らしげに言い、超力獣は再び女性の方へと向かう。

「まずい！」

龍我はそう思つて声を上げる。

それを同時に里菜は

「させるかー！」

という言葉と共に超力獣に向かつて手をかざした。

すると突如、超力獣の身体が何か見えないモノに吹き飛ばされるように宙を舞い、道の端の金網に激突。

更に里菜がすかさず掌を返しグツと力を入れて握ると、その金網が超力獣の身体に巻きついていく。

「どうなつてんだ!？」

目の前で起きる不思議な出来事に驚いて呟く龍我に凌が声をかける。

「あれはサイコキネシス。里菜の能力だよ。さあ、ボサつとするな！」
それは、『今の内に超力獣にトドメを刺すんだ』という凌の合図だった。

「あ、ああ…」

と、やや気遅れ気味ながらも凌に呼応する龍我。

二人はサイコソードを振りあげながら身動きのとれない超力獣に向かつていく。

だが、そこで里菜の技が解けてしまった。

「くっ…」

その声を発して座り込む里菜。

超力獣は金網がほどけた瞬間を見逃さず高く飛んで木に飛び移り二人の刃をかわす。

「ぐぬぬ…。おのれ、サイコレンジャー。覚えていろ…。そして女、お前のエナジー、必ず頂くぞ!!」

木の上からそう叫び超力獣は姿を消した

「大丈夫かい？」

しゃがみ込む里菜に駆け寄る凌

「平気だ。それよりすまない。あのまま握り潰す位のつもりでやったのだが…。最近、能力の調子がどうもな…」

謝る里菜を龍我は励ました。

「いや、仕方ないよ」

一方、襲われた女性に声をかける雄真

「大丈夫か？」

「ええ。なんとか…痛ッ」

「あ、大丈夫ですか？」

立ち上がれない女性に手を差し伸べる純。

その顔を見て女性が眩く。

「あれ？ 百瀬さん？」

「え？」

「百瀬純さんよね、私よ、私。中学校で同級生だった霞麗子！」

そう名乗り、女はサングラスを外す。

すると彼女の色白で目の大きい整った顔が露わになった。

もしかしたら『ゾツとするくらい』と形容できるかもしれない、そんな美人だった。

その顔を見て雄真が言う

「あっ！ タレントの霞麗子！」

護衛

「なるほど…。それで皆さんはあの怪物と戦っているんですね…」

「はい。ですから、この事は秘密にして頂きたい」

サイコレンジャーの事務所内で里菜が霞麗子に事情を説明する。

「ええ、勿論」

麗子は頷いた後、続ける。

「それにしても知らなかったわ。こうやって百瀬さんが正義の為に戦っているなんて…。凄いいじゃない」

「う…うん。ありがとう…」

純はうつむきながら遠慮がちに応える

机に座って話をする女性陣から少し離れて様子を見守る龍我、凌、雄真。

「うーん、それにしても本当に美人だな。さすがモデル」

「芸能人の知り合いがいるなんて純って凄いよね」

売れっ子芸能人、突然の登場に雄真と龍我が騒ぐ。

「ねえ、凌もそう思うよね」

龍我が話しかけると凌はあきれたように呟いた。

「君達はおめでたいよ。あの女がどういう人間かも知らないのに」

「あの超力獣は、また再び貴方を襲うと予告して去って行きました。口ぶりから言って実際にそうする可能性はかなり高いと思われれます」
里菜の説明を聞いて不安そうな声を漏らす麗子。

「まあ怖い」

「ですから今日から数日、貴方に護衛をつけたいと思うのですが」
「ええ。構いませんわ」

「純、お前、やれるな?」

「う、うん…」

純は若干躊躇う様子を見せながらも里菜の指示に頷いた。

「念の為、あともう一人…」

そう言つて里菜が男性陣の方を見ると、雄真が自分を指差し猛烈にアピールする横で凌が両手で×マークを作っている。

「むーん…」

里菜は何か考え込みながら龍我の方へ視線を移す。

龍我はさつきまで騒いでいたくせに、もう話に飽きたらしい。こちらを気にする事もなくボケーンツとした表情で煎餅をつまんでいる。

あれが一番マシか。

そう判断した里菜が声をかける

「よし。じゃあ龍我。お前、純と一緒に霞さんを家までお送りしろ」

「あ、俺か! は、はい!」

ぼけっとしていた所にいきなり話かけられた龍我は椅子から転げ落ちた。

そして、それと同時に雄真が叫ぶ

「何だよ、何で俺じゃねーの!!」

パターン――

ドアが閉まり、龍我と純、麗子が事務所から出て行く。

「ねえ、何で純にやらせるの?」

そのタイミングを見計らっていたかのよう凌が聞くと里菜は首を傾げつつ答えた。

「知り合いだし、丁度いいだろ? それが何だ?」

「知り合いだからダメなんじゃないか。純にだって、昔は色々あったはずでしょ? 護衛、替えた方がいいと思うよ」

それを聞いた雄真が言う。

「何だ、あんな事言っつてお前、やっぱりやりたかったのかよく。まあお前くらい顔がよくて人の気持ちかわかれれば相手が誰だって落とすのは簡単だろうからなあー」

その言葉に珍しく憤慨する凌。

「違う！ そうじゃない！」

夜道

「わあ、大きいマンションですね！」

麗子の自宅マンションを見上げて龍我が言う。

龍我、純の二人は予定通り、霞麗子を家まで送り、現在その自宅マンションのふもとまでやってきていた。

「まあ、私もこう見えて芸能人の端くれですし、世間に顔が知られてますから…。セキュリティの面を考えるとやはりこういう所が…」

麗子が謙遜するように右の掌をパタパタと扇ぐような動作を見せつつ言うと、龍我は大きく頷いた。

「うん。これなら明日の朝までは平気そうですね。じゃあまた明日迎えにきますよ」

「ええ。じゃあまた明日。ごきげんよう」

そう言って、麗子は二人に背を向けようとしたのだが、その瞬間、

「あ、ちよつと待って！」

「はいっ」

と首を傾げる麗子に龍我は頭を掻きながら尋ねた。

「麗子さん、明日の仕事の予定は…？ 教えてもらえないと迎えにこないんで…」

「あ、そうでした。すいません」

そういって麗子は鞆から手帳を取り出し予定を確認する。

「あ…、明日は朝から都内でイベントですね…。それと、明後日の仕事朝早くの仕事なので夜はホテルに泊まる事になってるんですが…」

「なら、俺達も泊まりがけで護衛しますよ」

「本当ですか、助かります！」

「純もそれでいいよね？」

「う、うん」

麗子の自宅マンションからの帰路。夜道を歩く龍我と純

「…という事になったから」

龍我が電話に向かって話す。その向こうからは里菜の声がする。

「わかった。こちらからは少し遠いが何かあればサイコバスターにのってすぐいけるだろう」

「じゃ、そういう事で」

一通り、要件を伝えて電話を切った龍我はその後、純に話かける。

「いやあ、デカイ家だった。芸能人って凄いよね！」

「うん…」

龍我は興奮気味だが純の返事はなんだか気が抜けている。

「なんかさ、純さっきから元気がくない？」

純は先程からなんだか少し大人しかった。

基本的にサイコレンジャーのメンバーになった者は情報保持の観点から友人関係を遮断されて、その先は連絡をとることすら難しくなってしまう。

彼女は龍我とは違って期間を限定したメンバーと言う訳でもない。このまま戦い続けるなら、もう二度と会えなかったかもしれない友人に会う事ができたのだ。

本当ならもつと喜んでいいはず。なんだか不自然だ。

まさか、同級生つてだけでそんなに仲良くない？

いや、麗子さんの嬉しそうな反応を見る限り、そんな感じじゃない。

では、二人の友情は麗子さんの片想いで純は大して仲いいと思っ
ない…？

それも考えづらい気がする。芸能人が『有名になった途端に知らない連中まで友達を名乗り出した』というのはよく聞く話だが、今回のケースはその反対だ。そんなこと、あるんだろうか。

龍我がそんな意味を込めて聞くと、純は首を大げさに横に振った。

「そんなことないよ。何でそう思うの？」

「いや、大した事じゃないけど…。せっかく昔の知り合いに会えたのに全然しゃべってないし…。二人は友達だったんだよね？」

純は頷くもののなんだか自身なさげだ。

「うん。たぶん…」

「たぶんって何？ 麗子さんは友達だったっていつてたよ」

『友達だった』っていうのはあつてると思う…」

なんだかよくわからない。でもこれ以上聞くのは悪い気がしたので龍我はムリヤリ納得してみせた。

「そっか…」

龍我は気まづくなつてワザと明るく言う。

「じゃあ…えつと…。麗子さんって中学生の時、どんな感じだった？

芸能人の過去つて気になるなあ。実は滅茶苦茶暗かったりして！」

「今と変わらないよ。人気者だった。すごく」

「なーんだ。イメージ通りでつまんない。あ、じゃあ純は？ 純はど

んな中学生だった？」

「私は…暗かったかな…。友達もいなかったし…」

「あ、そう…」

あえて言わなかったものの、龍我は純のその言葉に明らかに矛盾を感じていた。

『友達がいなかった』…？

じゃあ麗子さんは？ 一体、二人はどういう関係なんだろう？

握手会

「どうもありがとう、ありがとう」

東京都新宿区にある書店のイベントホールで、長い行列をつくるファンの一人一人と握手を交わしてサイン入りの本を手渡す霞麗子。

今日の麗子は、プライベート姿で化粧も碌にしていなかった昨日とは打って変わって、バッチリとしたメイクと華やかな衣装でキメている。昨日もサングラスを外した瞬間から、抑えきれんばかりの美貌を周囲に振りまいていたが、今の麗子の姿はまさしく自分がスターであると言わんばかりであり、彼女を慕って会場まで足を運んだファンからすればもはや神々しくすらあっただろう。

会場にいる誰もが、華やかな彼女の姿に目を奪われていた。

そして、目立たないようにイベントスタッフに扮した龍我と純がその様子を少し離れた場所から見守る。純が麗子と再会した翌日、二人は約束通り、イベントに参加する麗子の護衛についていたのだった。握手を終えたファン数人が列になって龍我と純の前を通り過ぎると、その会話が聞こえてくる。

まず最初に通りがかったのは小太りで眼鏡をかけたオタク風の男。なぜか少し前かがみになりながら、不自然な歩き方で、独り言を言いながら通り過ぎる。

「ふあゝ。萌ゝ、麗子タン萌えゝ」

その後ろを歩きながら男を侮蔑の表情で見る若い女性。この女性はどうやらファッションリーダーとしての麗子に憧れているらしい。麗子と同じような髪形と服装。上から下まで麗子スタイルだ。ただ残念なことに麗子と同じファッションをしているが故に麗子との美貌の差が際立っている。その辺にいればある程度の美人であろう彼女ではあるが、麗子を相手にするには荷が重い感じだ。そんな彼女が去り際に呟く。

「何よ、アイツ。麗子様はスーパーモデル様々なのよ。オタクの萌えゝの対象にしないですよ」

その後ろから来たのは、フリルのついたワンピースを身にまとったふんわりとした雰囲気的女性。龍我の見るところ、おそらく20台中盤くらい。年の割にはやや無理のある格好だが、前を歩く2人にくらべると明らかに人当たりがよさそうだ。そんな彼女であったのだが先程の麗子スタイル女性の独り言を聞くと表情を一変させた

「モデル？　麗子様はそんなじゃないわ。麗子様は天使。この世に舞い降りた天使なのよ…。やっぱり、やっぱり麗子様の事をわかってあげられるのは私だけ…。ああ、麗子様…麗子様…」

その彼女が通り過ぎた直後であった

「フハハハハ…！」

そんな高らかな笑い声が聞こえた。

もしかして超力獣か？

龍我と純は一瞬身構えたが、違っていた。

それは彼女の後ろを歩く40代後半くらいの男性の声だった。

男性はシルクハットをかぶり、顔には目から鼻を覆うマスク・オブ・ゾロのような謎の仮面をつけている。そしてワイシャツのボタンを4つ程外し、筋肉質な肉体とフサフサの胸毛を強調していた。正に変態紳士である。彼は一通り笑いがおさまると、独り言というにはあまりに大きな声で叫んだ

「天使だと？　ふん、笑止。彼女は神だ。まさしく神なのだよ！」

龍我達の前を通り過ぎたオタク風男性、麗子スタイル女性、フリルの麗子信者、変態紳士は列を抜けてやや広い場所に出ると輪を作るような体形になり、にらみ合った。おそらく、それぞれの発言が互いに聞こえていたのだろう。

最後の一人に関しては当然だが。

そして互いに罵倒しはじめた

「麗子さんはスーパーアイドルだ！　萌の権化だ！」

「何がアイドルだ！　偶像崇拜など私は認めない！」

「男どもの汚い妄想で麗子様を汚さないで！　私だけの麗子様なんだから！　ああ…」

「てかお前ら不細工なんだよ！　不細工は麗子様に近づくな！」

騒ぎを聞きつけて集まってくる警備員たち

「ハイ、騒がないでー。話は外で聞きますからねー」

警備員達はそんなことをいいながら4人を小脇に抱えて会場を出ていった

「何をするー」

「離せー」

「麗子様、万歳ー!」

「麗子様は栄光あれー!」

連行される4人のファン達の断末魔を聞きながら龍我はふと言った

「俺達、あれはほつといてもいいんだよね」

純は苦笑いしながら頷く。苦笑いでも純にとっては久しぶりの笑顔だ。

「うん…。本人に危険が及ばなければ…」

そんな純をみて龍我は言う

「麗子さん、人気者だね」

しかし純はそれを聞くとまた表情を曇らせてしまった

「うん。あの頃と変わってない。全然変わってない」

そこからまた少し離れたイベント会場の隅。

その龍我と純を見ながら麗子のマネージャーと事務所スタッフが何やら話している。

「護衛とか言っただけで来たけどアイツら、一体何者なんだ？ 警察でも何でもないのに…。ストーカーよりアイツらの方がよっぽど怪しいんじゃないか？」

「そうだけどき、仕方ないだろ。あの宝来財閥会長・宝来源三様の紹介状を持ってるんだから」

「本当に何者だよ…」

麗子の部屋

東京ポークスホテル15階。

握手会を無事に終えた麗子は護衛の純と龍我を従えて、自身が宿泊する部屋のドアの前までやってきた。

そこで立ち止まって龍我が言う。

「じゃあ俺は部屋の外を見張りますから、部屋の中は純が」

「ええ。わかりました。じゃあお二人共。この後も宜しくね」

そう龍我に優しく微笑みかけた麗子。

純と一緒にドアを開けて部屋の中へと消えていく。

ガチャ —

ドサツ —

麗子は部屋の中に入ると身に付けた毛皮のコートとサングラスを乱暴に床に投げつけベッドに倒れ込んだ。

「あー、営業スマイルってホント疲れるわあー。あのオタクの奴とかマジキモイって…。あのさあ、純、それ全部片付けといてー」

態度を豹変させた麗子が床に散らばった衣服を指して言う。

純は言われるがままに麗子のコートをハンガーにかけながら呟く。

「本当に変わってない。全然変わってない…」

「ねえ、純」

麗子に呼ばれた純は肩を『ピクツ』と動かしてからゆっくりと麗子の方を見る。

「何?」

「結局さあ、あの超力獣? とかいう奴ってなんなの? 何でアンタがあんなのと戦ってんの?」

「超力獣は突然変異で生まれた猛獣で…」

「それは聞いた!」

ブツブツ話す純に対して麗子が高圧的に言う。

「私が聞いているのは本当の事よ！ どうせマニュアルか何かでそう答えるように決まってるんでしょ？ 嘘ついてるのがバレバレ。それとも何!? 私にも言えないっての!?!」

「ごめん、言えない決まりだから…」

「フウ…」

麗子はベッドの端に座りながらため息をつく。

「まあいいわ。とりあえず私さえ無事なら後は誰が襲われようが関係ないし。アンタ達がとつと追っ払ってくれればいいのよ。頼んだわよ、純。せつかく地位も名誉も手に入れたのに…。死んでたまるもんですか」

「うん…」

「チツ」

麗子はうつむいたまま返事をする純を見て舌打ちをする。

そして、

「返事が小さいわね」

と立ち上がって純に近づき脛に蹴りを入れた。

「アンタさあ、やる気あるの!?! 世間には私を必要としてる人間が沢山いるの! アンタとは違ってね! 私が死んだらどう責任とるつもり!?! ねえ、教えて。ねえ!?!」

言葉で一方的に責め立てられた純は今にも泣きそうな顔つきだ。

麗子は嗜虐的な笑みを浮かべた。

「はあ!?! 泣いてんの!?! ウケる。アンタってホント最高! 最近アンタみたいに虐める相手がいないから本当にストレス溜まっていたよー。あ、そうだ! アンタ、サイコレンジャー辞めて私専用のサンドバックにならない? 今よりいい暮らしさせてあげるわよ!」

それを聞いて、純は遂に肩を震わせて泣き出した。

「ウフ、ホントに泣いた」

麗子はそう呟いて続ける。

「あ、サイコレンジャーと言えなきゃ。彼ら結構イケメン揃いよね。一番格好いいのは…凌君かな。龍我君もいつもニコニコしてて可愛いわね。奴隷にしたいタイプ。雄真って人は…顔はいいけど頭悪そう。

少しならいいけど毎日一緒にいたら不快になりそうね…」

麗子は純の肩に手をのせて耳元で囁く。

「もしかしてさー、あの中に純の彼氏がいたりするのかな？ だったら先に言っつて。手は出さないで置いてあげるから」

純はすすり泣きながら必死に声を出した。

「別に…いない…よ」

それを聞くと麗子は待っていましたとばかりに満面の笑みを浮かべた。

「知ってるわ！」

その笑みで続ける。

「アンタみたいな暗い奴に彼氏なんか出来る訳ないじゃない！ どうせ今まで一度も彼氏でできた事ないんでしょ!? アンタはねえ、一生誰にも愛されないで死ぬのよ。かわいそー」

麗子はそれだけ言っつてベッドに腰掛けるとポケットから煙草を取り出す。

「ねえ、火！」

「え？」

「だから火！ そこにライターあるから」

麗子の示す方を見ると、近くにテーブルがあつてその上にライターがある。

それ拾いあげて差し出すと

「何やってんの？ ボサつとしないでつけてよ」

と麗子が更に要求してくるので、純は言われるがままにライターを煙草にあてがった。

すると一転、麗子は純の手から急いでライターを取り上げた。

「やっぱりいいわ。アンタにライターなんて持たせると危なくて…。ね、放火犯の純ちゃん…」

それを言われると今までの表情とは打って変わつて純は麗子を激しく睨む。

「何よ、その目。ホントの事言われてキレた？」

次の瞬間、麗子の服の袖に小さく火がついた。

「わっ！ 何これ！熱ッ」

しまった！

という表情でその火を消そうと麗子に近づいた純だが、麗子はその身体を突き飛ばす。

「どけよ！」

そして麗子は自ら急いで着ていた服を脱ぎ火を消すと、言った。

「アンタ、また何かしたわね。出て行きなさい。超力獣も放火犯も変わらないわ。どっちも危険なケダモノよ。龍我君と中の見張り代わってもらって。アンタ、外で眠りなさい。ホラ、出て行きなさいよっ！」

沸騰

ガチャ―

麗子の部屋のドアが開いて純が廊下に出てくる。
それに気づいた龍我。

「純？ どうしたの…？」

そう言い、純の顔をまじまじ眺めると、その目に涙が光っているのがわかった

「え、泣いてるの？ 何かあったの？」

しかし純はその質問には答えない

「ごめん、龍我君。私ちよつと外に用があるから、見張つてて」

龍我に対して一方的に事づけた後、純はホテルの廊下を走つて行つてしまう

「え？ え？」

突然の出来事に戸惑いながらも龍我はその背中に必死に声をかける

「純！ 傘は!? 外は雨だよ！」

「純…」

その場で龍我が茫然としていると再びドアが開いて、今度は麗子が部屋から出て来た。

「あの…」

龍我は麗子が何か言いかけた瞬間に、彼女の肩を揺すつて問いかける

「あ、麗子さん。純はどうしたんですか!? 何かあったんですか!?」

ガバツ―

麗子は答えるより先に龍我に抱きついた

「麗子さん…？」

「ごめんなさい。私怖くつて…百瀬さんに思わず八つ当たりしちゃっ

たんです」

そして麗子は龍我を上目遣いで見つめる

「ちよつと、マズいですよ…」

龍我は麗子の身体を押し離す。麗子は呟く

「チツ、ガードが堅いわね。私が誘ってるんだから素直に乗ればいいのよ…」

「え？ 何ですか？」

龍我が聞き返すと麗子は今までの事が何でもなかったかのように笑った

「いいえ、何でもないので！ とにかく龍我君！ 私と友達になって！」

「は？」

「私、心細いの…。ね、いいでしょ？」

「まあ…はい…」

純も心配だが、任務である以上ここを離れる訳にもいかない。

龍我は麗子のそばにいるしかなかった。

土砂降りの中、傘もさささずには濡れで歩く純。

「鎮めなきや…鎮めなきや…」

そう呟きながら歩いていると足下がふらつき自転車にぶつかりそうになる

「この、危ねえじゃねえか…」

傘をさしながら自転車にのる運転手はそう言いかけてから、言葉を詰まらせた

無言の運転手に純が言う

「ねえ、お願い…私に話かけないで…今の私は何をするかわからない…！」

「ひえっ！」

自転車にのった男が見たのは普段の大人しい顔つきからは想像できない程の恐ろしい形相を浮かべる純だった。降り注ぐ雨が全て身体に降りかかる寸前で蒸発して湯気になっている。

「わあー、バケモノー！」

自転車は猛スピードで走り去る

「ダメだ…ダメだ…。もう我慢できない…」

フラフラと今にも倒れそうな足どりで歩く純。

辺りをキョロキョロしながら進んでいくと、公園の噴水が目に残る

「あ、あれだ…」

純は何か思いついたかのように小走りで噴水に近づき、そこに張った水に手をかざす。

ボコボコボコー

噴水に溜まった水がたちまち音をたてながら沸騰し出した。

「じゃあ、何かあったら大声で叫んで下さいね！俺はここにいますから」

「あー、ちよつと龍我く〜ん…」

龍我は麗子の身体をほぼ無理矢理ドアの中へ押し込んだ。

「フウ、二人とも一体なんなんだ…」

ホツと一息つこうとした瞬間、龍我の脳裏に突如、何かに打たれた様な衝撃が走った。そして直感する

「近くにいる！超力獣！」

龍我が急いで階段を降りるとそこには蜘蛛の糸でグルグル巻きにされたホテル従業員の姿。

龍我はサイコチェンジャーの通信機能を使って呼びかける

「純！ ホテルに超力獣が現れた。今すぐ戻って来てくれ。純！ 聞こえるか、純！」

そこへ後ろから忍び寄る超力獣

「くらえ！」

超力獣は口から粘着性の糸を吐き出し、龍我に奇襲をしかけた。しかし、龍我はそちらを一切見ていないにも関わらず、間一髪攻撃をかわす

「何イ！ 完全に気配は消したはず…。なんて勘のいい奴だ！」

「サイコチェンジャー!!!」

龍我は超力獣が感心している間に変身して殴りかかるも超力獣の怪力で投げ飛ばされる

「やっぱり強い。一人じゃムリだ…。純！ 応答してくれ、純！」

龍我はサイコチェンジャーに向かって必死に叫び続ける

純のサイコチェンジャーから龍我の叫び声が響く。

しかし、今の純にその声は届かない。

純は無表情のまま、ただひたすら噴水の水を沸かし続けていた

第五話 憎しみのパイロキネシス (後編) 出動

サイコレンジャーの事務所内、夕食を食べる凌、里菜、雄真。

「うん、うまい。この仔羊にこの味付けをするのはなかなかいいアイデアだ」

「また、腕を上げたな」

里菜と雄真が言うのと凌は満足げな表情を浮かべた

「そうでしょ。研究に研究を重ねたからなあ」

そんな三人の元にアスピよんが駆け寄る

「みんな、大変よー！」

「一体、なんだってんだよ。せつかくうまいメシ食ってんだから静かに…」

食べる手を動かしたまま迷惑そうに答える雄真の危機感のない声をアスピよんの叫び声がかき消す

「龍我達のところに超力獣が現れたわ！」

それを聞くと里菜と雄真は態度を一変させてナイフとフォークを放り投げる

「何！ サイコバスターで出撃するぞー！」

里菜が言い、雄真が続いて部屋から出て行く

納得いかないのは食事を作った凌だ

「せつかく作ったのに…。帰って来てから食べたんじゃ冷めちゃうじゃないか。くそ…超力獣！ 許さないぞー！」

乱暴に椅子を蹴りあげてから遅れて続く

パリンー

窓ガラスが割れて龍我と蜘蛛の超力獣がもつれ合いながらホテルの駐車場に落下する。

ドスン―

着地の瞬間、超力獣を下敷きにし、クッション代わりにした龍我はすぐさま立ち上がりサイコガンを撃つ。超力獣はそれを寝返りをうつような形で避けて立ち上がる。そして龍我めがけて糸を発射した。龍我は持ち前の第六感で攻撃を事前に察知して素早く避ける。しかし、そこへまた糸攻撃。またしても避ける龍我。

もの凄い勢いで相手の攻撃をかわし続ける龍我だが、段々と駐車場の隅へと追い詰められて行き逃げ場を失ってしまう

「ハハハ、素晴らしい動きだったがそこまでだ」

勝ち誇る超力獣の前になす術のない龍我。

どうしたんだ…。なんで来てくれないんだ…。

そんな思いからサイコチェンジャーに向かって必死に呼び掛ける

「くそ、純！ 応答してくれ！」

「今さら仲間を呼んでも遅い！ くらえ！」

超力獣が再び糸を吐こうとした瞬間、超力獣に上方からの攻撃。

サイコブルー、サイコイエロー、サイコグリーンの三人がサイコガンを撃ちながら降り立った。

超力獣は攻撃の衝撃で吹き飛ばされる

雄真が叫ぶ

「龍我、大丈夫か！」

「超ギリギリ！」

「純は？」

凌が聞く

「いや、何か出かけたまま帰ってこなくて…」

「そうか、じゃあファイアストライクは使えないか…。ならあの技でいこう…デルタストライカー!!」

凌が叫ぶと四人の元にデルタストライカーが現れる

「デルタストライカー フォーメーションB エアロスライサー!!」

4人で構えたデルタストライカーから扇形の光線が発射されて、それが超力獣に命中する

「ギアアア…!!」

超力獣は大爆発を起こすが、次の瞬間、地面が揺れる

「しまった、巨大化か！」

凌が叫ぶ。

四人が空を見上げるとそこに巨大な超力獣

「よし、サイコバスターで合体だ!!」

雄真が提案するが凌がその作戦を否定する

「ダメだ、純がいない。合体は全員揃わないとできない…!」

「じゃあどうすんだよ!!」

雄真が叫ぶ

「仕方がない。飛行モードのまま攻撃しよう。合体はできないが時間稼ぎ位にはなる!」

里菜の言葉に同意する龍我

「うん、純は絶対来る。信じよう!」

純の回想（1）

無表情のまま、ただ噴水の水を、自らのパイロキネシスによって沸かし続ける純。その脳裏に麗子と共に過ごした中学校時代の記憶が蘇る――

ここはとある市立中学校の教室内

昼食の時間、他のみんなが机を合わせて友達と一緒に食事をとる中で、誰とも机を合わせず、たった一人で食事をとる地味な風貌の少女。弁当箱から箸でおかずを拾い上げる度に、明らかになんの手入れもなくただボサツと伸びた前髪が目にかかり、彼女はそれをいちいちかきあげる。

「プツ……。プププププ……」

そんな彼女の耳に通路を挟んで隣の席で食事をする男子生徒三人組の抑えた笑い声が聞こえてくる。彼らは少女のやや不審な動作を見て陰口を言い、笑っているのだ。

しかし、少女には自分がなぜ笑われているのか理解できなかった。彼らの事を見て『なんだか、嫌な感じだな……』と思いつつ、文句を言う事もできないから、しばらくした後にまた食事を再開する。そして先程の動作を繰り返し返す

「ハハハハハハ！」

どうして自分が笑われているのかも理解できない少女の間抜けさ加減に男子生徒達の笑い声は、ますますヒートアップしていく

すると、周囲のクラスメイト達もその様子に気づいたようだ。皆、一斉に彼女の事を見てなにやらコソコソ話を始めた。生徒達の表情に浮かぶのは、このあからさまに孤立した少女に対する侮蔑と嘲笑である

なんで……。なんでみんな、私の事を笑うの？

私、まだここでは何も悪い事なんてしてないのに…
どうして…

そう思うと、彼女は胸の中になにかドス黒い感情が湧いてくるのを
感じた

何笑ってんの…。

あんた達なんか、私とその気になれば一瞬で灰に変えられるんだか
ら…。

そうだ…。私には『この力』がある。

望んで手に入れた力じゃない。いつも勝手に暴走して私の人生を
狂わせるこの力。

でも、これだけ悩まされてきたのだから、一度くらい自分の為に
使ったってバチはあたらないよね…。

それにコイツら全員殺したところで証拠は一切残らない

誰も私を裁くことなんてできない

そうだ、殺してやる…。殺してやる！

思考の中で感情が爆発すると、彼女は『力』を抑える理性のブレー
キが少しずつ弱まっていくのを感じた。

視線の先にあつた弁当箱の中のハンバーグが、彼女の発した熱によ
りジウジウと音を立て始める。

そんな時であった。彼女は一つの声によって妄想の世界から現実
に呼び戻される

「あの、あなた、百瀬純さんでいいのよね？」

「え？」

彼女は学校生活の中で呼ばれる事があまりにも少ない自分の名前
に反応して、思わず顔をあげた。目の前にいたのは、周りと比べてや
や浮いているくらい整った顔立ちをした女子生徒。他の生徒と同じ
ように怒られない範囲で制服を着崩してはいるが、そこに派手さや下
品さは一切感じない。上品というか、可憐というか。そんな言葉で形
容しても全く不自然じゃない、そんな風貌の美少女だ

「何？ 霞さん…」

純は声をかけて来た女子生徒の名前を呼んだ。

彼女の方は純の名前をうろ覚えだったようだが、純は彼女の名前を知っていた。いや、知らないはずもなかった。これだけの美貌を持った少女。同性とはいえ、どうしても目に留まる。

正直言うと、純は彼女に対してあまりいい印象を持つてはいなかった。

別に、なにかされた訳ではない。他の生徒と違って自分を下に見たり、嫌がらせをしてくる訳でもない。むしろ、大した関わりがなくても、遠くから見ているだけで彼女の性格の良さは十分に理解できていた。だが、それが余計に気に食わない。

美人でオシヤレで優しく、明るくて。みんなの人気者。

嫉妬なのは自分でもわかっていた。それでも、なにかもが自分と正反対の彼女を好きにはなれなかった。

やや警戒した面持ちの純に対して、やはり正反対に霞麗子は明るく言った

「ねえ、何で一人で食べてるの？ 一緒に食べようよ！」

「で、でも…。私、霞さんの事、よく知らないし…」

遠慮する純に対して麗子は全くひるまない

「いいじゃない！ そんなこと。私があなたと一緒に食べたいの。ね、お願い。いいでしょ？」

「え？ う、うん」

純は勢いに押されて頷いてしまった

さつきまで、ここにいた奴らを皆殺しにしてやろうと思っていたのに…。

純は自分の気の弱さを呪った。

その後、麗子とその友人数人と机をくっつけて昼食をとる純。

「昨日のオフバト見た？ 超面白かった！」

「あつ、私、『ダイナマイト松本』大好き！」

麗子を中心に友人たちの会話が回っていく。

今は昨晚放送されたお笑い番組について話していて、『ダイナマイト松本』というのはこの時期ブレイクしていた毒舌芸人である。

数年後には名前すら聞かなくなるのだが、この時代の中高生で知らない者はほとんどいないというような存在だった。

しかし、純はそんな会話に全くついていけない。

元々、そういった番組は好きではないのである。というか、笑う事自体が性に合わない気がしていた。

この時期の純の趣味といえば、ベタベタな展開のやや古い少女漫画を読む事くらいだった。自分自身の暗い日常から逃避する為、そのファンタジックな世界に想いを馳せるのである。

こんなオタクっぽい趣味持つてる人なんて、他にいないだろうな…。

こんな明るそうな人たちと話なんて合わないよ…。

そう思うと余計に口を開くのが怖くなってくる。

その様子を見かねたのか、麗子が純に話を振る

「ねえ、純ちゃんは好きな芸人さんとかいないの？」

「あつ、あつ、わ、私はっ、あの、その…」

話しかけられたのだから、なにか話さなきゃ。

そう思っ慌てた純の反応に笑いが起きる

別に悪意などない、他愛のない笑いだっただが、他人から嘲笑を

浴び続けた純にそれを受け流す余裕はなかった。

パイロキネシスを使っている訳でもないのに全身が熱くなり、恥ずかしいくらいに赤面してしまう

そんな純に麗子は優しく微笑む

「どうしたの？ 純ちゃん、そんなに緊張しなくていいんだよ」

「ごめんなさい、私、今まであまり友達とかいなかったから、どうやって話せばいいか、わからなくて…」

「じゃあ、私と友達になろう」

「え？」

「私が純ちゃんの初めての友達になってあげる。これからもずっと一緒にご飯食べたり、遊んだりするの。きっと楽しいよ！」

友達……。そんなの信じられない。だって、こんな私と友達になってくれる人なんているわけがない……

そう思っているハズなのに気がついた時には頬に涙がつつたっていた。

そしてこの言葉を言わずにはいられなかった

「麗子ちゃん……ありがとう。嬉しい」

麗子は純の背中を元氣よく叩いて言う

「ちよっと、何で泣くの？ 嬉しかったら笑って！」

純が麗子の家を訪ねたのは、その一週間後の事だった。

いつもみんなに囲まれている麗子が、友人達の中でなぜか純だけ家を招いたのである。

ピンポン――

ガタツ――

「純、待ってたわよ。さあ、上がって、上がって」

純が玄関のチャイムを鳴らすと、間髪いれずに出てきた麗子。

純は彼女に言われるがままに家に上がり、廊下をズンズン進んでいく彼女についていく

そして奥まったところにつくと麗子は

「ここが私の部屋よ」

と言って、そこにあつた扉を開けた

すると、いかにも女の子らしい小物に囲まれたおしゃれな部屋が現れた。

物が多い割にはそれがキッチンと片付いていて床には荷物の一つもない。

そんな部屋の中央に一つだけポツンと椅子が置かれていた

足にはタイヤが付いて、マットはフカフカと分厚い。長時間座って

いても疲れそうにはない、高級そうな椅子だ。

一体、何に使うんだろう？

純がそう思っていると、麗子はその椅子の真横に立って、ポケットからハサミを取り出した

「さあ、純。ここに座って」

「え？ えつと…えつと…」

え？ いきなり家に呼ばれるなんて変だと思ってたけど、やっぱり私、何かされるの？ どうしよう…。

純がそう思い、まごついてしていると麗子は

「いいから、いいから」

などと言い、純の背中を押して強制的に彼女を椅子に座らせた

そして次に首にタオルを巻きつけて、その上から更に大きな布をかける。

純の身体がその布に覆われた

これはまさか…。

純がそう思っている間にも麗子はキビキビ動く。

純が座る椅子をそのままゴロゴロと動かし鏡の前まで持つていくと、おもむろに純の前髪をかきあげた

露わになる純の額。そこには幾つか吹き出物ができている

「あつー！」

それをひそかに気にしていた純は慌てて額を手で覆うが、麗子は分析するように冷静に言う

「うーん。吹き出物は気になるけど、この程度なら、ちゃんとした薬をつければ治るわね。今度、お医者さんも紹介してあげる。それまではとりあえず少しだけ前髪残して…」

「麗ちゃん、これってもしかして…」

不安そうな純。それと裏腹に麗子はあっけらかんとしている

「そう。髪の毛、切るのよ」

純は必死に言う

「ダメだよ、切っちゃ！」

「何で？ このままじゃ顔が見えないじゃない」

「いいもん。私なんて、人に見せていいような顔してないし、肌も汚いし」

いじけ気味に言う純を麗子が優しく諭す

「そんな事ないわ。肌は一時的にニキビができてるだけで質はうらやましいくらいにいいわよ。白くて、プニプニしてて。赤ちゃんみたい」

「そうかな…?」

「それに顔だって。自分で鏡を見てみなさいよ」

麗子に促されて鏡を見る純。

そこにいたのは、自らとは比較にならないくらいの美少女に前髪を驚掴みにされた上、自分で自分の額を押さえる奇妙なポーズをとった女の子

別に普段と変わらない。地味な自分。

顔だって昔から変わっていない。というか変わらなすぎて子供っぽい

やはり自信は持てなかった

「やっぱりムリだよ…。なんか子供っぽいし」

「そんなことない。男の人ってこういう顔、結構好きなんだから。童顔はステータスよ」

麗子はそう言うのと、自信なさげな純の髪に容赦なくハサミを入れていく

数時間後。作業を終えた麗子が純に語りかける

「ホラ、可愛くなったでしょ?」

麗子に言われて、再び鏡に映る自分の姿を確認する純

やはり、麗子と比べると地味な印象は拭えない。

でも、前髪を切ったことにより、以前は見えなかったクリクリとした大きな目が露わになって、切る前と比べるとかなり明るい印象だ。

私、可愛くなってる…!?

自分で言うのは、はばかられたが自分でも思わずそう思ってしまった

麗子はそれを悟ったように微笑んで言う

「どう？ よくなったでしょ？」

口には出さないが無言で頷く純。そして言う

「麗ちゃん、凄い。どうしてこんなことできるの？ もしかして、美容師になる勉強でもしているの？」

麗子は顎にてを当てて言葉を選びながら答えた

「うーん。美容師の勉強はしてるけど、別に美容師そのものになりたいわけじゃないんだ……」

「じゃあ、なにになりたいの？」

「私、将来、ファッションモデルになりたいんだ。だから、ファッション全般について勉強して……。美容師の勉強はその一環」

そうなんだ……

純は感心した。自分は将来のことなんて考えたこともなかった

「ちやんと考えてるんだね。本当に凄いな、麗ちゃんは」

「まだ誰にも言っていないから秘密にしてよね。親や先生は大学へ行けっとうるさくて……」

そこで麗子は初めて暗い表情を見せた

しかし、純は目を輝かせて言う

「私、応援するよ！ 麗ちゃんならきつとできる！ ううん、絶対できるよー！」

どこまでも純粹な純の瞳。それを視た麗子は再び笑顔を見せる
「純、ありがとうね」

更に、数カ月後。

職員室から出てきた純が、廊下を歩く。

その時、純はもの凄い後悔に襲われていた。

それは、理科室で実験の授業をしていた時、その時間の終わり頃に起きた出来事であった。

事の発端は純に仕掛けられた、やった方からすれば些細な悪戯だった。

いつも純をバカにしてくる男子生徒が転んだフリをしてビーカーに入った水を純の顔にかけたのである。

それを目にして、教室は笑いに包まれた。

弱い者に対する、嘲笑。

そんなクラスメイト達に純は憎しみを抑えきれなくなっていた。

パリン――

そう音がすると、近くにあったアルコールランプの燃料が一気に燃えだした。

高ぶった感情が純のパイロキネシスを暴走させたのだった。

燃え広がろうとする炎をみて理科教師が素早く消火剤をぶちまけた為に大事には至らず済んだ。

しかし、その原因が問題視され、事件の当事者である純は職員室に呼び出されて事情を聞かれていたのだ

職員室のドアを開けた純を見て生徒達が口々に噂話をする

「理科室で小火だったさ」

「へえ、最近多いな。誰かがイタズラしてんじゃないのか？」

「アイツだよ、アイツ」

「えっ、あんな可愛くて大人しそうな子が…？」

「信じらんないよな。でも最近の小火五回、全部居合わせてるんだって」

「へえ。じゃ、あの子で決まりじゃん。なんで早く捕まえないんだよ？」

「証拠がないから。持ち物検査したけど、マッチもライターも見つからなかったってさ」

「ええ？ パンツの中にでも隠してるんじゃないのか？」

「それがさ、今日という今日はって事で女の先生が全裸にして調べた

らしいんだけど、何も出て来なかったらしいよ」

「そりゃ調べ方が足りねーんだよ。よし、俺が再検査してやる、隅から隅までなっ！」

「うわっ、超変態っ！ やめとけよ。キレられたら、お前の家も火つけられるかもしれないぜ」

「ギャハハハハ」

ガラガラ――

ドアを開けて教室に帰って来た純。

それに対して先程、理科室で純をからかった男子生徒のグループから野次が飛ぶ

「オイ、放火犯！ いい加減に自首しろよ！」

「わかってんだよ、バーカ」

教室がたちまち純に対する疑心暗鬼に包まれ、皆が一斉に無言で純を睨みつけた

そんな中、ただ一人、教室内を早歩きで移動する麗子

あいつ、何やってんだ？

皆がその様子に気づいて視線を純から麗子に移した頃、麗子は一番最初に純を野次った男子生徒の目の前で停止した。

「お……。な、なんか用かよ」

男子生徒が今にも身体が密着しそうなくらい近くに立った美少女の美貌にニヤつきながら言った次の瞬間だった

パチン――

教室に乾いた音が響く。それは麗子はその男子生徒の頬を引っ叩いた音だった

「何すんだよ！」

叩かれた生徒はもの凄い勢いで怒鳴り散らすが、麗子はそれを遙かに超えた剣幕で答える

「なんでそんな事いうの？ 証拠もないし、本人も違うって言ってる

じゃない!! それに、そもそもあんた達があんな所で悪ふざけしてるのもいけないんじゃない? そっちが原因じゃないってなんで言いきれるの?」

「ううッ…」

学校のマドンナである麗子に怒鳴られてバツの悪そうな男子生徒達。

彼らにこれ以上、反撃する事はままならないようだ。

麗子はその様子を見ると男子生徒を軽蔑のまなざしで一瞥してから、麗子は純の手をとって言う

「ねえ、純。みんなはああ言ってるけど私は信じてる。信じてるからね…」

「麗ちゃん、ありがとう」

そう言っただけで強く握る麗子の手は純が今まで触れたどんなモノより暖かいモノに感じられた

麗ちゃんは私を信じてくれた…。

彼女の期待に、初めてできた友達の信頼に応えたい

その為には、もう二度とあんな事件を起こしてはいけない

もう二度と力を暴走させてはいけない

自分の力と戦って、自分の力を抑え込むんだ

その日以来、純はそう誓った

生まれつき持った自分の力、念力発火能力・パイロキネシス。

それを抑える方法が一つしかない事を純は知っていた。

その方法とは『常に平常心を保つ事』であった。

純は誓いを立てたあの日以来、インターネットや図書館の文献を用いて、ずっと自分の能力について調べていたが、どうやら、根本的に超能力を消してしまう事は難しいようだった。

『超能力者になる為のトレーニング』とか『エスパーになりたい君へ』みたいな文献はいくつか見つけたが、逆に超能力を消す方法となると急に資料がなくなってしまふのだ。

そうなるのも仕方がない事だった。

なぜなら、世の中には超能力を持つ人間より持たない人間の方がずっと多いからだ。それは即ち、必然的に普通になりたい超能力者より、超能力者になりたい普通の人の方がずっと多い事を示す

それに気付いた純は資料に頼る事をやめて、自分の経験を分析してみることにした。

そうすると、答えは一つだった

この前、理科室で事件を起こした時も皆にバカにされて思わずカツとなつたら、もう火が燃え広がっていた。そう言えば、まだ幼い頃はないか気に入らない事があるとすぐに小火騒ぎを起こしていた

私の能力は怒りや憎しみの感情と密接にリンクしている――。

つまり、他人にないをされても怒つたり、苦しんだりしなければいいんだ――。

純がたどり着いたのはそのような結論だった

純の自己分析の結果、つまり『自分の能力は怒りと密接につながっている』という結論は大正解であった。

その後、更に詳しく調べてみると、やはり麗子と一緒にいる時や趣味に耽っている時はどんなに興奮しても能力が暴走することなどないことがわかった。また、故意にパイロキネシスを発動させた場合、何かに対する憎しみの感情が湧き出てきて、しばしば歯止めが利かなくなる事もわかった。

ということは、予想通り、常に平常心を保っていれば、小火騒ぎを起こす事なんてなくなるのである。

しかし、実際にそれをやるとなると話は違ってくる。

純の置かれた状況と不安定な思春期の少女の心がそれを許さなかったのだ。

純がいくら堅い覚悟で『怒らないようにしよう』と思っても、同級生達はそんな事を知る由もない。平気でちよつかいを出してくる。純は無視をしようとする。そうすると面白くない同級生達は更に酷い悪戯を仕掛けて来るのだ。

そこから先はさながら蟻地獄のようだった。

虐められる、我慢する、虐めがエスカレートする、我慢できなくなつて小火を起こす、そしてそれを咎められてまた虐められる。

そんな事の繰り返しである。

それでも純はいつか必ず完全に力を制御できると信じて疑わなかった

それには理由があった。

尊敬する超能力者の存在である。

直接、その人にあつたことがある訳ではない。その人はテレビ番組などで予知を行い、次々に事件を解決する凄い能力者だった。

同じ超能力者でありながら、事件を起こしてばかりの自分とは違つてしつかりと人の役に立っている。その人が普段どんな人か知らなくたって、それだけで純はその人を尊敬できた。

だから純はその尊敬すべき超能力の先輩に聞いてみたかった。

『力が強すぎて嫌な事まで予知してしまう事はありますか？ そういう時、どのようにして気持ちを抑えていますか？』と。

その予知能力者が出演する番組には丁度、能力者が視聴者からの質問に答えるコーナーがあつたから、『変な質問だと思われるかな？』と思いつながら純は先程の疑問をはがきに書いて番組へ送つた。

すると数日後、そのはがきが番組内で読み上げられたのだ

キャスターが読み終えると、コメンテーターや超能力に否定的な科学者など、他の出演者は「なんだこの質問？ 気持ち悪い…」とか「こんな信者染みた中学生がいるなんて危険」などと純をへこませるコメ

ントばかりしたが、超能力者は真面目に答えてくれた

超能力者は質問の送り主が超能力者である可能性を示唆した後、言った

「彼女はもしかしたら今、超能力者である自分に悩んでるのかもしれない。でも、大丈夫。きつとわかってくれる人がいる。もし、その人が超能力を信じていなくても、あなたの事は信じてくれる。その人と一緒ならきつとどんな試練も乗り越えられる。もし、自分の力のことで悩んでるならその人の事を考えてみて。きつと心が落ち着いて能力も抑えられるから」

その言葉は純の心に突き刺さるものだった。
なぜなら今の自分の心境を的確に言い当てていたから。

私には麗ちゃんがいる。私を信じてくれた唯一の人、初めての友達。

親より、兄弟より大切な人。

あの人の言う通り、彼女が信じてくれれば私は頑張れる

そう思うと、純は自分で自分の事を信じてあげられる気がした。

しかし、大切な人が自分の事を信じてくれなくなる時がやってくるのは、純が自分で自分を信用できなくなる時よりずっと早かった

麗子と友達になって一年が過ぎようとしていた頃だった。

その日、純は麗子の友人、数人に呼び出されて体育館の倉庫へ向かっていた。

そこで麗子が呼んでいるというのだ。

何の用なんだろう…？

不思議には思っていた。

話があるなら教室でしてくれればいいのに。わざわざ人を使って、

こんな所まで呼び出すなんて…。

純を呼び出した麗子の友人の内、二人によって倉庫の重い扉が開くと、跳び箱の上に腰かける麗子の姿が純の目に映った。

「麗ちゃん、こんな所まで呼び出して、一体何…ッ！」

そこまで言った所で純は何者かに背中を強く押された

バシッ―

床に叩きつけられた純。その身体を、おそらく純を押し倒した張本人であろう女子生徒が上から押さえつけて言う

「アンタさ、麗子に謝りなよ」

「え？ 何？ どういうこと？」

突然の出来事に戸惑う純が思わず言うのと、身体を押さえつける女子生徒は半ば呆れるように溜息をついた

「アンタのせいで麗子がどれだけ恥かいたと思ってる？」

その言葉を聞いて純は背筋が凍りつくのを感じた。

もしかして麗ちゃん、私を庇ったことでもなにかマズいことでもあったんじゃない？。

そう直感した純はすがりつくように麗子を見つめながら叫んだ

「そんな…私は本当に何もやってないの。麗ちゃん、本当よ、信じて！」

しかし、麗子の心にその言葉は届かなかった。

その瞳から涙がこぼれ落ちる

「あのさ、純。無理だよ。もう、さすがに無理。今回で何回目？ なん
で？ 私、信じてたのに…。あなたはなんで私を裏切るの？」

純の回想（2）

その日から純は再び一人で昼食をとるようになった。

麗子と出会う前まではこのくらい当たり前だったのに、何故だろうか。

一人で食べる食事はなんだか物足りない気がした

純は楽しそうに談笑する他の同級生達を羨ましい想いで見つめる。

こんな風に思うのは初めてだった。

この大嫌いなクラスメイト達の和の中に入りたいなんて思うこと、今まで一度だつてなかったのに。

「ねえ、純。また一人なの？」

そんなことを思っていると純は唐突に後ろから肩を叩かれた。

振り向くと、そこには麗子の姿

「麗ちゃん……」

純が何か言う前に麗子は話し出した

「無様ね。純。私を裏切るからこういう事になるのよ……」

麗子からすれば軽くジャブを打った位の憎まれ口だったのだが、後ろめたさから、純は一切、反撃できない。

口ごもってしまった純に対して麗子は少し間を置いてから囁いた

「純、また仲間に入れてあげようか？」

「え？？」

戸惑う純に麗子は言う

「あんたみたいな可哀想な子でもできる簡単な仕事があるから、紹介してあげるって言ってるの。私達、友達だから」

それから数日後。中学校の体育館倉庫。

麗子やその仲間達のたまり場になっている場所である。

純は再び麗子に呼び出されてここに來ていた。

今、麗子と一緒にいる友人達は、仲間といつても、ほとんどが派手

な見た目の所謂ギャル系。純の苦手なタイプだった。

前にクラスで一緒に食事をしてた女の子達は優等生っぽい子が多かったから、あれから麗子は付き合う友人も少し変わったらしい。

しばらく距離を置いていた間に、彼氏ができたとも聞いていた。付き合つてはすぐ別れてを2、3人と繰り返した後、しばらく恋人がいない状態のようだったから、一人一人とそれほど深い仲であったようには思えない。

ただ、彼らとの経験がそうさせたのか。この時期の彼女には、自分の美貌が男を夢中にする、あるいは狂わせるものであると気づいてしまった少女の邪悪さが具わりつつあった。

「キャハハハハ！ 男つて本当に馬鹿！ 10万くれたら付き合つてあげるつて言つたら本当に持つてきたよ！」

「コツチも大量だよー。でもアイツ、かなり私に入れ込んでるから、そろそろ迫つてきそうでキモいんだよねー」

そんな事を言いながら一万円札を数える麗子と友人二人。

どうやら様子を見てみると、麗子たちは援助交際まがいの事をやって金を儲けているらしい。

一通り、金勘定が済み満足した表情を見せると、麗子は純の方を見て言つた

「純、詳しくは言つてないけど、見ればわかるよね。そういうことだから、純。アンタも協力してよ。分け前は弾むからさあー」

「でも、私は…」

さすがに『うん』とは言えない。純はどのように断ろうか考えながら口を動かす。しかし、麗子は純が一生懸命考えた言い訳を最後まで言わせてくれはしなかった

「やらないなんて言わせないわよ。せつかく私が髪切つて可愛くしてあげたんだから…。ホラ、世の中には金は持つてるのにキモくて一緒に歩くのも嫌つて奴がいるのよ。アンタにはソイツらの相手をして欲しいの」

純は勇気を出して思い切つたように言う

「あ、あのさ……。やっぱりお金返した方がいいよ……。人を騙したりするのってやっぱり良くないよー!」

「ギャハハハハ!」

そう高笑いした麗子は続けて言う

「何言ってるの? 私に人を騙す事を教えてくれたのはあなたじゃない!!」

結局、純はその誘いを断った。

自分が麗子にした事を考えれば、一人だけいい子ぶっているのは自分勝手だとも思った。でも、援助交際などに関わって好きでもない相手にムリヤリ迫られでもしたらどうなるだろうか。自分は何をするかわからない。

もしそうだったら、自分とはもかく、共犯の麗子まで疑われることになる。

だから、その誘いだけはきっぱりと断った。

断る際には罵声を浴びせられ、挙句の果てには身体に痣ができるほど殴られたが、それでも純は譲らなかつた

しかし、それで麗子との関わりを断つ事はできなかつた。

麗子と一緒にいる事でどんな扱いを受けるとしても、また一人になるのが怖かつた……。というのもあるが、それよりも純の中にある自責の念と淡い期待がそうさせていた。

麗ちゃんをこんな風にしてしまったのは私だ。ここで彼女の事を投げ出して逃げるなんてできない。それに、私がここで彼女を見捨てなければ彼女もいつか自分のしたことに気付いて改心してくれるかもしれない。

そんな想いから、純は麗子の為、献身的に働いた。

この時期に麗子たちが犯した犯罪行為は援助交際以外にも万引き、

恐喝など多岐に渡ったが、純もサポート役としてそれに手を貸した。特に麗子達が万引きをする際の見張りや逃走のサポートは純の得意分野だった。

感性の鋭さに加えて、純にはパイロキネシスがあったからだ。

危険なのでそう連発はできないが、行為がバレて追跡されている時などは本当に役に立った。スプリンクラーや火災報知機を誤作動させて相手の注意を引きつけるのである。

純の能力を知らない麗子達には当然、何が起きているのかわからなかったようだが、仲間内では『純が一緒だとどんなピンチでも必ず逃げられる』という話しになり、彼女らはご満悦のようであった。

そして『役に立つ』と判断された純は更に重用される事になるのである。

だが、罪を犯す度に純の心は荒んでいった。

どんなに尽くしても変わってくれない麗子に対しては憎しみすら抱くようになっていった。勿論、『私が放火で疑われていた時の麗ちゃんも同じ気持ちだったんだろうな…』というのはわかっていた。それでも、彼女への感情を止める事はできなかった。

破綻の時は、中学校卒業間近の時期にやってきた。

再び、体育館倉庫の中。

麗子の友人達によってマットに叩きつけられる純

「おい、何で金持ってこないんだよ！ いつも私達がやってる方法なら楽勝だっつってんだろ！」

「でも…」

「連続放火魔が今さらいい子ぶってんじゃねえよ！」

純にそんな罵声を浴びせながら麗子の友人二人が純を羽交い締めにする。

そこへ麗子が近づいてきた。

この時期の彼女は、受験のストレスからだろうか。非行を更にエスカレートさせていた。それは他の人間に対しても同様ではあったが、一番近くにおいて虐めやすい純に対しての態度は特に酷いものであった。

純が犯罪行為への参加を躊躇っているのを知っていて、強要してきた。今までのようなサポート役では納得せず、もっと積極的に参加するように要求してきたのだ。

純がそれを断ると、暴行を加えたり、代わりに金を持ってくるように命じていた。

その日もそんなやりとりの最中であった。

パチン―

麗子が純に平手打ちを食らわす

「アンタさ、友達の私を騙しておいて他の奴は騙せないって訳？ アンタって本当最低」

最早、彼女に抱いた友情を憎しみに転換させていた純はもの凄いい相で麗子を睨みつけた。麗子は今まで見た事のない彼女の表情になにか感じるものがあつたらしい。

「何よ、その目は！ まあいいわ。とにかくお金は持つてきなさい！

慰謝料よ、私を騙した事への慰謝料！」

それだけ言うと、麗子は仲間に純を離すように言って、純に背中を向けた

しかし、純の心はもうそれだけでは止まれない所まで来ていた

去っていく麗子の後ろ姿を見ながら純は呟いた

「ごめんね、麗ちゃん。ごめんね。もう我慢の限界なの…」

純は彼女達の去っていく方向へ向かって手をかざす

「サヨナラ、私の初めての友達…」

すると次の瞬間、倉庫内に青白い炎が広がった。

「何！ これ！」

そう麗子達の悲鳴が響いた所で純は自制心を失った。

「中学校体育館倉庫内で火災発生。重傷2名、軽傷2名……」

緊急車両のサイレンが響き、救急隊員が必死な声で通信する。

体育館倉庫を全焼させたこの火事は今まで純がパイロキネシスによつて起こした事件の中でも最も大きなものだった。

そんな事件の後なのに、純は落ち着いていた。

何故だか、いつものように罪の意識に苛まれる事はなかった。

それよりも、不思議なことがあったので、それについて考えていた。

「あーあ。失敗したな……。何で殺れなかつたんだろ……」

純はそのことがただ疑問だった。

私の能力ならもつと火を速く燃え広がらせて、あそこにいた人間を皆殺しにする事もできたはずなのに……。やっぱり無意識に、自分も危険だと思っちゃったのかな……。別にいつ死んだって構わないくらいに思ってるんだけどな……。

そんな純の耳に足音が聞こえてきた。

なんだらう……？

そう思つて音のする前方を眺めてみると白いタキシードを着た老人が近づいてくるのが見えた。

何？この爺さん？

学校関係者……ではないだろう。曲りなりにも三年間、この学校に通っているが、今までこんな人は見た事がない。では消防関係者？

それも違うだろう。それならもつとそれにふさわしい格好をするべきだし、第一こんな爺さんにできるような仕事ではないはずだ。

純がそんなことを考えていると、老人は純の目の前で立ち止まり、静かに語りかけた。

「あの、百瀬純さんですよ。この事件の犯人の……」

いきなり言われて驚いた。でもそれよりも、この老人の何もかも見

透かしたような態度が鼻についた。

「犯人？ 私か？ 証拠はあるんですか？」

パイロキネシスの発動により気分が高ぶった純は挑発的に言う。

その様子を見て老人は微笑んだ。自分より何十個も年下の少女に生意気を言われたというのに、老人は全く気にしていない様子だった。そして呟く

「パイロキネシス…」

「え？」

純は戸惑ってしまった。言葉の意味がわからなかった。

勿論『パイロキネシス』という言葉自体は知っている。自分が持つ力の通称。その能力をコントロールする為、何度も何度も入念に調べ上げた力の名前。

だが、他人がその言葉を発するのを聞くのは初めてだった。だから咄嗟には理解できなかったのだ。

そんな純に老人は再び語りかける

「念力発火能力・パイロキネシス。それが君の力だ。違うかい…？」

謎の少女

ボコボコボコ―

噴水の水を沸騰させ続ける純。その頬を涙がつつう

「純！ 応答しろ、純！」

サイコチェンジャーから龍我の声が聞こえる

「ダメ、私ダメなの…」

耳を塞ぐ純。

「嫌！ 嫌！」

そう叫んだ瞬間、噴水の水が一気に水蒸気変わった。

そんな彼女の目の前に黒塗りの車が一台止まる。

中から出てきたのは中学生、場合によつては小学生位に見える少女とSP風の男二名。

少女が純に近づき言う

「純！ 純！ しつかりしなさい！ みんながピンチなの！」

応答しない純に少女が平手打ちを食らわせると純がやっと反応する

「ア、アスびょん？」

「純、あれを見て」

少女が指差す方向を見ると巨大化した超力獣がいる

「純、行ってあげて。みんなが待ってる」

「でも…」

「純、あなたは戦士なの。あなたはもう、超能力を持って余して悲劇のヒロインを気取っていいればいい存在ではないの。わかったら行きなさい！」

純は立ち上がり超力獣のいる方向へ走り出す

巨大化した超力獣にサイコバスター飛行モードで攻撃を仕掛ける
四人

「撃て！」

里菜の号令を合図に四人の機体からミサイルが発射される

チュドーンー

「ギャアア……！」

ミサイルが一斉に命中。超力獣はそのダメージでのたうち回る。だがトドメを刺すには至らない。すぐに立ち上がり、また暴れ始める。

「くそ……まだか、純……」

凌が呟いた時、ピンク機が猛スピードで飛んできた

「みんな、ごめん！」

通信機を通して呼びかける純

「遅せえよ、純！」

「でも、これで合体できる」

雄真が叫び凌が言う

「よし、合体だ！」

龍我がレッド機内につけられたレバーを引くとサイコバスター各機が機械音を発しながら組み合わさっていく

「合体！ サイコバスター！」

超力獣と向かい合うサイコバスター。超力獣が突進してきて双方の取っ組み合いになる

「くっ、やはり力が強いな、ならばこれを食らえ！」

里菜がボタンを押すとサイコバスターの腹部から赤いレーザー光線が発射される。

「ガアア！」

至近距離から発射された光線が超力獣の胴体を貫くと超力獣は派手に吹き飛んだ

「よし、トドメだ！ エナジーソードDX！」

凌がそう叫ぶがエナジーソードが出てこない

「あれ？ 出ない!? どうして?。」

「燃料切れだ！ 飛行モードの時に弾を撃ちすぎた！」
龍我と雄真が叫ぶ。

超力獣はその隙立ち上がり再びサイコバスターに体当たりを仕掛ける

「うわあー！」

後ろ向きに倒されて超力獣にマウントポジションをとられるサイコバスター

「まずい、純！ 奴の手を押さえるぞ」

「うん！」

雄真と純がサイコバスターの両手を操作。超力獣の腕を掴んで何とか攻撃を耐え忍ぶ

「里菜、縮小光線を使おう」

凌が言う

「くそ…やりたくはないが仕方ないな…」

里菜がボタンを押すとサイコバスターの腹部から青い光が発せられる。

それを浴びた超力獣の身体がみるみるうちに縮んでいく

「これ、どうなってんの？」

龍我の質問に凌と里菜が答える

「超力獣の巨大化を一時的に解いたのさ。だけど一日位すればまた元に戻っちゃう」

「だから、我々は24時間以内にもう一度奴を探し出して始末しなければならぬ。そう遠くまではいかないはずだ。奴も深手を負っているからな」

サイコバスターから降りる五人

「おい、純！ お前一体どこへ行ってたんだよ」

「聞かせてもらおう。そうでなければ納得できないからな」

雄真と里菜が純を問い詰める

「それは…えっと、その…」

口ごもる純に凌が言う

「純、話した方がいい。その方が君の為になる。僕にはわかる」

「え？」

「全部話すんだ。今日あつた事も、過去に君と霞麗子の間であつた事もね」

そう言われて純は拍子抜けしてしまった

そうか…。凌にはもうバレたんだ…。

なんで今まで一人で抱え込んで悩んでいたんだろう。

凌にかかれば私の考えなんて、簡単に見抜かれちゃうのに。

そう思った純は意を決して大きく頷いた

「わかった。全部話すよ。私と麗ちゃんの間にあつたこと…」

独白

サイコレンジャーの事務所内。集まって座る五人とアスピョン
「じゃあ、新人の龍我君もいるから最初から話すね…」

そう言つて純が机の上にある折り紙の花を手にとつと、一瞬にして
それに火が点つた。燃えカスが机の上に落ちる

「これが私の力。念力発火能力・パイロキネシス…」

純は静かに語り出す

物心ついた時から私の周りではなぜだかいつも火事や小火が絶え
なかつた。

理由は自分でもわからなかつた。

何で私ばかりこんな事に巻き込まれるんだろつてただ不思議
だつた。

そういう事件が起きた後にはいつも警察とか消防の人がいろいろ
調べていたけど原因がわかることはなかつた

ほとんどの場合、現場周辺に火器もなかつたし、私もまだ小さかつ
たから話を聞かれてもまともに答えられなかつた

でも、周りの大人がみんな私を疑つてるのはわかつた。

当然だよね、いつも現場にいるんだもん。

最初は心配していた親もそのうち事件が起きる度に私を激しく叱
るようになった。

「火遊びはやめなさい」つて。何の証拠もないのに…

その頃はまだ、何もわからなかつたからさ。

自分がやった事に気づいてもいなかつた。

だから、言つたよ、何度も。私はやってないつて。

でも信じてもらえなかつた。

小学校に入る頃にはカウンセラーが家に来たりもした。
大ッ嫌いだったな、あの人…

私は何もやってないのに、わかった風な話し方でお説教するんだも
ん

それで私、一回すごく機嫌が悪くなったことがあって。

その人の服燃やしちゃってさ。それ以来その人来なくなったんだ
けど…

これが超能力だって気づいたのは、そのもう少し後だったかな。

家族と一緒にTVで超能力の特集番組を見ていたの。

ソートグラフィ、サイコキネシス、プレコグニション、クレヤボヤンス
念写、念力、予知、透視…

様々な能力の実証例が紹介されていたんだけど、その中に私の力が
あった。

念力発火能力・パイロキネシス…

手や口から火炎を噴射したり、念じるだけで対象物を灰にする怖ろ
しい能力だって。

その番組を見ながら「私もパイロキネシス使えるよ」って言ったら、
お母さんは凄い形相で私を睨んだ

そして、その後「ふぎけないで！」って泣きながら叫んだ

それが超能力だってわかってからは私も「どうやったら能力を抑え
られるのかな？」って考えるようになった。ドラマやアニメに出てく
る超能力者って自由自在に能力を使うでしょ？ だから私にも出来
るって思ったんだ。

だから、色々な方法を試したよ。

でも、どれも効果は無かった。仕方ないよね。誰もやり方なんて教
えてくれないし。

そのうち、私は誰からも避けられるようになった。

親も多少の事では私を叱らなくなった。

もう慣れちゃったんだらうね。この子はそういう子なんだって思われちゃったんだらうね。

それで私、力を制御する事を諦めた。

誰に言っても信じてもらえないし、別に私のせいじゃない。私だつてこんな力持ちたくて持った訳じゃない…生まれて来たくて生まれて来た訳じゃないって

麗ちゃんはそんな私にとって初めての友達だった。嬉しかった。

何回も小火が起きてるのに私を信じてくれる彼女を見て、私、思ったの。

彼女の為にまたこの力と闘おうって。

それで私、TVに出てる有名な超能力者の人に手紙を送って相談した

『あなたはどうかやって力を抑えていますか』って

そしたら、その人、凄く親身になって答えてくれた

力が暴発しそうになったら大切な人のことを考えてみなさい
そうしたら自然に心が落ち着いて力も抑えられるはずだって。

私、その言葉に凄く感動して、思ったんだ。

麗ちゃんの為に頑張ろうって。

それから私は、その超能力者の言うとおりに努力した。

虐められても無視されても、平常心を保とうとした。

何があっても我慢しようとした。

でも、やっぱりダメだった。力は抑えられなかった。

むしろ、小火は減る所か、倍以上に増えた。

その頃には私の力は限りなく大きくなっていったの。

何で？ あの人の言うとおりにしたのに…

ってそう思ったけど、文句なんて誰にも言えない。

そんな気持ちだが、また私の力を暴発させる。

とんでもない、悪循環だった。

バカだよ、私。人の言うこと真に受けちゃって。

あの超能力者、偽物なのに。その人、この前、詐欺で捕まっていた。

それである日、遂に麗ちゃんを怒らせちゃった。

「何回、裏切れば気が済むの？」って。

それから、麗ちゃんは変わった。

なんかいつもイライラして、人からお金を騙しとったり、裏で誰かをイジメたりするようになった。

私に裏切られて人が信じられなくなったんだって。

張本人の私は何度も標的になって、毎日叩かれたり、無理矢理お金をとられたりした。

毎日それが続いて、それで私、我慢できなくなっちゃった。

彼女を建物ごと焼き殺そうとした…！

その事件の後よ。

私が宝来会長に拾われてサイコレンジャーになったのは…。

サイコレンジャーとして戦う事は私にとって粛罪だったの。みんなの為に働いて罪滅ぼしをしてると思ってた

私は事件の後、あまり学校にも行かなくなったから彼女とは事件以来まともに話もしてなかった

久しぶりに会った時はすごく気まずかったな

でもね、今までサイコレンジャーとして戦ってきて自信もついてきてたからさ。

もしかしたら仲直りできるかもってちよつと期待もした。

でも彼女、あの頃よりもっと荒んでてさ…。

それでやつと気づいたの。私はちつとも償えてなんかなかった…

しかも私ね、彼女に罵倒された時、彼女の事が憎くて仕方なくなつた…！

殺してやる！

一瞬だけど、そう思ったの…。

最低だよ、私。

私は麗ちゃんを殺そうとしたんだもん…

当然の報いなのに

一通り語り終わると、純が龍我に問いかける

「龍我君、ねえ教えて」

「何？」

「もしも、すごく憎い人がいて、その時に自分が誰にも気づかれず、罰も受けないで人を殺せる力を持っていたら、普通の人はどうするのかな？」

龍我は答える

「たぶん、やらない…いや、できないと思う」

純はため息をついた

「そっか。じゃあ私、最悪だ。だって私は、麗ちゃんを…」

龍我は首を横に振る

「ううん。純はやってないじゃないか」

「違う！ あれは失敗したの！ 実際、もう少しで…」

「本当に失敗だったの？ たぶん、できなかったんじゃないかな…。違ってたらゴメン。でも、もう一度よく思い出してみてよ」

龍我は純をまっすぐ見つめた

しばらく沈黙が続いた後、里菜が言った

「純はこの作戦からは外れてもらう。気持ちの整理も必要だろう。代わりに明日は残りの四人全員で彼女を護衛する」

凌と純

話し合いが終わり1時間程がたった頃

トントンー

純の部屋の扉を叩く音

「入っていいかな？」

凌の声がする

「うん…」

ドアを開けて入ってきた凌は純が座る場所のすぐ横に腰掛ける。

しばらく黙った後、凌は純に語りかけた

「あのさ、僕は純が羨ましいよ」

「え？」

「いや、誤解をうける言い方だった…」

「いいよ、話して」

純の言葉に頷く凌

「僕は純みたいに人に裏切られたり、それで傷ついた事はない…。人を信用した事がないから」

「そうなんだ…」

「うん。生まれた時から人の心の声が聞こえてたからね。人なんてすぐ嘘をつくし、裏切る。いつもなんとなくわかってた。こんな状況じゃ人を信用する気になんてなれないよ」

「そうか…私も人の心がわかったらこんな想いしなくて良かったのかな…」

凌が微笑む

「純は僕が羨ましいかい？」

「あ、いやそうじゃないけど…」

「いいんだよ。否定しなくても。結局みんな無い物ねだりなんだから」

凌は続ける

「あのさ、僕は結局、人を信じるのが怖いかもしれない」

「え？」

「信用しなければ裏切られない。そう思って生きてきたけどさ、結局臆病なんだよ。僕は、たぶん。だから純が羨ましい。誰かを信じたり裏切ったり、信じられたり裏切られたり。そんな経験ができた純が羨ましい」

そこまで言うとき凌は立ち上がってドアノブに手をかける

そして部屋を出る前に一言こう言った

「麗子さんも本当は純と仲直りしたがつてると思うよ。僕にはわかる」

翌朝

翌朝。

純を除くサイコロレンジャーのメンバー達は、引き続き麗子の護衛を行う為、東京ポークスホテル15階にある麗子の部屋の前に集合していた。

4人を代表して龍我が部屋のドアをノックすると、ガチャリと音をさせながら、ドアを開けて麗子が出てくる。

「あら、龍我君！ どこ行ってたんです？ いきなり居なくなっ一人にするんですもの…。私怖くって…くすん」

龍我は頭をかく

「すいません。超力獣と戦ってまして…」

「あ、じゃあもう超力獣は倒してくれたのね!？」

「すみません。取り逃がしましたのでもう一日護衛をつけさせて下さい」

里菜にそう言われて麗子はあることに気づいた

「あれ、百瀬さんはいないんですか…?」

「彼女は体調が優れないので今日からは代わりに私達が。不安はあるかと思いますがその分、万全を期して人数も増やしましたからご安心下さい」

それを聞くと麗子は一気に顔を曇らせた。

「そっか、純は来ないのか…」

「ホントすいません」

麗子は謝る龍我を一瞥もせず続ける

「純…もう私を守ってくれないのね…。そうやってまた私を裏切るの…」

「え?」

独り言に反応した龍我を見て、麗子は自分がもの凄く暗い表情をしていた事に気付いたらしい。

「あ、ごめんなさい。独り言です。さあ、皆さん行きましょう。今日の仕事場は近いから歩きます」

急に明るい声を出して歩き出す麗子に向かって龍我が叫ぶ

「あの、麗子さん！」

「何？」

「純は！・裏切ってなんかいません！」

「あら。それ、何のことかしら」

麗子は笑顔を崩さない。でも、自然な笑顔ではなかった。どこか表情が固定されていて、強がっているようにもみえた。

やっぱり、今日の麗子さん、おかしいな。

龍我は一瞬そう思ったが、その考えをすぐに自分の頭の中で撤回した。

もしかしたら、自分達が気づいていなかっただけで、麗子さんはずっとこうだったのかもしれない。誰も信じず、ひたすら上を目指して。ずっとさみしかったのかもしれない。

そう思うと、龍我はこれ以上、言えなかった。

「いや…何でもありません。だけど、それだけ覚えておいてください」

そしてサイコレンジャーの面々は麗子を囲むようにして歩きだした。その表情には四人それぞれ緊張の色が伺える
「つけられてるな…」

里菜が麗子本人には聞こえない位の声で言う

「うん…超力獣の気配がする」

そう答える龍我に里菜は静かな檄を飛ばす

「龍我、警戒を怠るなよ。こういう時はお前が一番頼りになる。お前の判断に全てが懸かっているんだ！」

炎の決戦

「ここだわ」

麗子はある建物の入り口までたどり着くと、立ち止まりそう言った。

周りを囲むサイコレンジャーのメンバー達が建物を見上げると、その姿が限りなく上空まで続いている。

「随分、立派なところで仕事するんだな」

雄真がふと言ったところで、龍我は直感した。

何かが、来る！

「危ない！」

龍我が麗子を抱きかかえながら横っ飛びすると、次の瞬間であった。

ビルの上から蜘蛛の超力獣が糸を垂らしながら降下してくる。

——ガシャン！

空振りした超力獣の爪が地面を引っ掻き、アスファルトが宙に舞う。

「ぐぬぬ…かわされたか！」

地団駄を踏む超力獣

それに対してサイコレンジャー達は前を塞ぐように横一列に並ぶ

「現れたな、超力獣！ みんな、いくぞ！」

「おお！ サイコチェンジャー！」

雄真のかけ声に合わせて変身するサイコレンジャー達。

四人の姿が戦士に変わる

直後、四人は立ちふさがる超力獣に対して、挨拶代わりと言わんばかりに一斉に殴りかかった。だが、超力獣はその攻撃を一人一人を薙ぎ払うようにしていなしていった。

相変わらず、もの凄いパワーだった。

「なんだよ、アイツ！ 昨日、腹に穴開けてやったのに全然弱ってねえ！」

雄真の言葉を聞いた凌。彼はその言葉を聞いてあることに気付いた

「そういえば…アイツの腹…。穴が塞がってる！」

そう促されて超力獣の身体を改めて眺める一同。

すると、確かに超力獣には、小さな傷一つ付いていなかった。

昨日までの戦いでつけた傷が全て回復してしまっていたのだ。

「どうなってんだ！」

叫ぶ雄真に里菜が答える

「奴の親がレベルの高い超能力者ならこの時間での回復は可能…。く

そ、やはり昨日の内に片付けておくべきだった！」

「後悔してももう遅い！」

超力獣はそう叫んで突進してくる。そして一番近くにいた里菜の首を掴んで投げ飛ばした。すると地面に叩きつけられた里菜の変身が解けてしまう。

「くッ…！」

うめき声をあげて苦しむ里菜。それを見て龍我と雄真は我を忘れた。

「里菜…！」

「くそ！」

そう叫んで龍我と雄真が向かっていくが取り押さえられ、彼らも同じように投げ飛ばされて変身を解かれてしまう。

超力獣はその様子を見て満足そうに雄たけびをあげた

「ガハハハハ！ 口ほどにもない！」

しかし次の瞬間であった。ただ一人、冷静さを保っていた凌が油断した超力獣に奇襲を仕掛けた。背後に回って、サイコガンで足元を射撃。驚いて振り返った超力獣の腹にエナジーソードを突き立てたのだ。

「やった…！」

思わず叫んだ凌だったが、今度油断したのは彼の方であった。

「どうだ…！」

と言わんばかりに超力獣の顔を見る凌。しかし超力獣の表情には

苦悶の一つも浮かんでいなかった。

バカな…。

そう思つてエナジーソードを突き立てた超力獣の腹を見てみると、超力獣の分厚い皮膚に切っ先が弾かれて、全く身体に刺さつていなかった。

「何イ!？」

叫んだ時にはもう遅かった。超力獣は凌の顔面にパンチをいれる。凌の身体が激しく宙を舞った。

「ふん、バカめ…。では女のエナジーをもらおうとしよう」

そう言い超力獣は、一步、また一步と麗子の方へ近づいていく。

「麗子さん！ 逃げて！」

龍我が叫んだが、麗子は腰が抜けて動けないようだった。

地面に尻もちをついたまま、足をジタバタさせるだけで一向に立ち上がる様子がない。その間にも超力獣は迫っていく。

「嫌…！」

目の前まで迫つた超力獣に麗子が叫ぶ。

しかし、その時、唐突に聞き覚えのある声が響いた。

「待ちなさい…！」

澄み渡つていながらも鬼気迫るその声に、そこにいた全員が声のした方を振りかえつた。

そこにいたのは純。

いつになく、背筋を伸ばした堂々とした姿でこちらへ向かつて歩いてくる。

超力獣はそれを見て舌打ちをした。

「チツ、まだいたのか…」

「純、なんでここに…」

「来ないはずじゃ…」

呟く龍我と雄真。

サイコレンジャーの面々は任務を外れたはずの純の登場に戸惑うばかりだ

そんな中で、麗子だけが確信のあつたような微笑みを見せた。そし

て眩く

「純…やっぱり、来てくれたのね…」

超力獣にゆっくり歩きながら近づいていく純。

その目に浮かぶのは、戦う意思。

「サイコチェンジャー…」

静かに言うときサイコチェンジャーが眩い光を放ち、純の姿が戦士に変わる

「おのれ！」

先に動いたのは超力獣だった。純に向かっていき素早く拳を振りおろす。純は拳を受け止め逆に蹴りを入れる。

激しい殴打戦が始まった。

バシツ、ビシツ

互いに拳を受け止め合う、鈍い音が響く。そんな激しい戦闘の中、純は一瞬の隙をついて超力獣の腕の内、一本を掴む

「よし、捕らえた！」

純は合気道のような動きで相手をいなして後ろ側にまわると超力獣の腕を逆に曲げた

—— ボキッ！

完全にへし折った…。本人同士以外にもわかる大きな音が鳴った。

「今だ！」

トドメを刺す為に純が至近距離でサイコガンを構えた瞬間だった。

超力獣の背中から太い針が飛び出し、密着した純の胴体に突き刺さる

その針に串刺しになった純。身体から血がしたたる。

超力獣はそれを確認して満足そうに笑った後、身体を素早くひねり、純を遠心力で吹き飛ばす

「ガッ！」

小柄な姿に似合わない、激しいうめき声をあげて倒れ込む純。

その変身が解ける。

「ふん、もう少しだったが、詰めが甘かったな」

そう言つて、超力獣は再び麗子の方に向かう

「マズイ！」

それを見て、変身を解除させられた龍我、凌、里菜、雄真が生身のままで必死に止めにかかるが、案の定通用せず次々に弾き飛ばされる

純は立ち上がれない。立とうとすると、腹に激痛が走り、血が噴き出す。

そしてそれを繰り返すほどに力が抜けていくのだった。

そんな純の視界に映るのは、次々に弾き飛ばされる仲間達と怯える麗子。

純は激しい痛みの中で倒れ込んだまま呟いた。

「麗ちゃん、ごめんね。私、償えなかった。麗ちゃんを傷つけた罪……守りたかった。麗ちゃんを。いつか、彼女が私を守ってくれたように……」

そんな事を思いながら意識が遠のいていくのを感じていた、その時。純の耳に龍我の声が聞こえた

「諦めるな！ 純！」

「え？」

「戦え、純！ 君の力は、自分や誰かを傷つける為にあるんじゃない……。みんなを守る為にあるんだ！ そうだろ!？」

朦朧とする意識の中、龍我が叫ぶ言葉の意味を全て理解できた訳ではなかった。

でも、それを聞くとなんだか『立ち上がらなきゃ！』とそんな気持ちになった。

再び立ち上ろうとする純。地面に手をつき、膝を立てる。

するとまたも、血がドクドクと溢れ出て、体温が下がっていく。

お世辞にも立ち上がれる程の力が入ったとは言い難い。

それでも純は立ち上がった。自分でも何故こんなことができるのか分からなかった。しかし、今の純に疑問を感じている余裕はない。

おそらく、自分にもう一度変身して、奴に格闘を挑むほどの体力は残されていない。

考えるまでもなく、そう判断した純は、今の自分に残された唯一の攻撃手段を行使する為、麗子の目の前まで迫った超力獣に向かって手をかざす

一歩一歩、麗子に近づくと超力獣

麗子の目に映る超力獣の姿が段々と大きなものになっていく

「もう、ダメ……」

そう言つて震える麗子の首根つこを超力獣は腕を振り上げて捕まえた。

「くうう……」

気管を締め付けられた麗子は、急激に身体から力が抜けていくのを感じた。

ああ……。私、ここで死ぬのかな……。

嫌だな……。せつかくここまで上り詰めたのに。せつかく有名になれたのに……。

麗子は薄れていく意識の中でそんな事を思いつつも、自分の思考に違和感を感じていた。

でも、違う。

掴んだ地位や名誉を失うことが、そんなことが残念なんじゃない。

そうだ……。せつかくまた純と会えたのに、仲直りできないで死ぬのが嫌なんだ……。

そう思うと、今まで思っていた事が走馬灯のように浮かび始めた。

私は、みんなと友達になりたかった。

私、一人っ子の上に親が忙しくて家ではいつも一人だったから、私

にとって一番大切なのはいつだって友達だった。

だから、教室で独りぼちな子の事は放って置けなかった。その子と仲良くなつて『友達つてこんなにいいものなんだよ』つて教えてあげたかった。

純もそんな子の一人。極端に気が弱くつて虐められやすい子だったけど、少し話したらすぐにいい子だつてわかった。私にすごく感謝してくれて、私の夢を応援してくれた。騒ぐタイプじゃないから、周りからはそう見えなかったかもしれないけど、私の中では一番大切な友達だった。親友だと思つてた。

でも、純には困つた癖があつた。なんだかわからないけど、あの子、周りに火をつけちゃうらしいのよね…。でも私は信じてた。私が友達であり続けてあげれば、きつといつか自分のしている事に気づいてくれる。そう信じてた。

だけど、純の周りでの小火は一向に減らなかつた。純はいつまでたつても変わってくれなかつた。純を庇つたせいで他の友達の中には私を避けるようになった子もいた。私は純が許せなくなつた。それである日、爆発しちやつたんだ…。

それから、私、最低だつたな。

なんだか知らないけど、誰を傷つけても平気になつちやつた。歯止めが利かなくなつちやつた。何でだろう？

親友と喧嘩して、もう友達とかどうでもよくなつちやつたのかな？

いや、違う。何か引つかかつてたから。

純みたいな子があんな事するはずない。そうわかつてたのに最後まで彼女を信じてあげられなかつたから！

それで自分が嫌になつて、自暴自棄になつて…。

わかつてたのに、一度そうなつたら、もう止まれなかつた。純と会わなくなつてからも、私は変われなかつた。夢しか継るものがなくなつた私は、自分の目的の為に何人の人を傷つけただろう…。

そうだ…。モデルになるつて夢を持ったのも、世界中を旅して色んな人と友達になれる仕事だと思つたからだだよね…。大切な事、忘れてた。

あのオーデイションの時、衣装を隠して落としてやった子、まだ怒ってるよね。散々、嫌味を言っつてやめさせたあの子、私の事嫌いになったよね。

昨日も純には酷い事言っつたな…。

本当は仲直りしたかったのに。純なら分かってくれる、受け止めてくれるって思っつたら急に我儘言いたくなつて…。あんなので本当の気持ちなんて伝わるはずなのに…。

純、ごめん。

あなたともう一度、友達になれたら、あの頃の私に戻れるんじゃないかな。いかつて思つてたの。人を傷つけた罪は一生消えないけど、もう少し、マシになれるんじゃないかと思つてたの…。

ごめん…。

ごめん…。

純、もう一度、素直になつて謝りたいよ…。

そう思うと、急に『まだ死ねない』という想いが麗子の胸に湧いてきた。

「嫌！ まだ死にたくない！ 死にたくない！ 純、助けて！ 純！」意識を取り戻した麗子がそう叫びながら足を激しく動かすと、一度、つま先が超力獣の腹に当たつて蹴りを入れるようなカタチになった。

普段なら、超力獣は何も感じなかつただろう。しかし、そこは先程、凌がエナジーソードを突き立てた個所だった。致命傷には至らなかつたが触られると痛いらしい。

「女あ…。このまま首をへし折つてやろうか！」

ムキになつた超力獣は麗子を掴む腕にさらに力を込めた

麗子は呼吸ができなくなつた。

苦しい。今度こそ、今度こそ、死んでしまう…。

麗子がそう思つた瞬間だった。

超力獣が突如、青白い炎を放って燃え始めた。

「なんだ…これは…ウガア…」

超力獣は麗子の身体を手放してしばらく立ったまま苦しんだ後、その場に崩れ落ちる。すると、尻もちをついた麗子の視界に、超力獣の後ろでうつすらと笑みを浮かべる純の姿が入ってきた。

何が起きたかさっぱりわからないけど…

純が助けてくれたの…？

やっぱり、助けてくれた！

少しだけ、嬉しくなった。だが麗子のそんな気分は一瞬にして崩れ去った。

それは、燃え上がる超力獣を見つめる純の目があまりにも冷たく、恐ろしいものだったからだ。

麗子はその目をどこかで見た事がある気がした。

それは自分が純を虐めた時、何も言えない純が自分を睨む時のあの目に似ていた。

「燃えろッ、燃えろッ！」

「ウアア…」

超力獣がのた打ち回るのを見ながら純は声をあげて笑った。

「燃えろッ、燃えろッ…！　アハ、アハハハ…」

超力獣の動きは段々と鈍くなっていき、そして遂には完全に動きがとまった。

炎が止まると、焼け焦げて真っ黒になった超力獣の死骸が現れる

「麗ちゃん、大丈夫？」

まだうつすら笑いを浮かべながら麗子に歩み寄る純

「今の貴方がやったの…!？」

麗子の言葉にゆっくり頷く純

「そう。これが…私の力…」

それを聞くと麗子は急に恐ろしくなった。

何…？ 今の…？ 超力獣がいきなり燃え上がった!? サイコロンジャーとしての技でもない…。だって変身していないのに…。何でこんなことができるの？

もし、純の言う通りなら、あの体育館倉庫の火事も、昨日、服に火がついたのも全部、純がやったという事になる。

原因不明の不審火。全部、純なら可能ではないか。

そこに考えが至ると、麗子は心の奥底で純に抱いていた期待が粉々になっていくのを感じた。

純がそんなことするわけないって思ってたのに。

仲直りできるかもって思ってたのに。

純は私を殺したくて仕方がなかったんだ！

「純…」

麗子は言う

「純…、来ないで…。今のも昨日のも昔のも…全部貴方がやったのね…!? 私をどうするつもり!? 焼き殺すの!? あの化け物と同じように…私が貴方をイジメたから…!!」

麗子の表情はあからさまに恐怖を浮かべている。

それに構わず純は麗子との距離をつめていき麗子の目の前に立つ

「麗ちゃん、ホラ、そんなトコに座り込んでちゃダメだよ。ホラ立って…」

純が虚ろな表情のまま差し出した手を払いのける麗子

「来ないで！ バケモノ！」

叫び声が響く

「こんなコトができるなんて、アンタ普通の人間じゃない…！ 自分でわかってる？ アンタはあの怪物とおんなじよ！ このバケモノ！」

麗子は純の元から走り去っていく

「麗子さん！」

「よせ、追うな」

急いで立ち上がる龍我を凌が引き止める

「だけど…」

龍我が何か言おうとした瞬間、純の身体が崩れ落ちた

エピソード

「純！」

そう叫び駆け寄るサイコレンジャー達

「純！ 大丈夫!?! 純！」

気を失った純に対して必死に声をかける龍我を里菜と雄真が諭す

「大丈夫だ。能力の使いすぎ…パンクしたただけだ」

「あの超力獣を一体丸ごと炭にしたんだ。こうなるさ」

それを聞いてホツとした表情になる龍我。

「そう…よかった…」

だが、そこで気づく

「あ、そうだ、麗子さんを探さなきゃ」

走り出そうとする龍我の手を凌が掴む

「だから追わない方がいいって」

「ダメだよ、ちゃんと仲直りしないと！」

「残念だけど、ムリだ」

「でも、二人は元々友達なんだよ！ 麗子さんだってそれを望んだ。

だからちゃんと話せば…」

凌は首を横に振る

「確かに、さつきまではそうだった…。色々あつて気持ちとは裏腹に純を傷つけるような事を言ってしまったようだけど、彼女、再会した時からずっと純とまた仲良くしたいって思ってた。僕にはその心の声はずっと聞こえてた…」

「じゃあ、なんで…?」

「でも、さつきのパイロキネシスで台無しさ…。彼女の言葉、聞いたろ? 純の事、バケモノだつてさ…。あの状態になったら、仲直りなんてもうムリだよ…」

「そんな…」

龍我は里菜と雄真を見るが二人も黙って頷くだけだ。

凌は倒れた純を背負いながら言う

「でも、ありがとう」

「え？」

龍我は思わず声を漏らす

「別に。純の代わりにお礼を言っただけさ。君の気持ちは純も喜んでるよ」

「それって、どういう事？ 純がそう言ったの？ ああ…そうか！

読心術で読んだの？」

龍我が聞くと凌は笑顔で言った

「いや、これは僕の勘だよ」

第六話 食卓の騎士（前編） プロローグ

とある高級マンションの一室。オールバックの男、金髪ショートカットの若い女、派手な服を着たヤクザ風の男の三人が集う部屋に一人の少年が大きな声をあげながら入ってくる

「国生さん！ スパイダーが倒されたんだって!？」

「ああ。そのようだ」

冷静な国生に対して、少年の不満が爆発する

「ちよつと！ 国生さん！ そんな落ち着いてモノ言ってる場合じゃないでしょー！」

ヒートアップする少年のテンションとは裏腹に若い女が気だるそうに言う

「ねー、翔太あ。アンタさつきからうるさいんですけどおー」

「響子！ お前は黙ってるよ！ 僕は今、国生さんと話してるんだからさっ！」

「あーそう。わかった、わかった。じゃあもう口出しはしないけどおー。声のボリウムは落としてねー」

「チツ」

翔太と呼ばれた少年は響子と呼ばれた若い女に対して舌打ちをし、それから続ける

「ねえ、国生さん。スパイダーは国生さんが丹誠込めて作り上げた超力獣じゃないか…。それをあんな風にするなんて僕は許せないな…。ねえ、国生さん。あのサイコレンジャーとかいう奴ら、みんなで抹殺するってというのはどう？」

「その必要はない」

「そんな…何でツ!？」

興奮する翔太に国生が諭すように言う

「なあ翔太。例えばの話だが、君は自分の歩く道に石が転がっていた

らどうする?。」

「蹴つ飛ばす。蹴つ飛ばして自分の邪魔にならない所まで吹っ飛ばしてやるさー!」

「キャハハハハ!」

翔太の回答を聞いて響子が笑う

「あのねえ、翔太くん。そういう時、正しい大人がどうするか教えてあげようかあ? 石はねえー、避けていくのー。だってカツコ悪いでしょ? そんな小さな石ころにムキになったら」

「うるさい、口出ししない約束だろツ!」

翔太は響子に対して怒鳴ると再び国生に言う

「ねえ、国生さん。そういう事なの? 国生さんもそう思ってるの?」

国生は微笑む

「主旨はあっているが、少し違うな」

「え、違うトコってどこ? 詳しく聞きたいな」

翔太は身を乗り出す

「確かに石が目の前に現れた時は翔太の言う通り、蹴つ飛ばすというもの一つの手だ。選択肢として、悪くはない」

「でしょ、そうでしょ!」

「うん、そうだとも」

国生は翔太に一度同意した後、続ける

「だが、道の端にある石までわざわざ蹴りにいく必要はないだろ。サイコレンジャーも同じさ。我々の目の前に出てきた時だけ相手をしてやればいい」

「うーん…そうだけどさあ…」

これ以上の反論ができない翔太はもう一人のヤクザ風の男に助けを求めた

「ねえ、五条さんはどう思う?」

五条と呼ばれた男はぼそりと言う

「争いは…不毛だ」

「プツ…」

「キャハハハハ!」

それを聞いた瞬間、翔太と響子が一斉に笑い出す

「な、何が可笑しいんだよッ！」

翔太が五条に答える

「だって五条さん、そんな怖い顔してるくせに『争いは不毛だ』なんて…プププ…」

「キヤハハハハ！」

五条は怒鳴る

「うっせえガキ共！ よく聞けよ。俺達の世界ではなあ！ 相手に対して一発ぶち込んだら、相手に二発で報復される。そしたらコツチも黙ってはいられねえ…今度は相手に三発ぶち込まなきゃならねえ。そしたら相手は…」

「プツ。ちよつと、ちよつと」

五条の言葉を未だ笑いのおさまらない翔太が遮る

「五条さん。そんなヤーさん同士の争いとこの偉大な活動を一緒くたにしたらダメだって…プププ…」

翔太のそんな反応を受けて国生はボソリと呟くように言う

「いや、同じだよ」

「え？」

「組織同士の抗争、子供の喧嘩、未だ止まらぬ紛争。みんな同じさ。全ては終わらない悲しみの連鎖…。だが、我々は愚かな人類を導き、それを断ち切る！ その為に今やるべきことは一刻も早く神の力を得ることなんだよ…」

当番

「うーん、不味い」

「ああ。不味いな」

食卓に出されたソテーを食べながら凌と雄真が言う

「え…あれ？ 今日結構自信あったんだけど…。里菜、里菜はどう？」

不安そうな純が里菜の顔を覗き込むと彼女は申し訳なさそうに目を閉じた

「…純。すまない。これは不味いぞ」

「そ、そんな…」

その場に崩れ落ちる純。

「あーあ、七日連続不合格。これで純の食事当番は終了。遂に俺達の舌を満足させる料理は出てこなかったな」

雄真が言うのと凌も呼応した。

「あー、もう我慢できない。僕、味付けしなおしてくる。まだ何とかなるよ、これ」

「よし、私もそうしよう」

「じゃあ俺も」

凌の提案に賛同する里菜と雄真

三人揃って皿を持ち台所へと向かって行ってしまった

「やっぱり、ダメだ…うう…。私ダメなんだ…」

そう呟く純だったが、隣でただ一人席を離れず黙々と食事をとる龍我に気づく

「あれ、龍我君は行かないの？」

「へっ、どこへ？」

「台所だよ。味付けし直しに」

龍我は不思議そうな顔をする

「あのさあ、純…何でみんなはこれ不味いって言ってるのかな？」

「え？」

「いや、これ凄くおいしいよー！」

純は一瞬驚いたような表情を浮かべてから寂しそうな顔をして言う

「いいよ、気使ってくれなくて…私、料理下手だから。才能ないから。うえーん」

純は机に突っ伏して泣き出してしまった

「ちよつと純！ だからホントに美味しいんだってば、ホントだよ！」

そう言う龍我の横でアスピよんが呟いた

「全く、悲しい人達よね」

「ん？ 誰が？」

「あの美食家三人組の事よ」

アスピよんが三人のいる台所を指す

龍我はアスピよんに聞く

「あのさ、これどうなってるの？ みんなは何でこんな美味しい料理を不味いって言うの？」

「それはあの人達がこれより美味しい料理を作れるからよ」

「ああ。そういえば先週の夕食はヤケに豪華だったな…」

「そう。あの嫌味な料理は全部凌が作ったのよ。あのね龍我、教えてあげる。一人で過ごす時間が多いと料理って勝手に上手くなってしまうの。可哀想よね。あの人達にはご飯を作ってくれるお父さん、お母さんがいなかったのよ」

アスピよんは言い終わると机に突っ伏した純の肩を叩く

「元氣を出して純。家庭料理ならこれで十分。むしろこれより上手くなったら脅迫だね。』どうだ？ 旨いだろ？ 旨いって言えよ！』って言う脅迫…」

「あー、そういえばさあ…」

凌が台所から叫ぶ

「何？」

龍我がパクパクと料理を口に運びながら言う

「来週の食事当番は龍我だから」

「えっ!!」

龍我は吹き出しそうになりながら言う

「俺、これより美味しい料理なんか作れないよ！」

「別に作れとは言ってないよ」

凌が言い、里菜と雄真が続く

「どこかから買ってきてきても何でもいい。とにかく私達の舌を満足させろ」

「もし一週間で俺達を一回も満足させれなかったらどうなるか…わかってるよな…？」

「フフフフフ…フハハハハ！」

不敵に笑う三人を見て龍我は眩く

「あの人達、超力獣より怖い」

牧村隼雄の超聴力

「フフフフフ…。聞いたぞ、聞いたぞ、サイコロレンジャー!! 俺の能力、超聴力はやはり無敵だ!! フハハハハ!!」

サイコロレンジャー達がいる事務所の隣に建てたバラックの中で叫ぶ男。

「これで…俺は…」

男はそう呟き、数週間前にあつた出来事を思い出す

ある日の夕方、スーパーマーケットのレジ。この時間帯は客のかき入れ時である。レジにできた長い列がドンドン捌かれていく。

ピツ、ピツ、ピッー

鳴り響くレジスターの機械音。

そんな中、店員の内の一人が唐突に倒れ込む

「うっ、うわあ…」

うなり声をあげる店員

「ちよつと、おじさん、大丈夫?」

客の少年が店員に語りかけるが、店員は意に介せず耳を塞ぎながら呟く

「うるさい、うるさい、うるさいッ…」

目覚めると、男はソファアールの上に横たわっていた。

見慣れた景色。ここは従業員控え室だ

「あつ、牧村さん気がついた?」

椅子に腰掛けて語りかける店長

「すいません…」

牧村はソファアールから立ち上がって言う

「あのさあ、牧村さん…」

店長は若干遠慮気味にはあるがはつきりと言う

「牧村さん、ここに来てから3ヶ月だけど仕事中に倒れるの何回目だっけ？」

「たぶん、8回目くらいかと…」

「うーん、牧村さんさあ、しばらく仕事休んだ方がいいんじゃないかなあ？ ほら、こんな頻繁に倒れるなんて、どっか身体が悪いとしか思えないでしょ？ ちゃんと病院行ってさ、病氣治したら、またここで働くかどうか考えましょうよ」

店長は愛想よく言うが、その笑顔の裏にあるものを、牧村は悟った。
なるほど…。俺はここにいたら迷惑なのか。

「そうですね。残念ですが、そうさせていただきます」

「あーあ。また仕事クビになっちまったか…」

そう呟きながらスーパーから出てくる牧村に語りかける声

「ねえねえ、おじさん」

牧村が振り返ると、少年の姿。どこかで見覚えがある。

そうだ…。さつき倒れた時、声をかけてくれた少年だ

「ああ…。さつきは世話になった。悪かったな」

そう言う牧村に対して少年は笑う

「当然の事をしただけさ。同じ超能力者じゃないか」

「えっ？ 坊主、大人をからかっちゃいけないよ」

「からかってなんかいないよ、よく考えてみて…。おじさん、心当たりがあるんじゃない？」

少年に言われて牧村は思い出す。

そういえば…。昔からやけに耳が良かったっけ。

隣の家の会話がはつきり聞こえたり、遠くの悲鳴が聞こえたり。

そうだ、中学校の頃のあだ名、聖徳太子だったな…。

一度に何人に話しかけられても一人一人の言葉を正確に聞き取るから…。

もしかして本当の聖徳太子も超能力者だったのか？

そう考えると俺って凄いのかも…。

でもいいことばかりじゃなかったな。

遠くで俺の悪口言ってる奴の声まで聞こえたりもするし、今日みたいに周りの音がうるさ過ぎて体調が悪くなる事だって…

「どう？ 心当たりあったんじゃない？」

少年は微笑む。牧村は言った

「お前、一体…」

「真鍋翔太。おじさんと同じ超能力者さ」

「何が目的で俺に近づいた？」

「ハハハ、おじさん察しがいいなあ」

そう笑ってから翔太は言った

「ほら、おじさんって能力の制御ができないでしょ？ 今日もいきなり倒れたりしてさ…」

「…」

「おじさん、自分の能力が自在に操れるようになれば便利だと思わない？」

「何？」

「教えてあげようか。能力の制御の仕方」

牧村は翔太の肩を掴んで言う

「本当か？ そんな事ができるのか？」

「うん。僕達のリーダーにかかれば簡単な事…。でも、その前に条件があるんだ」

「それは、何だ!？」

「簡単な事さ。おじさんの力を使って人捜しをして欲しいんだ」

「人捜し…。誰を捜せばいいんだ？」

「サイコレンジャー」

「サイコ…レンジャー…?」

「僕ら超能力者の無限の可能性を否定しようとする患者さ。おじさん、頼むよ。しっかり手柄をたてればそれだけ待遇もよくなるからさ」

それからすぐに牧村はサイコレンジャー捜索を開始した。

能力を自覚して使うのは始めてだったが、その他全ての感覚を殺し、耳に意識を集中すると数百メートル先の様子が、まるで目で見たかのようにはつきりとわかった。

牧村がサイコレンジャーを発見したのは捜索開始から一週間後の事だった。

今まで聞いた事のない、何かと何かが戦っているような音を聞きつけ、現場に駆けつけると得体の知れない化け物と戦う奴らがいたのだ。

そして牧村は彼らの戦いが終わった後、彼らの後ろ姿をつけて行く事でサイコレンジャーのアジトを発見したのだった。

本来なら牧村の任務はここで終了である。あとは結果を報告すればいい。

しかし、ちょうどその時、牧村は翔太のある言葉を思い出した

「手柄をあげれば待遇がよくなる」

彼は確かにそう言った。

ならば、このまま自分がサイコレンジャーを倒してしまえばどうだろう。

それこそ大手柄になるに違いない。

そう考えた牧村は報告を後回しにしてサイコレンジャーを倒す方法を考え始めたのだった。

だが、全く思いつかない。

牧村は自分の能力が戦闘向きではない事を自覚していた。
コッチには武装もないし、戦闘力に差が有りすぎる。
どうするか…。

牧村が初めに目をつけたのは奴らの仲間内で「純」と呼ばれている
大人しそうな女だった。

変身前の彼女なら自分の力でもねじ伏せられるかもしれない。

そう考えて数日間彼女を見張ってみたが、それもすぐ諦めざるを得
なかった。

先日、彼女がパイロキネシスを発動して超力獣を笑いながら焼き殺
した所を目撃してしまったのだ。

牧村は思った

なんだあれ、おつかない、つーか絶対勝てない。

何か別の弱点を探ろう。

そう考えた牧村はサイコレンジャーの事務所の入るビルの隣にバ
ラックを建て、そこに住み着きサイコレンジャー達の様子に聞き耳を
たてる事にしたのだった

「しかし、たった今、俺は奴らを倒す方法を思いついた！　そう、毒殺
だ！」

牧村は一人叫ぶ

「奴らがあんな美食家集団だとは知らなかった…。ならばこの場所に
美味しい弁当屋を開けばどうだろう！　奴らは必ず釣られてやって
くる…。今まで幾つもの仕事をクビになってきた俺は飲食店だけで
も十数件に勤めた経験がある！　この俺の腕にかかればサイコレン
ジャー達もすぐに夢中になる事だろう。そして完全に信用した所で、
弁当に毒を入れて奴らを始末する！　なんて完璧な計画なんだ！」

牧村は声高らかに笑った

買い物

とあるデパートの地下にある食品売り場。龍我はサイコレンジャーの美食家三人組を満足させる食材を探してうろついている

「どうぞー！ 試食していつて下さーい！」

試食コーナーの店員に差し出された一切れのハムを口に運ぶ龍我「どうですか？」

龍我に問いかける店員

「とつても美味しいです！」

「それではお一ついかがでしょう？」

「じゃあ、それをひと…」

そこまで言いかけた時、龍我の脳裏にある考えがよぎった。

彼らはこの食材で満足するだろうか…

「あ、あの…、やっぱいいです」

「ええ！ そんな！」

購入を断る龍我に対して叫ぶ店員

「どうしました？」

「すみません。取り乱してしまって…。実は私、今日中にこれを全部売り切らなければ、この仕事をクビになってしまうんです…」

「ええ！ そうなんですか!!」

「だから一つでも多く売れたかったので買わないと言われて取り乱してしまいました…すみません」

そう言われた龍我は並べられた商品のハムを両手に取った

「それ、先に言って下さいよ！ じゃあ、やっぱ買います！ 二つ買います！ つーか売るの手伝います！」

龍我は店員の側に回る

「美味しい、美味しいハムですよ！ いかがですか！」

数時間後、籠いっぱいにあったハムはすっかり売り切れていた

「貴方のお陰でクビにならずにすみませす！　ありがとうございます！」

店員が龍我に深々頭を下げる

「いやあ、当然の事をしたまです」

「お礼がしたいので是非お名前を…」

「いえ、名乗る程の者でもありませんよ…」

龍我はそう言って格好良く去っていくが歩きながら思い出した

「あれ、なんか忘れてるような…ゲツ、結局食材ハムしか買ってない！」

龍我が去った後の売り場で売りが呟く

「あー、なんか超親切な人だったなー。あー、助かったあ。なんか好きになっちゃうかもお」

そう言つて売り子は頭に着けていた三角巾を解き金色のショートカットを露わにした

美食アカデミー

食卓に並ぶハムエッグ

「これは何だ？」

里菜が聞く

「あ、ハムエッグです…」

「だから、何でハムエッグなんだよ！ お前、真面目に考えたか!？」

ブツブツ答える龍我に対して雄真が怒鳴る

「ま、いいじゃないか。素人が無理に難しい料理作るよりは余程好感が持てるよ」

凌の言葉に頷く里菜

「そうだな。大目に見て食べてやるか…」

そして三人はハムエッグを口に運び始めた

「せーの、ドン！」

三人が一斉に数字の書かれたフリップを提示する。

それぞれのフリップに書かれた数字は里菜が「2」凌が「2」雄真が「0」である

「うう…」

龍我が絶句し、アスびよんが言う

「合計4点！ キャー、これは辛口ね！」

凌は言う

「いや、ハムは割といいものを使ってるんだけどさ。卵は特売品っぽいし。この調理法じゃ素材が全く生きないよ…」

「ああ。その通りだな。だが、まだ一日目だしな。龍我に人間の食べ物を作れたという事だけでも驚きだし、褒めてやっていいと思う。そういう意味で私は2点にした。雄真はどうだ？」

里菜が雄真に聞く

「二人共優しすぎだろ。これは料理と呼べる範囲に入るのか？ 0点

だろ、こんな物。むしろ点数をつけるに値しねえ。白紙にすれば良かったかもな」

「ガーン…」

シヨックを受ける龍我。凌と里菜がその肩に手を置く

「ま、初日だしさ。気にする事ないよ」

「また明日頑張ればいい」

「凌、里菜…」

慰めに感動した龍我が二人の顔を見る

「頼んだよ…龍我あ…。また明日もこんなのだったら…ねえ？」

「ああ。最早我慢がならないだろう…」

二人は龍我の想像とは正反対の恐ろしい形相を浮かべていた

「怖っ…ちよつと助けてよ…」

龍我は純とアスぴよんを見る

「龍我君、頑張ってたね…」

「ごめんね、私達それしか言えないわ」

「そんなあー！」

「フフフ…」

サイコレンジャー事務所ビルの横のバラックの中でほくそ笑む牧村

「サイコレッドの料理は失敗だったようだな。気は熟した！ 計画を実行に移す時！」

牧村は天井に向かい拳を突き上げた

再びサイコレンジャー事務所の中。

誰一人として言葉を発する事のない食卓。気まずい空気の中でアスぴよんが唐突に口走る

「あの、お取り込み中の所、悪いんだけど、一言いいかしら？」
「なんだよ？」

雄真が不機嫌に返事をする

「街に超力獣が現れたみたいなんだけど…」

「やったー！ これでこの空気が解放されるぞ！」

素早く立ち上がって部屋から出て行く龍我に続いてトボトボと続く凌、雄真、里菜。

そしてオドオド続く純

暗闇のバトル

人通りが少なく暗い道。帰宅中のOLをつける影。

影がOLに襲いかかろうと体勢を整えた時、その前に五人が立ちふさがる

「そこまでだ、超力獣。みんな、いくぞ！」

「おおー！」

里菜の号令に呼応する

「サイコチェンジャー！」

身体が光に包まれて五人が変身する

「サイコレッド 北神龍我！」

「サイコブルー 風祭凌！」

「サイコイエロー 一色里菜！」

「サイコグリーン 桧垣雄真！」

「サイコピンク 百瀬純！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

「邪魔をするなッ！」

そうやって姿を現した超力獣は猫の姿をしている

「キシヤー」

超力獣がそうなり声をあげて向かって来るので身構える五人。

しかし、超力獣は走ってきた勢いを生かしてジャンプ。

五人の頭上を飛び越えて先ほど狙っていたOLの方へ向かっていく。

後ろ姿のOLは超力獣に気づかず急ぐ様子もない

「チツ、くらえー！」

雄真がサイコガンで狙撃するが超力獣は素早く動いてそれを避ける

「しまったッ……！」

だが、超力獣が後ろからOLに襲いかかろうとした瞬間、超力獣の動きが止まる

「えっ？」

驚いた龍我が真横を見ると里菜が苦しそうな表情を浮かべながら手をかぎしている

「能力でヤツの動きは止めた！今のうちにトドメを！」

「わかったー！」

龍我は動きを止められながらも必死に抵抗する超力獣に向かって行き、腹にエナジーソードを突き刺す

「ジャアアツ……！」

そう奇声をあげると超力獣は抵抗もできなくなった

「フウ……やったか……」

龍我が一息ついてしていると狙われていたOLはやつと事態に気づいた様でおつとりと言った

「あのお、何やってるんですかあ？」

「あ、えっと、これはですね……」

龍我が何か言おうとした時、超力獣の死骸が発光しだした

「まずい、巨大化だ！龍我、その人を頼んだよ！」

凌が叫んだ次の瞬間、超力獣が膨張を始める。

OLは呆気にとられているが、龍我が彼女をムリヤリ抱えてその場から離れたので何とか踏み潰されずに済んだ

「さあ、早く逃げて！」

龍我はOLに言う

「はあい」

OLは間の抜けた返事をして走り出す

「あの人、大丈夫かな？」

龍我は心配に思ったが、超力獣が巨大化した以上、あまり構ってもしられない。

龍我は叫ぶ

「サイコバスター、発進！」

巨大な超力獣と対峙する合体したサイコバスター。

超力獣がサイコバスターに飛びかかるがパンチで叩き落とされる
「フン、全然パワーがない。コイツ雑魚だぜ」

そう言う雄真に純が注意する

「雑魚とか言ったらダメだよ。もっと優しい言い方をしなきゃ…。例
えば…実力不足とか…」

「気にするな、そんな所で気を使って貰って貰って喜ぶ相手でもあるまい！
くらいえ、エナジーソードDX!」

里菜が叫んで超力獣を斬りつけると超力獣は大爆発した

サイコバスターから降り立つ五人

「ま、ざつとこんなもんか」

雄真が呟く

「うん、じゃあラーメンでも食べて帰ろうか」

「いいな、それ!」

凌の提案に雄真が賛成するが純が言う

「え、でも家に龍我君が作ったご飯が残ってるよ」

凌が言う

「ああ。大丈夫。あれは責任を持って龍我が一人で始末するから。
じゃあ龍我、僕たちラーメン食べるから先に帰ってて」

「え、そんなあ」

そんな事を言い合いながら歩き出す龍我、凌、雄真、純の四人。

しかし、里菜だけはそこに立ち止まっている

「ゲホゲホツ…」

口に手を当てて咳き込む里菜。咳が治まり手を離すと手の平には
ベツトリと血がついていた。

里菜はハツとした表情を浮かべる。

そこへ少し離れた場所にいる雄真から声がかかる。

「オイ、里菜。何ボーツとしてんだ？ 置いていくぞ!」

「今行く。すまない」

里菜は血のついた手の平を堅く握って四人を追いかけていく

第七話 食卓の騎士 (後編)
弁当屋

「うーん…」

昨日と同じデパートで食材選びをする龍我。

真剣な表情で商品を見つめる

「あのー！ お客様ー！」

そんな龍我に後方から呼びかける声。

龍我が振り向いて見るとそこには昨日ハムを売っていた店員

「あ、どうも…」

駆け寄る龍我

「昨日は本当に助かりました！ ありがとうございます！ 本当に！」

店員はそう言って龍我の手を握る

「いやあ、そんな当たり前の事をしただけなのに、そんなにお礼言われたら照れちゃうなあ…」

龍我は握られた手とは反対の方の手で頭をかき、照れ隠しに話題を変える

「あ、そんな事より！ 今日はいんげんですか!? 美味しそうですね！」

「そうなんです、実は…」

店員が表情を曇らす

「え、もしかして今日もノルマがあるんですか!?!」

「はい…」

店員はラックの中に山程積まれたベーコンを指差した

「これは大変だ！」

龍我は試食品の並べられた台の反対側に回って叫ぶ

「いらっしやいませ、美味しいベーコンですよ！ いかがですか!?!」

数時間後。ベーコンはすっかり売り切れていた

「すいません、また手伝ってもらっちゃって…」

店員は頭を下げる

「いえいえ、本当に大丈夫ですよ」

「あの、お礼がしたいので是非お名前を…」

「そんな大した事してませんよ」

そう言っただけ立ち去ろうとする龍我の手を掴む店員

「ダメです！ 一度ならず二度までも助けてもらったのに…」

「ああ…そうですか…じゃあ…」

龍我は渋々リュックからメモ帳を取り出して、そこに自分の名前と

連絡先を書き込んだものを店員に渡す

「北神龍我さん…。画数の多いお名前ですね！」

店員はメモを見てそう言い、今度はポケットから自分の名刺を取り

出して龍我に渡す

「私、ドキドキ食品株式会社の砂川響子っています。今度、連絡しますね」

「いやあ、また良い事しちゃったなあー」

そう呟きながら徒歩で帰宅する龍我。気分が良くスキップ気味に歩いているが、サイコロンジャーの事務所がある廃ビル前まで来て立ち止まる

「あれ、何か忘れてるような…。あっ！ 食材ベーコンしか買ってない！ うわあ、どーしよ、どーしよー！」

龍我は頭を抱えてキョロキョロする。するとビルの隣の空き地に建てられたバラックが視界に飛び込んできた。

バラックの前には旗がたっていて、それには『弁当屋』と書かれている

「あれだ！ 助かった！」

龍我は叫んだ

「すいませーん」

バラックの小窓の中に向かって叫ぶ龍我

「あいよー」

店の中から一人の中年男性が出てくる。牧村だ

「お弁当買いたいんですけど、メニューありますか？」

「ププッ！」

牧村は必死に笑いをこらえた

（やはりやってきたな、サイコロレンジャー！ まさに計画通り！ 罨だともしらずにこいつマヌケ面で弁当なんか買おうとしちやってるし…。わ、笑う）

「プププププッ」

「あの…お弁当屋さん…？ 大丈夫ですか？ なんか笑ってます？」

牧村は慌てて首を横に振る

「しまった…。いやいや、違うんです！ ちょっと泣きそうになってたんですよ…うん。あの…嬉しくて。この店、初めてのお客さんだから」

「ええ！… そうなんですか！」

龍我は驚嘆の声をあげた後、静かに続ける

「あ、そうか…。この辺、人通りが少ないからなかなかお客さんが来ないんですね！」

「え…ええ、 そうなんですよ。だから…嬉しくてねえ」

牧村は苦し紛れに泣き真似をしながらメニューを差し出す。

メニューには汚い字で『鮭弁』『海苔弁』とだけ書かれている

「うーん。これじゃどんなお弁当かよくわからないなあ。あの、これって何が入ってるんですか？」

龍我が聞くと牧村は即答する

「だ、だから、その…な、何も入ってませんよ！」

「ええ！ 全く何も？」

「はい！」

「このお弁当、何も入ってなくて480円なんですか！ 高い！」

牧村は言う

「いえ、高いだなんてとんでもない。とっても美味しいですよ！」

「え、でも何も入ってないんですよ？」

「そうです！ 怪しいモノなんて何も入ってませんよ！ 毒はしばらく美味しい料理を食べさせて油断した所で入れるんですから！」

龍我は首を傾げる

「ん？ ん？ あれ、どういう事ですか？ お弁当屋さん、ちよつと落ち着いて答えて下さいよ」

龍我の一言で冷静さを取り戻す牧村

「あ、ああ…。しまった…。あの、お客さんにウチの料理の安全性をわかって貰おうと思って…」

「ダメじゃないですか、おじさん」

牧村の言葉を聞きほくそ笑む龍我。

バ、バレたか…!?

牧村がそう覚悟した瞬間、龍我は言った

「食の安全性を訴えるのはいいけど、アピールが過剰だと逆に疑われちゃいますよ！」

あー、助かった…。

ホツとした牧村は龍我に言う

「そうですよね、あはは…。えつとメニューの説明でしたよね。海苔弁にはご飯の他は…」

牧村の説明を聞いて龍我は言う

「じゃあ鮭弁五つでお願いします」

実食

食卓に並ぶ鮭弁と焼ベーコン

「今日は弁当と…ベーコン…？ 何でベーコンなんだ？」

雄真が首を傾げる

「色々と訳がありまして…」

龍我がうなだれる

「この弁当はどこで買った？」

里菜が聞く

「ああ。このビルの横にお弁当屋さんがあつて…そこで」

「あれ？ そんな所にお弁当屋さんあつたっけ？」

純が口に手を当て考える横から凌が言う

「でも楽しみだね。近所なら美味しかったらまた買いに行けるし」

「じゃ、早速食ってみようぜ！」

雄真の号令に従い五人が一齐に弁当に箸をつける

「せーの、ドン！」

一齐にフリップをめくる美食家三人組。

つけた得点は里菜が6、凌が8、雄真が6である

「おい、凌。8点は優しすぎじゃねえのか？」

「そうだ、お前の悪い癖だぞ。はつきりと言うべき所ははつきり言わねば」

雄真と里菜が凌を責める

「そりゃ、高級料亭とかで出てきたりしたら許せないけどさ。街のお弁当屋さんだとしたら十分なんじゃないかな。個人でこの味を出すのって難しいと思うよ」

凌はそう言うが里菜と雄真は更に追求する

「いや、個人の店だからこそダメなんだ」

「これじゃチェーン店に勝てねえ」

「そうかな？ その辺のチェーン店よりは上じやない？」

「味だけを見ればな」

凌の疑問に里菜が答える

「このご時世、美味しい料理なら売れるとは限らない。味を味だけで判断するな。消費者が食に求めるモノと言うのは昨今大きく変化している。狂牛病問題、毒餃子事件以降、一番に求められるのは味よりまず安全性、信用だ。昔は味だったんだがな。安全は前提だったからでもそれが今や崩れさってしまった。そうなつてくるとやはりチェーン店は強い『みんなが知っている』それだけで信用は高まる。その点で個人商店は最初から不利なんだ。そこを差し引いて私は6点にした」

「なるほど」

凌は頷いて続ける

「じゃあ僕は7点にするよ。1点はベーコンの点だけど」

「そうだな。昨日は高いハムに特売品の卵かけて台無しにしてくれたからな。うん、成長したな、龍我！」

雄真が龍我の肩を叩く横で呟く純

「でも…何か足りないような…」

事務所横のバラックの中。

牧村は五人の会話に聞き耳をたてて驚愕していた

「まさか…この俺の料理が全く通用していない…だと?！」

牧村はワナワナと身体を震わせながら続ける

「サイコロレンジャーめ、見ていろよ！ 必ず俺の料理でお前らを夢中にしてやるー！」

海鮮弁当

翌日。またあのデパートで食材を選ぶ龍我

「あのお客様…？」

「ゲゲツ…！」

もしかしたらまた仕事を手伝う羽目になるかもしれない。

昨日、一昨日の体験から恐る恐る振り返る龍我。

そこにいたのは別の店員と4、5歳位の少女だった

「何ですか？」

少しホツとした龍我が聞くと店員が少女の肩を抱きながら言う

「あのお客様のお子さんですよね？」

「パパー」

少女が龍我に抱きつく。戸惑う龍我

「えッ…？ ち、違います！ 俺まだ独身だし…」

しかし少女は更に激しくじやれついてくる

「パパー」

「違う、違うんですって！」

その様子を見て不審に思った店員が呟く

「まさか…育児放棄！」

「へ？ ちよつと人間きが悪いなあ！」

龍我は抗議しようとするが周りにいた他の客達は既に噂話を始めている

「うわあ。最悪だよ、あの親」

「最近の若い親には本当にロクな奴がない…」

その場の空気で思わず反論できなくなる龍我

「えつと…わかりました。俺が責任を持ってこの子の親を探しますから！ それでいいでしょー！」

数時間後。

少女の親を無事発見した龍我に少女の母親が頭を下げる

「お世話になってすみません。ほら、あんたも謝るの！」

母親が少女の頭を押して強引にお辞儀をさせる

「違うの、この人はホントに私のパパなの！」

そう叫ぶ少女に対して母親のゲンコツが炸裂する

「馬鹿な事言ってんじゃないの！」

少女は泣き出す

「うえーん。だってパパはもつと若くてイケメンな人がいいんだもん！ こんな豚みたいな奴じゃ嫌だよおー」

少女は横にいた小太りの男を指差す。男は非常に卑屈な表情で言う

「どうせ僕なんて父親失格ですよ。娘にだけじゃなくて会社でも嫌われてるし…ああ、ダメだダメだ。僕はダメ人間だ…」

その様子を見て龍我は言った

「…あのそれじゃあ僕帰りますね…」

「あーあ。また何も買えなかつたよ…」

そう呟きながら弁当屋の前を通りがかる龍我。

ふと見ると『新メニュー 海鮮弁当』と書かれた看板がたっている

「うーん、仕方ない。あれにしよう」

「すみませーん、海鮮弁当下さいー！」

弁当屋の小窓に声をかける龍我

「ハイ、毎度あり」

龍我に弁当を手渡す牧村

「ではまた」

そう言って去っていく龍我の背中に向かって呟く牧村

「ふん、今度こそ俺の料理に夢中になるがいい、サイコロレンジャー！」

俺の持てる技術を全てを注ぎ込んだこの海鮮弁当にぬかりはない！」

突入

食卓に並ぶ弁当

「今日も隣の弁当屋か？」

そう聞く雄真に答える龍我

「うん：昨日とは別のメニューだよ」

凌は言う

「ま、メニューが変わろうがあんまり期待できないけどね」

「え？」

続いて里菜

「ああ。この料理には大切なモノが欠けているんだ」

「どうだった？」

食べ終わった3人に聞く龍我

「うん、うめえよ、これ。でもな…」

二人の顔を見る雄真

「ああ。やはり大切なアレが欠けている」

「もう我慢できない！ 隣の弁当屋に乗り込もう！」

そう言って凌が立ち上がると雄真、里菜もそれに続いて出て行ってしまった

「何がどうなってるの？」

顔を見合わせる純と龍我

今日も五人の会話に聞き耳をたてていた牧村は驚愕した

「ええ！ アイツら、来るのかよ！ どうしよう…」

カツカツー

そんな事を言ってる間にも足音は近づいてくる

「ヤバいやバいやバいや…」

牧村が部屋の中を右往左往しているとブラックの小窓から叫び声が聞こえた

「おーい、店長！ いるんだろ、出てこいよ！」

雄真の大声に仕方なく出て行く牧村

「あの…何かご用でしょうか…」

里菜が牧村の胸ぐらを掴む

「さあ、案内して貰おうか」

そんな…俺の悪だくみは全てバレていたのか…。
もうダメだ。破滅だ。

牧村は全て白状しようと思った

「す、すいません！ 俺にも訳がわからないまま事が進んでいて…悪気はなかったんだ！ 許してくれ！ 本当に何にも知らないんだ！」

それを聞いて里菜は首を傾げる

「何を言っている？ お前は自分の店の厨房の場所も知らないのか？」

「へ？」

「今すぐ厨房へ案内しろと言っているのだ！」

弁当屋の厨房に集結する牧村、里菜、雄真、凌の四人。

凌が冷蔵庫の野菜室からキャベツを取り出して言う

「じゃあ店長、これ、切ってみてよ」

何で俺がこんな事…。

牧村は渋々ながらまな板の上にキャベツを置いてキャベツを千切りにする。

半分程切った所で雄真から声がかかる

「ハイ、ストップ」

「へ？」

牧村が手を止めると里菜が切り終わったキャベツの山の中に手を

突っ込んで何かを取り出して牧村の前に示す

「これを見ろ」

「あつ、それは…」

里菜が持っていたのは切り方が中途半端になって幾つかの千切りが繋がってしまった状態のキャベツだった。それを示して、雄真が言う

「お前の料理には雑念が多すぎんだよ」

「お前は料理を作る時、いつも何を考えている？」

里菜の言葉に答える牧村

「そりゃあ、旨いモノを作って…(信用させた上でお前らを毒殺したいんだけど、これは言えねえな)」

「その『作って…』ってなっちゃうのが問題だよね」

凌の指摘でギクツとした牧村

「あーと、それはですねえ…」

「なんで、ただ『美味しい料理を作りたい』じゃダメなの？」

「へ？」

牧村には凌の言葉の真意がわからない

「おっさんさあ、料理に最も大切なモノって何だかわかるか？」

雄真が言う

「え…料理人の腕…？」

「不正解。答えは、愛情だ」

里菜の言葉に戸惑う牧村。

何だ？ コイツらこんな綺麗事言いになざわざ来たのか？

牧村が考えていると凌が声をかける

「綺麗事だと思った？」

「あはは…」

苦笑いする牧村に語りかける雄真と里菜

「確かに料理人のセンスや質のいい食材も料理には欠かせない。でもな、愛情がなきゃダメなんだよ」

「自分の料理で誰かに笑顔になって欲しい…。自分の料理を食べてくれる人に幸せな気分になって欲しい…。その気持ちが調理中、一つ一

つの作業の丁寧さ、繊細さに繋がる」

里菜は先ほど切り方を失敗したキャベツを示して続ける

「こういう細かいミスも気持ちを込めればなくなる訳だ」

凌が続く

「それに、人間はさ。みんななるべく面倒な事はしたくないモノでしょ？ 料理だってそう。一回の食事の為に食材揃えて、野菜切って魚捌いて出汁とってさ…。面倒くさいでしょ。安くてそこそこ美味しいモノならその辺に沢山あるし、僕も一人だけなら食事なんてみんなカツ麺で済ませちゃうかもしれない。でもね、自分の料理を食べてくれる人の事を思うとき。美味しいモノを作る為に何時間でもキッチンに立って、手間暇かけて料理を作っていられるようになるんだよね…」

それを聞いた牧村はハツとした表情になる

「そうか…。そうだよな。俺はこの間から邪な気持ちでしか料理をしていなかった…。これじゃ相手が誰であれ俺の料理に夢中にさせる事なんてできやしない…。俺は料理人失格だな…」

俯く牧村に雄真が声をかける

「おっさん、そんなに落ち込むなよ。俺達だってそれに気づいたのは最近なんだ。みんなと住み始めてから。一人の時にはわからなかった」

話が終わると里菜と雄真はスタスタと店を出て行く。

だが、ただ一人、凌だけは立ち止まり店内にとどまっている。

それに気づいた牧村は言う

「あの…まだ何かご用でしょうか…」

凌は重たい口を開く

「店長さま、悪い事は…やめた方がいいな…」

「え？」

「急にこんな所に店建てたのも僕達を倒すのが目的なんですよ？ 違

う？」

牧村は観念した

「いつから分かってたんだ？」

「確信したのは今。話しててわかったんだけど。でも僕らの仲間にも千里眼がいてね。その人は昨日から怪しいって言ってた」

「全部、お見通しって訳か…」

「全部じゃないけど、店長が頭で考える事はだいたいわかるよ。それが僕らの能力だから」

「バレた以上、ただでは済まないよな…。俺はどうなるんだ？」

牧村が恐る恐る聞くと凌は即答する

「別に、コッチからは何もしないよ」

「え？」

「だって店長はまだ何もしてないでしょ？ 僕らの家の隣でお弁当売ってただけじゃん。まあ盗聴はしてるか…」

牧村は言う

「気休めなら止してくれ。俺はお前達を殺そうとした」

凌が言う

「でも毒の入手もまだでしょ？ 店長は『殺したい』って頭で考えてただけじゃない？ それなら誰にだってある事。今の段階じゃ別にはならないよ」

「…」

予想外の言葉に何を言っているかわからない牧村に対して凌が続ける

「でも、店長が超能力や超力獣を使って誰かを傷つけるなら、もう容赦はできない。絶対捕まえるし、場合によっては死んでもらう…。だからもうそんな事は考えないで欲しい…」

牧村は凌に頭を下げる

「わかった。もうこんな事はしない…」

目に涙を浮かべる牧村

「すまない…。俺は…俺は…」

凌は牧村の肩に手を置いて言う

「大丈夫。僕にはわかる。能力の事で悩んでたんですよね…。その事なら僕達が相談に乗ります。悪いのはアナタじゃない…」

牧村は膝をついて吐き出すように言う

「この能力のせいで、仕事はしょっちゅうクビになるし、街中を自由に歩く事もできなかつた…。俺は…ただ普通に暮らしたかつたんだツ…」

築地決戦

数日後、築地場外市場で魚を購入した牧村。

曲がり角を曲がり、人気のない道にさしかかると、そこで一人の少年の姿が視界に入る。

それは数週間前、牧村にサイコロレンジャー捜索を依頼した真鍋翔太だった

「お前、あの時の…」

「ちよっとおじさん、サイコロレンジャーはどうしたんだよ。こんな所で魚なんか買っちゃってさあ。ちゃんと仕事してくんない？」

牧村は少し口ごもった後に言う

「すまん、アレ…なかつた事にできないか…？」

「はあ!?! なんで!?!」

「だって俺が奴らの居場所を教えたら…」

翔太は頷く

「うん、倒すよ。それが何? 文句ある?」

「お前と奴らが何で揉めてるのかはわからないが…。やっぱりそういうのは良くないんじゃないのか? なあ?」

翔太はため息をつく

「つまり、おじさんは僕に協力できないって訳?」

「ああ」

返事を聞くと翔太が唐突に言う

「あのさ、おじさんって頭悪いでしょ?」

「あ? なんだと!?!」

「だっておじさん語るに落ちてるんだもん。それじゃ既にサイコロレンジャーと接触したのがバレバレ。乱暴はしないつもりだったんだけど、仕方がないね。ムリヤリ喋ってもらおうよ」

翔太がそう言つてポケットから何かを取り出そうとした瞬間、路地に声が響く

「待て!」

先程牧村がやってきた方向からサイコロレンジャーの五人が現れて

翔太の前に立ちふさがる

「あ、あんたら…何でここに？」

思わず漏らす牧村に答える里菜と雄真

「悪いが、お前を囮に使わせてもらった。依頼主を探し出す為にな」

「ま、おっさん、これで本当に貸し借りはなしだぜ！」

翔太は牧村とサイコレンジャー達の会話を聞いて鼻で笑う

「ふーん、あんたらがサイコレンジャーか…。なんか嵌められたみたいでいい気しないケド、まあいいや。コッチから探しに行く手間が省けたよ！」

翔太はポケットから独楽を取り出してそれに手をかざす。

すると独楽はみるみるうちに超力獣へと姿を変えた

「能力者…レベル2…」

それを見た里菜が思わず呟く

「ん？ レベル2？」

首を傾げる龍我に凌が説明する

「超力獣を自力で作り出せる能力者の事。要は大物だから絶対捕まえてやろうって事が言いたいのさ」

「よし、みんな行くぞ！」

雄真が叫ぶと四人が応じる

「おお！ サイコチェンジャー！」

五人の姿が戦士に変わる

「サイコレッド 北神龍我！」

「サイコブルー 風祭凌！」

「サイコイエロー 一色里菜！」

「サイコグリーン 桧垣雄真！」

「サイコピンク 百瀬純！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

「チツ、正義の味方ぶっちゃってさ…気にくわないんだよ。さあ、いけ！」

翔太は超力獣をけしかけた。

向かってくる超力獣にエナジーソードを取り出して応戦する龍我

と雄真。

二人は突進の威力で吹き飛ばされるがその隙について凌がサイコガンで超力獣を狙撃。

さらに里菜と純が超力獣の脇をすり抜けて翔太に対峙する

「お前何者だ！」

「大人しく捕まってくれれば乱暴しなくて済むんだけど、どうする？」

「く、くそっ！」

語りかける里菜と純に背を向けて逃げ出す翔太

「あ、逃げた！ さっきまであんなに偉そうにしてたのに！」

「純、追うぞ！」

翔太を追う二人。変身して身体能力が強化されている二人は楽々

翔太に追いつく

「大人しくしろッ！」

里菜が叫んで翔太の腕を掴もうとした瞬間の事だった。

突如、二人の身体が舞い上がり地面に叩きつけられる

「痛ッ！ 何これ！」

「サイコキネシス……！ 奴の能力か？ くそっ！」

二人はそう言った後、立ち上がり再び翔太を追おうとするがその眼前、既に翔太の姿はなかった

「逃がしたかッ……！」

悔しがる里菜

一方、超力獣と交戦する龍我、凌、雄真。

雄真がエナジーソードで切りかかるが超力獣にソードを弾き飛ばされてしまう。

雄真が怯んだ隙に攻撃を加えようとする超力獣を見て叫ぶ龍我

「危ないー！」

その声を聞いた雄真は巧みなフットワークで超力獣の攻撃をかわすと反対にワンツーパンチを喰らわせた

「さすが元ボクサー！ 武器使うより素手の方が強いんじゃない？」
そう茶化す凌に怒鳴る雄真

「う、うるせー！ どうでもいいからトドメだ、トドメ！」

「ハイハイ」

「よし、いくぞー！」

雄真に呼応する凌と龍我。

三人が一生にサイコガンでレーザー光線を喰らわせると超力獣は派手に爆発した

サイコレンジャーと超力獣が交戦する路地に面したビルの屋上からその戦いを眺める金髪の若い女・響子とヤクザ風の男・五条。五条は脇に翔太を抱えている

「ふーん。あれがサイコレンジャーかあ…」

響子が呟く

「あの緑のヤツ、なかなかいい動きするな。お前が戦ってみたいっていうのも納得だ」

五条が翔太に語りかける

「そんな事より二人共何でこんな所にいるんだよ！」

叫ぶ翔太に答える響子

「だってえ。最近ー、アンタの動き怪しいからさあ。調べてみようって、五条さんが」

「五条さんが!？」

翔太は五条を睨む

「そう怖い顔すんなって。見張るようなマネして悪かった。でもいいタイミングで助けに来ただろ？」

「そーそー。私達が来なかったらアンタ死んでたかもよお」

翔太は舌打ちする

「どいつもこいつも子供扱いしやがって！」

そう言って翔太は何やら念じ始める

「オイ、こんな所で巨大化かよ！」

「アンタ、夢中になると本当に後先考えないよね…。やっぱガキだわ」
響子と五条はそそくさと逃げ出した

エピソード

爆発で散らばった肉片が集まり巨大化していく超力獣。狭い路地で巨大化したので隣のビルが崩れてその破片が降ってくる

「うわあー！」

それをなんとか避ける龍我達。雄真が言う

「チツ、巨大化かよ」

「サイコバスター、発進！」

凌が叫ぶと五機の飛行機が飛んでくる

築地の街で暴れる超力獣の後ろにつけて合体したサイコバスター。

超力獣に剣を振りかざすと超力獣が派手に吹っ飛ぶ

「なんだ、コイツ大した事ないぜ！」

雄真が叫ぶと里菜が頷く

「ああ。あの少年、この前に出た蜘蛛の超力獣を作ったのとは別の超能力者だろうな」

そんな話をしている間にも超力獣は攻撃を仕掛けてくるが五人は軽くないです。

「トドメだ！ エナジーソードDX！」

超力獣は大爆発を起こした

戦いを見ていた翔太、響子、五条の三人

「ああ。やられちゃったよ。アイツらやっぱ強いな」

「ま、仕方ないんじゃない？ 国生さんの超力獣が負ける位だし」

五条と響子はそれだけ言い歩き出す。翔太はまだじつと突っ立っている

「おい、翔太！ 帰るぞ！」

五条の声を無視して翔太は呟く
「くそっ、サイコレンジャーめ！ 絶対、絶対許さないからなッ……！」

第八話 サイコレンジャーの秘密！ (前編) 引越

段ボールで溢れかえるサイコレンジャーの事務所内。

「ねえ、これはどこに入れればいい？」

置物を持った龍我が里菜に聞く

「それは割れ物だからあの箱だな」

「わかった」

サイコレンジャー達はせせせせと部屋の中にある物を段ボールに詰めていく

「ところでさあ。いきなり引越しとかどうなってるの？ 全然理由を聞いてないんだけど…」

龍我の問いに里菜が答える

「先日、牧村隼雄がここの場所を特定しただろう？ いつ敵が襲ってくるか解らん所にいつまでもいられないからな」

「でも牧村さんはここの場所バラしてないって言ってたじゃん」

「その話が本当だという保証はどこにある？」

冷たく言う里菜。

龍我は口を尖らせる

「牧村さんは利用されてただけなんだし、もうちよつと信用してあげても…。てゆうか！ 牧村さんの事は凌も一緒に取り調べたんだよね！ 本当の事言ってるかどうかくらい読心術でわかるでしょ！」

「うん。彼、嘘はついてなかったよ」

凌は龍我と里菜のいる所から少しばかり離れた所で棚から物を下ろしながら言う

「じゃあわざわざ引越しなんてしなくても…」

凌が龍我の言葉を遮る

「でも、それは牧村さんが『教えていない』って認識しているだけかもしれない」

「へ？」

「もし、あの牧村さんを使っていた少年の能力が記憶を消す能力だったら？ もしくは僕と同じように他人の記憶や思考を読み取る類のモノだったら？」

「あつ…」

「それなら聞いた後にその部分の記憶を消したり、気づかれない内に記憶を盗んだりできる。牧村さんが嘘をついていなくても相手に情報がいつている可能性は十分に考えられるよね」

龍我は頭を抱える

「うーん、そんな所まで考えないといけないなんて…超能力って難しい！」

数時間後。

五人は既に荷作りを終えて移動用のワゴン車に段ボールを積み込む作業に移っていた。

雄真と一緒に積み上げられた段ボールを車のトランクへ入れていく龍我

「よし、これで最後かな」

龍我は残り一つになった段ボールを持ち上げる

「ん？ なんだこれ？」

龍我が注目したのはその段ボールの表面に書かれている文字である。

そこにはマジックで『アスピョン』と書かれていた。

龍我の様子を見た雄真が言う

「どうした？」

「この中って、何が入ってるの？」

「ん？ 何って…書いてあるじゃねえか。アスピョンだよ。いつものうさぎ」

龍我は目を丸くする

「えっ、こんな所に入れて大丈夫なの？ 窒息とかしないかな？」

雄真は首を傾げる

「お前、何言ってるんだ…？　もしかしてお前、あの人形が生きてるとか思ってる？」

「えッ、違うの？　だって動くし、喋るし」

それを聞いた雄真は声高らかに笑ってから大声で言う

「おい、みんな！　コイツ、あのうさぎが生きてると思ってるんだってさー！　段ボールに入れたら窒息するとか心配してやんの！」

「ええー！」

遠くで作業をしていた純が叫び声をあげながら寄ってくる

「人形が生きてる訳ないじゃん！　もしかして龍我君おかしくなっちゃったの！　大変！」

「それはいい過ぎじゃ…」

騒ぐ三人の横から凌が冷静に説明する

「あの人形はさ、単なる受信機なんだよ。本当は超能力者が別の場所からアレを操ってて、僕達に指令を出してるワケ」

「そうなの！　でも、何でそんな回りくどい事を…？」

「戦闘部隊である僕らサイコロンジャーと彼女本人が一緒にいるとリスクが高いから」

「と言いますと…？」

まだ解らない龍我。凌は続けて言う

「彼女の能力は二つ。千里眼とテレパシー。千里眼で超力獣を見つけ、テレパシーでいち早く僕達に知らせる。彼女の役割は僕らの活動の要なんだ。僕達みたいな調査、戦闘要員なら代えがきくけど彼女の場合はそうはいかない。組織として簡単に失うワケにはいかないから、僕らの基地よりもっと見つかりにくい場所に隠れてるんだよ。それに彼女は超能力者としては優秀だけど、能力自体は戦闘向きじゃないから。いざという時、自己防衛するのも難しいしね。」

「ふーん…初めて知った…」

驚く龍我に雄真が言う

「てゆうか、お前今まで不思議じゃなかったのかよ。　何、簡単に受け入れてうさぎと普通に会話してんだ？」

「ごもつともな事を言われて怯みながらも龍我は反撃する

「後回しになってただけだよ！ だって最近、信じられない事が次々起こるんだもん！ いきなり超能力だの、超力獣だの！ てかッ！

俺、ここの組織とかについて全然説明受けてないんだけどッ！ 俺達五人以外にも仲間とかいたワケ!? それすら初めて聞いたよ！」

純が惚けた表情を浮かべる

「そう言えば説明してなかったっけ？」

「うん！ いきなり逮捕されて、戦わされて！」

龍我が鼻息を荒げると雄真と凌が言った

「わかった、わかった。だから落ち着け」

「ちゃんと全部説明するよ。今から宝来邸に行くから丁度いい」

宝来邸

五人を乗せて山道を走るワゴン車。助手席に座る龍我が運転席の雄真に問いかける

「あのさあ、一つ目の門過ぎてから一時間くらいたつんだけど…まだつかないの?」

「ああ。仕方ないだろ。この山一つが敷地なんだから」

面倒臭そうな雄真に代わり後部座席にいる純が答える

「でも、そろそろ着く頃だよ。ほら、見えてきた!」

純は前方を指差す。その方向を見ると大きな西洋風の邸宅が見えた

「ここが新しい基地なの!? わあ、大きいなあ! こんな立派な所があるならあんなボロビルを基地に使う必要なかったんじゃない?」

助手席から飛び降り、屋敷を見上げながら言う龍我に対して少し遅れて後部座席から降りた純が言う

「あのね龍我君。ここが基地になる訳じゃないんだよ」

「え?」

龍我は純の言葉に首を傾げる。続いて里菜と凌

「ここは我々の活動を支える宝来財閥会長一族の邸宅。新しい基地が準備できるまでの一時避難場所だ」

「残念だったね。正式な基地はきつと前の廃ビルと同じような所だよ」

「ええー、そんなあ…」

がつくりと肩を落とす龍我に雄真が言う

「当たり前だろ。こんな所を基地にしてたら目立って仕方ねえじゃん。何日か泊まれるだけでもありがたいと思えよ」

そんな話をしている五人のもとに前方から黒塗りの車が近づいてくる

「お迎えだな」

雄真が呟く。

車は五人の目の前で停止。そして扉が開き、中から二人の人が降りてきた。

一人は黒服の若い男。サラサラヘアーが特徴的な美男子だ。もう一人はOL風のスーツに身を包んだ小柄で若い女。

雄真と里菜が呟く

「珍しい出迎えだな…」

「樋村透と三門志織か…」

それを聞いた凌が言う

「三門志織…!?! 彼女が『記憶の破壊者』メモリーブレイカー…。実物は初めて見たよ」

「メモリー…ブレイカー…?」

首を傾げる龍我に純が説明する

「記憶を消す超能力者のこと。前に説明したでしょ?」

「ああ…大学の事件の時に言ってたヤツか…」

龍我はついでにもう一つ聞く

「じゃあもう一人の人は誰?」

「ああ、樋村透さんね。あの人は養成学校の第一期卒業生で源三会長の護衛団の一人なの…」

「ん? 妖精学校? なにそれ?」

龍我はまだイマイチ事情を把握できない。だが、そんな事にはおかまいなしとばかりに樋村透と呼ばれた黒服の男が話しかけてくる

「皆さん、遠い所までご苦労様です。早速、部屋までご案内しますよ。皆さんの泊まる三号棟まではまだ距離がありますから車に乗って行きましょう」

その言葉に反応したのは里菜だ

「いや、待ってくれ。まずは源三様に挨拶がしたい」

透は頷いて言う

「それでは挨拶へ行く組と部屋へ行って荷物を整理する組、二手に別れるというのはどうです?」

里菜も頷く

「そうしよう」

「それでは源三様へ挨拶に行く方は我々の車に乗って下さい。僕が運転しますから。部屋へ行く方は皆さんが乗って来たワゴン車に乗って下さい。志織さん、運転できますよね？」

「はい」

三門志織は惚けた返事をする。

それを聞いて龍我は何かを思い出した

「あれ、貴方…。この前会いませんでしたっけ？」

「何だ？ 知り合いか？」

雄真が言うが志織は首を傾げて不思議そうにしている

「ほらほら！ この前、猫の超力獣に襲われそうになってたでしょ？」

「ああ…。あの時のOL！ あの時は暗くてよく見えなかったけど確かにこんな感じだったなあ」

龍我がアピールすると凌も思い出したようで志織をしげしげ見ながら言う。

だが肝心の志織本人は態度を変えない。

すると透が言う

「ああ。そういえば志織さん、この前、任務の後で道に迷って夜まで帰って来なかった日があったじゃないですか。あの時じゃない？」

「あれえ？ そんな日ありましたっけえ？」

それでも志織は首を傾げたままだ。

その様子を見て里菜は言う

「諦めろ。コイツは記憶力が悪いんだ。かまってるって日が暮れる。龍我は私と一緒に挨拶。凌、雄真、純は先に部屋へ向かってくれ」

迷い道

「それにしてもこんな大きな家に住んでるなんて宝来財閥の会長って凄いなあ…」

透が運転する車の中、龍我が呟く。

それを聞いた里菜が言う

「当たり前だ。宝来財閥と言えば、二大政党への政治献金が一財閥で経団連全体に匹敵するほどの大財閥だぞ。そんな事も知らなかったのか？」

龍我は頭をかく

「いや、俺の先輩も何人が就職したからさ。大した事ないのかと思つて…」

里菜はため息をついて言う

「それはお前が東大だからだ」

「北神龍我さん…。どんな人かと思つてましたけど、なんだかボケた方ですね」

運転席の透が言う

「へ？」

唐突に失礼な事を言われて龍我が思わず声を漏らす

「この僕を差し置いてサイコレッドに選ばれる人だからどんな優秀な方かと思つたら…。こんなボンクラだなんて。里菜さん、どうです？」

今からでも遅くないから源三様に僕を推薦してくれませんか？

源三様も可愛い妹さんの意見なら耳を貸すと思うんですが」

里菜は透を無視して龍我に言う

「龍我、気にするな。こういう奴なんだ」

一方、三門志織の運転するワゴン車に乗る凌、雄真、純

「あのさあ。道、間違つてないかな？ こんな所、来たことないよ…」
純が運転席の志織に語りかけると志織は不思議そうな表情でポ

ケットから地図を取り出す

「あれえ？　そうですかあ？　村田社長に地図書いてもらってその通りに来たんですけどお」

その態度を見て雄真が地図を取り上げる

「それ貸してみろ」

それを見て怒鳴る

「お前、どこの地図貰ってんだよ！　全然違う場所の地図貰ってんじゃねえか！　地図よりカーナビだろ！　なんでカーナビをセツトしねえ！」

「私い、遠くへ行く時はいつも宝来製菓の村田社長に地図を書いてもらうんです。村田社長はいつも親切にしてくれるんですよ。源三様と村田社長は私の命の恩人ですよ」

志織のおっとりとした口調に苛立つ雄真

「んなこと聞いてねえだろ！　カーナビ使えって！」

凌が冷静に言う

「敷地内じゃ住所一緒だから無理だよ。誰も敷地内で迷う事想定してカーナビ作ってないから」

それを聞いた雄真が言う

「もういい、俺が運転する！」

四人は車を止めて一度車から降りた

「ここってどの辺なんだ？」

雄真がそう言って周りを見渡すと巨大な倉庫が目に見える

「ああ、これ宝来製菓の在庫保管用倉庫だね。宝来製菓って毎年赤字なんだけど、財閥の中でも伝統のある会社だから潰せなくて在庫が沢山出るらしいよ」

凌が倉庫の前に立って言う

「なるほどな…。そんな会社維持する金があるならサイコロレンジャーの新兵器でも開発して欲しいもんだぜ」

雄真がそう言いながら倉庫の扉にふと手をついたその時である。

突如、意図せずサイコメトリーが発動。雄真の脳内に記憶イメージが流れ込んで来た

「これはッ……！」

宝来源三

トントン―

扉をノックする音。

「入りたまえ」

男の声を聞いて部屋の中へ入っていく里菜、龍我、透の三人。
部屋の中にいたのは四人。

恰幅のいい50代前後の男と眼鏡をかけた30代前後と思われる男。

それと透と同じ黒服の二人。どうやら源三の護衛ならしい。ほっそりとした体格でどこか自信なさげな男と眼鏡をかけた女だ

「やあ、里菜。元気にしてたかい？」

年上の方の男が右手をあげて言うとき里菜は身体を垂直に曲げて礼をする

「お久しぶりです。源三様。日々のご支援、ありがとうございます」

そして今度は年下の方に続けて言う

「勝広様もお久しぶりです。ここにいらっしやっていると知りませんでした」

勝広と呼ばれた男は言う

「久しぶりにみんなと会えるっていうからね。明日香も来てるっていうし」

「明日香も？」

「知らなかったかい？ 彼女も引越したよ」

「明日香も敵に居場所が知れたという事ですか？」

「そういう訳でもないみたいだけど、先日、緊急事態で外出してしまっただらしくてね。もし見られてたらよくないから念の為。明日香には君達みたいな戦闘能力はないし…」

二人が会話する様子を見た源三が里菜に語りかける

「ところで里菜」

「はい」

里菜はビシッと背筋を伸ばして話を聞く

「私や勝広を呼ぶ時に『様』をつけるのはもうやめないか？ 年は離れているけど、私達は一応兄妹なんだし、勝広に至っては甥っ子なんだ」

「えっ、兄妹!？」

それを聞いて龍我は目を丸くするが特に説明もしないまま、里菜は源三に答える

「いえ、そうはいきません。私は先代の治五郎様に拾って頂いた身。一族の方と対等に接するなどおこがましい事です」

里菜の様子を見た勝広が諭すような口調で言う

「でも明日香は呼び捨てだろ？」

「ご希望なら、これからは明日香様とお呼びしますが」

「そうか…」

源三は里菜の素っ気ない態度にため息をついてから龍我の方を改めて見る

「君が新しいサイコレッド、北神龍我君だね」

「あ、はい」

「確か予知能力があるとか」

「ああ…予知って言うか…ただ勘がいいだけなんですけど…」

「ちよつと見せてくれないか？」

そう言つて源三は机の上に裏向きに積まれたトランプを置く

「じゃあ、一番上のカードが何か当ててくれ」

唐突な展開に龍我は動揺を隠せない

「そんなのわかんないですよ…」

「つべこべ言わずやれ」

不満を漏らすと里菜が命令するので仕方なく答えた

「じゃあダイヤのAで…」

源三がトランプをめくると龍我の予言通りにダイヤのAが現れる

「おお…!」

驚嘆する源三

「ではその次は？」

「うーん、ハートの6で…」

カードをめくるとこれまた予告通りのカードだ。

里菜が説明する

「今、見て頂いた通り、彼の能力は異常なまでに発達した第六感です。本人も言っているように、『勘で何でもわかる』という訳ではありませんが、いくつか選択肢を用意した上でのテストなら間違いなく正しい回答を選び出す事ができます。また、人やモノ、環境の変化に敏感に反応できるので、任務の中では超力獣の発見や奇襲攻撃への対応に利用でき、相手の行動が先読みできるので一対一での戦闘でも有利になります」

それを聞いて今まで黙っていた透が呟く

「なるほど。それはいい能力だ」

その透に里菜が釘を刺す

「関係ないだろ。お前はサイコレンジャーではないのだから」

「今はね。でもまた誰かが犠牲になれば僕がサイコレンジャーになる事だって…」

透の言葉を源三が遮る

「透、縁起でもない事を言うのはやめなさい」

透は頭を下げる

「すみません…」

それで満足したようで源三はそれ以上、透を追求するような事はせず、再び龍我に語りかける

「北神君、君はいい能力をもっているね」

そんなことを褒められても大して嬉しくはないが龍我は礼儀としていちおう頭を下げる

「ど、どうもありがとうございます」

源三は龍我の心情を悟ってか含み笑いを浮かべつつも続ける

「だけどね、私が君を新しいサイコレッドとして選んだのはそんな事が理由じゃない。それだけならここにいる透や太一、樹理も優秀な超能力者だ」

他の事を話しながらなのでわざわざ話の腰を折るような事はしないが、源三は先ほどから自身を囲むように無言で立っている黒服の二

人に目配せする事で龍我に二人を紹介した。

眼鏡をかけた女が樹理で、ほっそりとした男が太一だろう。

それが龍我にも伝わった

「でも君は透、太一、樹理にも、他4人のメンバーにもないものを持っている。それを生かしてみんなを助けてやって欲しい」

「はい…」

いつもの癖で、なんとなく返事はしてみたものの、龍我には源三のいう「他の人にはないモノ」というのがわからなかった。自分はまだ戦闘の経験も浅くみんなに助けられてばかりだし、みんなに比べて超能力を用いて悪事を働く者の気持ちを知ってやることもできない。

それって、なんなんですか…？

龍我は聞きなおそうと思ったが、そんな間もなく、源三が里菜に向かって次の言葉を発したのでタイミングを逃してしまった

「せっかくだから明日香にも会っていきなさい。北神君は直接本人に会った事がないだろうしね。いつもの場所：製菓倉庫近くの倉に住み着いてるから」

「ではそうします」

お辞儀をして部屋を出て行くこうとする里菜に続く龍我と透。里菜が振り返って透に言う

「お前はついて来るな。案内はなくても行ける。そして何よりお前がいると不愉快だ」

「それはあんまりな言い方だなあ…」

透が笑顔を崩さないまま何か言い返そうとするが里菜は続きを言わせないよう源三に話しかける

「あと、源三様。あの写真そろそろ外した方がいいですよ」

里菜は源三の後方の壁にかけられた写真を指す。写真には里菜と源三、それに前会長らしき老人と三十代位の西洋人。それに加えて三人の若者達が写っている

「お互い過去は忘れましょう」

そう言って里菜は部屋の扉を開いた

並んで歩く里菜と龍我

「ねえ里菜。ちよつと聞いていい？」

龍我が話しかける

「なんだ？」

「源三会長はわかるんだけどさ。勝広さんって人はどういう立場の人？ 話聞いてたけど全然わからなくて」

「勝広様は源三様の兄、現国家公安委員長・宝来祐二様のお子さんだ。ご本人も警察官僚で超力獣事件の情報操作に協力して下さっている」
「なるほど。色んなコネがあるんだね。」

「まあ、そういうことだ。サイコレンジャーや超力獣のことを知った者に対する情報操作は基本的に『記憶の破壊者（メモリーブレイカー）』が能力を使って行うが、不特定多数に見られた場合など、一人一人記憶を消去していったのでは間に合わない事もあるからな…。そういった時に重要な役目だ。例えば、我々がサイコバスターを出勤させて派手に戦っても全く報道がなされないのはその成果だな」
「そうなんだ…。それも前々から不思議に思ってたんだよね…。じゃあついでにもう一つ聞いていい？」

龍我は人差し指をたてる

「なんだ？ 早く言え」

「源三さんと里菜って兄妹なの？ 名字違うし、年も離れてるけど…」
「私は先代会長・治五郎様の養子なんだ。だから治五郎様の実子である源三様とは義理の兄妹にあたる」

「養子！ 何でまた…」

里菜は少し間を置いてから答える

「私には親がいなかったからな。孤児院の前に捨てられてたらしい」

「そうなんだ…」

「だが孤児院も盪回しにされてな」

「え？」

「別に特別なことじゃない。理由は純が学校で虐められていた理由と同じ。私も昔は能力が制御出来なかったんだ。勝手にサイコキネシスが発動し、行く先々でポルターガイスト現象を起こして、気味悪がられていたらしい。そんな私を拾ってくれたのが前会長の治五郎様という訳だ」

「なるほど。親切な人だったんだね。治五郎会長は」

里菜は龍我の発言を鼻で笑ってから言う

「いい人ではあったが、別に親切で拾ってくれたワケじゃない。治五郎会長の目的は私の超能力だよ」

「へ？」

「治五郎様は奥様が超能力者でな。それがきっかけで超能力の存在に気づき、超能力を人の役に立てる為に使おうと思っただけ。それで十年程前に五人の超能力者を集めてサイコレンジャーを結成したんだ」

「へー」

龍我は感心したように相槌を打つが、そこで話の矛盾に気づく

「ん？ 五人？ サイコレンジャーって俺が入る前は里菜、凌、雄真、純の四人だったんじゃないの？」

「ああ…そこから話さないといけないのか」

里菜は呟いてから言う

「サイコレンジャーのメンバーは結成当初から常に五人。だが、今のサイコレンジャーで結成当時からいるのは私だけだ。あとのみんなは他のメンバーとの入れ替わりで入って来たんだよ。さっきの部屋に写真が掛かってただろ？ あれが初代サイコレンジャーのメンバーだ」

「知らなかったなあ…。でもそれじゃ、辞めた人達は怎么样了の？」

「例外もいるが…ほとんどは死んだ」

「え？」

「当たり前前だろ。私たちは命を懸けて戦っているんだ。犠牲者がいたって不思議じゃない…。どうした？ 聞いて怖じけついたらか？」

「そういうワケじゃないけど…でも…」

何か言いかける龍我に里菜が整然と言う

「因みにお前は五代目レッド。今のところレッドのスーツを使った者が一番死んでるからな。お前も気をつけろ」

火葬

倉庫の扉に触れる雄真の脳内に流れ込むイメージー。

男の悲鳴、「助けてくれー！」と言う声。

そして何より強く感じる、吐き気をもよおすようなドス黒い悪意ー

「わああ!!!」

サイコメトリーに集中させていた意識を取り戻すと雄真は叫び声をあげた

額からは冷や汗が流れおちる

そんな雄真の顔を心配そうに覗き込む純と凌

「雄真君…ど、どうしたの?」

雄真は顔を上げると純の質問に答えるよりも先に自らが問いかける

「この倉庫の中、何がある…!?!」

凌と純は二人同時に顔を見合わせて、首を傾げた

二人は雄真と同様にサイコレンジャーの一員として普段から別の場所に住んでいるので、屋敷の中の事については詳しくない。その動作を見せ合う事で改めてお互い雄真の質問に答える事ができないという事を確認しあつた。

だから雄真、凌、純の三人は、普段から屋敷にいる三門志織に答えを求め、彼女の事を真剣な表情でじつと見つめた

しかし、三門志織から返つてきたのは拍子抜けするほどの外れな内容の返事だった

「ここはあ、宝来製菓の倉庫ですからあ。お菓子の在庫ですよ。お煎餅とかあ、おかきとかあ…」

「そういう事じゃねえ!」

志織の言葉を途中で遮る雄真の怒鳴り声。

あまりの迫力にさすがの志織も「何か悪い事をしましたか?」とばかりに不安そうな表情でまわりをキョロキョロ見渡す。

自分が注意された訳でもないのに純も驚いて表情を強張らせてい

る。

その場で冷静な感情を保っていたのは凌だけであった。

彼は読心術を駆使して雄真がサイコメトリーで何を見たのか、何を考えているのか、探ろうとした。しかし、自分以外の他の三人が同時にパニック状態に陥っていた事で、聞こえてくる心の声が混じり合っ
て全く要領を得なかった。

仕方なく「短気なところがある雄真の行動だとしても、あまりに配慮がなかったな…」と、状況から雄真の只ならぬ様子を察して凌は
言った

「何か見えたんだね？」

黙って頷く雄真

「とにかく一回、この扉を開けてみよう」

そう前置きしてから凌は志織に語りかける

「ねえ志織さん。こここの鍵、どこにあるか知らない？」

「えつと、えつと…」

「役にたたねえなあ！」

思い出せそうにない志織に雄真が苛立っていると後方から誰かが
声をかけてくる

「ちよつと、何事よ！」

一同が見るとそこには中学生位の少女といかにも腰の低そうな5
0代前後の男。

二人を見て志織が言う

「あー、明日香さんと村田社長お…。村田社長お、あのおさつき貫った
地図違つたみたいなんですけどお…」

「ああ、そうかい？ 悪かったねえ」

のん気に頭を下げる男。

志織と「村田社長」と呼ばれた男の場違いなやりとりを無視して純
が言う

「アスぴよん…何でここに？」

男を伴い近づいて来る少女が答える

「貴方達を〃視てたら〃様子がおかしいから。製菓の社長を連れてきたあげたのよ」

「いいから早く開けてくれ!」

雄真に急かされ、鍵を開ける製菓の村田社長。雄真が重い扉を開くと、暗い倉庫の中にポツリと光が灯っている。それを見て少女が悲鳴をあげる

「キヤー」

叫び声は倉庫方面へ向かう龍我と里菜のもとにも届いていた

それを聞いて里菜が呟く

「この声…。明日香の声か?」

「何か嫌な予感がする!」

龍我はそう言って声の主に気付いた里菜に先駆けて走り出す

里菜も少し遅れてついていく

「みんな!」

龍我と里菜が凌や志織らがいる倉庫前に辿り着く

「何があつた? 説明しろ」

里菜が近くにいた純に聞くと純は倉庫の中を指差す

「あれ…」

里菜と龍我がその方向を見ると、暗い倉庫の奥にポツリと灯る光が見える

「なんだあれ…?」

龍我はそう呟き目を凝らす

オレンジ色に輝く光。弱い風が吹くと時折、ユラユラと揺れる。

たぶん火だ。じゃあ、何に火がついているんだろう？

そう思つて光から視線をやや下に落とすとそこには何か黒い物体。長細いカタチ。横たわつたような格好でそこにある。

更によく見ると左右から枝のように飛び出している。

結構大きいな。

上から下まで160cmくらいだろうか

いや、まてよ…。

ややカタチは崩れているが、何か見覚えのあるカタチだ…。

まさか…！

そこまで考えて龍我はようやくそれが火のついた人間である事に気づいた「ゲツ…！ 人が燃えてる！」

「お前ら何ボケツとしてるんだ！ なぜ早く火を消さない！」

そう言つて里菜は勢いよく燃える物体に駆け寄りジャケットを被せて火を消した。

しかし、現れたのは黒こげの死体だ

「くそっ…手遅れだったか…」

他のメンバーが里菜に少し遅れて駆け寄つた。

雄真が言う

「あれだけ燃えてるのにピクリとも抵抗しなかった…。俺達が見つけた時にはたぶん…もう」

目の前の惨状に一同が言葉を失う中、遠慮がちではあるが凌が口を開く

「あのさ…」

「ん？」

凌は純を見て言う

「念の為、いちおう聞くだけなんだけど、純の能力じゃないよね？」

「え？」

その言葉の意図がつかめない純に対し、凌は補足する

「僕らが来た時、この倉庫には鍵がかかっていた。そして鍵を開けて扉を開けたら、もう死体は燃えていた…。つまり死体は密室の中で燃

えていた事になる。こんなの普通の人にはできない……。でもパイロキネシスを持つ超能力者なら……」

「ち、違う違う！」

慌てて首を横に振る純

「ごめん、わかってる。念の為さ」

そんな事を話していると明日香が目を瞑りながら唐突に言う

「みんな！ この中、何かいるッ！」

「え？」

「たぶん超力獣……。あの棚の陰よ！」

明日香が倉庫の奥を指差すと犬の形をした超力獣が姿を現した

V S 犬型超力獣

「明日香、志織、村田社長！ 奴は我々が相手をするから早くこの場を離れろ！」

里菜が戦闘力のない三人に声をかける。

明日香と製菓の社長は一目散に逃げるが志織だけがポケットとしている。

製菓の村田社長は少し逃げてから振り返ってそれを見つけると、戻って来て志織の手を引いてから、もう一度逃げ出した

三人が逃げるのを確認してから里菜が叫ぶ

「いくぞ！ みんな！」

「おお！ サイコチェンジャー!!」

五人の姿が戦士に変わる

「サイコレッド 北神龍我！」

「サイコブルー 風祭凌！」

「サイコイエロー 一色里菜！」

「サイコグリーン 桧垣雄真！」

「サイコピンク 百瀬純！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

「ヴウー！」

叫び声をあげて襲いかかる超力獣を雄真が軽くないです。

超力獣は勢い余って倉庫内の棚に激突。

すると倉庫内に無数にある棚がドミノ倒しのようになって次々と倒れた。

危うく下敷きになりそうになる五人

「ちよつと雄真君！」

「何やってんだよう！」

純と龍我が雄真を責める

「悪い悪い…」

手を合わせて謝る雄真を余所に凌が沈んだトーンで言う

「ちよつと…超力獣がいないんだけど…」

「まさか逃がしたか？」

マスクの下から里菜は雄真を睨む

「お、俺のせいだよ…」

戸惑う雄真と呆れて思わず体の力を抜く里菜、凌、純

しかし、龍我だけが『それ』を察していた

「いや、待って！ 気配がする…。まだいるよ！」

龍我の叫びに反応した一同が身構える。

臨戦態勢で神経を張り巡らせる五人

しかし、しばらくしても異変がない

「やっぱり、逃げたんじゃ…」

純が言った瞬間だった。瓦礫の下から超力獣が現れて純に飛びつく

「危ない！」

「しまった！」

「純！」

順番に叫ぶ龍我、凌、雄真。

しかし、そこへ里菜がすかさず手をかぎす。

サイコキネシスで超力獣の動きが止まった

「今だ！ 殺れ！」

その叫びに呼応して四人がサイコガンを一斉に発射。超力獣は消滅した

散らかった倉庫の中で変身を解いた五人

「あーあ、現場が滅茶苦茶。死体も埋まっちゃったし、捜査に手間がかかりそうだ…」

凌が呟く

その言葉に違和感を感じて龍我が聞く

「捜査？ 何を？」

答えたのは雄真だ

「は？ 被害者を燃やした超能力者を探すんだよ」

「だって今のはあの超力獣がやったんじゃないの？」

「超力獣の親を探さないとな」

「でも、親がまだ近くにいないとは限らないでしょ？」

里菜と純が首を横に振って順に言う

「いや、近くにいます。超力獣はパイロキネシスの類いは使わない。死体を燃やしたのはおそらく超能力者……」

「個人差はあるけど基本的にパイロキネシスはそんな遠くから使える能力じゃない……。だからたぶん犯人はまだ屋敷の中にいる……！」

第九話 サイコレンジャーの秘密！ (後編) 倉庫前

事件の現場となった宝来製菓倉庫前。

たった今、起きた事件を聞きつけて続々と集まってくる宝来財閥の関係者達

雄真が全体に問いかける

「これで関係者は全員そろったか？」

その言葉に促されて、龍我は集まった者の顔ぶれを確認していく

まず、自分の立っている位置から右側をみるとサイコレンジャーの4人がほぼ一列に並ぶように立っている。自分も含めて、龍我、凌、里菜、雄真、純。

今日この屋敷に初めてやってきた龍我にとって見知った顔はこのいつものメンバーのみだ。

その確認が終わると今度は向かい側にいる者たちの顔を覗く。

まず、目についたのは宝来財閥の会長である宝来源三とその甥で警視庁幹部の肩書を持つ宝来勝広だ。こんな緊急事態の中でも、自身の持つ立派な立場に恥じることのない落ち着いた態度だが、やはり身近でこういった事件を経験した事はそう多くないのだろう。サイコレンジャーの面々に比べるとさすがに二人ともやや不安そうなのが否めない。

その脇を固めるのは先ほど源三の部屋で出会った護衛の二人。眼鏡をかけた女、樹理とほっそりとした青年、太一。さらに宝来邸にいた時、入口まで5人を迎えに来た樋村透もそれに加わっている。

龍我はこの並びをみて、樋村透の肩書が源三の護衛であった事をやっと思い出した。今日はたまたま別行動だっただけで、普段から三人でチームを組んでいるのだろう。何やらヒソヒソと話し合いながらもそれぞれ警戒を怠っていない。

そこから少し距離をおいて、メモリーブレイカー「記憶の破壊者」こと、三門志織。相変

わらずボケつとした表情だ。

そして他の者たちから『明日香』と呼ばれる中学生くらいの少女がいた。騒動の中で話しかけるタイミングを完全に逃してしまったが、おそらく彼女が『アスピオン』を動かしている超能力者だろう

龍我はそこまで見渡して気づく。

「あれ？ 宝来製菓の社長さんがいないんじゃない？」

龍我が言うのと透が答える

「ああ。村田さんは今、損害額の計算中ですよ。誰かさんが倉庫を滅茶苦茶にするから…。製菓はただでさえ赤字なのに、可哀想」

バツの悪そうな表情を浮かべる雄真。透はそれを見てとても嬉しそうだ。

しかし、里菜は透のイヤミを聞き流して言う

「いない方が話が早く進んで都合がいいだろう。あの人は超能力の事に詳しくないからな」

続けて直接目撃者になっていない者への説明も兼ねて事件の概要を話し始める

「被害者の名前は菊池貴康。半年前に雇った金融アドバイザーで宝来財閥全体の経営状況を監視する役割を担っていた。そうですね？」

里菜が見ると源三は頷く

「ああ。本来それは私の役割なんだがね。最近は超力獣事件が多発しているから、そっちにかかりきりになって手が回らないことが多くて…。それで彼を雇ったんだ」

里菜はさらに聞く

「被害者は超力獣の件は知っていましたか？」

「いや。優秀で信頼に足る人物だったからいざずれは知らせるつもりでいたが…。まだ雇って半年だからね」

「なるほど…。では超能力者と直接の関わりは薄いかな？」

里菜はそう呟いてから勝広に言う

「いちおう、死因究明の為、警察の力を借りて遺体の解剖をお願いしたいのですが…」

「うーん…」

勝広は考え込む

「何か不都合でも？」

「いや、できるにはできるけど…。今回の事件は特に表沙汰にする訳にはいかないだろう？ 超能力関連の施設とか見られたらマズいから警察入れて捜査なんか出来ないし。法医学士にしる鑑識にしる使うなら信頼できる人物を使いたいんだけど、彼らも暇じゃないからね。結果が出るまで長くかかっちゃうよ」

凌が言う

「それはマズいな。それでは犯人に逃げられてしまう…」

それを聞くと唐突に透が口を開いた

「何をそんなに難しく考えているんです？ もう犯人はわかってるじゃないですか」

「え？」

驚く一同を余所に透は純を指差す

「この人ですよ。事件当時最も近くにいたパイロキネシス能力者。それだけで怪しい」

「そ、そんな…」

突然の指名で戸惑う純に雄真が助け舟を出す

「それはねえよ。あの時、ここの扉は閉まっていた。そしてこの扉が開くともう遺体は燃えてたんだ」

透は、納得いかない、というより、理解できない、というような口調で聞き返す

「だから何だっというんです？」

「純は対象物を見ながらじゃないとパイロキネシスを発動できないんだよー」

「それは解りませんよ。能力の発動条件を隠してるかもしれない」

「てめえはどこまで人を疑えば…！」

透の胸ぐらを掴もうとする雄真を凌がそれを押しのけて言う

「残念だけどそれはないよ」

透が首を傾げる

「なぜですか？」

「事件が起きた直後に聞いたんだ。純はやってない。僕にはわかる」

透は顎に手を当てて言う

「なるほど…貴方の能力は読心術でしたね…。心の声でわかったって事ですか…。でも、読心術って相手が強い精神力で拒めば効かない事もあるんでしょう…。信用できないなあ」

「まあね。でもそれは通常時の場合。僕は純に『やってないよね？』って質問したんだよ」

「はあ？ 意味が解りません」

「人は何かやましい事があると、質問された瞬間にどうしても一瞬それを思い出してしまうモノなんだ。あの時、純からは何も感じられなかった。だから純はやってない」

「それは妙ですね…」

透は一瞬だけ不可解だというような表情をつくるがその後すぐに満面の笑みで言う

「じゃあ、解った！ 風祭さん、百瀬さんを庇う為に嘘をついてるんですよ？」

「てめえ！」

今度こそ雄真が本当に透に掴みかかりそうだったので透と同じ護衛団の二人が透を制した

「やめようよ、透。それを言っていたらキリがないじゃない」

まず発言したのは太一だ。続いて眼鏡をかけた若い女、樹理が発言する

「そうです。無駄です」

透はため息をつく

「はいはい。わかりましたよ…。でも、そうなるといよいよ犯人を追う手がかりがない訳ですけど、どうするつもりなんです？」

それを聞いて凌が言う

「一つ聞きたいんだけど、この屋敷の中に超能力者は何人いる？」

透は目を丸くする。

「え？ えーと……ここにいるメンバーを除けば養成学校の生徒だけだから……。まあ60人位ですかね。何でそんなこと聞くんです？」

龍我は話の邪魔をしないよう純にそつと聞く

「養成学校って何？」

「ああ。源三さんが会長になってからできたんだけど……。超能力者を集めて正しい能力の使い方を教えてるの。私達が捕まえた超能力者もみんなそこにいるよ……」

「そうなんだ！」

「で、あの護衛三人組は特に優秀な卒業生。龍我君が入る前は彼らのうちの誰かがサイコロレンジャーに入るって噂だったんだよ」

「へー」

そんな話を話している間にも凌の話は進んでいく

「僕が全員を尋問する。そうすれば犯人は解る」

それを聞いて雄真が叫ぶ

「オイオイ、それは無茶だって！ お前、確実にパンクするぞ」

それでも凌は折れなかった。純が疑われていたのが余程いたたまれなかったようだ

「でもこのままじゃ犯人を逃がしてしまう。これしか方法がないんだ！」

しばらくして全体の方針が決まった。

里菜が各自に指令を出す

「純と凌は私と一緒に超能力者達の尋問。雄真は現場で遺留物をサイコメトリーしてくれ。龍我は雄真の補佐。で、護衛の三人……透、樹理、太一は源三様から離れないようにな」

全員が了解して各自活動に移ろうとした時、明日香が言った

「ちよつと待ってよ。私は捜査に参加させてくれないの？」

里菜がため息をつく

「当たり前だ。お前は重要な超能力者なんだから護衛団と一緒にいろ。志織、お前もだぞ！」

「えーそうなんですかあ？」

「やっぱりわかってなかったか…」

里菜はそう呆れてからいじけ顔の明日香に声をかける

「お前にも任務はある。千里眼で屋敷内を見張るんだ。頼んだぞ」

明日香は口を尖らせた

「いつも退屈な任務ばかりでサイテー」

捜査（1）

現場に残った龍我。

各自が持ち場へ散っていくのを見ながら雄真に聞く

「ねえ、あの女の子が『アスピョン』の能力者？」

「ああ、そうだ」

「初めて会ったのに全然話せなかったよ」

「あ？ 気にすんな。新しいアジトができればまた人形通して話せばいいだろ。中身は一緒なんだから」

「それはそうだけど…やっぱり顔を合わせて話した方が健全というか…」

龍我の言葉を遮って雄真が叫ぶ

「さあ、いいから仕事するぞ！ 手がかりになりそうなモノ見つけたらすぐ持って来い、いいな!？」

養成学校内のトイレの中。

取り調べの最中に、体調の変化を感じた里菜は他のメンバーには理由を隠してここに来ていた

水道の前で咳き込む里菜

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ…グッ!!」

そう声を出すと激しく吐血する。

排水溝に溜まる自身の血液を見て呟く里菜

「いよいよよ、私もか…」

里菜はそれ以上の大きな反応は見せなかった。

それだけ言うと、蛇口から勢いよく出した水を口に含んで、口内を洗浄する。水を吐き出すと、そこにはまだ相当量の血液が含まれているらしく真っ赤な色をしていた。

先程の戦闘でかなり身体に負担をかけてしまったらしい。

相手の奇襲攻撃に対応する為とはいえ、あの程度の敵に能力を使つてしまうとは。本当に下らない事で寿命を縮めてしまった。

里菜はそう思う反面、それでいいのだとも思った。

今までたくさんの仲間がサイコレンジャーとして戦つて散つて行つた。

中には仲間を救う為とか強敵を倒す為とか、そんな風に格好のいい死に方をした者もいた。でもその反面、大したことない敵に不意をつかれたり、半ば事故のような死に方をした者もいた。

所詮、死に方なんて自分では選べないのだ。

いや、むしろ自分は仲間たちより長生きした分だけ、カツコ悪く無様に、屈辱にまみれながら死んで行くのが分相応なのかもしれない：

何度かうがいを続けると吐き出す水も段々と色が薄まって無色透明になっていった。

そろそろ取り調べに戻ってもいい頃か。あまり遅くなっても怪しまれる。

そう思った里菜はもう考え事はよすことにした。

あちらの部屋には凌もいる。心の中で考えている事は全て見透かされる。

私が命を縮めながら戦っている事を知ったら今の仲間たちはどんな反応をするだろうか。

きつと私を戦いから遠ざけようとするに違いない。優しい奴らだ。

でも、それだけは自分の信念が許さない。絶対に。

トイレを出ようとする里菜。

一旦はドアに手をかけるが、口の周りに血か何かついていないだろうかと気になってふと正面の鏡を見る。

すると、鏡に映る自分の後方に護衛団の眼鏡をかけた女、樹理の姿があった。

驚いて振り向く里菜。そこにはやはり樹理。

里菜は樹理を問い詰める

「お前、いつからそこに…」

「ちよつと前から」

無表情のまま、興味なさげに言う樹理の胸ぐらを掴んで里菜は言う
「いいか？　ここで見た事は絶対に口外するな！」

樹理は首を横に振る

「それは不可能です」

「何!？」

「私は源三様の命令で貴方を見張っていたんです。私に命令がなされたのは貴方の身に起きる異常を知る為ですから、報告はさせて頂きません」

「なんだと…源三様が…」

里菜は声を震わせた

ガチャー

里菜がドアを開け、凌が養成学校の生徒に対して取り調べを行っている部屋に入ってくる。今は丁度取り調べ相手が代わる所で少し休憩しているらしいが、凌はかなりつらそうな表情をしていて純もそれを心配そうに見ている。

そんな様子を察して里菜は言う

「大丈夫か？　やはり取り調べの対象はパイロキネシスを使う能力者だけに絞った方がいいのではないか？」

凌は首を横に振る

「いや、養成学校の生徒は能力を複数持っている場合が多いから、一位能力を隠し持つのは簡単だ。今わかつているパイロキネシス能力者だけに絞ってたら容疑者を見落としてしまうかもしれない」

「でも、これじゃあ凌の身体が持たないよ…」

心配そうに言う純を凌が制止する

「仕方ないよ。この事件、見落としては一つも許されない。こんな超能力者だらけの所で人を殺してるんだ。犯人は何らかの方法で自分の正体がバレない仕掛けを用意していると考えていい…」

宝来製菓の倉庫内。

龍我と雄真はサイコレンジャーに変身した姿で棚を起こしながら遺留物を探している

「やっぱり変身すると棚起こすの楽だなあ。何で始めから変身しとか
なかつたんだろ？ なあ！」

雄真が龍我に語りかける

「でもさあ、棚起こしたのはいいけど中のモノが全部床に落ちちゃつ
てるから何が重要な遺留物なのかサツパリわからないよ……」

「まあ、それもそうだな……。片っ端からサイコメトリーしていきたい
所だが、俺の体力にも限界はあるし……」

「あ、そうだ！」

龍我が人差し指をたてる

「遺留物と言えば遺体があるじゃない！ サイコメトリーしようよ
！」

しかし、雄真は慌てたように激しく首を横に振る

「ダメだダメだダメだ！ お前は怖ろしい事を言うな……」

「確かにね……。あんまり遺体をいじくり回したら可哀想だつて言うの
はわかるよ。でもさ、それで犯人を逃がしちゃったら被害者の人、
もっと可哀想なんじゃないかな？」

「いや……」

雄真は一瞬躊躇いながらも言う

「それもそうなんだが……遺体のサイコメトリーは苦手なんだよなあ
……」

龍我が不思議そうに問いかける

「え？ どういう事？ サイコメトリーしても何も見えないって事
？」

「違う……。むしろ見えすぎると言うか……」

「ん？」

「死の直前に見たそれは怖ろしい映像が次々に頭に流れ込んでくるんだよ……。わかんねえだろうなあー、他の奴には！」

それを聞いた龍我は肩を落とす

「そうなんだ……。そんなに嫌なら仕方がないよね……。俺はその苦しみを解ってあげられないし……。でも困ったなあ。そうすると本当に手がかりがないよ……。あーあ、あの時、誰かが柵を倒さなければなあ！」

本当に悲しそうな龍我の表情を見て雄真は叫ぶ

「わかったよ、やるよ！ やればいいんだろ！」

捜査（2）

「貴方はパイロキネシスを使えますか？」

「いいえ…」

純の質問に答える養成学校の男子生徒。

その横にいる凌の耳に彼の心の声が聞こえる

【何なんだよ、この取り調べ…。一体なにがあったんだ…？ てかもしかしたらこの三人の中に読心術を使える超能力者とかいるのかな…？ いたら嫌だな…。この前トイレで煙草吸ってた事とかバレちゃう…。ってイカンイカン。だったらそういう事は考えないようにしないと…。よし、煙草の事なんか考えないぞ。絶対に煙草の事なんか…】

「どうだ？」

里菜が生徒に聞こえないよう凌に言う

「たぶん白だ…」

「そうか…」

そう呟いてから里菜が生徒に言う

「わかった。これでおしまいだ。ご苦労だったな」

それを聞くと生徒は

【ふう、助かった。煙草とかエロ本とか色んなやましい事がバレなくて良かったあ。どうやら読心術がいるってのは考えすぎだったみたいだな。読心術使う奴らって本当に性格悪い奴ばかりだから困るんだよなあー】

と心の声を発しながら部屋を出ていった

「どうだ？ これで全員終わった訳だが…」

里菜が凌に問いかける。

凌は能力の使用で消耗しているだ。若干苦しそうな表情で答える
「質問に引っかかった人間はいなかったね…」

「じゃあ、一回、状況を整理してみようか…」

純はそう言って話だす

「私達が調査対象全員に聞いたのは『パイロキネシスを使えるか』という事と『一週間以内に宝来製菓の倉庫に近づいたか』という事。で、この二つ共に当てはまった人が重要参考人って事だったよね？」

凌が頷く

「ああ。でも一つだけなら何人かいたけど二つ共に当てはまる人物はいなかった…。やはり読心術が破られているのかもしれない」「でもどうやって？」

純が首を傾げる

「断定はできないけど…。例えば、記憶の破壊者メモリーブレイカーを使って犯行時の記憶を消すとか…」

凌の言葉に里菜が口を挟む

「お前は三門志織が犯人に協力していると言いたいのか？」

「それはないと信じたいね…。でも利用される事はあり得るよね？」

あの人の頭だと」

「まあ、そうか…」

考え込む里菜と凌に純が言う

「でも、能力破りの事まで考えてたら何でもアリになっちゃうよ。まずは他の可能性から当たった方がいいんじゃない？」

里菜が頷く

「むん。そうだな…。凌、質問には当てはまらなくても何か隠してる感じのある奴はいなかったか？」

「それ、みんなだよ」

「はっ」

凌の言葉に思わず声を漏らす二人

「やっぱりこういう風にかにも取り調べて感じてにしたのが悪かったのかもなあ…。相手は超能力の事知ってる訳だし、警戒されて当然だよ」

それを聞いた里菜はゆっくりと言った

「それでは仕方がない。使いたくなかったが最後の手段だ。凌、二つの質問の内一つでも当てはまった人間にもう一問づつ質問したいの

だが、いけるか？」

「いけると思うけど、何を聞くの？」

「何を隠してるかだ」

菊池貴康の焼死体が一時的に安置される宝来邸敷地内の冷凍室。

遺体を前にたたずむ龍我と雄真

「よし、いくぜ…」

腕をまくった雄真が遺体の上に手をかぎす。

すると雄真の脳裏に流れ込む遺体の記憶イメージ――

【ガバツ、ガバツ！ ベリベリ！】

何者かの手が袋を開けている。幾つも、幾つも、幾つも連続で開けていき、口の開いた袋がどんどん床に溜まっていく。

その溜まった袋のパッケージ。

そこには『宝来製菓の手焼き煎餅』と書かれている…。

「ハッ!!」

サイコメトリーが解けると同時に雄真が大きな声をあげる

「だ、大丈夫？」

龍我が心配そうな顔で覗き込む

「ああ。今回は思ったより平気だったな」

「あ、そう。ならよかった…。で、何が見えたの？」

雄真は真剣な表情で答える

「煎餅だ！」

「はい？」

「だから煎餅だって！」

「だったら何なんですか？ 私やましい事なんて何も…」

「ここまでよくボロを出さずに頑張ったけどさ、もう逃げられないよ。君はもう自分の心に嘘をつける状態じゃない…！」

女子生徒はそれを聞くと諦めたように俯きポツリポツリと話し出した

「皆さんが調べている件というのは倉庫に隠した超力獣の事ですよね？」

「その通りだ」

頷いたのは里菜だった。ここから女子生徒に対して里菜による激しい尋問が始まった。

「そうです。あの超力獣を生み出したのは私です…。で、でも！ ワザとじゃないんです！ 初めは犬を隠して飼っていただけなんです。でも、ある日、あの子達に餌をあげている時、勝手に能力が発動してしまっ…。あの子達を超力獣にしてしまっ…なんです！」

「お前はあくまで事故だと言う気か？」

「本当なんです！」

「なら何故今まで隠していた？」

「私どうしたらいいか解らなくて…。それは謝ります！ でも、あの子達に人を襲われたりは誓ってしてませんから！」

里菜は机を叩き『ドン！』と大きな音をさせてから怒鳴った

「白々しいな！ 現にあの倉庫で人が死んでいるんだ！」

すると、女子生徒は目を丸くした

「まさかあの子達、人を襲ったんですか？ そんなッ！ そんな子に育てた覚えは…」

「お前が襲わせたんだろうがッ！ 被害者は死んだ後、何の前触れもなく勝手に燃え上がった！ 超力獣を使って捕らえた後にお前がパイロキネシスで燃やしたんだろう！」

「えっ？ 私の能力はサイコキネシスです！ パイロキネシスなんて使えませんよ…！」

「貴様ア！」

思わず掴みかかりそうになる里菜を凌が制した

「里菜、ちょっと待ってよ！ 彼女の言ってる事は全部本当だよ」
「何!?!」

純も続いて言う

「そういえばこの子…伊藤さんは一回目の取り調べの時も引つかかったのは倉庫に近づいたかかっていう質問だけでパイロキネシスの方には引つかからなかったんだよね?」

凌が頷く

「ああ。それにあの超力獣も僕らが騒いだからコツチを襲ってきたけど、その前は怯えて隠れてる感じだった…。この子が命令した訳じゃないってのは本当だと思うよ」

それを聞いて里菜が呟く

「では何故遺体は燃えたんだ？ 他の超能力者がいたという事か?」

一方、倉庫搜索組の龍我と雄真。

先程、遺体のサイコメトリーで大した成果を得られなかった二人は、再び現場の倉庫に戻って来た。

手掛かりになるモノを探す為、床に這いつくばるようにして遺留物を探す。

そんな最中に龍我が言った

「あのさあ、これいつまで続けるの?」

「あ? 手がかりが見つかるまでだよッ!」

「ええ!」

「当たり前だッ!」

遠くから叫ぶ雄真に対して龍我が愚痴を漏らす

「てかさあ。捜査の方法これで合ってるのかなあ…」

雄真は更に激しく怒鳴る

「ウダウダ言ってるんなよお！ 鑑識も解剖も使えないんだから仕方ないだろ!」

「いやあ、そうじゃなくてさあ」

「じゃあなんだよ？」

「さっきのサイコメトリー聞いて思ったんだけど犯人は本当に超能力者なのかなあ？」

「じゃなかったら何なんだよ、死体が勝手に燃えてたんだぜ」

龍我は『何言ってるの？』とばかりにあっけらかんと言った

「あるよ、その場にいないでも死体を燃やす方法」

それを聞いた雄真は龍我の近くまで猛スピードで走ってきて、その胸ぐらを激しく掴んで叫んだ

「何イイー！ なら何で早く言わねえんだよッ！」

「いや、みんな犯人はパイロキネシスを使う超能力者だって前提で動いてるみたいだったから…じゃあ違うのかなって…」

雄真は龍我の頭を叩く

「お前は頭いいのか悪いのかハッキリしろッ！」

現場倉庫前に揃ったサイコレンジャーの五人。

龍我の推理を聞き頷く里菜と凌

「なるほど、そう考えれば全て合点がいくな…」

「超能力者の盲点をうまく突かれたね」

全員が納得した所で雄真が叫ぶ

「よし、じゃあ犯人を捕まえに行こうぜ！」

しかし、純がその雄真を制止した

「ちよつと待って！ コツチも大変な事がわかったの…」

「大変なこと…？」

思わず龍我が聞き返す

「うん、超力獣の親の伊藤さんによるとどうやら超力獣は一体じゃないらしくて…」

「ええー！」

「超力獣はおそらく逃走中…。だから犯人を捕まえる人と超力獣を探す人を分けた方がいいと思ってる…」

里菜はそうした状況をふまえて指示を出した

「そうしよう。犯人の所へは龍我と凌に行ってもらおう」

「うん、それが適任だろうね」

凌が頷いた。推理で犯人を追いつめるなら、サイコレンジャーの中で最も感性の鋭い二人がいくのがいいだろう。そういう意味だ。

そのまま里菜は続ける。

「雄真と純は私と一緒に超力獣探した。まずは明日香の所へ行つて千里眼で超力獣を追跡しよう」

そうして一同が里菜の指示に従って、動き出そうとした時だった。

龍我が里菜を呼び止める

「ちよつと待つて。俺達もいくよ！」

「何故だ？ 犯人の居場所ならわかっているはずだが…」

「ちよつと探したい証拠品があるんだ」

真相

宝来邸敷地内の一室で書類を書いている宝来製菓の村田社長。

トントンー

そこにドアをノックする音が響いた

「どうぞ」

村田が言うのとドアが開いて少し大きめの鞆を持った龍我が入ってくる

「どうも…」

龍我がそう挨拶すると村田は彼を立ち上がって歓迎した

「ああ、君は確かさつき倉庫にいた…」

「はい、そうです」

「君もサイコロレンジャーの一員なんだよね？」

「はい」

「なるほど、座って座って」

村田は自身が座っていた席の向かい側の席の椅子を引く

「あ、すいません」

勧めに従って龍我が席に座ると村田は話し出した

「いやあ、びっくりしましたよ。あれが超力獣なんですね。話には聞いてたんですがね、私初めて見たんですよ」

「あ、そうなんですか？」

「ええ、宝来会長から超能力だとかそういう話をして頂いたのも結構最近ですし、それ以降もそっち方面の仕事をすることはありませんでしたしねえ」

村田が言うのと次の瞬間、再びドアが開いて凌が遅れて入って来た

「なるほど、それで超能力を舐めてかかってしまったんですね」

村田は目を丸くして言う

「はい？ 貴方を言ってるんですか？」

「貴方は一番やっちゃいけない場所で事を起こした…。こんな超能力者だらけの場所で隠し通せる訳がないんですよ」

「『事を起こした』だなんて…まさかあれを私がやったと言っても言うんで

すか?」

凌は頷く

「そうです」

村田はそれを一笑に付した

「ハハハ…、バカな。どう考えたってあの超力獣がやったに決まっていますよ」

「超力獣はああいうモノを燃やす類いの技は使いません」

村田は一瞬驚いたような表情を見せるもすぐに真顔になって言う

「じゃあ超能力者がやったんですよ。それしかない! 遺体に触れもしないで火をつけるなんて私には不可能だ」

ヒートアップする村田の口調とは裏腹に龍我は冷静に言った

「それが出来るんです。倉庫の中の物だけで、簡単に」

「何ですって?」

龍我は持ってきた鞆から『宝来製菓の手焼き煎餅』を取り出した

「村田さん、貴方が使ったのはコレですね?」

村田は手を叩き笑う

「煎餅!? そんな物でどうやって!」

龍我は挑発には応じない。黙って煎餅の袋を開いて中から乾燥剤を取り出す

「煎餅じゃなくてコッチです」

「…」

ここまで来てようやく村田が静かになった。

無言の村田に向かって龍我が説明する

「これ見てください成分に灰石灰って書いてあるでしょ?」

龍我は成分表の小さな文字を村田に見せて続ける

「灰石灰には水に反応して熱を発する作用があります。だから水をかけてその周りに可燃物を置いておけば暫く時間を置いた後、発火します。そのタイムラグを利用すればその場にいらなくても遺体に火をつける事は可能ですよね?」

更に凌が続いた

「貴方は予め被害者を殺害して倉庫に隠して置き、目撃者が現れる夕

イミングを見計らって発火するようにセッティングしておいたんだ。」

しかし、ここで村田が反論に打って出た

「なるほど、確かにそうすれば犯行は可能ですね。でもそれで私が犯人だと言うのはあんまりだ。何故、私が犯人なんです？　倉庫の鍵を持っていたから？　でも、あれはたまたま明日香さんが私を呼んだだけですよ。本当は合鍵が幾つかあって、それをこの屋敷に出入りしている財閥や製菓の幹部数人が保管しているんだ。菊池さんを殺害した方法が貴方達の言った通りなら鍵を持つ全員に犯人の可能性があるはずですよ」

そして一呼吸置いた後、思いついたように言う

「そうだ！　被害者の菊池さんも鍵を持っていたはずですよ。もし彼が殺害されてから倉庫に連れて来られたなら、犯人が彼が持っていたモノを奪って使ったのかもしれない…。ならばこの屋敷にいる全員が容疑者になるはずですよ。違いますか？」

一通り喋らせた後に龍我は言った

「凌達があの現場を目撃したのは偶然じゃない…違いますか？」

「は？」

「貴方は初めから誰かに現場を目撃させるつもりだった…。犯行を超能力者の仕業にみせる為に」

凌が付け加える

「もっとも、僕達はどうでも本当のターゲットは志織さんだったはずですよ」

凌は志織が車を運転する際に使っていた地図をポケットから取り出す

「この地図を志織さんに渡したのは貴方ですよ？」

「ああ、確かにそれを渡したのは私ですよ。でもそれが何か？」

「志織さんは貴方に宿舍までの地図を書いて貰ったと言っていました。でも、これは明らかに倉庫までの地図だ。貴方は目撃者をつくる為にわざと間違った地図を渡して志織さんを現場まで誘導したんですよ」

「あれ？ 彼女忘れっぽいからなあ。私は彼女に倉庫までの地図が欲しいって言われたから書いてあげたんです。わざと間違えたなんてそんな」

「志織さんが何の為にそんな事頼むんですか？ あの倉庫に用なんてないでしょ」

「さあ？ 彼女は時々訳のわからない事しますからねえ」

惚ける村田に凌は言い放った

「貴方は卑劣だ！」

「なんですって？」

「志織さんは能力の反動で記憶力が極度に悪い。貴方はそれを知っているから志織さんを目撃者に選んだんだ。そして都合の悪い事は全部志織さんの記憶違いのせいにすれば済むと思ってる……！」

そして更に龍我が続いた。彼の口調は先程の凌の責めるような言い方とは違い、何かを諭すような言い方だった

「今の推理を志織さんに話したらね、志織さん必死に貴方を庇うんですよ。『この地図は確かに村田社長から貰ったモノだったと思う。でも村田社長はいい人だから人殺しなんかするはずない。だからやっぱり自分の記憶が間違っているんだ』って。貴方、志織さんと随分親しくしてたそうじゃないですか。貴方を信じている人を裏切らないで下さい！」

村田は動揺したようだった。しかし、またすぐに平静を装い、ため息をつく

「私は本当の事しか言っていないですよ。どうしたらわかってもらえるのかなあ」

凌が言う

「貴方、まだしらばっくれるつもりですね。心がそう言ってますよ」「は？」

「だから貴方は超能力をナメすぎなんです。僕の場合は読心術。今、僕には貴方の心が筒抜けだ。貴方がさつきから自分の犯行を隠そうと必死なのも僕には解る！」

村田はそれを聞いて動揺したようだったが負けじと言い返す

「だったらなんだ!? 超能力が何の証拠になる!？」

そこから先の龍我の行動は『待ってました』と言わんばかりだった。再び持ってきた鞆に手を突っ込み、そこから口の開いた煎餅の袋を数袋取り出す

「それは…」

やや誇らしげに胸を張って頷く龍我。

「そう。貴方が犯行に使ったものです」

「まさか、そんな…」

「屋敷から離れた場所に捨てたはずだからこんな所にあるはずがない…ですか? アスぴよんの千里眼で探したんです。今はこれだけじゃ証拠にはならないけど、手袋なんてしてたらこの袋は開けられないですからね。貴方はこれを素手で開けたはず…。だから後できちり調べたら必ず貴方の指紋が検出されますよ」

凌が続く

「もう隠しても時間の無駄です。認めてくれますよね」

そこまで聞くと観念したようだ。村田は悲しそうに頷く。

「私が全てやったんだ…」

ガツクリと肩を落とす村田に対して静かに問いかける龍我

「一体、何でこんな事を…」

村田は声を搾り出すように言う

「菊池は赤字の宝来製菓を潰そうとしていたんだ…」

「それが理由ですか? そんな…それだけの理由で…」

「そう思われるでしょう。でもね、社長というのはあなた方が思っているよりずっと責任の重い立場なんですよ。私の下で働く何百人という社員の生活の為に会社を潰される訳にはいかなかった…」

「でも、それは貴方や社員の努力で解決すべき問題ですよ…」

「判つてます、判つてますとも…。でももう時間がなかった。菊池は出来るなら今すぐにでも会社を潰そうとしていた…それに…」

村田は心に留めていた言葉を一気に吐き出した

「宝来製菓は前会長が一番大切にしていた会社なんです。前会長は『利益なんかどうだっていい、とにかくお年寄りから子どもまでみんな』

なが一緒に食べられるお菓子を作りたい』といつも言ってるらしいやい
ました。治五郎会長に取り立てていただいた自分が潰す訳にはいかな
かったんです…!」

「でもだからって…!」

そこで龍我が何かを言おうとするのを凌が止めた

「龍我、もういい」

「え?」

そして凌は静かに、呟くように言った

「この人はもう自分のした事が間違いだっただって判ってるから
…。いや、本当は初めから判ってたんだ…」

山道

一方、超力獣の搜索にあたる里菜、雄真、純の三人は、”こと宝来明日香に協力を仰ぐ為、会長の部屋に戻ってきていた。”

部屋の中央付近で、目を瞑りながら椅子にじっと座る明日香。

ただ眠っているだけにも見えるような状態だが、これが彼女が千里眼を発動する時の基本姿勢なのである。

それを取り囲むのは里菜、雄真、純、そして警察官僚にして源三会長の甥にあたる宝来勝広。

サイコロンジャー三人の依頼によって明日香が超力獣の搜索を始めてから既に30分が経過している。しかし、未だ明日香から『超力獣が見つかった』という声は聞こえてこない。さすがに一同は焦りの色を隠せなくなっていた。

そして、雄真が遂にしびれを切らす

「えーい、まだ見つかんねえのかよ!! テメーはホントに寝てんじやねーのか!」

明日香は目を開けて、叫ぶ雄真に対して迷惑そうに言った

「今、集中してるんだからちよつと黙っててよ!」

集中を乱されて怒る明日香の気持ちも尤もだが、確かに現実的に考えると遅すぎであった。

そんな状況を鑑みて里菜は切りだした。

「しかし、屋敷の敷地内にいるはずなのに千里眼でこれだけ探して見つからないというのは少し妙だな…」

勝広が頷き、同意した

「うん、もしかしたら一匹目の超力獣を倒した事で屋敷の外に逃げてしまったのかもしれないね。明日香、搜索範囲を広くできるかい?」
「わかったわ」

そう言い、再び瞑想に入る明日香。

その横で純が唐突に言った

「そういえば、源三会長と護衛の三人はどこへ行ったんですか？ さつきから姿が見えないですけど…」

勝広が答える

「ああ、夕方から会合が入っていてね。車に乗って出かけたよ」

「超力獣がうろついているのに俺達から離れて大丈夫かなあ…」

呟く雄真に勝広が言う

「ま、平気だろう。その為に護衛をつけてるんだから。いざとなったらあの三人もサイコチェンジャーを使って…」

「アッー!!」

勝広の言葉を遮り明日香が叫ぶ

「どうした？ 見つかったか？ 超力獣はどこだ？」

肩を揺さぶりながら言う里菜に答える明日香

「それが…パパの車のトランクの中なの…」

黒塗りの高級車が山道を走る。

源三と護衛の三人が市内で行われる会合に参加する為、移動中の車だ。

その車内では護衛団のほっそりとした青年、太一がハンドルを握り、後部座席の真ん中にいる源三を透と樹理が挟むようなカタチで座っている。

山道特有の急カーブに揺られながら透が不機嫌そうに呟く。

「いやあ、屋敷に超力獣が入り込んでいるというのに僕達、こんな所にいていいんですかねえ…」

「透。源三様を会合の場所まで無事にお届けするのが、私達に与えられた任務なので。今はこの任務に集中するべきですよ」

優しく、諭すつもりで樹理は言ったのだろうが、彼女のピクリともしない表情をみていると、透はちつとも反省しようという気にはなれ

なかった。

「だってそうでしょう？ 入り込んだのは空き巣や強盗じゃない。超力獣なんだから。いつ誰がどんな手で襲われるかわからない。いざという時、サイコエンジャーを使える人間は屋敷の中にいないと…。ね？ 源三様？」

透が左隣に座る源三の顔を覗きこむと、彼は深く溜息をついた
「そうだね、透。今日、たまたま里菜達が帰ってきていなかったら会合に欠席しなくてはいけない所だった」

遠まわしな言い方ではあるが、つまる所、超力獣の事はサイコレンジャーの五人に任せておけという事だ。透の思惑とはだいぶ違う

「そんなッ…。源三様！ お言葉ですが、源三様は僕的能力を過小評価しています！」

源三は『またその話か』とでも言いたげに微笑む

「そんな事はないさ。だったら自分の護衛を任せたりはしないだろう？」

「じゃあ、何故、今回の補充では僕をサイコレンジャーに入れてくれなかったのですか？」

「それは能力や体力、経験などを総合的に判断して、龍我君の方が適任だと判断したからだよ。私だけではなく、勝広や祐二兄さんも含めてみんなで出した結論なんだ」

それを聞くと、透はもう自分の感情を抑えられなかった

「なら余計に僕の方が相応しい！ あの人は超能力者でありながら超能力に関して全くの素人じゃないですか！ その点、僕は養成学校でキチンと能力の使い方を学んで、今までずっと源三様の護衛も務めてきた。どこをどうとったら僕が龍我さんより劣っているというんです？」

「ねえ、透、もうやめようよ…」

見かねた太一が運転席からそう話しかけた瞬間だった

ガタツ！——

大きな音がして車内が大きく揺れた

「おい、太一！ お前はしっかり前見て運転してろ！」

透は原因を作ったのは自分なのに偉そうだ

「ああ…。っ、ごめん…」

太一はそう言い、再び姿勢を正して運転するがそれでも音は鳴りやまなかった

ガタガタ、ガタガタ―

「どういう事だ…？」

呟く透を筆頭に一同は耳を澄まして音の鳴る方向を探す

すると、音がするのは車の後方からであることに皆、一様に気付いた

ガタガタ、ガタガタ―

やはり、何かがおかしい…。

運転席の太一が先程から見せていた頼りない表情を一変させて言った

「少し変ですね…。一度車を降りましょう」

車から降りた四人。

太一がトランクの前に立ち、少し距離をとった所に他三人がいる。

ガタガタ―

トランクの中からは相変わらず妙な音がする

「よし、開けるよ。みんな気をつけて！」

トランクを開ける役目を負った太一は後ろを向いて三人に注意を促す。

だが、本当に注意をしなければならぬのは彼の方であった

太一がそう言った瞬間、彼の後方からこれまでとは違う凄まじい音がした。

バツコーンッ！――

車のトランクをブチ破って現れたのはやはり、犬型の超力獣であった。

「何イ！」

不意を突かれたカタチの太一は思わずたじろいでした。

トランクの中にいるのが、超力獣かもしれないという所までは覚悟していた。だが、ここまで大人しくしていた超力獣が自分から出てくるとは予想できていなかったのだ。

超力獣はそんな太一を右手で軽く吹っ飛ばす。

「うわあー！」

太一の身体が道の端のガードレールに叩きつけられた。

そして超力獣は一目散に他三人の方へ向かっていく。

「でたな超力獣ー！」

透はそう叫び、向かってくる超力獣に対して、そのまま激突しそうなまでの勢いで走り出す。

超力獣は迎え撃ってパンチを繰り出す。その時、透の姿が突如消えた。

予想外の事態に動きを止める超力獣。周りをキョロキョロと見渡し、透の姿を探す。だが、どうやら何も見つからなかったらしい。

超力獣が透の事を潔く諦めて、残りの源三と樹理が待つ方向へ走り出そうとした、

次の瞬間。超力獣のやや後方の何もない空間からいきなり透が現れて、超力獣の後頭部に蹴りを喰らわせた。

「隙ありー！」

攻撃を完全にジャストミートさせた透はガッツポーズまで見せたのだが、超力獣はビクともしていなかった

「バカな…！」

唾然とする透を超力獣は殴り飛ばす

「うわあー！」

透の体が宙を舞って地面に叩きつけられる

それを確認すると、超力獣はまたゆっくり源三と樹理の下へ歩いていく。

倒れたままの太一が眩く

「なんて力……これが超力獣なのか……」

初めて体験する超力獣の力にどうする事もできない護衛団の面々。残された手段はあと一つだけだった。

「源三様！ サイコチェンジャーを使う許可を下さい！ このままでは全員やられてしまいます」

そんな透の言葉に『自分の力を示したい』というエゴが混じっていなかったかと問われれば、言った本人も聞いた源三も否定できなかっただろう。しかし、それしか手が無いのは一目瞭然であった。

源三は一瞬躊躇ってから言う

「仕方がない！ 今から君達に変身を許可……」

やった！ これで遂に……！

透はそんな風に不敵な笑みを浮かべながら、源三が全てを言い終える前からサイコチェンジャーに手をかける。

しかし、一つの声がそれを遮った

「源三様！ その必要はありません！」

「何?！」

周囲を見渡す源三に樹理が言う

「上です」

源三が上を見ると上空にホバリングするサイコバスターから五人のサイコレンジャーが降りてきた

「サイコレッド 北神龍我！」

「サイコブルー 風祭凌！」

「サイコイエロー 一色里菜！」

「サイコグリーン 桧垣雄真！」

「サイコピンク 百瀬純！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

「お前達は源三様を早く安全な所へ！」

里菜は護衛三人にそう指示を飛ばした後、超力獣に向かっていく。他のサイコレンジャー四人もそれに続く

「源三様、さあこちらへ」

「源三を誘導して避難する太一と樹理。

それに少し遅れて続く透はサイコレンジャーと超力獣の戦闘を見ながら軽く舌打ちをして去っていく。

サイコレンジャー達は超力獣に対して次々打撃を加える。

そして雄真と純が超力獣の腕を取り押さえる。

「今だ、やれ！」

「デルタストライカー！」

叫ぶ雄真に呼応した龍我がデルタストライカーを出す。

超力獣に対してデルタストライカーを構える龍我、凌、里菜

「デルタストライカー フォーメーションC ゲッドプラズマ!!」

超力獣に向かっていくプラズマ弾。

着弾の寸前、超力獣から手を離して逃げる雄真と純。

プラズマ弾は超力獣のみに命中。

超力獣は大爆発した

エピローグ

「さあ、行きましようか」

サイコレンジャーの五人が見守る中、勝広に誘導され車に乗り込む村田。

そんな様子を見て龍我が一同に尋ねる

「これから、村田社長はどうなるの？」

普通、超能力がらみの事件が起きた場合、サイコレンジャーが取り調べを担当して、犯人はそれから養成学校に送られる。

だが、今回の事件の場合は少し事情が違う。

たまたま倉庫に超力獣を隠していた学生がいた為に事が大きくなったが、村田自身が起こしたのは『超能力者の仕業に見せかけた殺人』だけだ。

龍我はこの後の処置がどうなるかを気にしていた。

その疑問に答えたのは凌だ

「普通に、警察に引き渡されるよ」

「え？」

龍我は首を傾げた。

確かに村田がやった事自体は普通の犯罪だが、今回は複雑な事情からみすぎている。このまま引き渡すだけでは色々と不都合も起ころはずだ。

「それで、いいの？」

不思議そうな龍我の様子を察して里菜が補足した。

「勿論、引き渡すまでにある程度の情報操作は済ませておくがな。村田は超能力者でもなんでもない。今回はそれで十分だ」

里菜は淡々とした口調だった。そこには悪意のカケラも感じはしない。

しかし、『情報操作』という言葉に龍我は不吉な予感を覚えずにはいられなかった。

「情報操作って事は、それってつまり…」

龍我が懸念したのは、その『情報操作』というのが メモリープレイヤー 記憶の破壊者

“こと、三門志織による記憶消去なのではないかという事であった。龍我は以前からこうしたやり方には共感していなかった。

そしてなにより、村田は三門志織の恩人であるという。

その彼女に村田の記憶を弄らせるような事をしないといけなにか。

「いや、大丈夫だ」

里菜は龍我が全て言い終わる前に話し出した

「記憶の破壊者は使わない。村田自身、かなり反省しているようだからな。そこまでしなくても、こちらの言う通り、超能力の情報を漏らさず、かつ、犯した罪のことは素直に自供してくれるだろう」

そこまで聞いて、龍我はやっと胸をなでおろした

「そう、それはよかった！」

その間、村田は勝広の用意した車の後部座席中央に乗り込んでドアを閉めていた。

運転席には、源三の護衛の一人、透。そして助手席に勝広が乗り込み、村田を挟むようにして樹理と太一が座る。

「さて、透。出発しようか」

勝広が運転席の透に語りかける。

「はーよ」

そう言つて、透がアクセルに足を掛けた時、前方から人影が近づいてきた。

「村田社長お〜」

なんだか間の抜けた声。それを聞いて、誰もが気付いた。

近づいてくるのは「記憶の破壊者」メモリーブレイカー三門志織である。

村田は勝広に言う

「早く車を出して下さい。私は彼女を利用した。あわせる顔がありません」

俯く村田に対して勝広は首を横に振る

「ダメです。話して下さい。貴方には義務がある」

志織が車の横までやってくると後部座席のパワーウィンドウが開いた。

勝広の指示で透がやったようだ。

志織はその開いた窓から車内を覗き込み叫ぶ

「社長おー！」

しかし、村田は俯いたまま、志織の声に応じない。

しばしの間、沈黙が続く

「村田社長、どうぞ」

静寂を破ったのは村田の横、窓際の席に座る太一だった。

太一は軽く腰を上げて、自分と位置を入れ替わるように促している

村田はそれでもまだジツとしたままだったが太一が今一度「どう

ぞ」と言うと、観念したのか、渋々、窓際に寄ってきて顔を覗かせた。

すると志織は突如、村田の顔を両手の手のひらで挟んで固定した

「あの、志織さん？」

戸惑う村田に志織は言う

「社長お、なるべく早く早く帰って来て下さいね」

「え？」

「そうじゃないと、私きつと社長の事忘れてしまいます…。だけど、

帰ってくるまでしつかり覚えていたいから、社長の顔、しつかり見せ

て下さい」

そこで村田はやつと笑顔を取り戻した

「ありがとう」

村田は静かに言うつと優しく志織の手を離して窓を閉める。

そして、走り去る車。

それを見送る志織の目から涙がこぼれる。

志織はそれを拭って不思議そうな顔をした

「あれ？ えっと、えっと…これ…なんて言うんですたっけ？」

「ん？ 涙の事？」

龍我の言葉を聞いてしんみりと言う志織

「そっかあ…。私、忘れてました…。ここにきて、源三様や村田社長にお世話になるようになってから全然流してなかったから…前はあんなによく流してたのに…」

第十話 夢は氷のように (前編) プロローグ

「だから、国生さんは甘過ぎるんだってば！ 邪魔者はやつつけなきやー！」

国生一派がアジトとしている高級マンションの一室に翔太の叫び声が響く。

「もう！ ムキなんないでえ！ うっさいんですけど！」

砂川響子がうるさそうに耳を塞ぎながら、翔太に負けない程大きな怒鳴り声をあげると二人による言葉の応酬が始まった

「響子だつて大きな声出したじゃないか、うるさいのはどっちだ！」

「あんたが出させるからでしょー！」

「それなら僕だつて同じだ！ みんながサイコレンジャーに甘いからだー！」

「それはあんたの我儘でしょうがあー！」

段々とヒートアップしていく二人に対して五条亘はあきれ顔だ

「おいおい、それぐらいにしておけつての！」

彼がそう苦言を呈した瞬間、

「あんたは関係ないだろ！」

響子と翔太、二人は揃つて今日、最も大きな叫び声をあげたのだつた

ハアハア…

ハアハア…

そう音を漏らしながら息を切らす翔太と響子

先程から息もつかせぬ舌戦を繰り広げていた二人は、五条に対する叫びでついに力をつかい果たした。揃つて床に膝をつくようにして肩を上下させている。

その様子を見て、沈黙を保っていた国生は落ち着いた口調で語り始めた

「サイコロレンジャーの事についてはこの前も説明しただろう？ 今は戦う時じゃない。翔太ならわかってくれると思っただけだな」

「でもッ……」

いじけた幼稚園児のように身体をくねらせる翔太。しかし、
「でも何だい？」

と国生に改めて問われるとその続きが出てこなかった。

今、思いついたかのように慌てて五条に責任を転嫁する

「あ、そうだ。五条さんもサイコロレンジャーと戦う事には賛成だろ？」

五条さんからもなんとか言つてよ」

翔太にそう言われた五条は驚いたような表情を浮かべる

「いいや、賛成じゃねえけど……。っーか俺がいつそんなこと言っただよ？」

翔太は五条に対して指をさして非難する

「あ、裏切ったな！ 五条さん、この前、築地に行った時に、サイコグリンと戦ってみたいって言ってたじゃないか！」

五条は首を横に振る

「別に殺し合いがしたいって意味で言っただんじゃねえ。試合がしてみたいって事だよ。一人のボクサーとしてな」

そこまで聞くと翔太は急にキョトンとした表情を浮かべた

「は？ ボクサー？」

「あ？ そーだよ。俺は元ボクサーだからな。あれ、言っただけか？」

当然だといわんばかりに胸を張る五条に対して、響子は言った

「てかさー。五条さんってえ、ヤーさんじゃなかったけえ？」

「は？ そんなこと言った覚えねえぞ」

「でもおー、この前もなんかあ、『俺達の世界では一発撃たれたら二発

「撃ち返すんだ」とか物騒なこと言ってたしー」

「それ、どう考えてもボクシングの話じゃねえか！」

五条の声部屋中に響いた後、部屋の奥から女の声が聞こえた。

「フフフ…。面白そうな話をしてますわね」

一同がその声がした方向を見るとそこには巫女姿の若い女がいる

「何も面白くなんかねえ！ 俺、ヤクザだと思われてるんだぞ！」

女に向かって五条が叫ぶ

「それは五条さんの悪人面のせいですわ。私に当たらないで下さい」

巫女姿の女は五条による必死の訴えを歯牙にもかけず、そう即答から続ける

「それに私が面白いと言ってるのは五条さんの顔の話ではありません…」

「顔って…オイ…！」

「サイコレンジャーの話ですわ」

「神楽あ…アンタ…」

神楽と呼ばれた巫女姿の女は響子に頷いて更に続ける

「私、毎日部屋の中において退屈してましたの。サイコレンジャー…。是非戦ってみたいものですわ！」

「そうだよね、そうだよね！」

加勢を得た翔太が調子に乗るが響子がそれを鼻で笑う

「でもお、神楽さあ。アンタの能力でサイコレンジャーに太刀打ちでききるワケ？」

「あら、心外ですわ。能力が戦闘向きじゃなくても超力獣を作ること位はできてよ。それにチャンスじゃないですか…」

「なんのお？」

「それは決まっていますわ。この前入った新入りさん達の覚悟を試すんです…。彼らが本当に迷える人類を導く神となる気があるのかどうか。その覚悟があるなら一度位は命を懸けてもらわないと…」

どうやら、反対派の響子や五条に神楽を言い負かすだけの理屈はな

さそうだ

そんな空気を察して、国生はため息をつく

「わかった。サイコロレンジャーと戦いたい者は戦えばいい。私はまとめ役を担ってはいるが、別にみんなを従えているワケじゃない。他の者に危険が及ばない範囲でやるなら私に翔太や神楽を止める権利はないよ……。新人も何人か君達に預けよう」

「やったあー！」

翔太と神楽は国生の言葉に手を叩いて喜んだ

雄真の回想

今からさかのぼる事、9年前。ある寒い冬の日の事だった。

学生服に身を包んだ雄真が気だるそうに肩を揺らしながら学校へ向かう。

雄真の自宅から彼の通う市立法典第二中学校までの距離はそう遠くない。家からまっすぐ伸びる路地を2、3分程歩くと、大通りに出る。そこからまた数分歩いた後、交番がある角を曲がって、更に路地に入ると、そこに学校がある。

ここまでどんなに遅く歩いても約10分くらいだ。

しかし、雄真は家から出て20分程がたった現在もまだ道のりを半分程しか進んでいなかった。

今日もまた、あの騒々しいクラスメイト達に囲まれながら、かったるい授業を受けなくてはならない。

そう思うだけで段々と足が重たくなってくるのを感じる。それが雄真の歩く速度を大幅に遅らせていた。

毎日、毎日、クソみたいだ。

日々そんな風に思いつつも雄真が学校を休むことは滅多になかった。

学校にさえ行っておけば家族に文句を言われることはない。

それが雄真にとって学校に通う唯一の理由だった。

教室でギャンギャンと騒いでいるクラスメイトも大嫌いだったが、両親や二人いる兄の事はもつと嫌いだった。

自分のことを考えてくれているフリをしながら、自分勝手な要求を突き付けてくる家族なんて信用できない。もう話もしたくない。

思春期の少年にはよくある衝動だが、サイコメトリーを持つ雄真のそれは人一倍強いものだった。

力を制御できなかった当時の雄真には、家の中にあるものに触れれば嫌でも家族の秘密がわかってしまっていた。

「勉強しろ、勉強しろ」とうるさいクセに若い女のいる店に入り浸る父

親。「自分は誰よりも子供たちの事を考えている」と日々主張しながら、生活費をちよろまかして貯めたヘソクリでブランド物のバッグをいくつも買っている母親。そんな両親の言う事を聞くフリをしながら裏では酒やタバコや万引きに手を出している兄達。

実の家族ですら信用できないのだから、他人なんて言わずもがなだった。

誰も、信用できない。

中学を卒業したら、学校にもいかず、家族にも頼らないでいい、そんな生活がしたい。それが、この時期の雄真がただ一つ持っていた夢だった。

でも、どうしたらいいかわからない。

勉強もできないし、スポーツも続かない。強いて得意なことを言うなら喧嘩くらいだが、そんなもの生活する上で何の役にも立たないヤクザの用心棒にでもなるしかないのかな…。

雄真はそんなことを考えながら白い溜息をついた。

市立法典第二中学校の校門を遅刻ギリギリでくぐる雄真。

「オイ、早く着席しないと遅刻だぞ！ 走れー！」

校門の脇に立つ生活指導教員が大声をあげるが、雄真は気にしない。

どうせ、チャイムが鳴って数分してからでないと、出席はとられない。

それに推薦入試を受ける訳でもないから、遅刻して成績が落ちたつてかまわない。

そんな考えからゆっくりとした歩みで教室に向かう雄真。

頭の中はボーっとしていて誰の言う事も気にならない。

しかし、しばらく歩いて校舎の前にさしかかった時。そんな雄真にすら聞こえる、けたたましい音が鳴った。

——ガツシヤーン!

音のした目の前を見てみると、そこには教室でつかっている学習机が無造作に横たわっていた。どうやら、誰かが教室の窓から落としたモノのようだ。

「チツ、危ねえーな…」

雄真がそう呟きながら校舎を見上げると二階の教室の窓から何人かの生徒が顔を覗かせている。そこへ向かって叫ぶ雄真

「テメーら、何すんだ!」

すると、その中から茶髪の男子生徒が答える

「ごめん松垣! お前に落としたんじゃないんだって!」

信用できない。

そんな面持ちで雄真が更に激しく睨むと茶髪の男子生徒は少し下手に出ながらも続ける

「ホント、ホントだって! それもお前の机じゃない!」

「あつ!? じゃあ誰のだよ!」

今度は長髪の生徒が身を乗り出してその問いに答える

「お前の後ろにいる奴だよ!」

そう言われて雄真が振り返って見るとひよろりとした少年が泣きそうな顔で立っている。

少年に向かって叫ぶ教室の生徒達

「北野お、お前の席ねえーからッ!」

「ギャハハハ!」

生徒達はそれだけ言って教室の中へ消えていく。

北野と呼ばれた少年は泣きそうな表情のまま落とされた机を重そうに持ち上げてヨタヨタ歩いていく

「おい、大丈夫かよ」

そう言って北野に手を貸そうとする雄真。

しかし北野はその手を振り払う

「やめてくれないかな?」

「は? テメー、俺は親切で…」

「だから、それが嫌なんだよ。中途半端な親切心で僕に近づかない方がいい」

雄真は首を傾げる

「意味わかんねえ」

「今までも何人かいたよ。僕を助けてくれようとする人。でもみんな酷いメにあつて去つていった…。僕に近づいたら君も虐められるよ」

「それがどうした？ 別にお前に迷惑はかけねえだろ」

「ダメだよ。僕が君に迷惑をかけたくないんだ…。だから頼む。近づかないでよ」

そう言い残して北野は再び歩き出す。

雄真はもう何も言えなかった

教室の中。先程の生徒数名の内の四人が窓のすぐ下で身を縮めて語り合う。

制服の下に赤いTシャツを来た生徒が先程雄真と会話していた茶髪の生徒に言う

「東山！ お前どこに落としてんだよ！ よりによつて松垣に…」

「宮本、お前声でけえよ！ 俺だつてワザとじゃねえ！」

「あー、やべえ。アイツ喧嘩滅茶苦茶強いつて話だぜ…」

動揺する二人に茶髪の女子生徒が言う

「でもさー大丈夫じゃない？ いざとなつたら福ちゃんがかししてくれるっしょ？」

それを聞いて長髪の男子生徒が言う

「まあな。松垣がどれだけのもんか知らねえけど俺にかかれば楽勝だな！ てかむしろコッチから喧嘩売つてやろうかな。最近雑魚ばつかで退屈してんだよなあ」

東山が飛び跳ねながら言う

「ええー！ 福田と松垣がマジバトルかよ！ うわあ見てー」

雄真が北野の死を知ったのはそれから数日後の事だった。

案の定、イジメを苦にした自殺であり遺書で自分を虐めた相手を名指ししていたらしい。

葬儀にはクラス全員が参加する事になり、その中には当然雄真や北野を虐めていた四人も含まれていた

「ほら、お前ら。しっかりと謝るんだ！」

担任教師に言われて北野の両親に頭を下げる四人。

東山が涙ながらに言う

「僕たち、本当に取り返しのない事をしてしまいました…。ごめんさい、ごめんさい…」

続いて他三人も涙を流す

「返して！ 返して！ 政志を返して！」

北野の母親が四人に掴みかかろうとするがそれを抑えて北野の父親が言う

「君達がやった事は決して許される事じゃない。だがいくら君達を責めた所で政志は帰っては来ない…」

「うう…ごめんさい…」

「謝罪はもういい。私が望むのは君達がもう二度とこういう不幸を起こさない事だ…」

謝罪を終えて席に戻って来る四人。四人の席はたまたま雄真の隣だった。席に座ると四人は談笑を始める。最初に口を開いたのは東山だ

「ねえ、もう終わり？ あの親父なんか楽勝じゃなかった？ 拍子抜けなんだけど…」

「さすが北野の親父。人良すぎだろ…」

「クスクス…」

「おい、お前ツ…！」

思わず、話を聞いていた雄真は福田の肩に触れる。するとサイコメトリーが発動。脳内に記憶イメージが流れ込む

―職員室で担任教師と話す四人

「お前から何て事してくれただよおー。クラスで自殺者なんか出たら俺の評価がた落ちじゃねーかよ！」

嘆く担任に悪びれもせずに福田が言う

「俺らのせいだよ。てか俺らも迷惑してんだけど。何勝手に死んでんだよ。マジムカつく」

女が続く

「これって内申書とか響くの？」

教師が答える

「そりやそうだろ…。秋山はさあ、成績いいから先生の評価を上げてくれそうだったって期待してたんだぞう！ それをこんな…」

東山が言う

「先生の力でなんとかならないですかあ？」

「ならない！ お前ら、明日はとにかく謝り倒せ。反省してなくていいから。とにかく謝り倒せ、なっ！」

サイコメトリーが解けて脳内イメージの世界から解放されると福田が不思議そうに雄真の顔を見ていた。

「な、なんだよ。なんか用か？」

雄真はボソリと呟くように言う

「あのさあ、お前らが…死ねば良かったのにな」

「は？」

福田は訳がわからない、というような表情をした。

彼らには雄真がサイコメトリーを通して、たった今、昨日の出来事を知った事などわからない。

「だから北野の代わりにお前らが死ねば良かったのになって言ってんだよ」

言い終わると雄真は式の途中、堂々と会場を出て行った。

去っていく雄真の背中を見ながら東山が言う

「なんだよ、アイツ。ムカつくなあ…」

秋山と呼ばれた女が言う

「アイツ、福ちゃんの事ナメてんじやない？ このままでいいの？」

福田は舌打ちして言う

「野郎…ナメやがって。おい、東山。式が終わったらソツコーでゼンシューかけろ」

「まさか…」

「アイツ、泣いて詫び入れるまでマジで許さねえ」

雄真が河原を歩いていると目の前にガラの悪い男の集団が現れる。

男達は雄真の姿を確認すると道一杯に広がって道を塞ぐ。

気配を感じた雄真が後ろを振り返ると同じような集団に紛れて雄真のクラス不良四人組がいる。

「なんのつもりだ？」

雄真が語りかけると福田が答える

「あ？ 自分でわかんねえのかよ」

「ああ」

「ナメやがって…！」

すると後方から大柄な男が雄真に襲いかかる。次の瞬間、雄真は肘鉄を繰り出す。すると肘鉄が男の下顎にヒット。男は一発でのびてしまった

「畜生…テメーら行けえ！」

福田のかけ声に従って次々襲いかかる男達。

雄真はそれをバツタバツタと殴り倒していく。

そして遂にはその場に立っているのは雄真と四人組だけになった。

四人組に近づく雄真。福田は他三人に語りかける

「もういい。俺がやる…！」

雄真に駆け寄る福田。

その勢いのまま拳を繰り出すと雄真の顔面にヒットする

「ハハハ！ バーカ！ 雑魚を何人倒しても俺には勝てないんだよ！」

そう喚く福田に雄真が顔をあげて静かに語りかける

「お前、今のが全力かよ」

「強がつてんじやねーよ！」

福田は次々にパンチを繰り出して雄真に入れていく。

しかし雄真はビクともしない。

「おわりか？ じゃあ今度はコツチの番な」

雄真が攻撃を始めると福田はサンドバックのようになり、あつという間に顔が腫れ上がった

「だす…げて…」

倒れ込み、助けを求める福田をなお殴る雄真。東山が言う

「おい、それ以上やったらマジで死んじやうって…」

「だからなんだ？」

「え？」

「お前ら、人殺したんだから死んで当然だよな」

宮本が叫ぶ

「北野の事か!? あれは俺達がやったんじゃない。勝手に死んだんだよ！ お前マジぶざけんなって！」

それを聞くと雄真は福田から手を離して三人の元へ歩き出す

「お前…余計な事…」

「俺のせい？」

揉める東山と宮本を差し置き秋山が進み出る

「キヤー！ 松垣つて強いんだね！ 松垣さあ、私と付き合つてよ！」

もう福田の彼女は辞めるから…うツ！」

雄真は不用意に近づいてきた秋山を殴り飛ばす

「そんな…女まで…」

雄真は呆気にとられる東山に言う

「男女平等。クズに男も女もねえ。次はお前らの番だ」

それを聞くと東山と宮本は一目散に逃げ出した。

雄真はそれをあえて追わない。

倒れた福田の身体を掴むと再び拳を入れようとする。

だが、そこで何者かが腕を掴んだ。

振り返るとそこには冬だというのに派手なアロハシャツを着たヤクザ風の男がいた。

「やめとけ」

「なんだ？ まだ残りがいたのか」

男を敵とみなした雄真は殴りかかるが、男は巧みなフットワークでかわして雄真のみぞおちにラッシュを決める。

倒れ込む雄真

「カハツ…マジかよ…」

「喧嘩じゃ負けた事なかったのにつて顔だな」

「アンタなんなんだよ…」

「あ、別にお前と殴りあつてた連中の仲間とかじゃねえから安心しな。たまたま見かけてな」

「止めに来たのかよ？ ふざけんな。ソイツは殺されて当然の事をしてんだよ」

男は頷く

「ああ、俺もそう思うぜ」

「は？ なんでわかる？ アンタやっぱり福田の知り合いかよ」

「ああ…こう言うとななるか…。そういう訳じゃないんだが…話すと長くなるから…。ともかく俺が言いたいのはそのクズを殺して人生棒に振るのは勿体無くねえかって事よ」

「意味わかんね。わざわざ綺麗事言いに来たのかよ」

男はため息をつく

「つまり俺はお前をスカウトしに来たんだよ。俺について来ればいい夢見させてやるぜ！」

雄真は男の顔をマジマジと見て言う

「…ヤクザにもスカウトとかあんのか？」

「違う！ ボクシングだッ！」

「あ？ ボクシング？」

不思議そうな雄真に男は自慢げに言った

「どうだ？ やってみねえか？ 今、見た限りじゃどうせロクな人生送ってねーんだろ？ 誰にも頼らず自分の拳一つで成りあがるチャンスだぜ」

そう言われて雄真は自らの拳を改めて見つめた。

——ガバツ

ベッドの上で飛び起きる雄真

「夢か…」

新しくなった基地の天井を見上げて呟く

「随分昔の事を思い出しちゃったな…。天井がかわったせいかな…？」

狙われた少女

ガチャ——。

雄真が部屋のドアを開けて事務所のロビーに入っていく。

ロビーには前の事務所と同じような配置で物が並んでおり、パツと見た感じはあまり変わらない。

そこにいるのは凌と里菜。そしてアスぴよん

「遅かったわね。おそよう」

「よく眠れて良かったな」

嫌味っぽく言うアスぴよんと無表情で言う里菜

「残念ながらさうでもないんだよな…」

そう呟くと雄真は続ける

「ところで純と龍我はどこへ言った？ 姿が見えねえけど」

答える里菜

「任務だ」

「任務？ それなんだ？ 俺は聞いてないぜ」

そんな雄真にため息をつく凌

「雄真が寝てる間に警察の人が来たんだよ」

「警察？」

「うん、例の勝広さんの部下の人…」

「ああ…田町さんと出水さんか…。で、何だった？」

「先日、超力獣らしきモノに襲われたっていう少女を連れて来てね。その護衛で外に出てるんだ。また同じ子を狙って来るかもしれないからね」

その回答に雄真は目を丸くする

「あッ？ 匿うならここに置いておいた方がいいんじゃないのか？
なんでわざわざ外に出すんだよ」

首を横に振る里菜

「それは私も言った。だが、ダメなんだそうさ。警護対象はフィギュアスケートの有力選手だからな。一日たりとも休めないそうさ」

「そいつはまた厄介だな…」

ところ変わって、都内の室内スケートリンク。

クラシックの音楽にのせて氷上を華麗に舞い滑降する少女。

それを他に人のいない観客席から見ると純と龍我

「いやあ、麻由美ちゃん凄いなあ…。お母さんが必死になるワケもわかるよ。ジャンプもステップも本当に上手い。あの子ならオリンピック狙えるよね！」

そう楽しそうに語る龍我に不思議そうに聞く純

「私はフィギュアの事よくわからないから何とも…。龍我君は詳しいの？」

「ん？　そうでもないよ」

「じゃあ何で将来オリンピックピック狙えるとか解るの？」

「え、なんとなく。勘なんだけど」

勘でそこまでわかるものなのか。

純は呆れと感心が混じり合ったような口調で続けた。

「龍我君って本当に便利な生活してるよね…。でも、それならあの子が超力獣に狙われるのも当然だね…」

龍我が首を傾げる

「どういう事？」

「ああ…龍我君、そこまでは説明聞いてないんだ…。えっと、超力獣が狙ってるエナジーってどういうモノだかわかる？」

「なんとなくは…。なんか生命エネルギー（？）とか里菜が言ってたなあ…。とりあえず超力獣を使う超能力者は超力獣にそれを集めさせて自分の力をパワーアップさせようとしてるんだよね」

「うん。でね、私達みたいな超能力者はそれを能力の発動とかに使う場合が多くて、エナジーの量の豊富さや質の高さが能力の持続力や威力に関わってきたりするんだけど。超能力者じゃない普通の人は芸術的センスとか人を惹きつけるカリスマ性に反映される事が多いの」「センス…？」

「今までの被害者で言うと、麗ちゃん…蜘蛛超力獣の事件の時の霞麗

子なんか分かり易いかな……。やっぱり芸能関係の人にはエナジーの質がいい人が多いよね……。だから多く人を惹きつけられるの。よく『オーラがある人』とか言うじゃない？一言で言うとなんか、あれかな。そこまで聞くと龍我にもようやく話の方向性が見えてきたらしい。「それで超力獣もそのエナジーを狙うってワケか」
「そう。今回の麻由美ちゃんの場合も同じ。彼女は芸能人じゃなくてスポーツ選手だけど、フィギュアって採点方式のスポーツじゃない？審査員や観客を魅了する能力が問われるワケだから、いい選手ならエナジーが良質で超力獣に狙われるって可能性も高いよね……」

二人がそんな話をしているとリンク内に鳴り響いていた音楽が唐突にやみ、同時に氷上の少女、麻由美も動きを止める

「あ、また始まった……」

観客席で龍我が呟くと、次の瞬間、リンク内に女の怒号が響いた
「麻由美！ 何度言われたらわかるの？ 今のところ、アナタまた乱れたわよ！ 試合なら即減点。わかっているの!？」

リンク内で立ち止まった少女、麻由美はリンクサイドからそう叫ぶ声をあげた女に必死に頭を下げる

「ごめんなさい、ごめんなさい、お母さん……」

麻由美の母はため息をついて言う

「今日はもうやめにしましよ。アナタ、全然集中できてない。このままじゃどれだけやっても一緒だわ！」

「ご、ごめんなさい……」

そう言っただけでリンク中央からリンクサイドへと引き上げていく麻由美。母親が観客席の龍我と純に向かって叫ぶ

「すみません、そういう事なので！ 帰りますけどこの後も宜しくお願ひします」

「あ、は、はい……」

やや気後れ気味に返事をする二人。

麻由美の母親がリンクから出て行ったのを確認してから純が言う

「麻由美ちゃんのお母さんってちょっと厳しくない？」

頷く龍我

「うん…確かに…。でも、あれくらいやらないといい選手にはなれないって事なんじゃない?」

「でも、毎日毎日こんな風に言われるんだよ…。私なら練習するの嫌になっちゃうけどな…」

サイコレンジャーの事務所内。

話を聞いていなかった雄真に事件のあらましを説明する里菜。

ホワイトボードに張ってある関係者の写真を指しながら言う

「今回、超力獣の標的になっているのは角谷麻由美、14歳。フィギュアスケートの次期五輪代表候補選手だ」

「その年でか?」

「ああ。年齢制限さえなければ前回のオリンピックにも出場できる成績だったそうだ」

「マジかよ…凄いな…」

雄真が感心しているところへ、凌が口を挟む

「ニュースとか新聞にも結構出てるけど知らないの?」

「世間知らずで悪かったなッ!」

里菜は揉める二人に構わず続ける

「被害者の家族は二人。父親の浩二は工場従業員。母親の聡美は元スケート選手で麻由美のコーチでもある」

それを聞くと、雄真は頬杖を外してやや意外そうに言う

「へえ。父親は工場勤務…。結構普通の家なんだな。フィギュアやるのって金持ちだけかと思ってた。道具とか衣装とか金かかりそうだし。」

「ああ…麻由美にスポンサーがついた今は練習環境もかなり良くなっただけだが、その前は母親がコーチの傍らパートを三つ程掛け持ちしてなんとかやりくりしていたそうだ」

「そりやまた大変だな。なんでそこまでして…」

「麻由美の母親、聡美もメダル確実と言われたスケート選手だったそ

うなんだが、初めて出た五輪で思わぬ惨敗を喫すると一度にスポンサーが撤退して競技を続ける事が出来なくなってしまうらしい。おそらく、自分の叶えられなかった夢を娘に託すつもりなんだろうな」

「ふーん、そんなもんかね…」

ロッカールーム

スケート場の女子更衣室前。

麻由美が着替え終わるのを待つ龍我と純、そして麻由美の母、聡美「麻由美ちゃん遅いですね…」

龍我が言うのと聡美が答える

「すみません、たぶんまた一人で泣いてるんじゃないですかね」

「泣いてる?」

「あの子、少し厳しく言うといつもこうなんです。全く困ったものかわ」

「はあ…。でも放っておいていいんですか?」

「ええ。放っておいて下さい」

聡美があまりに平然と言うので龍我は麻由美にフォローを入れる

「でも麻由美ちゃんも大きなプレッシャーの中でやっている訳だから、こういう時はやっぱり誰かが励ましてあげた方が…」

龍我としては気を使った上での発言だったのだが、それを聞くと聡美は何かのスイッチが入ったように大声をあげた

「貴方に何がわかるって言うんです!? 私は今まで何人も才能が潰れていく所を見てきました。彼らがなんで上手くいかなかったかわかりますか!?!」

「いや、わかんないですけど…」

「メンタルの問題です! 原因や規模は違えど、どんな優秀な選手にでも必ず悪い時期というのは来ます。そういう時、選手は孤独です…。成績が下がれば世間は掌を返して批判を繰り返す…! それもトップであればある程に。アスリートはみんなそれを乗り越えていかなくちやいけないんです! 私が少し厳しくした位でへこたれるようではあの子は本当の意味でのトッププレイヤーにはなれません。だから麻由美は今のうちから厳しい試練をたくさん受けてもつと逞しい精神力を身につけなきゃいけないんです!」

「あ、は、はい…。そうなんですか…」

聡美の剣幕に怯む龍我。横で話を聞いていた純が二人に言う
「あの、私、とにかくちよつと様子見てきますね」
純は更衣室のドアを開けて中に入って行った

「麻由美ちゃん？ どこ？」

高いロッカーが並んで視界の悪い更衣室の中を進んでいく純。

ふと左方向を見ると置き去りになった麻由美の荷物が目に映る

「そんなッ……！ まさか……！」

純が慌てて周りを見渡すと更衣室の窓が開いてそこから風が吹き込んでいる

「麻由美ちゃんッ……！」

バタン――

大きな音をたてながら慌てて更衣室から出てくる純。

龍我が思わず聞く

「どうしたの？」

「大変！ 麻由美ちゃんがいなくなっちゃって……！」

「え……！」

「そう。部屋の中に荷物だけ置き去りになって……！」

慌てる二人に対して聡美が冷静に言う

「すみません……。それたぶん心配いらなと思います」

「どういう事ですか？」

龍我は不思議そうだ

「主人が働いている工場へ行っただと思います。これもいつもの事なんですよ。主人は娘を甘やかす所がありました……。麻由美は練習が辛くなるというも主人の所へ逃げ込むんです」

純はそれを聞いてもまだ安心できない

「とにかくその工場へ行きましょう！ お父さんの所なら平気だとは思うけど、念の為！ 速く！」

聡美は龍我と純の慌てようにキョトンとしながら言う

「あの…私はこの後、パートがあるので一緒にできないんですが…」

まるで他人事のような発言に龍我が思わず叫ぶ

「ちよつとお母さん！ 麻由美ちゃんが危ないかもしれないんですよ…」

「ちよつと龍我君…」

純がそんな龍我の袖を引いて耳打ちする

「警察の人からどんな説明を受けたか知らないけど、ちよつとお母さんには超力獣の危険性が上手く伝わってないみたいだね…」

「ええ！ それはまずいでしょ！ どうすんの！」

「このままにしとこうよ」

「え！」

「説明しても超力獣の事をよく知らない人には上手く伝わらないだろうし、戦いになるんだったらお母さんがそばにいても危ないだけじゃ…」

「うーん、仕方がない！」

龍我はムリヤリ納得して聡美に言う

「わかりました！ お母さんはパートへ行って下さい！ 麻由美ちゃんには僕らが追います！」

龍我と純は聡美に背を向けて慌てふためくように駆けていく。

その姿を見て聡美は不思議そうに首を傾げた。

走りながら会話する龍我と純

「お母さんはああ言ってたけど、これって結構ヤバイよね！」

龍我の言葉に頷く純

「うん。里菜達にも応援を頼もう！」

V S 羊型超力獣

フィギュアスケートのコスチュームにコートを羽織った格好で父親の工場へ向かって急ぐ麻由美。

その前に現れる羊の姿をした超力獣

「キヤーー！」

超力獣に背を向けて逆方向へ逃げ出す麻由美。

しかしすぐに追いつかれて身体を持ち上げられる

「もうぞぞ、貴様のエナジーー！」

超力獣が麻由美の口に手をあてがった瞬間、超力獣の背中に銃撃。

その衝撃で超力獣は思わず麻由美の身体から手を離す

「何者だー！」

超力獣が後ろを見るとサイコガンを構えたサイコレッドとサイコピンクの姿

「ぐぬぬ…サイコレンジャー…！」

超力獣は一瞬怯むが麻由美を人質に捕ろうとすぐに麻由美の方に向かおうとする。しかし、その前にサイコイエロー、サイコブルー、サイコグリーンが立ちふさがる。

雄真が言う

「残念だったな。そうはさせないぜ」

「くそッ！」

超力獣は地面に手をかざして戦闘員を呼び出した。

思わず叫ぶ龍我

「アルファイターー！」

「雄真は警護対象を頼む！ 純と龍我は超力獣、凌は私と一緒に雑魚の相手だ！」

里菜が指示を出すと乱戦が始まった。

里菜と凌はエナジーソードを取り出してアルファイターをバツタバツタと切り倒し、雄真は麻由美を庇いながらも迫りくるアルファイターを殴りつける。

麻由美に声をかける雄真

「大丈夫か！」

「は、はい…」

麻由美は恐怖のあまりうずくまり目を瞑って答える。

一方、超力獣の相手をする純と龍我。

「ハァ！」

エナジーソードで切りかかる二人。

超力獣は血を流しながらも二人の剣の切っ先を掴んで投げ飛ばす

「さすがに堅い！」

龍我が叫ぶと純が超力獣に向かって手をかざす。

すると突如、超力獣の身体に火がついて苦しみ出した。

純のパイロキネシスだ。

純が興奮した口調で叫ぶ

「龍我君、殺ってー！」

龍我は右手でエナジーソードを超力獣の腹に突き刺し、左手に持ったサイコガンで刺した箇所を乱射した

「ギャアア！」

超力獣が痛みのあまり動きを止めると龍我は素早くエナジーソードを引き抜いて首をはねる。

すると超力獣は音もなく消滅した

「もう大丈夫だぞ」

雄真は超力獣が消滅したのを確認して麻由美に声をかける。

しかし麻由美はその声に耳を傾ける事なく震えながら呟く

「うう…怖いよ…お父さん…お父さん…」

国生、響子、翔太、五条、神楽の集う部屋の中。

「うーん…」

こめかみに人差し指を当て目を瞑りながら唸る五条

「五条さん、難しい顔してどうしたの？」

翔太が声をかけると五条が唐突に言う

「翔太、あと神楽もすまねえ」

「は？」

同時に声をあげる翔太と神楽

「俺、お前達より先にサイコレンジャーと戦う事になりそうだわ」

「それってもしかして…」

神楽の言葉に頷く五条

「ああ。サイコレンジャーが俺の標的の警護についたみたいだ」

それを聞いて翔太が叫ぶ

「そりゃないよ！ 五条さん、今すぐその獲物を僕に譲ってよ！」

五条は首を横に振る

「ダメだ」

「何でッ！」

その会話に響子が口を挟む

「翔太あー、人の標的、横取りすんのは禁止でしょー」

「でも、サイコレンジャーは僕と神楽の獲物だ！」

そう言う翔太を国生がなだめる

「翔太、あんまり無理を言うな…。また戦うチャンスはあるさ」

「でも…」

翔太は神楽の方を見て助けを求めるが、その神楽は力なくため息を

ついて言う

「仕方がありませんわね。今回は五条さんにお譲りしましょう」

「そんなッ！」

「いいじゃないですか、翔太さん。もしサイコレンジャーがここで全

滅するような方々ならわざわざ私達が相手をする事ありませんわ」

「それは…そうか…」

翔太は納得いかない様子ではあるがこれ以上の反論も思い浮かばず頷いた

「じゃあ、決まりな」

そう言い席を立てってから五条は呟く

「サイコレンジャーか……。久しぶりに腕がなるぜ……」

その様子を見た響子は国生に言う

「興味ないような事言ってたけどおー、五条さんは勝負事になると燃えちやいますよお。止めなくていいんですかあ?」

「誰がサイコレンジャーを倒そうが関係ないさ。我々の目的はもつと崇高なものだから……」

国生は静かに答えた

第十一話 夢は氷のように (後編)
聡美の過去

麻由美の父親、角谷浩二の働く工場の休憩室

「お父さん！」

浩二の胸に飛び込む麻由美。

麻由美に同行したのは龍我と雄真。

雄真は麻由美の様子を見ながら呟く

「あーあ。柄にもない仕事引き受けちまったぜ…」

そして先程、純と役割を交代した時の出来事を思い出す

「おい、大丈夫かよ…」

襲撃にあった恐怖のあまり震えが止まらない麻由美に声をかける雄真。

他の四人も心配そうに麻由美の顔を覗き込む

「お父さん…」

震えながら呟く麻由美の様子を見た里菜はメンバー達に言う

「とにかく今は家族の所へ連れて行ってやった方がいいみたいだな」

「うん。そうだね…。お父さんの工場ってこの近くなんだよね？」

そうやって凌が龍我と純を見る。

答えたのは龍我

「うん、そういう風に聞いている」

里菜がそれを聞いて言う

「そうか。なら龍我と純で父親の所まで連れて行ってやってくれ。私達は他に異変がないかこの近くを探ってみようと思う…」

「あの、ちよつといいかな？」

里菜の言葉を遮ったのは純である。

首を傾げる里菜

「純、なんだ？」

「あのさ、麻由美ちゃんの護衛、雄真君と変われないかな？」

純の発言に雄真は思わず目を見開いて驚く

「へっ？・俺かよー！」

頷く純。

麻由美本人に聞こえないように少し小声で言う

「だから…私じゃ麻由美ちゃんの気持ちを分かってあげられないんじゃないかと言うか…」

「は？」

「麻由美ちゃんってやっぱり普通の子とは違うじゃない？ この年でオリンピックとか…。私、スポーツとかやった事ないからその辺がよくわかんなくて…。でも雄真君ならボクシングでプロ目指してた事もあるし麻由美ちゃんの気持ちもわかってあげられるんじゃないかな…？」

「オイオイ、ちよつと待てよ！」

雄真が反論する

「俺だつてちよつと目指した時期がある位でそんなオリンピックとか出てる訳じゃないぜ。だいたい俺達の任務は護衛だろ？ 気持ちがわかるとかわかんないとかがどう関係あるんだよ!？」

それを聞いて里菜が言う

「いや、被害者のケアも我々の大切な仕事だぞ」

「あ？ 里菜までそんな事言うのかよ！」

「ああ。また抜け出されたりしたら困るだろう？」

「それは…そうか…。でも俺はむいてないって。そういうのなら凌が専門だろ!?! なつ、凌、お前やれよ」

雄真にそう言われた凌は少し俯きながら言う

「いや、僕の能力で読み取れるのは表面的な思考だけだからさ…。誰かと感情を共有する事なら雄真の方が得意だと思っよ」

「とにかく早く麻由美ちゃんをお父さんの所へ連れて行ってあげようよ。このままじゃ…」

凌に続いた龍我はそう言って麻由美を見る。

雄真が彼に続いて同じ方向に視線を移すと、ガタガタと身体を震わ

せる麻由美が目にうつる。

その様子を見て眩く

「全く仕方ねえなあ…」

「大丈夫か？ うん、うん。怖かったよな…」

抱きつく麻由美の頭を撫でながら言う麻由美の父親、角谷浩二。父親に会うと安心した様で段々と麻由美の震えも治まっていく。

それを見て眩く龍我

「麻由美ちゃん、落ち着いたみたいでよかったね」

「ああ…」

頷く雄真。だがその表情は少しくもっている。

その様子に気づいた龍我

「雄真、どうかした？」

「あ、ああ…。ちよつと気になってな」

「何が？」

「あの子は何で父親にあんなベツタリなんだ？ 14歳だろ？ 普通ならむしろ父親なんかウザったくなる年頃なんじゃないか？ 母親にもあんな感じなのか？」

龍我は首を横に振る

「ううん。お母さんにはそんな感じじゃなかったな。お母さん厳しい人だからさ。なんか怖がつてる感じ」

「それは練習の時だけじゃなくて普段もか？」

「うん。見た限りではそうだね」

「そうか…」

珍しく深く考え込んでいる雄真に龍我が問いかける

「それが何か関係あるの？」

「いや、別に。ただ俺とは少し違うなと思ってさ」

「違う？」

「ああ。これ位の年の時、俺は親なんて信用できなかつたな。俺が信用できたのはボクシングのコーチと荒れてる俺をその道に誘ってく

れた先輩だけだった。要するに選手とコーチには特別な絆みたいなモノがある訳よ」

「ほうほう」

「だからこの子もそうかと思ってた。この子の場合母親がコーチならしいから父親より母親との結びつきが強くて当然だと思ってたんだが…。この状態だ」

雄真は麻由美と浩二を指差す。

麻由美は余程疲れたようで浩二の胸の中でスヤスヤと眠っている。

それを見て呟く龍我

「なるほど…」

「もしかしたらあの子、フィギュアやめた方がいいかもしれないな」

「え!？」

雄真の発言に戸惑う龍我

工場の休憩室。

ソファーに横になって眠る麻由美。

その傍らで浩二に話を聞く龍我と雄真

「聡美さんはどうしてあんなに厳しく麻由美ちゃんを指導するんでしょうか…? もしかして過去に何かあったんじゃないですか?」

龍我の問いかけを聞いて語り出す浩二

「私と彼女が出会ったのは大学生の時です。その頃、彼女はもう全国区の選手で、私は事業家になりたいくて経済の勉強をしていました」

「へー、事業家に…」

雄真が言うと浩二は照れ笑いをしながら続ける

「ええ。あの頃は二人共、夢を追っていましたから、互いに熱い話をしましたね。出会うと恋に落ちるのはあつという間でした。で、私達は大学を出ると同時に結婚しました」

「それってそんな昔の話でもないですよね…。随分早いんじゃないですか? 最近の基準で言うと」

「いや、もう20年くらい前ですから、どうなんでしょう?」

浩二は龍我の言葉に首を傾げてから続ける

「まあ、なんにせよ。大変だったのは結婚してからです。聡美はいい選手だったんですが、大きな大会の前になるとナーバスになり過ぎる所がありましてね。五輪や世界選手権なんかではイマイチいい結果が残せなかつたんです。すると、当然スポンサーなんかも徐々に離れていく訳で…」

「で、競技を続けるのが難しくなっちゃったって事か」

雄真の言葉に頷く浩二

「ええ。フィギュアって見た目は華やかですけど所詮はアマチュアスポーツですからね。しかもコスチュームも靴も必要ですし、所属が無ければ練習場の確保にもお金がかかります。当時の私達にそんな資金力は到底ありませんでした…。そこで私、考えたんです」

「いったい、何を？」

「私が彼女のマネジメントをする会社を創りました」

それを聞くと、龍我と雄真がほぼ同時に反応した。

「それは凄い！ 聡美さんの夢も浩二さんの夢も一度に叶えられる…。一石二鳥じゃないですか！」

「それが何で今につながるんだよ。訳わかんね」

二人の言葉に苦笑いする浩二

「それがね、大失敗だったんです」

「え？」

「世間的に彼女はもう終わった選手でしたし、お金があれば急に彼女の自身のレベルが上がる訳でもありませんから。ほとんど賛同してくれる企業はありませんでしたし、数少ない賛同者もすぐに離れていきました。その後も彼女は諦めずに頑張ったんですがね…。事業を始めた時に作った借金も返さなければいけない状況でしたし、結局、聡美は引退を決意したんです」

「それは大変でしたね…」

「その後は二人共、夢の事など忘れてとにかく必死に働きました。麻由美が生まれたのは借金も返し終わって生活もある程度は安定した頃だったんですが…。麻由美に物事がつくと聡美はフィギュアを教

え初めまして…」

「そんなヒドい思いをしておきながら、そりやまたなんで？」

「おそらく、夢を忘れたと思ってたのは私だけだったんでしょね。聡美の心の中ではずっとあの挫折が引つかかっていたんでしょ…。聡美は今、麻由美を自らと同化させて夢を見ていると思います。聡美は自分に敵しい選手でしたから、麻由美にも同じ事を要求しているです…」

浩二が一通り語り終わると雄真が問いかける

「その事、アンタはどう思ってるんだよ。麻由美が可哀想だとか思わないか？」

しばらく沈黙の後、浩二は言う

「今の状態を見ていると信じられないかもしれませんが、たぶん麻由美もフィギュアが嫌いな訳ではないんです。本当に楽しそうに滑っている時もありますから…。でもあそこまで厳しくする必要はないんじゃないかと私は私思います…」

龍我が首を傾げる

「聡美さんにはそれ言わないんですか？」

「それがなかなか言えないんですよね…」

頷く龍我

「まあわかります。あの剣幕ですからね…」

「そういう訳ではなくて…」

カクツとした表情でツツコむ浩二

「普段なら私も言うときは言いますよ。でも、スケートの事になるとね。彼女の挫折も知ってますし…。なかなか言いにくくて…」

ショートプログラム

翌日。

その日は都内のリンクにおいて日本代表選手も出場する競技会のショートプログラムが開かれており、麻由美もそこに参加していた。

麻由美がリンクに現れて演技を始めるとリンクサイドにいる聡美はメモとペンを取り出して麻由美の演技について詳細にデータを取り始めた。

龍我と雄真もそのすぐ横で麻由美の演技を見つめる。

麻由美は演技冒頭、コンビネーションジャンプを決める

「やったー！」

その瞬間、龍我は思わず声をあげるが、聡美はそれとは正反対のピリピリとした声で呟く

「ダメ…。速さが足りないわ…」

その後も聡美は麻由美の減点を逐一指摘しながらメモをとる。

本当に細かいな…。彼女の年齢を考えたら、まだそこまで出来ないのは仕方ない気がするけど…。

龍我はそんな様子を見て思わず呆れてしまった。

ふと横を見ると、雄真があごに手をあて、何か考え事をしながら、聡美を見つめている。

何やら、思うところがあるようだ。

「よく頑張ったね！　すごく良かったよ！」

演技を終えてリンクサイドへ戻ってきた麻由美に龍我はそう声をかけた

「ありがとうございますー！」

そう言われて麻由美は満面の笑みを浮かべるが、そんな彼女の横から聡美が無表情でメモを渡す

「麻由美、これ今日の減点ね。あなた、私に言われた事がちつともできてないわよ。特に最後のスピン：軸がブレブレだったわ」

ドスの利いた声に麻由美の表情が一瞬にして凍りつく

「ぶ……ごめんなさい……」

「あの、本人なりに頑張った結果ですからそこまで言わなくても……」
龍我が言いかけると聡美はキッと睨んだ。

脳裏に昨日、聡美に怒鳴られた時の記憶が過った龍我はすぐに態度を変えて言った。

「あ、いや……なんでもないです。あはは」

雄真だけが一連の流れをただジッと見つめている

競技会終了後。

ロッカールームに戻ってきた麻由美。

今にも泣き出しそうな表情で荷物を取り出す。

着替えを始めようと荷物の中を探っているとチカチカと光る携帯電話の着信ランプが目に入った。携帯電話を開く麻由美。

届いたメールは父・浩二からのモノだった

『麻由美、よく頑張ったね。今日は会場には行けなかったけど休憩室のTVで工場の仲間と一緒に応援してたよ。結果は三位だったけどお父さんは麻由美の演技が一番だと思った。明日のフリーも期待してる』

メールを見た麻由美は呟く

「お父さん……!」

そして同じ部屋で着替えをする何人か選手の目も気にせず、衣装の上コートに羽織った格好のまま窓から外へ飛び出した。

窓を出ると裏の細い道を抜けて会場から出ようとする麻由美。

小走りで出口に辿り着いた所で誰かから声がかかった

「おい、どこ行くんだ?」

麻由美が振り返るとそこに雄真の姿

「あつ……」

思わず声を漏らす麻由美に語りかける雄真

「もしかしてまた親父さんの所か？ 行くのはいいけど、お前狙われ
てるんだからさ。一人で勝手に動くのはやめてくんねえかな？」

オドオド話す麻由美

「す…すいません…。すぐに戻りますから」

「別に戻れなんて言っただけよ」

「え？」

「親父さんの所行くんだろ？ さあ、行くぞ」

そう言うと雄真は麻由美の手をひいてスタスタと歩き出す。

雄真と麻由美

ウイイインー

機械音が鳴り響く工場の作業室。

数人の作業員達が金属片を機械で加工している。

そこへ到着する雄真と麻由美

「麻由美！」

それに気づいて駆け寄ってくる浩二

「すいません、送って頂いたんですね」

雄真にそう言ってから浩二は麻由美に語りかける

「麻由美、今日の演技とっても良かったぞ。百点満点の演技だった！」

褒められても麻由美は暗い表情のままだ

「でもお母さんはスピンの時、軸がブレたって…」

「そうか…。でも麻由美は一生懸命やったんだろ？　ならそれでいいじゃないか」

そんな事を話していると浩二の同僚達が麻由美の元へやってきて口々に言う

「麻由美ちゃん、今日もお父さんと一緒に見てたよ！」

「凄いな、そんな年で大人相手に戦って！」

「ウチの娘も麻由美ちゃん見てたらフィギュアやりたいって言い出してさ…」

「本当に綺麗な演技だったよ」

それを聞く内に段々と麻由美の顔がほころんでいく。

浩二が言う

「麻由美、明日のフリーもみんなで応援してるからな」

「ありがとう。私、頑張る」

そう言う麻由美は満面の笑みを浮かべていた

工場を出た後、雄真と麻由美は再び試合のあったリンクへと向かう
「二日も続けて勝手に外出しちゃったな…。お母さん、怒ってるよね

…」

眉を下げて、誰かの葬儀の時みたいに深刻な顔をする麻由美。
そんな彼女とは裏腹に雄真はいかにも不真面目な態度で手をヒラヒラとさせた。

「気にすんな。言い訳なら俺が上手くやってやる」

「なんて？」

「超力獣が出たからやむを得ず避難したとかさ」

「そっか…。意外と簡単に出来るものですね。なのに私、思いつきも
しませんでした。私って言い訳下手なのかな…」

そう呟く麻由美に雄真が唐突に言った

「帰りたくなかったら一日くらい帰らなくてもいいんだぞ」

「え？」

「お前さあ、フィギュアやってて楽しいか？」

「え…」

口ごもる麻由美に雄真は続けて語りかける

「ああやってさ。毎日毎日怒鳴られてたら嫌にもなるだろ？ 一日く
らい家出してさ、心配かけてやるのもいいんじゃないか？ いいよ、
今日はおふくろさんもないし。正直に言っちゃまえ」

雄真の言葉を聞いて一瞬、ハツとした表情になるものの麻由美は必
死に否定した

「で、でも…。練習が厳しいのは仕方がないんです！ フィギュアは
私の夢だから…」

それが間違っているだなんて、疑うことすら知らない潔癖さ。本気
で、純粋な少女の瞳。

そんな目に見つめられて、雄真はため息をついた。

「でもそれって本当にお前の夢なのか？ お前、物心ついた頃から母
親にスケートやらされてたんだろ？ それ以外の生き方を知らない
だけじゃないのか？」

「それは…」

再び言葉を失う麻由美に雄真は言う

「まあいいよ。お前が本当にそう思ってるなら。ムリヤリやらされて

るウチに本当に好きになる事だってあるしな…。でもこれだけは言っておく…」

少し間を置いてから続ける雄真

「世間には夢がなければ生きていく意味がないなんて言う奴もいるけどさ。ムリヤリ夢を追う必要なんてないんだよ。確かに夢を追うのは素敵な事かもしれない。けどな、夢を追ってる人間が偉いと思っただら大間違いだぜ」

「え？」

「結局さあ、夢ってなんなんだ？ 要するに自分のやりたい事、なりたいモノだろ？ 自分のやりたい事を好き勝手にやっただけの人間のドコが偉いんだよ？」

雄真の言う事があまりに新鮮だったようで麻由美は口を開けながら聞いている。

雄真はさらにたたみかける。

「俺はいつまでも夢追っかけてる人間なんかよりさ、願った夢が叶わなくても一生懸命生きてる人間の方が偉いと思うね。例えば、お前の親父さんとかな」

「えっ、お父さん？ お父さんにも夢があつたんですか？」

「あ？ 知らなかったのかよ？」

「はい…。お父さんは夢がなくてなんの目標ない情けない人だからマネしちやいけないっていつもお母さんが言ってたから…」

雄真は苦笑いする。

仮にも自分の旦那相手なのにすごい言い方だ。

「親父さん本当は事業家に成りたかつたらしい…」

「事業家？ ウソ…」

「見えないよな。でも、色々あつて挫折しちまつたらしい」

「お父さんが…」

そう呟く麻由美に対して雄真が言う

「でも俺はお前の親父さん、凄く立派な人だと思うぜ。だって別にやりたくもない、辛い仕事をやりながら金稼いでさ。お前をここまで育てて来たんだから」

うつむく麻由美

「そうですね…。私もお父さんの生き方は間違っていないと思います…。今まで私がお母さんから教わってきた事の方が間違いだっただですよね…」

首を横に振る雄真

「いや、見方によつてはおふくろさんも間違つてねえよ」

「え？」

「つまり正解は一つじゃないって事だけ伝えたかったんだ。おふくろさんと一緒にフィギュアで世界を目指すだけが生き方じゃない。母親や他人がなんと言おうが自分の好きなように生きればいい。辛くなつたら逃げ道はたくさんあるんだからな…」

麻由美は頭の中の整理ができないようではしばらく黙り込んでしまった。

その様子を見た雄真は自分の身の上を語り出した。

「まあ、そんな難しく考えるな。俺の話なんか気にする事ねえ。あくまで参考程度と思つとけ。俺だつて所詮は夢を諦めた人間なんだからな」

「え？ 松垣さんも？」

「ああ。俺は昔プロのボクサー目指してたんだよ」

「なんでやめちやっただんですか？」

「俺をボクシングの道に誘つてくれた憧れの先輩が突然失踪しちまつてな。それで勝手にいじけてやめちやっただけさ。その後はせっかく学んだボクシングの技術悪く生かしてヤクザの喧嘩の手伝いしたりな。まあ、カッコ悪いやめかただったよ」

雄真の言葉は感受性豊かな思春期の少女の心に深く突き刺さる。

麻由美はやや遠くを見るような視線で小さく言った

「その先輩…松垣さんにとつて大切な人だったんですね…」

頷く雄真

「まあ、恩人であり憧れの人だったからな。その人、五条亘つて言つて、知る人ぞ知るボクシング界のホープだったんだぜ」

その後、雄真と麻由美は試合会場まで戻って龍我、聡美と合流した。「ちよつと雄真！ どこ行つてたんだよ！ お母さん怒り狂つて大変だったんだから…」

龍我が雄真に耳打ちする

「そうか。悪かつたな」

雄真は言葉とは裏腹に全く悪びれることなく龍我に軽く頭を下げると、すぐに聡美に駆け寄つて言う。

「すいません、超力獣が現れたので一時身を隠していました」

聡美は不審そうに雄真を睨みながらも言う

「そうですね。なら仕方ありませんね。ですが、試合前の大切な身体なので極力気を使うようお願いしますよ」

「はい、すいません」

今度はいかにも反省した様子で深々と頭を下げてみせる雄真だが、聡美がふとよそ見をした瞬間に麻由美の方を見てケロリと微笑み舌を出す。

それを見てクスリと麻由美が笑う。

先程、打ち合わせたのと全く同じ内容の言い訳。

共通の認識がある二人からすればバレバレの嘘なのに、相手が自分の意見をあつさりと言つ引つ込めてしまうのが、なんだか可笑しい。

「この後はどうするんですか?」

そう聞く雄真に聡美が答える

「今日はもう帰つて麻由美を休ませます。明日も試合ですから」

「じゃあ家までお送りします。俺達、今日は隣のアパートの空き部屋に泊まりますから何か異常があったらすぐ駆けつけますね!」

元気に言う龍我に冷たく言い放つ聡美

「何度も言いますが、試合前なので。なるべく来ないで頂けるとありがたいですが、いざという時はお願いします」

V S スチール缶獣

結局、その日晩は何事もなく翌日の朝がやってきた。

麻由美の自宅前に集合したサイコロレンジャー達は麻由美を試合会場まで送り届ける為に車二台を用意。一台目に麻由美、龍我、雄真。二台目に凌、里菜、純が乗り込み発車しようとする

「ところでお母さんは？」

一台目の車の中。運転席から龍我が麻由美に聞く

「試合会場の状態を見たいと言う事で先に行きました」

「そっか。ならもう行っちゃって構わないね」

ブブブブブンー

龍我は車のキーを回してエンジンを作動させて呟く

「えっと…それから…どうやって発進させるんだっけ？」

その様子を見て、助手席から雄真が言う

「何ブツブツ言ってるんだ？ お前運転できるって言ってたよな？」

「あ、いちおう免許証は持つてるんだけど、自動車教習所出してから運転するの初めてだから…」

「え、マジかよ…。いいか？ 足下のアクセルをだな…」

身乗り出して説明しようとする雄真

「あ、これか」

龍我はそれに構わず急に車を発進させる

ゴンツッー

雄真はその反動で車内の壁に思いっきり頭をぶつけてしまった

「痛ッー」

痛がる雄真を心配する麻由美

「大丈夫ですか…？」

雄真は頭をさすりながら言う

「麻由美、気をつけろ。超力獣に襲われる前にコイツの運転で死なないようにな」

一方、その後ろにつけた二台目の車の車内。

運転席に座る凌が一台目の車の様子を見て言う。

「雄真達、何やってるんだろ？」

助手席の里菜が言う

「おそらく龍我はペーパードライバーだな。車がそんな動き方をしていた。」

凌はそれを聞いて

「ああ、なるほど。」

と、一旦納得してからあきれ顔で言った。

「それでいて、サイコバスターは簡単に動かすんだから恐ろしいね。彼。」

会話に加わらず、二人のやりとりを静観していた、後部座席の純は一人、静かに呟く。

「ふう。私、コッチの車でよかつたあ」

そんな話をしながらこちらの車も発進する

車が走り去った後の路地に、遠くから今までの様子を観察していた五条が現れる

「あの五人がおそらく変身する前のサイコレンジャーか……。それにしてもアイツは……」

五条は彼らの様子を見て気になった事があった。

麻由美を護衛する五人の中で一番ガツチリとした体格の青年。

彼が昔、自分が面倒を見ていたボクシングジムの後輩に似ていた事だ。

彼とは数年会っていないし、連絡もとっていない。

今、どうなってるかわからないんだから多少似てても本人かどうかなんてわからない。きつと、他人の空似だ。

そう心に言い聞かせたがやはり気にかかる

「雄真…」

五条はそう呟いてから思わずハツとして一人で首を横に振った。これでは、いけない。相手が仮に誰であろうが関係ない。

「俺は人間を超える。そのために過去は全て捨てるんだ…！」

五条はそう言つて近くにあつたゴミ箱から空き缶を拾う。

そしてその缶の上に手をかざし念をかける

当初、今にも事故を起こしそうな勢いで車を運転していた龍我だったが、ある程度の距離を走つたことでだいぶ運転のコツを思いだしてきた。

一時の混乱も一段落して、順調に走行していた中、キキッー！ー！

と、唐突に龍我が急ブレーキをかけた

「ギャア！」

再び頭を打つ雄真

「テメエ！ 今度は一体なんなんだよ！」

痛みに気を取られた雄真は、全く、何の変化にも気付かない。

しかし、龍我の第六感はそれを感じていた。

「来る！ 超力獣が！」

「何イ！」

その次の瞬間、缶の形をした超力獣が車のフロント部分に落ちてきた。

ガチャンー

大きな音をたててフロントガラスが割れる。

龍我と雄真は素早く車から外へ出て麻由美を避難させる

「麻由美！ コイツは俺達が食い止めるから早く逃げろ！」

雄真の叫び声に従つて走り出す麻由美。超力獣はそれを追いかけてよとすが、その前に立ちふさがるサイコレンジャーの五人

「行くぞー！」

「おお！ サイコチェンジャー！」

雄真の号令に従って叫ぶ四人。五人の姿が戦士に変わる

「サイコレッド 北神龍我！」

「サイコブルー 風祭凌！」

「サイコイエロー 一色里菜！」

「サイコグリーン 松垣雄真！」

「サイコピンク 百瀬純！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

「ぐぬぬ…。サイコレンジャーめ！」

そう言つて突進してくる超力獣に対して雄真はクロスカウンター
気味にパンチを入れる

「よし！ ジャストミート！」

その様子を見て叫ぶ龍我だったがダメージを受けたのは雄真の方
だった。

手を押さえて痛がる雄真

「痛ッ！ なんだコイツ!? 滅茶苦茶堅いぞ！」

笑う超力獣

「ハハハ…。俺は缶は缶でもスチール缶！ アルミ缶のようにすぐに
ペコペコへこんだりはしないのだ！」

「打撃が効かないなら、火葬してあげる！」

純が手をかざしてパイロキネシスを発動。超力獣を火が包む。

しかし、これも効き目がない

「ハハハ、効かぬわ！」

「なんで！」

ヒステリックに叫ぶ純。

それを見て凌が言う

「スチールは熱にも強いからパイロキネシスは効かないんだ！」

「そんな…。じゃあどうすればいいの！」

龍我はその様子を見ながら考える。

「スチール缶の原料は鉄だから…えっと…そうだ！」

龍我は車の中から飲みかけのコーラを取り出すと雄真、凌ともみ合
う超力獣に近づいて行つてそれをかけた。

すると超力獣が苦しみだす

「ギャアア！ 溶ける！ 溶けるう！」

「なにが起きた!？」

雄真が叫びながら首を傾げる

「スチール缶って酸に弱いんだ。だから多少強度が弱くても炭酸飲料にはアルミ缶を使うんだよ」

自慢気に説明する龍我。

その横で里菜が叫ぶ

「デルタストライカー！」

五人が集まってデルタストライカーを構える

「デルタストライカー フォーマーションB エアロスライサー！」

デルタストライカーから放たれた扇状の超音波はコーラをかけられて錆びた箇所命中

「ギャアア！」

超音波は超力獣の身体を真っ二つに切り裂いた。

エピソード

超力獣撃破後、変身を解いたサイコレンジャーの面々が路地に集まって語り合う。

「ふぎけた奴ではあったが、なかなか手強い相手だったな…」
そう里菜が言うと凌が続く

「うん、龍我のお陰で助かったよね」

頷く雄真と純

「ああ、本当にこういう所は知恵がまわるな」

「よくとっさに思いついたよね」

そんな事を言い四人が龍我の顔を覗き込むと超力獣を倒した安心感漂うムードの中でただ一人、龍我は物凄く真剣な顔つきをしている。

その様子を見て純が言う

「龍我君？ どうしたの？」

張りつめた表情で龍我が口を開く

「心配がする！ あの超力獣の他にも近くに何かいるッ…！」

「え…！」

龍我は右方向にある曲がり角を指差す

「たぶん、アッチの方！」

それを聞いて、里菜が即座に指示を出す

「追うぞ！ 超力獣の親かもしれない！」

龍我の指した方向へ走る五人。

するとヤクザ風の派手な格好をした男が左方向に曲がっていくのが見えた。

凌が叫ぶ

「あれか！」

そこからやや遅れて雄真が呟く

「え…？」

そして雄真は立ち止まってしまった。

一方、他の四人はさらに加速して男を追いかける。

曲がりくねった住宅街。男は細い路地へと入っていく。

「たぶん、アッチは行き止まりだよ！」

サイコチェンジャーのGHS機能を使って地形を調べた純がメンバー達にそれを知らせた。

しめた！

とばかりに相手を追いつめにかかる4人であったが、曲がり角を曲がった先に男の姿はもはやなかった。

「今、確かに男の姿が見えたよな？」

里菜が他のメンバーに確かめると龍我が頷いて言う

「うん…。何者かな？ やっぱりあの超力獣の親？」

凌が悔しそうに答える

「いや…。どうだろう？ ただの通りすがりかもしれないけど…。しくじったな…。どっちにしてもとにかく捕まえて話は聞かないやいけなかった…。！」

純も続く

「ただの一般人でも目撃されてたら記憶の処理とかしないといけないもんね…」

そう話す一同からやや距離を置いている雄真は見覚えのある後ろ姿に動揺を隠せないでいた

「もしかして…五条さん…？ いや、まさか…。まさかな」

雄真はそう呟きつつも首を振って必死にその考えを振り払い、他の四人に向かって叫ぶ

「オイ、ボサつとしてる暇はねえぞ！ 今はそんな事を考えるより麻由美の安全確保が優先だろ！ 早く逃げた麻由美を探して保護しないとー！」

フィギュアスケートの試合が行われる会場へとやってきたサイコレンジャー達。

滑走順が先の選手達が演技をするすぐ真横のリンクサイドで麻由美の母親、聡美と再会する。

聡美は龍我達サイコロレンジャーの顔を見るなり興奮気味に言う

「あなた達！ 随分遅かったじゃない！ 何やってたのよ！」

少し遠慮がちなながら答える龍我

「スイマセン…。超力獣と戦ってまして…」

聡美はそれをロクに聞きもせず姿の見えない麻由美を探してキョロキョロと辺りを見渡した

「言い訳はいいわ！ 麻由美はどこ!? 早くしないと出番が来ちゃうでしょ！」

一様に目を見開いて互いの顔を見つめ合うサイコロレンジャーの面々。

それを代表して純が言う

「あれ？ あの後、辺りを探しても全然いなかったから先にコッチに来ていたものだ…。麻由美ちゃんいないんですか？」

先程から怒りとイラダチで顔を真っ赤にしていた聡美の顔色が青白く変わっていく。そして、彼女は頭を抱えてヒステリック叫んだ。

「はあ!? あなた達どうなってるの!? これって責任問題…」

「しまった！ 探すぞ！」

聡美の言葉を最後まで聞かずに叫ぶ里菜。

それに従ってサイコロレンジャーの面々が散らばって走り出す

純と凌は超力獣と戦闘をした場所、龍我と里菜は会場内、雄真が会場近辺を探索する

「くそっ、いないな…」

龍我の隣で呟く里菜。サイコチエンジャーの通信機能を使って他のメンバーにも問いかける。

「どうだ？ まだ見つからないか？」

サイコチエンジャーから聞こえる凌の声

「ダメ。見つからないよ」

「雄真の方はどうだ？」

サイコチエンジャーから今度は雄真の声

「いや、いない」

報告を受けて呟く里菜

「そうか…。まずいな」

その隣で龍我が言う

「もしかしたら、さっきの怪しい男に捕まったんじゃない？」

サイコレンジャー達がそんな風に考えて麻由美の心配をしていると五人の耳にどこからともなく、幼い少女の声が聞こえてきた。

「心配はいらないわ…」

それにいち早く反応したのは里菜だった

「明日香か！」

「ええ。麻由美さんは私が千里眼で探しておいたわ。彼女、無事よ」

「よかった…！」

息をついて言う龍我。

他のメンバーもそれぞれの場所で胸をなで下ろす。

だが、アスピよんはやや不思議そうだった。

「ただちよつと様子が変なのよね」

里菜が問いかける

「どういう事だ？」

「彼女、今、会場の前にいるんだけど…そこでフラフラしててなかなか中に入ってこないのよ…」

「それは妙だな…」

里菜は顎に手を当てて考え込んでしまう

「なんだかよくわからないがとりあえず迎えに行こう。今、一番近くにいるのは雄真だな…。雄真、行ってやってくれ」

サイコチェンジャーを通して応答する雄真

「いや、それはやめておいた方がいい」

返ってきた言葉に戸惑う里菜

「なぜだ？」

「麻由美はたぶん、迷ってるんだ。今日の試合に出るかどうか」

「は？ 出ないでどうする？ だいたいなんでお前にそんな事がわか

るんだ?」

「昨日、俺が言っておいたからな。母親に従ってスケートするだけがお前の人生じゃないって」

「…で、そんな事を吹き込んでおいてお前は どうするつもりなんだ?」

「どうするって…。放っておくさ。俺はアドバイスしただけ。決めるのは麻由美だから」

よくも、まあ、厄介事を増やしてくれたものだ。とばかりに里菜は溜息をつく

「我々の任務は角谷麻由美の護衛。安全に支障がなければ試合に出ようが出まいが本人の自由でいい。ただ母親への説明は責任を持ってお前がやれよ…。私はそんなのゴメンだ。」

「はあ!? アナタ、何言ってるんですか!？」

聡美に状況を説明した結果は予想通りのモノとなった。

雄真の胸ぐらを掴みながら叫ぶ聡美の声がリンク内に響く

「あの…落ち着いて…。みんな見てますから…」

横にいた龍我が説得する中、聡美は構わず雄真にたたみ掛けた。

「なんて事してくれたんですか!?! スケートは私と麻由美の全てなんですよ!」

雄真は一瞬、天を見上げて聡美の剣幕に呆れた様子を見せつつも、堂々と反論する。

「いやあ、母さんにとってスケートが全てっていうのは今の状態見ればバカでもわかると思うんですけど…。まだ若い麻由美さんの他の可能性まで否定するのはまだ早いんじゃないんですかねー」

「アナタに何がわかるんです!?! 麻由美の出番はもう次なんだから早く連れ戻して下さい!」

聡美は目を血走らせて、今にも卒倒しそうな表情だ。

そんな聡美の肩を龍我が遠慮がちに叩く。

「あの…」

「なんなんですか!」

「あの…あれ…」

聡美と雄真は龍我に促されてリンクの入口方面に顔を向ける。

すると、そこにはロッカールームとリンクをつなぐ通路から現れる麻由美の姿があった。

「麻由美! やっぱ戻って来たのね…。さすが私の娘だわ…」

聡美はそう言った後、雄真に対して勝ち誇った表情を一瞬見せてから麻由美に駆け寄る。

「麻由美! アナタ試合出るのよね!」

頷く麻由美。聡美は更に続ける。

「いい? よく聞いて。今日は調整なしのぶっつけ本番だから、もう細かい事はいいわ。とにかく思いっきりやりなさい! 今日だけはそれでいいから!」

「はい…」

聡美に返事をする。麻由美は小走りで雄真の方へ向かう。

目の前にやってきた麻由美に雄真が問う。

「やっぱり、スケート続ける事にしたのか?」

麻由美はコクリと深く頷いた

「はい…。正直、やっぱりお母さんの練習は厳しいです。やめたくなる事や逃げ出したくなる事もしよっちゆうです…。でもお父さんやお父さんの仲間の方達…私がスケートをする事で笑顔になってくれる人がいるから…。今はそれが一番嬉しいから…」

「そうか…」

「それにお母さんが私を叱るのは私がお母さんの求めるモノをまだ完璧にはこなせていないからだと思うんです…。だから私、いつかお母さんの求めている以上の演技をして、お母さんに笑顔になって欲しいんです」

「そうか…麻由美。そう決めたなら、頑張れよ。できる所まででいいから」

「はい…」

これまでにないくらい元気な返事をする。麻由美はもう振り向か

なかった。

スケート靴を履いて、颯爽とスケートリンク内へ入っていく。

リンク中央まで滑って行って静止すると音楽が流れ始める。

曲目はずっと練習してきた、フランツ・リストの『愛の夢』

そうして始まった麻由美の演技。

直前のウォーミングアップが全く出来なかったせいも演技冒頭から麻由美は失敗を繰り返す。

その様子をリンクサイドから心配そうに見つめる聡美。

そして真剣な眼差しで見る雄真。

龍我はその雄真の肩を叩いて斜め上方向を指す。

「ほら、あそこ」

そこには仕事場から駆けつけたと思われる麻由美の父、浩二の姿。浩二は何度も失敗しながらも立ち上がる麻由美を静かに見つめている。

そんな周囲の人々に見守られながら演技を続ける麻由美。

演技自体はベストの状態の麻由美とは比べるまでもない。

だが麻由美の表情にはいつもの演技の時にはない笑顔があった。

特集

登場人物紹介（その2）

☆サイコロレンジャーのメンバー

◎北神龍我／サイコレッド

◎風祭凌／サイコブルー

◎一色里菜／サイコイエロー

◎松垣雄真／サイコグリーン

◎百瀬純／サイコピンク

◎アスピョン

↓登場人物紹介 その1 を参照

☆宝来財閥関係者

◎宝来治五郎

年齢：故人

身長：165 cm

特徴：白髪、鼻の下にフサフサの髭

学歴：東京帝国大学法学部卒

プロフィール：

宝来財閥中興の祖とも呼ばれる先代会長。妻が超能力者であったことで超能力の存在を知る。その後、超能力の平和利用を目指し、優秀な超能力者を集めて、サイコロレンジャーや超能力の研究・育成部門をグループ内に設立。数年前に亡くなっている。身寄りのなかったサイコイエロー・里菜を養子にしている。

能力：なし

◎宝来源三

年齢：50歳

身長：174 cm

特徴：恰幅がよい、白髪混じり

学歴：大隈大学政治経済学部卒

プロフィール：

宝来財閥の現会長。宝来治五郎の三男。学業では兄に及ばなかったが、先代会長からは人をまとめる力に優れていると評価される。二人の兄を差し置いて会長に任命されても一切不満の声があがらなかったのはその証拠。

能力：なし

◎宝来祐二ほうらい ゆうじ

年齢：52歳

身長：169cm

特徴：小肥り、悪人面

学歴：東京帝国大学法学部卒（2浪で入学）

プロフィール：

現・国家公安委員長。宝来治五郎の次男。サイコレンジャーの秘密を守るため強引に法案を通してきた結果、事情を知らないメディアや国民から「政界の悪者」とあだ名をつけられる。だが、実際にはかなりの小心者で二人の兄弟に比べ特に取り柄もない自分にコンプレックスがある。息子の勝広と共にサイコレンジャー（宝来財閥）、警察、政府、三者の連携を担う人物。

能力：なし

◎宝来明日香ほうらい あすか

年齢：14歳

身長：155cm

特徴：顔が小さい、色白、和風よりな顔

学歴：中学2年生（通信制）

プロフィール：

サイコレンジャーたちと行動を共にするうさぎの人形“アスびよん”を操る能力者。宝来財閥会長・宝来源三の娘でもある。千里眼テレグノシスで超力獣を探しだし、精神感応テレパシーで得た情報をサイコレンジャーに知らせる役割を持つ。ほぼ全ての指示が彼女を経由されるので、実質、サイコレンジャーの上官といえる。能力の貴重さと役割の重要性から敵に居場所を知られぬよう、各地のアジトを転々としながら生活してい

る。若いが非常に大人びた性格で、時に年上のメンバーをも叱咤激励する。

能力：千里眼テレグノシス

離れた場所の出来事を感じできる能力。彼女の千里眼は自身が「見たい」と思った場所ならどんなに離れていてもその場所の映像を見ることができるというもの。非常に強力だが、使っている間は目を閉じ映像に集中する必要があるので完全に無防備になる。また、「見たい」と思った場所の映像しか見られないので、全くどこにいるかわからない敵や人を見つけるのには向いていない。

能力：精神感応テレパシー

離れた場所にいる人の精神に直接呼び掛け会話できる能力。彼女自身が知っている人なら誰とでも通信可能。千里眼と同じく目を閉じ集中する必要があるので、発動中は無防備。

◎宝来勝広ほうらいかつひろ

年齢：32歳

身長：175cm

特徴：若々しい、眼鏡はかけてる時とない時がある。

学歴：東京帝国大学法学部卒

プロフィール：

国家公安委員長・宝来祐二の息子にして警察官僚。階級は警視。特殊犯罪対策課を発足させ、超能力犯罪の情報収集に努める。宝来財閥の影響力により、年齢・階級以上の権限を手に行っているが、実際優秀で人柄も良いので不満は出ていない。もし、彼が悪口を言われるなら父親が宝来祐二というだけ。

能力：なし

◎三門志織みかどしおり

年齢：22歳

身長：154cm

特徴：常にぼつーとした表情、ショートボブ

学歴：中卒

プロフィール：

関係者の間では、”記憶の破壊者”^{メモリーブレイカー}と呼ばれる超能力者。サイコレンジャーの活動に関する情報を知ってしまった人の記憶を消去し情報操作を行う役割を持つ。非常にマイペースでゆったりとした口調で話す。能力の副作用の為、記憶力が非常に悪い。

能力：記憶破壊^{メモリーブレイク}

他者の記憶を消去する能力。消去の単位は時間であり、対象者は志織が指定した時間内の記憶の全てを消去される。指定した時間の記憶は少しも残すことができず、全て忘れるので「○○に関する記憶」だけ消去するようなこともできず、やや融通の効かない能力。能力の発動条件は対象者と視線を合わせること。目をカツと見開くのが発動の合図だが、具体的にどのよう記憶が消えるのかは不明。それを見た者はもれなく記憶を消去されているためである。普段から記憶力が異常に低い（能力を所持しているだけでも副作用があるとみられる）彼女だが、能力を発動すると、対象者の人数や消した記憶の量に応じて彼女の記憶も吹き飛ばすことになる。

☆宝来源三護衛隊

◎樋村透^{ひむ村とあろ}

◎岡元太一^{おかもと たいち}

◎瀧本樹理^{たきもと しゆり}

宝来財閥の超能力者養成学校のプログラムを終えた三人組。三人とも優れた能力者であり、サイコレンジャーの補充要員として候補にあがるほど。サイコチェンジャーを所持してはいるが、非常時以外使用禁止。

☆警視庁特殊犯罪対策課

◎田町洋輔^{たまち ようすけ}

年齢：29

身長：179 cm

特徴：ひよろりとした体格、分厚いレンズの眼鏡

学歴：京都帝国大学文学部卒

プロフィール：

超能力に対して異常なまでの知識と興味を持つ警察官。学業が優秀だったので、京都府警の次期エースと期待されていたが、事件を悉く超能力と結びつけようとするため次第に腫れ物扱いされるように。噂を聞きつけた勝広が特殊犯罪対策課創設時にスカウト。以降、水を得た魚のように働いている。自身は超能力者に興味深々だが、あまりにも興味本位で色々突っ込んでくるので、超能力者の方からは嫌われがち。

能力：なし

◎出水愛でみず あい

年齢：25歳

身長：164cm

特徴：小麦色の肌、目が大きい、怒られない程度の茶髪

学歴：英法大学法学部卒

プロフィール：

兄が勝広の友人だった縁で特殊犯罪対策課に配置される。出世頭の勝広に取り立てられたということで、エリート人生を想像していたが、訳のわからない事件や変な上司に振り回される日々ウンザリしている。時々本音が漏れる事もあるが、サイコレンジャー関係者の中では比較的常識人。

能力：なし

☆国生一派

◎国生こくしょう あきら

◎砂川響子すなかわ きょうこ

◎真鍋翔太まなべ しょうた

◎五条巨ごじょう わたる

◎早乙女神楽さおとめ かぐら

↓登場人物紹介 その1 を参照

第十二話 恐怖のポルターガイスト (前編)

砂川響子の日常

東京都港区。

ドキドキ食品株式会社関東営業所、食肉部門営業課のオフィス。ホワイトボードに各社員の営業成績が張り出される中、朝礼が行われている。

「えー、ゴホン。それでは今月の営業成績第一位を発表します。斉藤明菜君」

小太りで脂っぽい肌の中年課長が名前を呼ぶと、一見仕事が出来るようにはとも思えないフワツとした雰囲気をした目の大きな若い女性が、社員たちの列の中から出てくる。

「いやあ、斉藤君。今月も素晴らしい成績だよお。まだ入って2年だというのにウチのエースだねえ」

課長の猫なで声はお世辞にも気持ちのよい物ではなかったが、斉藤明菜はそれに嫌な顔一つせず、頭に下げた。

「どれもこれも皆さんのご指導のお陰です！」
すると集まった社員達が口々に賞賛の声を浴びせる。

「明菜ちゃんはやつぱすすごいなあ」
「可愛い上に仕事もできるなんて最高だよ」

賛辞の声が鳴り止まない中、課長が言う。

「それではこれから頑張ってくれたまえ。ねっ、明菜ちゃんっ」
言い終わると、課長はその言葉の弾みを利用して斉藤明菜の尻に触れた。

周りで見ていた男性社員ですら心配になる位の下品な行為であったが斉藤明菜は笑みを崩さない。

「もうっ、課長のエッチイ！」

「デヘヘ、怒られちゃったあ〜」

その様子を見てドツと笑い声の広がるオフィス内。

社員達に笑顔がこぼれる。

そんな温かい雰囲気の中、課長は少し言いにくそうに咳払いをしてから再び話始める。

「えー、まあこの様にだ。嬉しい話だけで終われば良かったんだが…。斉藤君とは反対にダントツで成績最下位の者がいる」

その一言で一転、沈黙に包まれるオフィス内。

そして、そこまで聞いただけでほとんどの社員には課長の言っているのが誰の事だかわかったようだ。

皆一様に、列の後ろ側にいる一人の女子社員に視線を送った。

その先にいたのは金髪ショートの髪型をした会社員にしてはかなり派手な女である。

「砂川響子！」

課長の怒鳴り声に怯えながらも進み出る響子

「はい…」

『はい』じゃないよ、『はい』じゃあ！ お前は毎月毎月、どうやったらかこんなダントツ最下位になれるんだ？ 全く、斉藤君と同期入社とは思えんな！ 同じ女子社員でどうしてここまで差がつくのかかわらん」

そんな説教が長々続き、一緒に聞いている社員達の表情にもありありと嫌気が見えてきた頃、課長は言った。

「じゃ、砂川も斉藤君を見習ってもっと頑張れよ」

そして、課長は先ほど斉藤明菜の時と同じように言葉の弾みを利用して響子の身体に手を触れた。

うわッ、気持ち悪ッ！

そう思った響子は反射的にその手を強く振り払ってしまった。

ーパン！

とオフィスに乾いた音が響く。

「あ…」

やってしまった…。

響子が恐る恐る課長の顔を見ると案の定、課長は物凄い形相でコチラを睨んでいる。

「あ…あ…えっと…」

言葉を詰まらせる響子。しかし課長の方も自分のセクハラを大事にはできない。

わざと聞こえるように大きく舌打ちした後、

「朝礼終了！ とつとと始業しろー！」

と不機嫌に怒鳴って自分の席に戻っていく。

それをうけて朝礼を解散させる社員達。

それぞれが自分の席や営業先に向かう為にバラバラと歩き出す中、響子の耳に社員達のヒソヒソ話が聞こえてくる。

「砂川の奴、また課長の機嫌損ねたよ」

「あーあ、また八つ当たりされるんだろうなあ…」

「仕事が出来ないのはいいけど俺達を巻き込まないで欲しいぜ」

「つーか、セクハラ課長もアレだけどさ。ちよつと我慢するだけでみんなが助かるんだから尻くらい大人しく触らせてやって欲しいよ。減るもんでもないんだし」

お前ら…聞こえてるつっの！

てかワザと聞こえるようにしてるのか!?

屈辱感に打ちのめされ、悔しさに拳を震わせる響子。

なすすべもなく立ち尽くしているとポンポンと肩を叩かれる。

振り向くとそこにはふんわりとした雰囲気的女子社員の姿があった。営業成績第一位の斉藤明菜である。

響子は相手が同期と言う事もあって不機嫌さを隠す事もなく、軽い口調で返事をした。

「なーに？」

「響子ちゃん、今日終わったらいいかな？ ちよつと話があるんだ」

その日の終業後。

二人の勤める会社からほど近い小綺麗なイタリアンレストラン。

店の規模はさほど大きくはないが店内は女性客で賑わっており、ほぼ満席というような状態である。

その中央付近の席で向かい合って座る響子と明菜。クルクルとパ

スタをフォークに巻きつけながら明菜が語りかける。

「私もね、響子ちゃんと比べて特別お仕事ができる訳じゃないんだよ。ただ周りを上手く使ってるだけでさ」

響子はその言葉に首を傾げた。

「上手くう？ どーゆー事お？」

「ほら、私達の周りで仕事してる人達ってほとんど男の人でしょ？」

そう問いかける明菜に響子は一旦食べるのを止めて頬杖をつきながら答える。

「まあねえ。それはそうでしょー。女の人は結婚したらドンドン辞めていくしいー」

「だからさあ、私達が仕事場で上手くやっていく為には男の人に好かれるべきなんだよ」

「媚び売るって事お？ それなら私もやってるよー。毎日毎日ペコペコペコペコ…」

頭を抱えながらウンザリとした表情を浮かべる響子の様子を見て、明菜は苦笑いした。

「そうじゃなくて…ホラ、響子ちゃん顔は綺麗なんだからさ。もつと髪とかふんわりさせて、物腰柔らかくするとか…」

響子にはその理屈がわからない。

そんなことで仕事ができるようになるのだろうか。

これ見よがしに不思議そうな表情で問いかけた。

「それと仕事と何の関係がある訳えー？」

「それが結構あるんだよ。みんな驚く程態度変わるんだから。営業先の人との商談もやりやすくなるし、会社でもちよつと困ってたら、みんな、すぐに助けてくれるようになるよ」

「でも…それで上手くいくようになったってさあ…」

「嬉しくない？」

明菜は響子の反応を予測していたように微笑んで続ける。

「でも、若さは私達が持つてる数少ない武器なんだからさ。古株の社員なんて私達みたいな若手女子社員は『どうせ4、5年で結婚して辞めちゃうんだからお茶くみ位にしかなれない』とか平気で言ってる

よ。ただでさえ不利なスタートなんだから使える物はドンドン使わなきゃ！」

そう言われ改めて明菜の事をしげしげ見つめる響子。

髪型は所謂、ゆるふわカールで顔にはナチュラル系のメイクが施されている。服はフリルのついた可愛らしいワンピース。

響子にとつては「いい年してこんな服…」と思ってしまうような代物だが明菜のふんわりとした雰囲気には凄くマッチしている。

同性の響子から見ても抱きしめたくなるような愛らしさだ。

これを私が…？

「やっぱ無理だしー」

机に突っ伏せる響子に明菜は少し強い口調で言う。

「ねえ、私が何でこんな事言うかわかる？ 私は響子ちゃんが頑張ってるの知ってるから、もつと響子ちゃんが周りに評価されるようになって欲しいの。二人で一緒に若い女をバカにしてるお偉いさん達に目にモノ見せてやろうよ！」

「明菜ちゃん…」

その言葉を聞いた響子は段々と目に熱いものが込み上げてくるのを感じた。しかし、その感動を大きな音がかき消した。

―ピリリリリ！

誰かの携帯電話の音だ。

全く誰だよ。せつかくの感動を台無しにして…。

店の中ではマナーモードにしているよ。

響子がそう思っていると明菜が口を開いた。

「あ、私の携帯だ。ちよつとゴメン」

そう断り、通話を開始する明菜。

「あー、ヒロ君？ なーにいい？ え、今？ 全然暇だよお」

ヒロ君って…誰？

ってか、暇？

今、友達とご飯食べてるのにな？

私というのが暇って事？

てか、この子、急に猫なで声になったんですけどお…。

響子がそんな事を考えながら話を聞いていると、明菜はおもむろに上着を着て、椅子の下からバッグを取り出した。

響子が尋ねる。

「どうしたのお？」

「ゴメン、彼氏に呼ばれちゃったから。行くね。今度の彼はお医者さんなの。プロポーズされたら一気に玉の輿！　こんな仕事とはオサラバだよ、えへへ。」

明菜はそれだけ言い残して、店内を駆けるように去っていく。

一人、取り残された響子と思う。

アイツ…マジで帰りやがった。

てか彼氏って…。

仕事頑張ろうとか言っつといてテメエはしつかり保険かけてんのかよ…。

そして最後、この事だけは考えるだけでは我慢出来ず、口に出してしまふ。

「自分の食べた分くらい勘定していけよお！　私に奢らせる気なのー！」

上品な店の静かなフロアにその声は響き渡っていった。

悪だくみ

その日の帰り道、道に落ちている石ころを尽く蹴飛ばしながら歩く響子

「クソっ、クソっ、頑張ってるのに、頑張ってるのに……。何で私だけえ……！」

そして立ち止まって言う

「こうなつたらあー！一刻も早く神の力を手に入れてみんなの頑張りが報われる世の中になくっちゃあー！」

そんな風に響子がカツカしていると道の反対側から一人の少女が姿を現す。

少女は高校生らしく、学校の制服を着ている。眼鏡をかけて三つ編みにしており、一昔前の優等生と言った感じの風貌だ。

彼女の顔を見て今までの表情を一変させた響子。

驚きと喜びが混じったような面もちで言う

「あれ!? 里美ちゃんじゃーん! 久しぶりー!」

「先輩、お久しぶりです……」

しかし、里美と呼ばれた三つ編み少女は響子とは裏腹にやや堅い表情だ。

その様子を悟った響子が問いかける

「どうしたの? 何が相談?」

その言葉聞いて少女の目から涙が溢れ出す

「そうなんですよ! 先輩! 聞いて下さい!」

「ええ! 何それえ! 信じらんない!」

夜の公園に響子の声が響く。

響子は里美と再会した後、近くにあった公園のベンチに場所を移して里美の話聞いていた

「私……もうどうしていいかわからなくて。もう先輩しか頼る人がいないんです」

缶コーヒーを持つ手を震わせながら必死に言う里美を励ますように響子は言う

「里美ちゃんは何にも心配しなくていいよ。私に任せといて!」

国生一派がアジトにしているマンションの一室。

翔太と神楽が資料を見ながら話し合う

「ねえ、コイツの能力、面白くない?」

「でも少数精鋭となるとそこまで必要ではないですね」

そこへ近づくと国生

「どうだい? 暗殺チームの編成は順調かい?」

頷く翔太

「うん、能力者集めはかなりいい感じだね」

神楽が補足する

「でも絞り込みにはもう少し時間が必要です」

そんな会話をしていると部屋のドアが開き響子が入ってくる

「そうなんだあ。じゃ私、その間遊んじやおうかなあー」

それに激しく反応する翔太

「響子! 奴らは僕の獲物だぞ!」

響子はため息をつく

「全くう。私はサイコレンジャーみたいな面倒なのに手を出す気はないから平気だつてえー」

ニヤリと笑う国生

「響子、悪だくみかい?」

「まあね。私が使ってる密偵さんが面白い情報を持ってきてくれたんだよねー」

私立第一中野学園

東京都内にある私立高校、第一中野学園。その三年E組教室。

ここでは現在、数学の授業が行われており、今は先週実施された定期テストの結果が生徒達に返されている所だ。

「安藤、飯田、板倉」

教壇に立つ初老の教師が生徒達の名前を呼んで答案用紙を手渡していく。

「じゃあ、次。篠原類」

教師がその名前を呼ぶと教室の窓側最後列の席から髪をやや長めに伸ばした茶髪のチャラチャラとした印象のある男子生徒が立ち上がり教壇に向かっていく。

篠原類と呼ばれた男子生徒は教壇の前につくと教師に向かって「早く答案をよこせ」と言わんばかりに無愛想に右手を差し出す。

しかし教師は渡すはずの答案の中身を見つめたままそれを手渡さうとしない

「おい、早く渡してくれよ」

類がそう急かすと教師はふと呟くように言う。

「お前も悪運がってきたな」

「いきなり何なんだよ」

「ま、点数は悪くないんだが、この時期に成績が下がるのは痛かったな」

「え？」

類は教師の手から答案をひったくるように奪い取り自身の点数を見る

「マジかよ……。まさか俺が…?」

そう呟く類の答案に記された点数は82点

「あぁー!! くそッ!!」

放課後の体育館裏、制服姿のまま煙草をふかす三人の男子生徒達の

横で体育館の壁を蹴っ飛ばす類。

そして煙草を吸う三人の内の一、坊主頭で目つきの悪い少年に声をかける

「おい、道重。俺にも一本くれ」

それに対して坊主頭の少年、道重は短く返事をする

「やだね」

「いいじゃねえか一本くらい。頼むよ、イライラして吸わずにはいられない気分なんだ」

「ダメだ。お前、今こんな吸ってる所見られたら大学の推薦がパーになっちまうだろ？」

更に短ラン、リーゼントというやや時代錯誤なスタイルの少年が続けて言う

「つーかお前帰れや。俺達と一緒にいる事自体やべえんだからさ。誘ってもねえのに来やがって。あらぬ疑いかけられても知らねーぞ」

地団駄を踏む類

「いいんだよ！もう推薦は諦めた。今回のあの点数じゃ福沢大の推薦はもう無理だろ…」

それを聞いて最後の一人、小太りの男子生徒が煙草を口から離して類に問いかける

「え？類さあ、今回も全教科80点以上だったじゃん。何がいけないの？」

その惚けた質問に対してただしかめっ面を浮かべるしかない類に代わってリーゼントの生徒が言う。

「田野倉、お前バカだなあ…」

「え？水戸だつてバカじゃん…」

リーゼントの生徒、水戸はそれを無視して続ける。

「あのなあ、お前。80点やそこらじゃ学年一位になれないだろ？相手が俺達ならともかく、A組上位の連中なら普通に満点に近い点はとってくるだろうしな」

小太りの少年、田野倉はそれを聞いてもまだ納得いかない様子だ。「だから何でそんなに一位にこだわるのさ」

「そりや、福沢大への指定校推薦枠が一つしかないからだろうよ！
内申書の成績で一番になって推薦をもらえればほぼ合格確実な上に
試験自体も二学期中盤位までには終わっちゃうからその後はもう自
由に過ごせる。ま、勉強頑張ってる奴ほど早く進路決めたいだろうか
らな。必死になってとりにくるってモンだろ」
「で、類はもうダメになっちゃったの？」

田野倉のどストレートな発言に水戸が思わず頭を殴る。

「お前、バツカ野郎！」

「なんで殴るんだよー」

そんなやりとりを見て呆れたようにため息をついた後、類は答える。

「正直わからねえな…。だがまあ、A組でも俺にテストでまともに勝負できる奴なんて加賀谷陸と石田里美くらいだと思っぜ。この2人にしたって一年生から通算した成績じゃ俺がかなり上回ってるはずだ」

「じゃあ問題ないじゃん」

「でも俺は奴らに比べて先公からの心証が圧倒的に悪いからな。その分、圧倒的にいい成績とらないと。近い点数ならアッチが優先されるだろうし、それに今、成績落としたら『昔は良かったけど今は…』とか難癖つけられかねない…」

類はそこまで説明すると天を仰いで呟く

「あーあ。やっちゃまったよなあ…」

そんな類を心配して声をかける道重

「お前、何かあったのかよ？　今までこんな事なかったじゃん」

その言葉を聞いてやや困ったような表情を浮かべる類。

それを察して道重は続ける。

「言えよ！　何か気になる事があるならとりあえず言ってみろって。まあ、俺達に言った所で解決するかわかんねえけどさあ」

類は少し不安げな面もちで言う

「わかったよ…。でもお前ら、絶対に笑うなよ」

道重、水戸、田野倉の三人は次々に言う

「当たり前だろ」

「いいから早く言え」

「そうだよ」

「そうか…。疑って悪かった。じゃあ言うぞ…」

類の勿体つけた言い方に思わず息を飲む三人。

そして類が口を開く。

「実は最近、俺の部屋に幽霊が出るんだよ…」

「はあ？」

呆気にとられる三人を余所に類は大真面目に話を続ける。

「俺も最初は気のせいだと思っただけ？ でも部屋で勉強してたらいきなり窓ガラスが割れたり、部屋の中のモノが宙を舞ったりし出すんだぜ？ しかも毎日毎日だ！ こりやあもう幽霊の仕業としか思えな
いだろ！ 仕方ないから勉強は図書館かなんかでするとしても結局、
寝る時にはあそこに帰らなきゃいけないから…。それを考えると
不安で不安で。勉強してても集中なんて出来やしねえんだ！」

「お、おう…」

最早何を言えいいのか。わからない三人。

その日の帰り道。交わす言葉も少ないまま歩く4人。

曲がり角に差し掛かった所で類が言う。

「じゃあ俺はここで…」

「お前、大丈夫なのか？」

心配そうに言う道重に対してムリヤリ笑顔を作る類。

「ああ。今日はゴメンな、変な事言って。なんか話したら楽になった
わ。もう忘れてくれ、平気だからさ。じゃあな」

そう言い残して去っていく類を見送り、再び歩き出す三人。

その中で最初に口を開いたのは田野倉だ。

「なんか全然平気じゃなさそうだな…」

そして少し間を置いてから言う

「それにしても類ってあんな事言う奴だっけ？」

首を横に振る道重

「いいや。少なくとも俺達の中では一番頭いいからな。あんな馬鹿な事言う奴じゃない」

続く水戸

「一回、病院かなんかで見てもらった方がいいかもしれないな…」

「ええ!!」

水戸の発言に思わず唾然とする田野倉

「それはちよつとヒドいんじゃないか！ 類がおかしくなったとか思ってたのかよ！」 「まあな」

「そんなツ！」

「まあ、落ち着けよ」

水戸はそう前置きしてから続ける。

「別にちよつと位おかしくなる事は人間としておかしい事じゃない。誰にだってありうる事だ。アイツ、悪ぶってるけどさあ、実際の所すごく繊細な奴だよ。いつも勉強なんかしてないって言ってるけど本当はメチャクチャやったりするだろ？ そういう真面目だったり優しくかったりする奴ほど自分を追い込み易いんだよ」

田野倉は一応納得しながらも釈然としない様子だ。

「でもいきなり病院とか連れて行かれたら類もいい気がしないと思うな」

それには水戸も頷く。

「まあ、それはそうだな。どうやって説得すればいいんだろ？」

「そんな事よりとりあえず類の言う事を信じてみようよ！」

田野倉の発言に怪訝な表情を見せる水戸

「幽霊が出るってのをか？ 無理だろ。てゆうか信じた所でどうすんだ？ ゴーストバスターズでも結成するか？」

「例えば幽霊に詳しい人を探してその人にどうにかしてもらおうとかさ」

「どこにいんだよ、そんな奴」

「いや、いるぜ」

田野倉と水戸の会話をしばらく静観していた道重が発言する。

「え？ マジで!？」

思わず叫ぶ水戸。

それとは逆に落ち着いたトーンで自身の坊主頭を示しながら言う道重。

「ほら、俺の家って寺やってるだろ？ それでさ何故だか昔からお祓いの依頼とか多くてさ…」

歓声をあげる田野倉

「じゃあ道重の家の人に聞けばわかるかもしれないな！」

しかし道重は少しかない様子だ

「ま、あんまり気は進まないがな…」

疑問を呈す水戸

「なんでだよ」

「実はさ。ウチの場合、親父はあんまりそういうの信じてないんだよ。お祓いとか心霊相談みたいなのは全部爺さんが担当しててさ。俺達も相談するなら爺さんにしなきゃいけないんだが…。これがまた気難しいジジイでさ。行っても嫌な思いするだけかもしれないぜ」

清浄寺

「バツカもーん!!」

東京都杉並区にある道重家が経営する寺社・清浄寺。

その境内に老人の怒鳴り声が響く。

そして本堂の中、正座で横一列並ぶ類、道重、田野倉、水戸の四人とそれに向かい合うようにして立つ老僧

「部屋に幽霊が出るじゃと!? 何を馬鹿ぬかしておる!」

説教をたれる老僧に対して孫である道重が反駁する。

「ちよつと爺さん、そりやないぜ! アンタよく余所の人の心霊相談にのつてやってるじゃねえか。だからアンタを頼ったつてのに…。いつものアレはインチキだったのかよ!」

それをうけた老僧は類を指差し言う。

「おい、その。お前もう一度、自分の身の回りで起きた事を説明してみい」

「あ、ああ…」

老僧の迫力に気圧されてかやや遠慮がちに語り出す類

「初めて異変に気づいたのは3ヶ月位前の事だな…。部屋で勉強をしていたら何の前触れもなくいきなり窓ガラスが割れたんだ。悪戯で何か物でも投げ込まれたのかと思ってすぐ外を確認したけど誰もいないし、投げ込まれた物は何だと思って部屋の中を探してみたけどそれらしい物は見つからない。だから変だなと思いつつもその日は原因究明は諦めた…」

「ほう、それで?」

「でもそれからそんな事が毎日のように続いて、しかも段々エスカレートしていった。ガラスが割れるのも最初は一日一枚だったのに平気で二、三枚割れるようになったし、部屋の中にあつたカップとかパソコンの画面とかそんな物にまで危害が及ぶようになった。その内、俺はガラスを張り替えるのを諦めて木の板を打ちつけたり物を置いたりで窓を塞ぐようになったんだけど、それすらブチ破るし…。悪戯にしてはかなり悪質だと思って警察に相談したけど原因はわから

「ず終いでさ」

そして少し息をついてから決意するように言う。

「正直、その時点で予感があったんだけど、これが幽霊の仕業だって確信したのはつい最近だ。ある日、部屋に帰ったら本棚の本やら机の上の鉛筆や置物やらがまるでダンスするみたいに空中に舞ってるんだよ。それで俺、怖くなって…。それ以来、何をやってても手につかないって感じてさ」

そこまで聞くと老僧は顎に手をつけて言う。

「察するにお主の身の回りで起きてるのはポルターガイスト現象という奴じゃな」

水戸が立ち上がり怒鳴る

「だからそこまでわかるなら早くどうかしてくれよ！ お祓いだから除霊だか知らないがよ！」

老僧がそれに負けない大声で怒鳴る

「だからお主らは馬鹿だと言うのじゃ！ 根本的に間違っておる！」

思わず腰を抜かす水戸に構わず続ける老僧

「原因が霊の仕業じゃったらワシにも手の施しようがあるが、ポルターガイストの原因は超能力じゃ。だからワシは専門外！」

「え？」

「は？」

一斉に首を傾げる4人。

何だこのジジイ、遂にイカレたか？ という疑問を飲み込んで道重が聞く。

「どういう事だ？」

「どうも何もそのままの意味じゃ」

田野倉が呟く。

「そんな事…ありえない…」

老僧は少し意外そうに言う。

「何じゃ？ お主ら心霊相談で来た癖に。幽霊は信じて超能力は信じんと言うのか？」

類がやや感情的に叫ぶ。

「だって！ 幽霊の方は確かにこの目で見たんだ！ だけど超能力だなんていきなり言われても…」

「だからお主が見たのは幽霊じゃなく超能力なんじゃ…と言っても信じられんか。仕方ない、これをやろう」

老僧が差し出した紙切れを受け取る類。

そこに書いてあるのは老僧の名前と連絡先。

「これは…名刺？」

「主らそれを持って警視庁へ行け。いいか？ そこらの交番や警察署じゃなく警視庁じゃぞ。そうすればきつと相談に乗って貰えるはずじゃ」

警視庁特殊犯罪対策課（1）

東京都千代田区、東京警視庁にやってきたE組の4人。類は受付に道重の祖父から渡された名刺を示して言う。

「スミマセン、特殊犯罪対策課をお願いします」

それから暫くロビーに設置されたベンチに腰掛けて待っていると一人の女性が4人に後ろから声をかける

「待たせてしまつてごめんなさい」

4人が振り向くとそこには背が高くスレンダーな体型にスーツがよく似合う、しかし警察というお堅い職業の割には肌がよく焼けていて遊んでいそうな感じもある、そんな雰囲気的美女が立っていた。

年齢はおそらく20代半ば位、小麦色の肌に大きな目がキラリと光っているのが印象的だ

「うお…」

自分達の周りにはいないタイプの美人登場に思わず息を飲む思春期の少年4人。

それを知る由もない女性は構わず自己紹介を始める。

「こんにちは。警視庁特殊犯罪対策課の出水愛です。清浄寺の和尚様の紹介で来た子達でいいんだよね？ よろしく」

「よ、よろしくお願いします…」

「じゃあ早速だけどついてきて」

女刑事・出水愛はキビキビとした口調で言い、少し遠慮がちになっている4人を引き連れて細い廊下へと入っていく。

長い廊下にはそれに面した部屋が十数ヶ所あったが出水愛はその全て素通りして突き当たりにある倉庫の前に立ち止まる。

そしてポケットの中からカードキーを取り出してドアについた認識装置にかざした後、暗証番号を入力してドアを開ける。

「ただの倉庫にしちゃ随分警備が嚴重だな」

その後ろでぼそりと言う水戸。

それに気づいてか出水は振り向いて悪戯っぽく微笑む。

「秘密の部屋だからね」

倉庫の中は細長い通路の様な構造になっており、壁際には棚がびっしりと並んでいる。

4人は薄暗い倉庫の中をスタスタと歩いて行ってしまう出水の後を時々無造作に置かれた荷物に躓きながらついて行く。

暫く歩いた後、倉庫の奥の方に行き着くと出水は突如右に方向転換して棚の影に入っていく。

目の前に現れたのは古ぼけて所々錆び付いた扉。

それを開けて中に入っていく出水について扉をくぐるとそこはまさに先程までの倉庫の延長線と言える様な荷物が多くて埃っぽい部屋だった。

壁際の本棚にはズラリと本が並び部屋の至る所に段ボールが積み重なっている。

部屋の中央には6〜7つ程、デスクが並んでいるが人が座っているのはその内一つだけ。

入り口に最も近い机にひよろりと痩せて眼鏡をかけた30代位の男がパソコンに向かって何か作業をしているのみである。

「田町さん、お連れしましたよ」

出水が男に声をかける。しかし机に向かう男・田町は反応する様子を見せない。

「くそッ、コイツまたかよ…」

出水はボソツと悪態をついた後、目一杯に息を吸い込んで叫ぶ。

「田町さん！ 連れて来ましたよ！」

「うわああー！」

椅子から転げ落ちる田町。不満げに甲高い声をあげる。

「ちよつと出水君、声が大きいよお」

腰に手を当てて強い口調で言う出水

「田町さんが作業に夢中で返事しないからでしょ？ いい加減疲れるんでそういうの止めてくれませんか？」

田町は口を尖らせ反論する

「だって仕方ないじゃん。ウクライナから興味深いレポートが届いたんだもん。これは昨年末に起きた集団失踪事件についてなんだけど

ね…」

「そんな事より！」

田町の言葉を遮る出水

「清浄寺の和尚様から相談があつた件で。被害者の少年とその友人を連れて来ましたから彼らの話を聞いてあげて下さ…」

「ウツヒョー！」

今度は田町が出水を遮り叫び声をあげる

「嗚呼、今日はなんていい日なんだ。こんな素晴らしいレポートを読めた上に事件がアッチの方からやってくるなんて…」

小躍りする田町。

それを心配そうに見つめる4人の学生達。

田野倉と道重が思わずヒソヒソ話をする

「あの人大丈夫かな？」

「アイツに相談するのかよ」

そんな様子を察して出水が必死にフォローする

「この人、あんなんだけど超心理学の分野では第一人者だから。安心して」

しかし類はその言葉に意外な反応を見せる

「おい、『心理学の第一人者』って…。俺はキチンと相談にのってくれ
る人がいるっていうから来たんだ。カウンセリング受けに来た訳
じゃねえぞ」

田町はそんな類の両手を一方的に握って握手する。

「おお。君が被害者の篠原類君だね。こんな面白い案件を持って来て
くれるなんて君、最高だよ」

「面白いだあ!？」

ムキになる類を無視して続ける田町

「でも誤解してるよ。超心理学ってのは簡単に言うとは超能力や超常現象
象に関する研究って事。まあ最も、最初に始めたのがフロイトとかの
有名な心理学者だったから物の考え方には共通点が多いし、その一分
野と捉えられる事もあるけどね。内容は全くの別物。だから君がお
かしいと疑ってる訳じゃないんだよ」

「お、おう…」

話についていけない類。ここは何となく頷くしかない。

田町はそれを好意的に解釈して微笑む

「うん、納得してくれたようだね。では本題に入ろう…」

そこから少し真剣な表情になる田町。

机の中から数枚、紙を取り出してから言う

「君の身の回りで起きた事については既に報告は受けてるよ。ポルターガイスト現象だったね。その原因を調べる為にまずこれをやってみて欲しい」

そして机から取り出した紙を差し出す田町。

受け取った類が目を通すとそこには見慣れない凶形や地図がズラズラ並んで印刷されている。

「なんだよこれ？」

首を傾げる類に田町は言う

「ちよつとした心理テストだよ」

警視庁特殊犯罪対策課（2）

「ふむ成る程ね…」

類のテスト結果を見ながら呟く田町

「勿体ぶらないで早く教えてくれよ。何がわかったんだ？」

道重が急かすと田町は頷いて言う

「うん、じゃあ教えてあげよう。テストの結果、類君は94.5%の確率で超能力ではない事が解った。おめでとう」

「はあ？」

首を傾げる4人。

その様子を見て顔をしかめる出水

「田町さん、それじゃ普通の人にはわからないに決まってるでしょ！」

意地悪せずちゃんと教えてあげて下さい」

「うーん仕方がない」

そう呟いた後、続ける田町

「じゃあまず類君の周りで起きた事象についての検証から始めようか…。君達さあ、ポルターガイスト原因って何だと思ってる？」

「幽霊でしょ」

田町は田野倉の回答に首を横に振る

「ブー。あれは超能力が原因なんだよ。君らサイコキネシスって知ってる？」

頷く道重

「ああ…。映画で見た事あるよ。物を宙に浮かしたりする…所謂念力って奴だろ？」

今度は田町が頷く

「そう。信じられないかもしれないけど、イメージはつくんじゃない？ あれは部屋で幽霊が暴れ回ってるんじゃないやなくて誰かが念力で物を動かしてる訳」

「まあ、どちらかといえばそっちの方が分かり易いかな…」

田野倉はひとまず納得した様子だがそこへ水戸が新たに疑問を呈す

「でも一体、誰が超能力なんて…」

「そう！　そこが問題なんだよ。で、僕はまず君自身が怪しいんじゃないかと思った」

田町は類を指差す。驚く類

「え！　俺が!？」

それと裏腹に落ち着いた口調の田町

「そこで先程うけて貰ったテストなんだ。実はこれ君を超能力者かどうか見分ける心理テストなの」

それを聞いて動揺を隠せない4人。代表して道重が問う

「そんな簡単に解るのかよ？」

「残念ながら現実には言えない。でも統計学的な問題でね。一般人、超能力者両方含めた数十万人に同じ様なテストを受けてもらった所、超能力者のほとんどがある数種類の回答パターンに当てはまっていた。つまりこのテストは類君がその回答パターンに一致するかどうか調べるのが目的だったんだ。しかし君はそれに当てはまらなかった。まあこのテスト自体、裏付けがある訳じゃなくて統計として結果を出してるだけだからどうしても例外はある。そういう意味で的中率94.5%と言われてるんだけど…。ともかく君が超能力者である可能性は低い。つまり現時点で君自身がポルターガイストを起こしているという可能性はほぼ消えた」

田町の長い説明を一通り聞くと類が質問する

「テストの意味とかはわかったんだけどさ、そもそも何で俺が疑われるんだ？　自分でやって自分で相談しにくるとか普通ないだろ」

再び首を横に振る田町

「いや、あり得る。君が自分を超能力者だと認識せず力をコントロールできないまま念力を使っている場合だね」

まだ疑問がある様子の類

「そんな事あるのか？」

「うん。それについては詳しい人がいるから後で連れて行ってあげればどさ。気を悪くしないでよ。何となくとかじゃなくて、僕もいくつか理由があつて君を疑ったんだからさ」

「理由？」

類が聞くと田町は逆に質問を返す

「ああ。説明の前にまず前提として聞きたいんだけど君は今まで超能力を発動したことはない。そうだよな？」

「当たり前だ」

「じゃあ君が原因でポルターガイストが起こっているとなると君が最近、自分でも気づかず後天的に能力を発現させたという事になる。ここまでではわかる？」

「なんとか」

「でね、能力を後天的に開花させるきっかけになるのが…もつと言うと普段使っているエナジーを超能力に転化するのに必要なのが…高い集中力、及び過酷なストレスと言われてるんだ。分かり易い例をだそう。君達、観戦するのが好きなスポーツとかある？」

類、水戸、田野倉、道重が順に答える

「俺はサッカーだな」

「俺もだ」

「俺は相撲」

「俺は野球部だし野球だな」

「ぶつちやけ種類はなんでもいいんだけど、そういったスポーツなんか見ててさ、普段は大した事ない選手が重要な試合の時、その日の一試合に限って何故か大活躍するのって覚ええない？ 『持つてる』ってヤツ？」

「ああ…」

一様に頷く4人を見て説明を続ける

「一つの試合にかける思いが時に普段からは考えられない様なパフォーマンスを生み出す。それが『集中力が高まって超能力が発現する』ってのに非常に近い現象だね。ただこれはあくまで普通の人に見える範囲での場合。それを、念力、予知といった超能力に転化するには更に物凄い力が必要だ。例えば僕の説だと昔の文献にある仙人とか魔術師とかも超能力なんだけど…そういう人達が能力を身につける為に何年も山奥でやる瞑想修行みたいな。そんな想像を絶する集

中力だね」

「うん…」

「ではここで話を類君の例に戻そう。君、最近山籠もりとかした？」

類はやや呆れたように返事をする

「ねーよ」

「でも君には僕に超能力を発現してるんじゃないかと疑われる特殊な要素がある。何だと思う？」

思い当たる節がなく口ごもる類。

助け舟を出す様に横から水戸が言う。

「もしかして受験か…？」

田町は人差し指を立てる

「ビンゴ！」

「でもそれっておかしいぜ」

そう疑問を呈すのは道重だ

「超能力を発現するには仙人の修行に匹敵する集中力かストレスが必要なんだろう？ 受験生なんて何万人もいるんだ。みんながそんな風になってたらそこら中、超能力者だらけだぜ？」

「勿論、数万人に一人のケースではある。でも超能力絡みの事件の中ではそう珍しくもないんだ」

「じゃあ毎年何人かはいるって事？」

田野倉の質問に頷く田町

「まあね、僕も何人か見た事があるよ。道重君の言う『受験で超能力が発現したら超能力者だらけ』というのはごもつともだね。基本的にはいくら本人にとって大切な事でも日常生活で誰もが経験する程度の精神的負担で能力が発現するなんてありえない。ただ10代の若者というのは感受性が豊かだからね。それが原因でその先ずつと超能力者になってしまっただけでいかなくても一時的に能力を発現してしまう事がある。ただこれは一時的な物だから受験が終わって原因が取り除かれれば自然に治まるよ」

「じゃあそんなに心配いらないじゃん！」

そう叫ぶ田野倉に対して田町は首を横に振る

「いや、だからさ。話が逸れたから忘れちゃってるかもしれないけどさっきのテストで類君は超能力を発現してないって結果になったでしょ」

「あ、そっか。」

思い出した様に言う田野倉の横から道重が言う

「結局どういう事なんだよ。早く教えてくれよー」

それを聞くと田町は急にあっけらかんと言う

「それが…分かんないんだよねー」

「はあ!？」

ひっくり返る4人。田町は頭をかきながら続ける

「類君じゃなければ類君の家族の可能性が高いかなと思っただけで事前調べておいたんだけど…。同居してるのは両親のみ。お母さんは専業主婦、お父さんは普通の会社員で社会に出てから今の会社にずっと勤めてる…。これでいいんだよね?」

頷く類

「ああ。兄貴は北海道の農大に行ってるから、今、家には両親と俺だけだな」

「だとすると家族の線も薄い」

「何でだ?」

「さっきも言った様に日常生活におけるストレスで能力を発現できるのは若者だけだ。大人でも例外はあるけどそういう精神の持ち主が類君のご両親の様に一つの会社ですつと働いたり、まともに子育てしたりはありえない。仮に類君のご両親がポルターガイストを引き起こしてるとなると人生そのものを左右する様な相当大きな精神的負担がかかっているはずだけど心当たりはあるかい?」

首を横に振る類

「無いな。少なくとも俺の知る範囲では…」

「じゃあ現時点で考えられるのはただ一つ」

そう前置きした田町は類を指差しながらやや大袈裟に言う

「君、超能力者から攻撃を受けてるね」

「え!？」

その発言に耳を疑う4人。

水戸が言う

「そんな漫画みたいな事、あるのかよ?」

頷く田町

「当然だね。自分で能力を自在に操れる超能力者がその気になれば容易い事。この特殊犯罪捜査課だってそういう事件が後を絶たないからできたようなモノさ」

一気に青ざめる類に代わって田町を問いただす道重

「それってヤバいんじゃないのか!？」

「勿論。かなりヤバい。もしそうなら相手は今までも類君を殺そうと思えばいつでも殺せた筈だ」

「オイオイ…。どうにかなんないのかよ!? てかそんな攻撃を仕掛けてくる超能力者ってのはどこのどいつなんだよ!!」

「ちよつと落ち着いてよ」

田町は慌てる道重を静止して言う

「悪いけどここから先の話は僕達だけじゃ進められないんだ。僕ら特殊犯罪捜査課の担当は超能力を使った犯罪の捜査と分析。今回みたいに攻撃してくる超能力者からの防衛となると警察じゃない別組織の担当なんだ。だから今から君達をそこへ連れて行く」

「何だよ、警察も頼りになんねえなあ」

水戸の発言に対して出水が言う

「ごめんなさい。でも所詮警察は国家の組織。法律で規定された範囲でしか動けないし、武装もできない…。あなた達を守るには私達じゃ力不足なの」

付け足す田町

「でも安心してよ。その組織、宝来財閥が私的に創設した組織なんだからだよ。正直言って宝来財閥の超能力研究は国家機関の研究より数段先をいってるよ」

首を傾げる水戸

「宝来財閥…? あの有名な?」

「うん。ほら、今の国家公安委員長って宝来財閥の血筋の人でしょ」

頷く水戸

「ああ…宝来祐二か。確か会長の兄弟なんだっけ？」

「そうそう。宝来財閥は以前から極秘に超能力の研究を続けていたらしいんだけどね。祐二さんが国家公安委員長になって更に息子の勝広さんが入庁してからは警察との交流が活発化したんだ。今では宝来財閥なしの超能力捜査なんてありえないね」

「そこまで聞くと暫く黙っていた類が口を開く」

「で、その組織は何て言うんだ？」

答える田町

「超常戦隊サイコレンジャー…」

第十三話 恐怖のポルターガイスト (後編) 来客

サイコロレンジャー事務所内。机を囲み食事をとる5人とそれを見守るアスぴよん。

食卓にはいつもと同じく無駄に豪華なメニューが並んでおり5人はそれをじっくりと味わっている

—ピンポーン

そこへ玄関のチャイムが鳴る。

それを受けて口を開く里菜。

「来客とは珍しい…。誰だろう？ 新聞の勧誘か何かなら追い返すのだが…。明日香、千里眼で確認してくれ」

「わかったわ」

そう返事をした後に数秒間の沈黙を挟んでアスぴよんは言う

「心配いらないうみみたいだから開けてあげて。田町さんと出水さんよ」

「あれ？ それ誰だっけ？」

首を傾げる龍我に純が言う

「龍我君も会った事なかったっけ？ 警視庁の特殊犯罪捜査課の人なんだけど」

「ああ！ フィギュアスケートの事件の時に麻由美ちゃんをここに連れてきた勝広さんの部下の人だね？」

「そうそう」

「あの時は話を聞いたらすぐ任務って感じだったからまともに自己紹介もできなかつたんだよね…」

龍我はそう言うと言子から立ち上がる

「じゃあ俺、出てくるよ」

—ガチャ

龍我がドアを開けるとそこには田町、出水に加えて4人の男子高校生姿

「こんにちは実は…」

話を始めようとする出水を制止する龍我

「ここで立ち話はマズいんでとりあえず中に入って下さい」

「あ、そうですね」

龍我の先導に従って事務所内へ入っていく一同。

机に座るサイコロレンジャーの面々が見えると先頭に躍り出た田町が言う

「やあ皆さん、こんにちはあー」

やたらテンションの高い田町に里菜は迷惑そうな表情を浮かべる

「何の用で来た？」

「ん？」

声のトーンから里菜の様子に気づいた田町が辺りを見渡してサイコロレンジャー達の表情を確認すると、雄真は明らかに苛立った顔で凌はわざと視線を逸らすように自分の手もとを憂鬱そうに見つめている。

純に至ってはコチラを敵対するように激しく睨みつけていた。

そして龍我だけが真横でキョトンとした表情を浮かべている

「あらら。もしかしてあんまり歓迎されてないのかな？」

田町の暢気な発言に声を荒げる雄真

「当たり前だろ！ お前みたいなのが俺達を実験台としか思っていない奴が歓迎されるとも思ったか!？」

「ちよつと人聞きが悪いなあ。僕は君達を興味深い研究対象だとは思ってるけど実験台だなんて思っていないよ」

「一緒じゃねえか！」

ヒートアップしそうな雄真を諫める凌

「やめなよ、雄真」

「でもコイツよー」

「気持ちわかるけど。これも仕事だよ」

「チツ、わかったよ！」

雄真が納得した様子を見せると凌は次に横にいる純の肩に手を置いて一言言う

「ホラ、純も」

純はそれを聞いてはじめて自分が物凄い顔で田町を睨んでいた事に気づいた様で一瞬ハツとした表情を浮かべてからいつもの柔らかい表情に戻った。

凌はそれを確認してから田町らに対して椅子に座るように手振りで促し、そして言う。

「じゃあ話を始めましょう」

議論

「なるほど。自宅でのポルターガイスト現象……。しかし本人も家族も能力者だとは考えにくいかな……。なかなか厄介ですね」

今回の被害者である類と田町から一通り話を聞くと凌はそう言った。

それに頷く田町

「これで今日ここを訪ねた理由は納得してくれたかな？」

「ええ」

凌の同意を得ると田町は里菜を指す

「君はどう思う？ 専門家として」

その言葉を聞くと里菜が答える前に類が反応する

「アンタがさつき言ってた『ポルターガイストに詳しい人』ってあの姉さんの事だったのかよ。そうは見えないな」

「だって彼女は生まれながらにサイコキネシスを使える超能力者だからね。幼い頃はよくポルターガイスト現象を引き起こしていたせいで気味悪がられて孤児院を盪回しにされていたそうだから正に今回の件にピッタリのアドバイザーだよな」

「へえ…そいつは頼りがいがある」

類が満足げにしている傍で雄真が舌打ちをしている。

里菜の過去をベラベラ話す田町が気にくわない様だ。

しかし里菜本人はそれに対して全く無関心に答える。

「恐らくそちらの見解通り、超能力者による攻撃と見ていいだろう。それが意識的なモノなのか無意識なのかは不明だがな」

それに質問する水戸

「攻撃するのに無意識ってのはどういう事だ？」

「仕組みとしては自分自身で能力を発動する時と同じだ。集中力及びストレスの高揚によって発動する。だがその感情の高まりが誰かに対する怨みや強すぎる恋愛感情による物だった場合、その矛先が対象者に向く事がある。俗に言う呪いだ」

「呪いって…。マジかよ…」

里菜の回答に絶句する高校生4人。

凌が4人を落ち着かせる様に優しい口調で語りかける

「どつちにしろさ、犯人は類君個人に対して怨みを持つ人物である可能性が高い。心当たりないかな？ ソイツを押さえれば一気に解決なんだけど」

「うーん…正直言つて沢山いるな」

類の言葉に雄真は思わず声をあげる

「あ？ お前ら、そんなに悪さしてんのか？」

「学校じゃ結構粋がってる方だしなあ…。先公にはよく怒られてるし、生徒でも真面目に勉強してる奴の中には面白くないと思ってる奴もいるだろうな」

「カカカカカ！」

それを聞いて田町は奇妙な声で笑つてから言う

「だからさつきから言ってるじゃん。超能力の発現には何らかの特殊な状況からなる極度の感情の高まりが必要なんだって。その程度の事じゃなくてさ。君の事を殺したくて殺したくて堪らないという人の心当たりがしりたい訳」

それを言われると類は口ごもってしまう

「うーん…それ言われるとなあ…今度は逆に誰も思いつかないな」

そんな類に対して純が明らかに悪意のある聞き方をする

「イジメとかは？ してないの？」

どうやら純は類の様なヤンキー系はちよつと嫌いならしい…。

というのが「純、ちよつと…」と声をかけた凌以外の面々にもその一言でよく伝わった。

それを悟り田野倉が類をフォローする

「いや類はそんな事しないよ。てかさあ…」

それ以上言葉の出ない田野倉が変わって水戸が続ける

「俺達、見た目はアレかもしれないけど正直言つて大した事はねえんだよ」

「オイ、余計な事言うなよ」

類がすかさず止めるが水戸は

「素直に言わねーと埒あかないだろ」

と言つて続ける

「俺達の行つてる学校つて地元じゃ有名な進学校なんだよ。そんでクラスもA〜Eまで成績の高い順で決まつててき。俺達E組は最下位。自分で言うのもアレだけど落ちぶれちまつてちよつとグレてるだけなんだ」

同調する田野倉

「つまり俺達、元は優等生だからさ。そんな大それた事はやってないよ。特に類なんて

…」

——ガタツ！

田野倉の言葉を遮つて立ち上がる類

「余計な事、言つてんじゃねえよ！」

そう言い残し類はドアを開けて事務所から出て行つてしまう

「ちよつとー！」

「類君！」

龍我と出水が同時に追いかけてよとしようとするが凌はそれを制止する

「追わなくていいよ。事情は大体わかつたし、本人がいると話しくい事もある」

「でも彼、狙われてるんだよ？」

龍我が反論するが凌は落ち着いた口調で言う

「大丈夫。彼は安全だよ。今回、異変が起こつてるのは彼が部屋にいる時だけ。それ以外の時は狙つてこないよ」

今度は出水が反駁する

「今まではそうだったけどこれからもそうだとは言い切れないでしょ？」

凌はそれに対して冷静に答える

「相手にその気があるなら類君に危害を加えるチャンスは今まで何度もあったはずだよ。なのにそれをしなかつたつて事は最初からそうするつもりがなかつたつて事さ。だから放つて置いてても平気だよ」

そこまでのやりとりを見て首を傾げる雄真

「だがわかんねえなあ…。超能力を発現する位の強い怨みがある癖にやってる事は嫌がらせレベルってさあ」

それに反応して一同に問いかける純

「確かに。じゃあやっぱり犯人は無意識の内に超能力を使ってるって
いうのが有力なんじゃないかな？ 犯人は類君に対して怨みはある。
でも超能力者としての素養が低いか精神的な追い込まれ方が少し足
りないかで微弱な現象しか起こせない…と」

反論する田町

「可能性としてはあり得るけどさー。類君の周りではもう2、3ヶ月
ポルターガイストが起きてるんだよ？ 君や里菜君ならわかると思
うけど超能力って次第に強力になってしまう物じゃない？ これだ
けたってるのに未だポルターガイストだけなんておかしいよ。僕は
意図的な攻撃だと思っけど」

口を開く雄真

「じゃあ相手は物凄く類を怨んではいるが我慢して嫌がらせで済ませ
うとしてるって事か？」

首を横に振る田町

「それも考えづらいよね。そもそも殺意がないと後天的に超能力なん
て発現しないもん」

怒鳴る雄真

「意図的な攻撃だつったのはテメエじゃねえか！ じゃあ何だつて
んだよー！」

悪びれない田町

「それをみんなで考えようと思つてここまで来たんじゃない」

雄真が怒りに震えていると龍我が唐突に手をあげる

「じゃあ犯人は類君への怨みで能力を発現した訳じゃないって説はど
う？」

聞き返す純

「どういう事？」

「類君さあ、殺される程の怨みはかってないけどちよつとした怨みは
かってるかもつて言つてたでしょ？ だから類君がそのちよつとし

た怨みをかっした相手がたまたまそれ以前から超能力を自在に使える人だったんだよ。で、その人は類君にムカついてはいるけど殺す程じゃないから嫌がらせしてるって事。これなら別に特別強い怨みがなくても大丈夫でしょ?」

しかし里菜がそれを否定する

「面白い説だがそれもないだろう。篠原類が普段かうような軽い怨みでいちいち復讐を考えるような奴が犯人ならソイツはいったい今まで何人に報復攻撃して来たんだ? そんな軽率な犯人なら今回の事件の前に我々がとつくに情報をキャッチして捕まえている。お前の様にな」

「ぐっ…」

龍我は痛いところを突かれたという表情を覗かせながらも苦しい反駁を試みる

「でも俺の時は俺が何億も稼ぐまで結構長い間捕まえに来なかったじゃん」

間髪いれず返す里菜

「馬鹿にするな。お前のケースは人の命が危険に晒されている訳ではなかったから後回しになっていただけだ。やろうと思えばもつと前に捕まえられた。我々は全ての事件をキャッチしている訳ではないが以前からこれだけ派手に犯行を行っているのであればその情報位は手に入れられる」

「じゃあアレだ…。今回、たまたま初めてだったんだよ…」

「だから言っているだろう。それしきで復讐するような奴なら以前からやってるはずだ」

「でも何にだって初めてってあるじゃん! 今回たまたま初めてだったんだよ! ホラ、人によって怒りの沸点って違うじゃん。今までは能力使うの我慢してたけど類君にやられた事は我慢できなかったんだよ! あとはそうだな…。細かい事が積もり積もってとか」

もう否定すらない里菜に代わって凌が言う

「それもなくはないけどさ。君の説って『たまたま』が物凄く多いよね」

そこまで終わるとあらかた意見も出尽くした様で一同は沈黙する。
そんな中、切り出したのは道重である

「ちよつと質問なんだけど…」

「何だい？」

「始めに聞いた話では超能力って集中力がストレスで目覚めるって話だったけど何で怨みでも目覚めるって話になってんだ？」

答えるのは田町

「ああ…。わかりづらかったかな。怨みも一種のストレスと考えてよ。ホラ、嫌いな奴の事考えるとイライラするでしょ？」

「つまりイライラする事なら超能力に目覚めるキツカケになるのか？」

「というか、ストレス源って色々あるからね。別にマイナスな事だけじゃなくても、例えば転居や進学、転職なんかで新しい環境に馴れようとする時なんかも相当ストレスがかかる。ただ勿論、ストレスを受ける側に感受性の強さがなければ超能力を発現する所まではいかな

いけど」
そこまで説明すると続けて田町は興味深そうに言う

「何か心当たりがありそうだね？」

「ああ。例えばプレッシャーなんかでもいいのかな？」

「なるほど…」

「ああ！」

「そうか！」

道重の言葉を聞くと田町、出水、龍我が声をあげる

「どういう事だ？」

まだピンときていないメンバーを代表して里菜が尋ねると出水が道重の方を見て言う

「つまり犯人は受験のプレッシャーで超能力を発現したという事でしょ？」

頷く道重。しかし雄真はまだ事情がわからず思わず口を出す

「は？。俺も受験生が一時的に能力を発現する事が多いってのは知ってるが…。何でそこで受験が出てくるんだ？」

龍我が言う

「ホラ、類君達、三年だから今年受験じゃん」

「それはわかっているよ。でも本人が超能力者って説はもう否定されてるんだろ？」

「うん」

「じゃあ受験だろうが何だろうが関係ねーじゃん」

一向に理解できない雄真に出水がやや呆れたような口調で言う

「類君が能力者だって言ってる訳じゃなくて。道重君が言ってるのは犯人が類君と同じ受験生なんじゃないかって事」

道重が続ける

「実は類の奴、ああ見えて学年一位の成績だからさ。このまま行くと福沢大への指定校推薦が受けられるんだ」

受験経験のない純が首を傾げる

「指定校推薦って…何だっけ？」

答えるのは東大休学中の龍我

「推薦入試の一種で合格率がとて高い試験なんだ。ただ、大学側が『この高校ならいい生徒を推薦してくれるぞ』っていう信頼度に応じて高校側に推薦人数の枠を設けてるから、各学校から限られた人数しか試験を受ける事ができない」

「じゃあその決まった枠の人数以上に希望者がいたらどうなるの？」

「その学校によってだけど基本的には成績順に選ばれると思うよ。あとは部活とか委員会やってると有利って話もあるけど」

龍我が話し終えると道重が説明を引き継ぎ語る

「ウチの学校にある福沢大への推薦枠は一つだけ。だけどあそこって私大ではかなりの有名所だろ？ だから毎年希望者が殺到して激戦になるんだよ。勿論、今年も例外じゃない。類もそうだし、沢山の成績上位者が推薦を希望してる。今の所は類が一番有利なんだけどさ。アイツ、教師から評判悪いから。ちよつと成績下がると他の奴に推薦枠持っていかれちゃうかもしれないねえんだよな」

「なるほどー」

やつと事情を理解して手を叩く雄真

「犯人はその推薦枠を狙って類の勉強を邪魔する為にポルターガイストを起こしてたって訳か」

凌が続く

「じゃあ犯人は類君が成績を落とせば推薦枠を狙える他の成績上位者って事だね」

領く田町

「そういう事になるよね」

凌は噛み締めるように言う

「これならこの事件の犯人像にピッタリ合致するね。ごく最近、超能力を後天的に発現させた人物で、それを可能にする条件、即ち多感な若者である事と受験による高いプレッシャーが備わっている」

領いて続く里菜

「この説なら、能力発現の原因も動機も怨恨ではないから犯人が篠原類を殺さなかった理由も説明がつく。犯人からすればあと数ヶ月間、篠原類が成績を落としてくれればいいだけだからな…」

雄真が言う

「そうだな。じゃあその線で調べていこうぜ！」

「ああ」

「そうだね」

一同が同意する中、純がポツリと呟く

「でもなんか意外だなあ。類君、あの見た目で成績いいなんて」

そう言われて気づく龍我

「あつ、そう言えば。さつきから違和感あると思ってたんだけどそこか！」

「え?」

「だって、みんなのいるE組って成績最下位のクラスなんでしょ? 何で類君は成績上位なの?」

ため息をつく水戸

「類はさ、成績でE組に落とされた訳じゃねえんだよ」

「そうなの?」

驚く龍我に領いてから説明する水戸

「アイツの場合、成績より態度とか服装が原因だな。結構いるんだぜ、そういう奴。まあ大体の場合はE組に落とされた事でやる気なくして成績も下がるけどな」

納得したように言う雄真

「朱にまじわれば…って奴か」

「まあな。でも類はE組に落ちてもずっと勉強やめなかった。根が真面目なんだよ」

水戸の言葉に続く道重

「アイツ、周りが遊んでても他の組の生徒や教師達に冷たい目で見られても、誰も褒めてくれやしないのに人目につかない所で頑張ってたんだ。真面目な奴からしたら当然なのかもしれないが、俺達はアイツのそういう所を尊敬してる」

田野倉が改めてサイコレンジャーの面々と田町、出水に頭を下げる
「頼むよ。一刻も早く犯人を見つけしてくれ。俺達、類を合格させてやりたいんだ」

三人の言葉に答える里菜

「当たり前だ。そう改めて言われなくても犯人は必ず捕らえる。それが我々の使命だからな」

それから数分の話し合いの後、捜査の方針が決定された。

里菜が状況を整理する

「これまでの情報から推測するに犯人の目的は篠原類の受験勉強を妨害する事。しいてはそれによって指定校推薦の推薦枠を奪い取る事にある。つまり犯人は第一中野学園三年生の成績上位者である可能性が高い」

それに補足する道重

「本人曰わく、一番成績のいいA組でも類とテストの点数でまともに勝負できる奴は2、3人だって言ってたぜ」

それを聞き雄真が勢いよく言う

「って事はつまりソイツらをピツタリとマークして能力を使った所で

現行犯逮捕すればいい訳だな」

頷く田町

「そういう事。じゃ、早速始めようか…って動くのはサイコロレンジャーの皆さんただけどねえー」

そうしてそれぞれ動き出そうとした所で龍我が一同に声をかける

「ねえ、ちよつと！」

ペースを見出された雄真が少しムツとした表情で言う

「お前、本当にそういうの多いな。今度は一体何だ？」

「まだ類君が帰って来てないけど始めちゃうの？」

ハツとした表情になる雄真

「そう言えば！」

しかし凌は言う

「このままでいいよ」

「え？」

「彼に何か知らせて余計な事されるとマズいしき。類君の事は暫く泳がせておこうよ。うまく行けば獲物が食いついてくれるかもよ」

加賀谷陸

その日の夜。篠原類の自宅前。

電柱の死角に隠れながら玄関の様子を見張る眼鏡をかけた少年。

学校帰りにどこかに寄ってそれからここに来たらしく学ラン姿で所持するバッグも所謂通学鞆である。

その鞆についた定期入れ。そこに加賀谷陸という名前が書かれている。

加賀谷陸は第一中野学園3年A組の生徒で定期テストの成績では常に上位に入る、周囲にも一目置かれた存在である。

だが大学受験に際して彼は焦っていた。

模擬テストの成績が悪かったのである。

加賀谷陸は関わる人々に優等生であるとされながら今まで自分を真面目だと思った事がなかった。

素行が悪いと言う訳ではない。

しかし、他の成績上位者に比べて特別何かしている訳でもなかった。

塾や予備校に通う訳でもなく独学で必死に勉強している訳でもなかった。

要するに彼は何もしなくても出来がいいのである。

だから元来が気楽で無関心な彼は周りの友達が塾に行っている自分はそのそこ成績がいいので何か受験の為に行動するという事はなかった。

だが周囲の環境は彼を放ってはおかなかった。

3年生になると生徒の進路が自分の評価に繋がる担任教師は勿論、中学時代まではそこまで教育熱心という訳でもなかった両親までもがしきりに受験の事を話題に出し、偏差値の高い学校を進路として勧めてくるようになったのだ。

結局、陸は勧められるがままに志望校を福沢大、大隈大といった私立大の最難関に決めた。だがこの時点では陸もそこまで焦る事はな

かった。

高校に入る前から試験という試験、いつもなんとなくクリアしてきた。きつと今回も平気だろうという腹づもりがあったのだ。

しかし、その考えもある日を境に変わる事になった。

それは2ヶ月程前、3年になって初めて行われた模擬テストの結果が返ってきた日の事であった。

このテストは所謂三大予備校といわれる予備校の内の一つが主催する物でその生徒の他、全国の進学校の生徒が参加する、入学試験を受けるにあたって非常に重要な目安になる物である。

陸はこの手のテストを受けるのは初めてであったのだが、返ってきたテスト結果を見て愕然とした。

陸の成績は志望校に遠く届かない、それどころか全国平均で言えば半分以上の点数だったのだ。

陸はそれを見て初めて受験と定期テストの勉強は全く違うのだと気づいた。

陸が今まで定期テストの為にしてきた勉強といえば主にテスト直前の一夜漬け。

出題範囲の広い大学入試でそれは通用しないのだ。

今までも担任や友人から口を酸っぱくして言われていたが実感したのはこの時が初めてだった。

その結果を見せると担任も態度を変えた。

自分を見る冷たい目。それで初めて焦りを覚えた陸。

塾にも通い始めたが出遅れは取り戻し難くなかなか成績はあがらない。

こうなったら今までの定期テストでもぎ取って来た好成绩を武器に推薦を目指すしかないがそれにはあと2回ある定期テストでE組の篠原類を上回る成績を残すしかない。

苛立ちを覚えながら勉強していると陸の身の回りに不思議な事が起こるようになった。

問題が解けずにイライラしている時や試験の事を考え不安に襲われている時。

突然部屋の中の物が勝手に動いたり窓ガラスが割れたりするようになったのだ。

誰かに相談しようとも思ったが冷静に考えると相談した所で信じてもらえないだろう。

問題の原因は自分の精神面にあると感じていた陸は常に冷静を保つ事でこの現象を止めようと考えた。

しかし陸の置かれた現状がそれを許さなかった。

受験が近づけば近づく程、早く能力を止めようとする程に現象はエスカレートしていった。

あの女に出会ったのはそんな頃だった。

ある日の夜。女は塾から帰る陸の前に唐突に現れた

「こんばんはあ」

話しかけられた陸はその髪の毛の短い女の顔を覗き込むが見覚えがない

「あの、誰でしたっけ？」

女は何も言わずに微笑むと落ちている小石に手を翳す。

するとそれがフワフワ浮き上がった

「すごいでしょー。これ私の超能力なんだあー。もっと詳しく知りたくない？」

その後、陸は女の隠れ家に連れて行かれた。

女はそこで能力の扱い方や論理を陸に伝え、そしてこの力をうまく使えば篠原類を出し抜き推薦資格が得られるだろうという事まで教えてくれた。

陸は助かった反面、怪しくも思い女に「なぜこんな親切にしてくれるのか」と問いただ

「した。女からの返答はこうだった

「私い、ある人から君達の学校の事聞いてねえー。なんか不良が推薦取りそうなんでしょ？ 真面目にやってる人が報われないなんて許せなーい」

正直、女の正体も目的もわからない。でも、そんな事どうでも良かった。

これで奇妙な現象の事も受験の事も一気に解決したのだから

V Sモグラ型超力獣

いつも通りに篠原類が帰ってくるのを待ち伏せる陸。

そこへ図書館で勉強を終えた類が帰宅する。

陸は篠原家の二階、類の部屋に電気が灯るのを確認すると窓に向かって手をかざす

「ごめんね、でもこれしかないんだよ」

そつと呟き、能力発動の為に全神経を集中させて念じ始めた。

掌には普段では有り得ない程に力を込める。

その事によって痛みが走る位だったが、能力の発動に集中すると段々とそれも気にならなくなってくる。

そしてその内、全ての感覚が麻痺して独特の浮遊感が身体を包む。

—これだ、この感覚だ。

暫くした後、集中力の尽きた陸は膝を突き道に崩れ落ちる。

能力を発動させている間は意識がないのでどの位の時間ここにいるのか、あるいは能力によって篠原類がどれだけダメージを受けたのか自分では全く実感が無い。

ただ、最近の定期テストで篠原類の順位が落ちていたのを見ると、やはりこの方法に間違いはないらしい。

これで今日もミッション完了だ。

陸は安心して家路につこうと後ろを振り返る。

しかしそこで自分の真後ろに知らない男女が立っている事に気がついた。

どうやら能力の発動に気をとられている間に回り込まれていたらしい。

男の方は肌の色が白くパツと見るとやや女性的に感じてしまうような優男だが目だけが妙に冷たい。

女は背が高くスラツとした体系で美人ではあるが少し近寄りがない印象だ。

サイコレンジャーの風祭凌と一色里菜である

「高校生がこんな時間に何をやっている?」

里菜に聞かれて苦し紛れに答える陸

「あ、いや。大した事じゃなくて…」

何だ、コイツら？ 何とか理由をつけて逃げないと…。

まあ、いざとなったら超能力で攻撃すれば…。

陸がそんな風に考えていると凌が陸の腕をガシツと掴む

「能力は使わせないよ」

え？ バレた!? 何故!? 何者…？

するとまたも凌が陸の思考を先読みして言う

「君の考えている事くらい僕には解るんだよ」

その言葉に逆上し、二人を攻撃しようとして掴まれたのと反対の手をかぎす陸。

しかし能力が発動しない

「な、何で？」

里菜が言う

「残念だったな。お前は今の精神状態で超能力を使う事はできない」

「え？」

「今日一日、お前をつけさせてもらった。その中でお前が能力を使つたのは今の一回だけだが、その一回を見ただけでもお前の能力が大したモノでない事は解る」

「どういう事だよ…？」

「お前、能力を使っている間に我々が回り込んでいる事に気づいていたか？ その上、私達はお前の肩を叩いたり話しかけたりしていたんだぞ」

全然気づかなかった…。

陸は背筋が凍りつくのを感じた

「そんな…」

「つまりお前はその他全ての感覚を捨てて能力の発動に神経を集中させなければサイコキネシスを使えないという事だ。これは意識して超能力を使うようになって間もない人間によくある状態。つまりお前は超能力の初心者。こんな風に動揺した状態では能力が暴発する事はあれど思い通りに能力を使う事は出来まい」

凌が続いて言う

「その点、僕は生まれつきの超能力者だからね。喋りながらも戦いながらもでも能力を発動できる。悪いけど大人しく僕らに従ってくれないかな？」

弱々しく言う陸

「これから僕はどうなるんですか？ てかアナタ達は何者なんです？」

凌は右手を軽く差し出し笑顔を作って答える

「僕はサイコレンジャー。超能力による犯罪を取り締まっているんだ。君も自分がやった事がどういう事かはわかるでしょ？」

黙って頷く陸を見て続ける凌

「君の身柄は一旦拘束させてもらう。でも君が今考えているような恐ろしい事はしないから安心してよ」

「拘束って…期間はどれくらいになるんです？」

「それは君次第かなあ。解放できるのはもう超能力を悪い事には使わないと誓ってもらって、それから養成学校で能力の正しいコントロールの仕方を覚えてもらってからだから。まあ普通は半年位だね」

「そんなに!？」

「まあ一般的にはね。でも君の場合は一時的に能力が発現してるだけっぽいから2, 3ヶ月で済むと思うよ」

それを聞くと陸が突如叫んだ

「ダメだ！ それじゃ次のテストに間に合わない！ 推薦がとれなくなっちゃう…いや、そんなに休んだら留年だよ！」

興奮する陸を諭すように言う里菜

「心配するな。コチラから手を回してテストは後日受けられるようにしてやる」

首を横に振る陸

「それでもダメだよ！ ウチの学校じゃ後日テスト受けても参考記録にしかないから、留年はしないけど推薦はうけられないよ！」

里菜は毅然とした態度を崩さない

「それは仕方がないだろう。それがお前の犯した罪の重さなのだか

ら。推薦は諦めろ」

いかにも納得していなさそうな表情を浮かべる陸に凌がトドメを刺す

「てゆうかさあ。こうして毎日嫌がらせしてる位ならその時間、しっかり勉強した方が建設的だと思うけどな。いくら類君の成績下げた所で自分の成績があがらなきゃ意味ないじゃない。推薦とれそうな成績上位者は他にもいるんでしょ?」

逆上した陸は「うわあああ!」と大きな声をあげて逃げ出そうとするがその身体を凌が掴む

「だから無駄だつてば」

だが、その時である。

もしもの時に備えて凌と里菜が陸に接触するのを隠れて見張っていた龍我がゴミ捨て場のポリバケツの中から飛び出して来て叫ぶ

「凌! 里菜! マズい! 超力獣の気配がする!」

「超力獣だ?! そんなバカな...」

里菜がそう言いかけた瞬間、ピシツピシツと音がして道路のアスファルトにヒビが入る。驚いて陸の身体を離しその場から距離をとる凌。里菜も飛び跳ねる様に後ろへ距離をとる。

陸はその隙に逃げ出すが追う者はいない。その姿が夜の闇の中へ消えていく

—ピシツ、ピシツ、バリバリツ、バリツ

道路に入った亀裂が段々と大きくなっていく。

そしてやがてモグラ型の超力獣が地中から派手に出現した

「嘘でしょ?」

「くそッ!」

その様子を見て龍我同様、身を隠していた純と雄真が物陰から姿を現す。

超力獣と向かい合うサイコレンジャーの5人

「どういう事だ...?」

眩く里菜。

それを聞いて龍我が他4人の顔を見ると皆一様に動揺した面もち

を浮かべている

「どうしたの…？」

龍我が問うと一番近くにいた雄真が答えるというよりはただ疑問を呈しているというような口調で言う

「あの超力獣…一体誰が作ったんだ？」

「え？ さっきの加賀谷陸君じゃないの？」

龍我の言葉に対して首を横に振る里菜

「それはありえないぞ、龍我。超能力者としての力がある程度強くな
くても超力獣は作れない。加賀谷陸には不可能だ」

「てことは他の誰かが超力獣を使って陸君が逃げるのを手伝ったって
事？」

龍我の言葉に頷いて凌が言う

「うん、もしそれが築地で戦った少年や大学の事件の田中利伸が言っ
ていた男ならここ最近の超力獣事件の真相に一気に近づけるかも…」

その言葉を聞いた純がハツとした表情で言う

「じゃあその相手より先に陸君を捕まえないと…。どうするの？」

答えるのは里菜

「加賀谷陸の事は出水と田町が何とかしてくれるだろう。彼らも近く
にいるはずだ。それより我々はこの超力獣を倒すのに集中だ！ い
くぞー！」

「おう！ サイコチェンジャー！」

里菜の号令に合わせて叫ぶ5人。5人の姿が戦士に変わる

「サイコレッド！」

「サイコブルー！」

「サイコイエロー！」

「サイコグリーン！」

「サイコピンク！」

「全てを超える超戦士！ 超常戦隊サイコレンジャー！」

5人に向かって突進してくる超力獣。

里菜と凌がサイコガンでそれを迎撃する。

「カチャー！」

超力獣は奇声をあげて苦しむがすぐに体勢を立て直して突進を再開する。

5人はそれにやや驚きはしたが里菜と凌の銃撃で勢いが衰えていた事もあり攻撃自体は難なくかわす。

そして雄真と純がすれ違いざま、背中に蹴りを入れると超力獣は道の突き当たりにあるブロック塀に激しく衝突する。

——ドン!

——ガラガラガラ

音をたてて崩れ落ちるブロック塀

「やったか!」

その衝撃音に思わず凌が叫ぶが超力獣は平然とそこから立ち上がる

「タフだな…」

呟く雄真。

純が言う

「強い…。築地で戦った男の子が作った超力獣とは違うね」

それを踏まえて龍我が問う

「じゃあ田中君の言っていた男が作ったって事かな?」

だが純は改めて言われると首を傾げてしまう

「うーん、でも言葉も全然話さないし…」

付け足す凌

「感じ自体が違うね。」

そんな事を話していると超力獣は再び5人に向かって突進してきた

「また性懲りもなく…」

「ワンパターン野郎!」

里菜と雄真はエナジーソードを取り出して超力獣に斬りつける。

苦しむ超力獣。

そこへ龍我、凌、純がサイコガンで銃撃を加える

「カヤヤー!」

超力獣がダメージを受けるのを見て叫ぶ凌

「今だ！ デルタストライカー！」

5人の傍らに現れるデルタストライカー

「デルタストライカー！ フォーメーションA！ ファイアストライク！」

発射された光弾が命中すると超力獣は激しく爆発した

「ハア…ハア…」

息を切らしながら夜道をかける加賀谷陸。

先程の場所からは随分離れた。疲れがたまって足下がフラついてくる。

ここまでくればさすがにもう大丈夫かな…。

そう考えて立ち止まる陸。

高校では部活にも入っていなかったからこんな必死に走ったのは久しぶりだ。

膝に手をつき肩で大きく息をする陸

「ハア…ハア…ゼエ…ゼエ…」

こんな風に息を切らすのは運動不足の年寄り位だと思っていた。

自分でもおかしくなる程だったが、それもしばらく経つと治まってきた。

これからどうしよう…。家に帰ろうか…。

だが家の場所くらい奴らは嗅ぎつけるだろう。

そうだ！ あの女の隠れ家に行ってみよう！

それがいい。

考えがまとまった陸は膝から手を離して前を向いて歩き出そうとするが、そこには先程とは別の男女が立ちふさがっていた。

男の方は眼鏡をかけていて痩せ型の体系、女の方はピシツとしたスーツを身にまとっている。特殊犯罪対策課の田町と出水である。

さっきの奴らの仲間だ！

そう直感した陸はすぐに反対方向へ逃げだそうとする。

しかし、そこで大きな音が深夜の住宅街に響いた

―パン！

驚いた陸が動きを止めて振り返ると出水が右手で拳銃を上に向けて持っている。

「どうやら発砲したらしい。」

そして銃口を陸の方向に向ける

「大人しく従って！」

思わず固まってしまう陸。それを見て田町が耳打ちする

「ねえ、高校生一人取り押さえるのにやりすぎなんじゃない？」

出水は逆上するように言う

「相手は超能力者です！ 油断出来ません！」

出水は陸との徐々に間合いを詰めていき、陸の額に銃を突きつける

「加賀谷陸！ あなたを連行します！」

一切迷いのない出水の態度に遂に観念した陸。地面に膝をついて
叫ぶ

「僕の推薦が…僕の推薦があー！」

エピソード

国生一派のアジトの中。神楽が手をかざす水晶玉に陸の姿が写っている。

そしてそれを横から覗く響子と国生

「あーあ、これで彼は推薦入試を受けられなくなってしまったんですね」

神楽に頷く響子

「そゆこと」

その軽い物言いに神楽はいかにも気の毒そうな表情を浮かべて釘を刺す

「響子さん、少しは可哀想だとか思わないんですか？ 能力の扱い方まで教えて置いて…酷すぎます」

それを鼻で笑う響子

「よく言うよねー。そんな事、ちつとも思っていない癖にい」

「あ、わかります?」

ニヤリと笑う神楽。

それを見て響子も同様にニヤリと笑う

「私い、彼の事は別にどうでも良かったんだよねー。今回の事は全部、彼女の為にやったんだからあ…」

「彼女?」

「入って来てえー!」

響子が叫ぶとドアから三つ編み眼鏡の女子高生が入って来た。

国生が問う

「彼女は?」

響子は女子高生の肩を抱いて言う

「この子はあ、石田里美ちゃん! 加賀谷陸や篠原類と同じ学校の生徒で、私の地元の後輩なの」

「もしや、君が言っていた密偵と言うのは彼女の事かい?」

国生が言うと頷く響子

「まーねー。ま、密偵つつつても地元の後輩みんなに言ってるだけな

「ただけだね。頑張っても報われないような事があつたら報告しなさいってね」

里美は震えながら訴える

「私、どうしても推薦が欲しいんです！ その為にずっと頑張ってきたんです！ なのに内申点の学年一位はあのE組のカスみたいなヤンキー男！ それにもう一人のライバル、加賀谷陸も見た目は真面目だけどいい加減な奴で私に比べたらちっとも努力してないわ！ あの二人に負けるなんて私…」

響子は言う

「私い、こういうの絶対許せないんだー」

頷く国生

「そう言えば響子はいつも言っているね。『この世界を人の努力が報われる世界にしたい』と」

「うん、だからこれはその第一歩…。ま、私達の手からすれば小さな事だけどねえ」

そして響子は里美の目を見て言う

「これで加賀谷陸は脱落。でも今回のテストでかなり有利になったとはいえ、篠原類の方は油断できないよ。ここからは里美ちゃんの頑張り次第。しつかりね！」

満面の笑みで返事をする里美

「はい！ 頑張ります！」

第一中野学園3年E組教室に田野倉の叫び声が響いた

「ええー！ 推薦入試を受けるのを辞めるうー！」

あまりの大声に思わず耳を塞ぐ類

「うるせえなあ。大袈裟だぞ」

首を横に振り田野倉と同様に大きな声で言う水戸

「いやいや。田野倉が正しいよ。お前どうした？ まさかこの前のテストが悪かったからって諦めちゃったのかよ！」

続く道重は二人とは裏腹にひそひそ言う

「そうだけ。せつかくポルターガイストも止まって、ついでに加賀谷

も脱落だつて言うのに…」

しかし類は妙に晴れやかな笑顔を浮かべて言う

「いや、いいんだよ。他に行きたい大学が出来たんだ」

首を傾げる田野倉

「は？ それってどこだよ？」

「あのさあ、サイコロレンジャーの北神龍我つていただろ？」

「ああ…」

「あの天然っぽい人…」

3人は類の言葉に一応は頷くもののその真意が掴めない。

そんな一同に類が言う

「あの人、どこの大学行つてると思う？」

すぐさま聞き返す水戸

「さあ？ どこだよ？」

ニヤけながら言う類

「東大だつてよ」

「ええー！」

いっせいに声をあげる3人の反応にクスリと笑う類

「あの人で行けるなら、俺でも一般入試で東大行けるんじゃないかって思つてさ。だから、これからは今まで以上に勉強しないと…」

都内某所のボロアパート。

その一室のドアの前に立つ龍我と雄真。

二人はお互いに顔を見合わせて頷き合うと、バタンと大きな音をたてながらドアを開け部屋の中に突入した。

周囲を見渡して警戒しながら部屋の奥へと侵入していく二人。

しかし、どれだけ見渡してもそこはもぬけの殻。

緊張した表情から一気にウンザリとした顔になった雄真が叫ぶ

「おーい！ 何にもないみたいだぜ！」

するとベランダから里菜と純、天井裏から凌が、別ルートから室内に侵入してきた。

「加賀谷陸が言つていた、女の隠れ家は確かにココのはずなのだが…」

里菜が言うのと雄真が続く

「もうズラかったって事だろうな。もしかしたらハナつかから使い捨てにするつもりだったんじゃないかねえか？ アジトも加賀谷陸も…。用意周到な奴だよ」

純が言う

「でも、これですますますわからなくなっちゃったね。陸君の話だと、今回、陸君をけしかけたのは金髪ショートの女性…。築地で戦った男の子ともオールバックの男とも違うなんて…」

付け足す凌

「ソイツらが単独犯でバラバラにやってるのか、複数犯で組織的にやってるのかもわからないしね」

しかし龍我は笑顔で言う

「でも確実に真相には近づいてるよ。わからなくなってるのは情報がまだ少ないから。調べていけばその内、見えてくるよ」

そして里菜は言う

「龍我の言う通りだ。今は敵の姿すらわからないが…。いつか必ず尻尾を捕まえて一網打尽にしてやる！」

第十四話 帝都震撼！ 国会大爆破！（前編）
プロローグ

東京都渋谷区のとある公園。

園内にはここに住み着いたホームレスが建てたであろうバラックや段ボールハウスが乱立し、鼻をつくような異臭がたちこめる。

―ザツ、ザツ、ザツ。

そんな園内に大きく足音をならしながら入ってくる作業服を着た集団。

手にはそれぞれ何らかの工具が握られている。

集団は公園内部に侵入すると入口を塞ぐようなカタチで横に広く列を作る。

整列が終わるとその最前列に立つ大柄な男が拡声器を用いて叫んだ

「これより条例に基づいて公園内に違法に設置、あるいは投棄された段ボール等の廃棄物に関して撤去する措置を行います。つきましては…」

「ちよつと待った！」

作業服姿の男が代執行宣言を半分程読み終えた所で段ボールハウスの建ち並ぶ公園中心部から声がかかった。

そして物陰から次々に出てくる小汚い格好をした十数人の男女

「何しに来やがった！」

「帰れ！ 帰れ！」

彼らがやかましく叫ぶ中、物陰から一人だけスーツに身を包み眼鏡をかけた、いかにも上品そうな青年が姿を表す

「区役所の皆さん、こんにちは。今日は一段と大人数ですが一体何を
するおつもりですか？」

青年が言うのと拡声器を使っていた男が呟く

「またアンタか…」

「それはまた不躰な言い方だなあ…。コチラが散々要求した話し合い

には全く応じずこんな暴挙に出ておいてよく言いますよ。ソツチからしたら『またアンタか』かもしれないけどコツチからしたら逆に『いきなり何なんだ』です」

青年の言葉を聞くと区職員は青年の背後にいるホームレス達を指差し言う

「あのねえ、コイツらがやってる事は明らかに違法行為なワケ。そんな奴らと話し合えて言われてもねえ…」

それを聞いた青年は区職員に対して侮蔑の表情を浮かべたがその感情を押し殺すように静かに言う

「処分を実行する側には処分される側の言い分を聞く義務があるはずですよ」

「とは言っても、今、ここで行われている違法行為が行われているんですよ。野放しにはできないでしょう。もし仮に相手が殺人犯やテロリストだった場合を考えて下さい。アンタも弁護士さんならその位わかるでしょ」

暫し沈黙した後、青年弁護士は溜まっていた鬱憤を吐き出した

「この人達は殺人犯じゃない。誰にも危害を加えてない。むしろ人命を危険に晒してるのはアナタ達だ！　ここから追い出されたらこの人達はどこへ行けばいいんです？　　だいたい、何年も放って置いた癖に今さら世界スポーツ選手権招致の為の景観美化だあ!?!　みんなお偉いさんの都合じゃないか!」

「ハア…」

青年弁護士の必死なトーンとは裏腹に区職員は冷たくため息をつく

「アンタと話してもラチがあかないよ。俺だってさ、仕事でやってんだ。悪く思わないで下さいよ」

そして今度は背後の作業員達に拡声器で指示を出す

「これより条例に基づいて公園内に違法に設置、あるいは投棄された段ボール等の廃棄物に関して撤去する措置を行います。皆さん、作業を開始して下さい!」

号令をうけ列をなして公園内部に侵入しようとする作業員達。

その大群が青年とホームレス達に迫る。
青年弁護士も負けじと声を張り上げる

「皆さん！ 我々もスクラムを組みましょう！ 暴力はいけません！
ただココに立っていればいいんです！」

青年の指示に従いスクラムを組み作業員に立ちふさがる公園の住人達。

作業員達はそれをワザと無視するかのようにはスクラムをムリヤリ
こじ開けて公園中心部に入り込もうとする

「ふざけるな！」

「出ていけ！」

「邪魔だ！」

双方の怒号が飛び交う中、入り乱れる両陣営

その日の夕方。

つい先程まで設置されていた段ボールやホームレス達の生活用具
は全て撤去され、公園の中は閑散としている。

夕焼け空の園内で話し合う青年弁護士と数人のホームレス達。

青年弁護士が頭を下げる

「スママセン、何にもできなくて…」

するとホームレスの中で最も年配と思われる70代くらいの男が
その頭を撫でながら言う

「いいや、健吾。お前はよくやってくれたよ。お前がいなかったら俺
達はただ奴らの言いなりになるしかなかった。ここまでやってこれ
たのはお前のお陰だ。誰も責めたりなんかしないさ。むしろお前は
俺達の誇りだ。よくぞ、ここまで立派になってくれた！」

それに続いてホームレス達は口々に言う

「健坊ありがとう！」

「意地は見せられた。それで充分さ」

それを聞いた青年弁護士、健吾は更に深く頭を下げながら声を震わ
せる

「皆さん！ 今まで本当にありがとうございました！」

「これからどこいく？」

「俺、新宿の方へ行ってみようかなあ？」

「止めとけ。あそこら辺は人が多い分縄張り争いもキツイ」

そんな事を話ながら公園を後にするホームレス達の後ろ姿を見送る健吾は彼らの姿が見えなくなるのを確かめると公園内に設置されたベンチに腰掛けた。

そして深く息をつく、その後、椅子の背もたれ部分を激しく叩く「くそッ！ 俺は何も守れなかった！ くそッ！ こんなモノ！」

健吾はそう叫ぶとスーツの襟から弁護士バッジを力任せに引きちぎり地面に投げつける。そして呟いた

「凌…。お前がいてくれたら、あんな奴らに負けなかったのに…」

そんな彼の元へ背後から歩み寄る人影。

健吾が気配に気づきふとそちらを見るとそこには露出度の高いギャル風の派手な格好をした金髪ショートカットの女

「こんにちはあ。中島健吾さんですよねえー？」

女はそう健吾に話しかけると鞆から週刊誌を取り出し、付箋の張つてあるページを開く

「私い、この記事を見て是非中島さんに会いたいなあーって思ったんですよー」

そう言われて女の見せた記事を改めて見る健吾。

そこに踊る文字『またも勝訴!!』『大企業の横暴を暴く!!』『弱者の味方 正義の青年弁護士・中島健吾』

健吾は冷たく視線を逸らして言う

「ああ…。アンタみたい人多いんだよね。そうやって取り上げられるようになってからさ。今そういう気分じゃないんだ。帰ってくれないか？」

「そんなあー、ひどーい。私い、アナタのファンなんですよおー」

「悪いけど俺はアンタの思うような人間じゃない。弱い者の味方をするのは強い立場を利用して威張ってる奴が嫌いだから。別に正義感

「でやってる訳じゃないんだよ」

「そう吐き捨てその場を立ち去ろうとする健吾。」

「女がそれを呼び止める」

「ちよつとー！ 待ってよおー。私い、アナタの力になれると思うんだけどおー！ この公園を取り返したいんだよねえー！」

「それでも無視を決め込み歩くのを止めない健吾に女が言う」

「あーあ、こんなお徳な申し出断ってもいいのかなあー。思い出の場所なんでしょ？ この公園」

「女の言葉を聞いて思わず立ち止まる健吾」

「アンタ、何でそれを…？」

「フフフ…。私には何でもわかるんだあー」

「女の様子に興味を持った健吾。」

「先程とは態度を一転させ一つ一つ言葉を選ぶように語りかける」

「アンタ…俺の力になれるって言ったよな？」

「うん」

「いったい、何ができる？」

「女は不敵に微笑む」

「何だあー、やっぱり興味あるんじゃない。なら始めっからそう言っつてよおー」

「いいから勿体つけずに答えろよ！」

「慌てないでよー。まあでも言うより見てもらった方が早いかもねー」

「そう言うと女は先程から手に持っている雑誌を地面に置きその上に手をかざし念じる。」

「彼女の手から発せられた光を浴びて雑誌は不気味に変形しだす」

「なんだ、これはー！」

「驚嘆の声をあげる健吾」

情報収集

サイコレンジャーの事務所内。机を囲む雄真、純、凌、里菜の四人。机には様々な種類の新聞が並べて置かれており、四人はそれを替わりばんこに読んでいる

「なあ純。俺、まだそれ読んでないからくれよ」

「ダメだよ。私まだ読んでる」

「あつそう。じゃあどれにしようかな…」

雄真が並べられた新聞の中から次に読むモノを選んでいると凌が横から手を出してくる

「僕、次はこれを読もうかな」

「あつ！ テメエ！ それ俺が読もうと思ってたのに！」

「何言ってるの？ 早い者勝ちでしょ？」

「ふざけんなよ！ お前、能力で俺の考え先読みしてとつただろ!？」

里菜が呆れ顔で言う

「お前ら、もう少し静かにやれないのか？」

そんなやり取りを少し離れて眺めていた龍我は4人に素朴な疑問を呈す

「あのさあ…何でみんなそんなに新聞読んでるの？ 一紙読めば十分じゃない？」

里菜はさも当然のように言い放つ

「超力獣や超能力者の情報を集める為に新聞を読むのは当然だと思うが…？」

龍我はますます訳がわからない

「へ？ だって普通の人は超力獣の事も超能力の事も知らないんだよね？」

「そうだが？」

「じゃあ超力獣の情報が新聞に載ってる訳ないじゃん…。それじゃ俺達、今まで何の為に姿を隠したり、事件の関係者に口止めしたりしてきたかわからないよ…」

「全く。お前は何もわかっていないな」

「へ？」

「里菜、ちよつと言い方が不親切だよ。少しは聞いてる方の気持ちも考えてあげなよ」

凌は全く事情を掴めない龍我を気遣い、説明を代わる

「そもそも龍我さあ、僕らの倒した超力獣って出現した超力獣の内の何割位だと思っ？」

「そりゃあ10割でしょ。あんなの一匹でも野放しにしてたら大変な事になるよ」

龍我のその言葉を引き出すと凌は納得したように首を縦に振って続ける

「そうそう。そこの考え方の違いなんだよね。僕らは別に自分達が全ての超力獣を倒しているとは考えてない」

「そうなの!？」

「うん。じゃあここで問題だけど、僕らいつもどうやって超力獣を見つけてる？」

「えーと、アスぴよんの千里眼」

「正解。でもさ、君もそろそろわかってるかと思うけど彼女は超力獣専用の万能リーダーって訳じゃないでしょ？ 彼女の千里眼は一つの場所にながら広い範囲を監視する強力なモノだけど彼女が自分の意志で『視よう』と思った場所しか見張れない。つまり予め警護対象となる人物がいたり、超力獣の出そうな地域があつてその周りを見張れって言う場合とかならないけど、何の脈絡もなく突然現れるような超力獣に関しては全てを探知できているとは言い切れないんだ」

「なるほど…。だけど、それと新聞何が関係してるの？」

龍我が聞くとそこまで行けばもういいだろうとばかりに里菜が再び説明する

「超能力の存在が一般に知られていないと言う事。即ちそれは超能力犯罪の被害にあつた人間が被害にあつたという事実気づかない可能性の高さを意味している。だから我々はあらゆる報道の中から原因のわからない怪現象や変死に関わる記事を探し、超能力が関わっていきそうなモノについては改めて調査する訳だ」

そして今度は純が口を開く

「他にも私がインターネットから情報を集めてるんだよ。あと財閥の諜報機関や警察も情報は提供してくれるし」

「あつ、純がいつもパソコンに向かっているのは情報収集の為だったんだね。なんだあ。俺、すっかり純がオタクなんだとばかり思ってたよ」

「オタクは否定しないけど…。別にいつも遊んでる訳じゃ…」

全員が一通り新聞に目を通し終わると里菜が他の四人に問いかける

「誰か今朝の新聞で気になる記事があった者はいるか？」

それに対して返事を返すのは凌と雄真

「僕は特にないかな」

「俺もねえな」

二人の気の抜けた報告に眉をピクリと動かしながらも里菜は感情を隠すように龍我に話しを振る

「龍我はどうだ？ 何かないか？」

その質問にややしどろもどろになりつつも答える龍我

「ない…かなあ。ていうかどんなモノが超能力に関連してるのか自体、俺にはよくわからないんだけど」

ため息をつく里菜

「龍我はともかくとして。お前達、超力獣と戦って倒すだけが我々の役目ではないんだぞ。こういうった地味な所もしつかりやってもらわないと困るな」

「だってよお、ないモノはないんだもんなあ…」

口答える雄真。

それとは裏腹に凌は本当に反省しているのか他の事を考えているのか、わかるはずもないが何か神秘的な面もちを浮かべている

「全く。お前達は…」

「あの、ちよつといいかな？」

里菜が再び説教を始めようとした時、純が手を挙げる

「なんだ？」

「この記事なんだけど…」

純が指したのは渋谷区在住の男性公務員が行方不明になったという小さな記事

「この記事がどうしたんだよ？」

雄真が聞くと純が続ける

「これだけだったらくある行方不明事件なんだけど、ここ数日、近辺でこの手の事件が続いてるの」

純は手元にあるノートパソコンの画面を広げて一同に見せる。

そこには一連の記事が一覧になって表示されている

「本当だ」

「こりや偶然にしちや出来すぎだな」

納得して頷く龍我と雄真

「更にこのリストを見て欲しいんだけど…」

純がマウスをクリックして別のファイルを開くと『世界スポーツ選手権招致計画実行委員会渋谷支部名簿』と題されたページが表れる

「この行方不明者の名前がみんなこの中に入ってるの」

そこまで聞いて頷く里菜

「なるほど。これは何か裏がありそうだ。よくここまで調べあげてくれたな、純」

滅多に人を褒めない里菜に褒められた事で頭をかいて照れる純

「一週間くらい事件が続いてたから…。リストは昨日、宝来財閥を通して取り寄せてもらったんだ…」

「いいか？ お前達も純を見習って注意深く情報収集をするように」

里菜は他の三人に注意すると、机を軽く叩き改めて一同に呼びかける

「ではこれから純が調べてくれた公務員行方不明事件について調査して行こう。純、お前が中心となってやってくれ」

「うんー」

「ちよつと待った…」

純が元気よく答えた直後、先程から神妙な面もちで黙っていた凌か

ら声がかかる

「手柄を横取りするようで純には悪いけどこの件、僕にまかせてくれないかな？」

間髪いれずに聞き返す雄真

「何でだよ？」

「ちよつと心当たりがあつてね」

そう言ったきり詳しい事は何も話そうとしない凌に里菜が釘を刺す

「考えがあつての事だろうからそれ自体は構わないが単独行動を許す訳にはいかないぞ」

「すまない。これは僕一人の方がやりやすいんだ」

凌はそれだけ言い残すと素早く席を立って逃げるように事務所を出て行く

「お、おい！」

雄真が後を追おうとするが里菜がそれを静止する

「止めておけ」

「はあ!? 何言つてんだよ! 単独行動は認めないとか言つてたのはお前だろ!」

「凌がああ言うんだ。何か事情があるんだろう」

純もそれに同意する

「うん。そうだよ」

雄真はそれを聞いて椅子にどっかりと座り込む

「わかったよ。凌の奴…。勝手にしやがれ」

こうして全員の意見がまとまったのだが、しばらくすると龍我が不意に立ち上がった

「どうしたんだ？」

里菜が聞くと龍我が言う

「俺、やっぱり凌と一緒に行くよ!」

その発言に過敏に反応する雄真

「ああ!? お前さあ! 今、凌に任せるって決まったばかりじゃねえか!」

「うん。そうなんだけどさ。でも嫌な予感…っていうか…なんか気になるんだ！俺、行くよ！」

龍我は急いで立ち上がって凌の後を追う

「えーい、どいつもこいつもわかんねーなあ!!」

雄真がふんぞり返って叫び声をあげる

龍我と凌

「おーい！ 凌！」

基地からしばらく歩いた所の道端。先をいく凌の背中を追いかけながら叫ぶ龍我。

凌は振り返り龍我の姿を確認すると目を見開いた

「龍我…!?! なんているの?」

龍我は凌に追いつくと膝に手をつけて息を切らしつつも言う

「一緒に行こうと思ってさ」

それを聞き怪訝な顔をする凌

「一緒につて…。僕一人でやるって言っただろ?」

「そうなんだけどさ。何となく凌が思い詰めてる気がして…。嫌な予感がしたから」

ため息をつく凌

「君の能力、本当に厄介だな。」

「え?」

唐突な言葉に目を丸くする龍我。

その龍我に凌は再びどこかへ向かって歩き出しながら説明する

「さっきの話し合いの時、僕、強引に意見を通しただろ?」

龍我は凌の後を追いつながら頷く

「うん」

「あれ、なんでだと思っ?」

「へ? 何でつて…。」

突然の問いかけにしどろもどろになる龍我の回答を待たずに凌が答える

「あれはね、誰も本気で僕を止めようとしていない事が読心術でわかってたからなんだ。止めても無駄つてみんな知つてるしね」

思つてみれば確かにそうだ。それが何なのか、龍我には知る由もないが、この事件に関する何らかの確証を掴んでいるのは凌だけなのだ。

一度止められた所で後からこつそり抜け出して調査に乗り出せば

凌が他のメンバーに遅れをとる理由はない。

勿論、単独行動を許したくないメンバーが捜査を妨害してくる可能性も考えられるが、仲間同士なら力づくという事もないだろうし、そういった隠密行動や先の読み合いで読心術を持つ凌にかなう者などいない。

おそらく、そこまで予測した上で里菜も純も凌の単独行動をムリヤリには止めなかったのだろう。ただ一人、雄真だけは本気で止めようとしていた様だったが。

だが、もしかすると凌はそこまで展開を読み切っていたのかもしれない、と龍我には思えた。

雄真なら反対するかもしれないが、恐らく二人に説得されればそれ以上反撃はできないだろうと。

それはきつと読心術によるモノではなく、龍我よりも長くサイコロンジャーとして他のメンバーと共に過ごした経験に基づく予測であろう。

龍我が納得して頷くと凌が深くため息をつく

「それで、僕の思い通りのはずだったんだけどな……。君のせいで台無しさ」

「え、俺のせい？ どういう事？」

コイツ、本当にわからないのか、とばかりに苦笑いする凌

「どうもこうもないよ。僕は一人で行きたかったのに君はついて来ちゃってるじゃん」

「あ、そう言えば」

「さっきのなんて、君にはただ僕が強引に出てきた様に見えるんだろうけど、僕は相手の思考を読んでから色々自分なりに考察した上で行動してるんだよ。なのに君は僕が行った後に『嫌な予感がする』ってそれだけの理由で心変わりして追ってきた……。僕が心を読めるのは所詮、相手の近くにいた時だけ。これじゃあお手上げだよ。読心術を防ぐ方法は理論上いくつかあるけど君は自然にそれができるからなあ……。正に僕の天敵だよ」

凌があまりに残念そうなのでとりあえず謝ってみる龍我

「んー、なんかゴメン」

凌はそんな龍我に遠慮しない

「格闘訓練の時だって君は考えるより先に勘で反応して手を出してくるから、コッチの能力が全く生かせない。最近じゃ君に勝った事ないよね?」

「そうかな? 俺はみんなに負けまくってる覚えしかないんだけど」

「そりゃ初めの頃はね。戦闘経験に圧倒的大差があるから資質も何もないんだけどさ。自分で気づいてないみたいだから言っとくけど、君、かなり強くなってるよ。雄真にはあまり勝ててないけど、最近僕と純にはまず勝ってるよ。里菜にも時々勝ってるし。君の能力、初めは奇襲対策用くらいにしか思ってたけど、知れば知るほど便利だよ」

「そう?」

別に自分が努力して手に入れた力でもないのだが、そこまで自分の能力を褒められると悪い気はしない。龍我は照れて頭をかく。

しかし、そんな心までも読み取ってか凌は龍我に釘を差すのも忘れない

「でもこれはあくまで単純な格闘での話。訓練じゃ使わないけど本当の殺し合いになったら里菜や純は平気で念力や発火能力を使ってくるんだからね。普段、戦ってる超力獣や能力者だって初対面じゃどんな手で攻めてくるかわかんないし。油断していると長生きできないよ!」

少しドキツとした龍我

「わ、わかってるよ…」

そんな龍我を見て凌はクスリとするが、その後すぐに寂しそうな顔をする

「でも本当に気をつけなきゃいけないのは僕だな。たぶんガチンコの戦闘じゃ僕が5人の中で一番弱いから」

凌がいじけた様に道に落ちていた空き缶を斜め前に蹴飛ばすと、空き缶は宙を舞って道の端に設置されている自動販売機横のゴミ箱にスッポリと入る。

おお、上手い。

龍我は声には出さないものの思わず感心した。

尋常じゃない位に上手いけど偶然かな？

なにかの能力じゃないよな…。

だって凌の能力は読心術だから、今のとは全然関係ないし…。

でもこの前、複数の能力を併せ持つてる場合、いざという時の切り札として能力を隠し持っている超能力者もいるって聞いたな。

もしかして凌はサイコキネシスか何か隠してるのかな？

龍我が難しく考えているとそれに気づいてなのか凌が言う

「上手いもんでしょ？ 僕、缶蹴り名人なんだ。一時期、それ位しか遊ぶモノがなくて缶蹴りばかりやってたからね…。だから別に念力で飛ばしたとかじゃないよ。能力隠してるとしたらこんな所でバレルような事しないし。ま、超能力者と対峙した時にあらゆる可能性を考慮してみるといい事だと思うけどね」

やっぱり読まれてたんだ…。

そう思うと同時に龍我は凌の言葉が引つかかった。

「缶蹴りくらいしか遊ぶモノがなかった」ってどういう事だろう。

随分、昔の人みたいな事を言うけれど、凌とは大して変わらない年齢のはずだ。というか、凌の方が少し年下だったはず。

だったらほとんどの人は子どもの頃、TVゲームも持ってただろうし、もしかしたら自分専用のパソコンや携帯電話なんかがあってもおかしくない世代だ。

むしろ自分が子どもの時はゲームばかりやっていて「たまには外で遊べ」とか言われていた気がする。

龍我は気になって凌にそれを確認したかったが、先ほどの言葉を発した後の凌の横顔が何故か妙に寂しそうだったので直接聞くことができなかつた。

中島健吾

二人の間にしばらく沈黙が続く。無言でスタスタと歩く凌とそれを追う龍我。

凌なら今の自分の気持ちなどお見通しなはずだ。龍我はそう思っていたから凌が自ら話すのを待っていたのだが、凌が話す気配は一向にない。と言う事は自分から言い出ししておきながら、何故だかそれについては話したくないと言う事だろう。

龍我はその様に判断して話を本題に移す事にした

「ところでさあ…。凌がみんなに黙って調べたかった。心当たり」つて結局なんなの？」

その問いに凌は口ごもる。勿論、それが凌にとって一番言いにくい事だというのは龍我にもわかっていた。でもここまでついて来てしまったんだから、さすがにもういいじゃないか。てゆーかこれを聞けなきゃ事が始まらない

「そうだね…。そう。『思われちゃった』ら仕方がないね…」

凌はそう前置きすると意を決して言った

「たぶん、僕はこの事件の犯人を知ってる…」

「ええ！」

驚愕する龍我に凌は言う

「君はさあ、この事件の犯人、どういう人だと思う？」

龍我は首を傾げながらも答える

「うーん、世界スポーツ選手権招致委員会のメンバーを狙ってる訳だから、やっぱり大会の開催に反対してる人なのかなあ…」

そう言った後、自分の話した内容に疑問がわいてきた龍我はさらに続ける

「でも世界スポーツ選手権開催に反対する人ってどんな人なんだろう？ どうして反対するんだろう？」

世界スポーツ選手権、World sports champion ship。略してWSC。WSCと言えば言わずもがな世界最大のスポーツイベントである。

それを自国で開催すると言う事は多くの人にとって誇りであり幸福のはずである。龍我にはそれを阻害する目的がわからなかった

「もしかして都知事が嫌いとか?」

思いつくのはこれくらいだった。

現東京都知事、青瀬裕次郎は保守的かつエキセントリックな言動が目立つ人物で敵をつくるタイプの政治家だ。

東京でのWSC開催は彼の悲願である。敵対勢力の中には意地でも潰してやろうという者がいてもおかしくない。

だが凌は首を横に振る

「それなら都知事本人を襲えばいいだけの話だね」

「じゃあなんで…」

「華やかな舞台の裏には必ず影があるモノだよ」

静かに言う凌。その瞳が冷たく沈んでいく。それは龍我に今にも何かが崩れ落ちそうな危うさを感じさせる。

凌は続けた

「先週、WSC開催委員会本部から評価委員会が来日して、競技会場や選手村の予定地を視察したのは知ってるかい?」

龍我は頷く

「そういえばニュースでやってたね」

「それなら話が早い。今回の視察はWSC開催地を決めるにあたって非常に重要なモノなんだったっていうのはTVでもやってたでしょ?」

だから議員、財界人、スポーツ界の重鎮、都職員などからなる招致委員会はその為に3年程前から綿密な準備を進めてきた」

「ひえー。たかだか2、3日の為に大変なんだね」

「うん。でもそれに力を入れるのはいい事ばかりじゃないよ。最近では直接の評価に繋がる所じゃなくて食事、宿泊、土産等の接待で評価委員にいい印象を与えたら勝ちって流れもあるからね。そんな賄賂渡すようなマネしてまで招致を目指す必要はあるのかって意見もあるし。そして何より…そのせいで犠牲を被る人もいる」

「犠牲?」

「今回の視察、準備の一環として行われたのが、会場周辺の景観美化

“都内の公園数十ヶ所を一斉に“美化”した”

龍我は凌の深刻な言い方に違和感を覚えた

「え？ 別にそれっていい事だよな」

「でもそれは単なるクリーン活動とは違う。君はそこに数万人のホームレスが住み着いていた事を知っているかい？」

「ううん…」

そんな事気にとめた事もなかった…。首を横に振る龍我に凌は言い放つ

「都は彼らや彼らの生活道具、その全てをまとめて“清掃”したんだ」「つまりそれって…」

「都は結果論とはいえ、彼らを追い出して生活の場を奪った」

「そんな…酷いな…」

やっと事の深刻さがわかってきた龍我が神妙な面もちでいると凌は先程とは打って変わって悪戯っぽい表情を作る

「それ、本当に思ってる？」

わかっている癖に意地悪だなあ。と龍我は口を尖らせる

「そりやそうだよ。追い出された人達はどこへ行けばいいのさ。ホームレスの人達も別に好きで住まいを失った訳じゃないだろうしさ」

そんな龍我に凌は冷たい

「でも僕は今回の処置は仕方がない面もあると思ってる」

「え？」

「だって公園はみんなの物でしょ？ そこを勝手に自分の家にしていいのかな？ それに君、『ホームレスの人達も好きで住まいを失った訳じゃない』って言ったけど、実際、好きでやってる人もいると思うよ。貧しいながらそれなりに生きたいと思っただら生活保護とかだっであるんだからさ」

「それはそうだけど…。やっぱり評価委員の接待に税金使う位なら、その人達を救ってあげられる、もつといい方法があるんじゃないかな？」

それを聞いてニヤリと笑う凌

「そうそう。それが聞きたかったんだよ」

「え？」

「世間やお偉いさん達がどう思ってるのかは知らないけど、世の中には龍我と同じ考えの人もいてね。支援団体やそれに協力的な弁護士達を中心に弁護団が結成された。そのリーダーが若手弁護士の中島健吾」

その名前は龍我也聞いた事があった

「あー！ それって大企業とかを相手に立場の弱い人を弁護するっていうんで有名な人だよな」

「うん。それでいてその勝訴率は99%」

「そんな人がリーダーなら安心だね」

龍我は安堵の表情で息をつくが凌は首を横に振る

「いいや、今度ばかりは無茶だった。そもそも不利な条件での裁判だったのに、都知事の青瀬はかなりやり手でね。噂じゃ弁護団を一人一人、買収して足元から崩していったらしいよ」

思わず声をあげる龍我

「えー、そんなの許されるの？」

「関係ないね。どんな事したってバレなきや罪には問えないでしょ」

「うーん、納得いかない」

そんな龍我に頷く凌

「中島健吾も同じ考えだったみたいだね。彼は弁護団が一人になっても法廷で戦い続けた。でも結局は敗訴。それからもなんやかんやと理由をつけて処分を後回しにさせてみたいけど、結局は評価委員会の来日を目前にして行政代執行が行われてしまったって訳」

「酷い話だなあ…。でもやっぱり中島健吾って人は立派だね。一人になっても他人の為に頑張れるんだから」

龍我がまるで自分の事のように怒りつつ、中島健吾に対する尊敬の念を口にする凌がポツリと言った

「そうかもしれないけど、たぶん違う。きっと、今回ばかりは他人の為だけじゃなかったんだ」

「え？」

「公にはされていないけど、彼も昔、公園に住んでいたんだよ。つまり

ホームレスだった訳」

「ええー！ そうなの！ てか何で凌がそんな事知ってるの!？」
「だって僕も彼と同じ公園でホームレスしてたからね」

驚きすぎて最早声すらでない龍我。

それに対して凌は衝撃的な告白をした後だというのにまるで、何をそんなに驚いているんだ、と言わんばかりに堂々とした態度だ。

そして歩く足を止めると右方向を指さした

「ここがそうだよ」

龍我が凌の指差す方を見るとそこには龍我が「公園」と言われて想像したジャングルジムやらブランコやらの設置された所謂児童公園の様なモノよりかなり規模の大きな広場が広がっていた。

そこへ吸い込まれるように入っていく凌。龍我也それに付いていく。

まず一步、入り口に足を踏み入れるとそこは緑の木々に囲まれた緑道であった。

恐らくここは子どもの遊び場というよりは一般市民の為の散歩道、あるいは憩いの場として作られた場所なのだろう。

緑道をさらに50m程歩くと中央に噴水のある広場に出た。

凌は噴水の付近まで進んで行き、その淵に腰掛ける

「随分、綺麗になったな。昔は…つていうか多分ついこの前まで。ここダンボールハウスだらけだったんだよ」

そう前置きして凌は語り出した

「僕がここにいたのは13〜15歳まで2年間。つまり7年前から5年前までの期間になる」

「そもそも凌はどうしてこんな所に住む事になったの?」

今までも任務での成り行き上、他のメンバーがサイコロレンジャーになる以前、どういう生活をしていたのか聞く機会があったが、それぞれがその能力故に特殊な事情を抱えていた。

ましてや今回の相手は対象の思考を悉く見破る凌である。

龍我は凌の能力の前にはそんな気遣いすら意味をなさない事を知りつつも言葉を一つ一つ選びながら訪ねた

「大した事じゃないんだよ。一言で言えば家出だね。ホラ、中学生位の時って反抗期って言うかさあ、なんとなく世の中の人がみんな信じられなくなったりするじゃない?」

凌は龍我の気の使いようとは裏腹にあっさりと言うが、その凌の問いに今度は龍我があっさりと言う

「俺はそんな事なかったけど、まあ世間ではよく言うよね」

トコトンお気楽だな、と鼻で笑う凌

「僕はなまじテレパシー、読心術なんて持つてるからそれが普通の人より激しかったんだ。それで誰とも関わらなくていい所へ行きたくて辿り着いたのがココだったのさ。健吾とはその頃知り合った。健吾は僕より5つ年上だったけど、そんな若いホームレスは少ないからね。すぐに仲良くなったよ。まあ彼からしたら年下の兄弟の面倒をみてやっている感じだったと思うけどね」

「ん? 『誰とも関わりたくなかった』のに仲良くなったの...? まあいい事だと思うけど...なんか本末転倒だね」

龍我に話の矛盾点を指摘されると凌は顎に手を当て何か考える様にしながらたどどしく言う

「うん...。今考えると...と言うか。当時も違和感を感じてたと思うんだけど...。何故だかココは居心地が良かったんだ。ココにいる間、健吾だけじゃなくて色んな人にお世話になったよ。世間一般の常識で言えばしようもない人ばかりだったハズだし、どちらかと言えば下品な考えの人が多かったんだけど...。みんな裏表がないと言うか、正直と言うか。欲がないと言うか。まあ何にせよ、そうじゃなかったら、いかにホームレスの社会が中学生一人で生きていける程甘いモノじゃないにしても、あの時の僕は人の施しなんか受けたりしなかっただろうな...」

その事についてはいくら考えても答えなど出ないと踏んだらしく、凌は話の続きを始めた

「健吾と僕が親しくなったのは多分、年が近いのだけが理由じゃない。ココに来るまでの境遇が少し似ていたんだ。僕の場合はさつきも言っただけど、読心術で人の心に触れすぎた事が関係してる。対して健

吾の場合にはちよつと違うけど、彼も人の考えてる事がわかるんだ」

「中島健吾も超能力者だつて事？」

「いや…。そこまで言われると自信ないな。あの頃はサイコレンジャーのメンバーでも何でもなかったからイチイチ誰がエスパードとか気にしたりしてなかったし。でも、彼が一種の天才だった事には変わりない。彼は人の行動とか持っている物、立っている位置とか何でもいいんだけど、そういったモノの変化を見極めるのが異常に上手かった」 「洞察力が鋭いつて事だよ。小説やドラマに出てくる名探偵みたい」

首を縦に振る凌

「つまりはそういう事。それで人が嘘をついている事や隠れて悪事をやってる事までわかっちゃうんだつてさ。で、あとは彼も僕と同じ。誰とも関わらないでいい場所を探してココに辿り着いたんだけど、何だかんだで馴染んじやつたワケ」

「確かに立場は似てるね。凌は彼が今回の件の犯人だと思つてるの？」

凌の表情や話の流れからそう判断した龍我が核心に迫ると凌は「うん。」と案外素っ気なく首を縦に振つた。

「でも、何で彼が犯人だと思うの？ この公園に住んでいた事があつて、ついこの間までココに住む人達の為に裁判で戦つていた中島健吾が招致委員会に怨みを持つつていうのはなんとなくわかるケド…。仲良かったんでしょ？ 俺なら何か決定的な証拠でもない限り友達がそんな事やってるだなんて信じられないな。ホラ、招致委員会に怨みを持つている人物つてだけなら他にも沢山いるだろうし」

それに対して凌は納得したように頷きながらもハッキリと言う

「うん。さっきも言つたけど、僕にも確証があるワケじゃないんだ。でも、この事件の特性から考えるとね。彼を知つている人間からすれば、彼しかいないんじゃないかつてくらいだよ」

「特性つて言うつと？」

不思議そうな龍我に凌はまたも彼らしく一つ一つ丁寧に説明する

「勿論、『招致委員会に怨みがある人物』つていうのは前提ではあるん

だけどね。僕もそれだけで言ってるんじゃない。それを『やる能力があるか』っていうのと、『実際にやりかねないかどうか』っていうのが重要なポイントだね」

「中島健吾はその条件に当てはまるの？」

「ああ、まず『やる能力があるか』って所から考えて行こうか……」

凌はなるべく分かり易いようにという心配りからか、身振り手振りを加えながら普段の彼からすればやや大袈裟に説明を続ける

「今回の事件ではWSC招致に関わった区役員が人知れず消されてる訳だけど、コレって案外難易度が高い」

「何で？ 超力獣を使えば普通の人を襲う位、簡単じゃない？」

「それがそうでもないんだよ。今は情報社会だからね。超力獣みたいな目立つモノ、一度でも誰かに見つかったらインターネット上に情報が流出しておかしくないんだ。なのに常にネットを巡回してる純からも警察からもそういういった情報は今まで全く上がってこなかった。つまり犯人は3ヶ月間で20人以上を殺害、あるいは誘拐しておきながら一切見られていない事になる」

龍我はまだ納得できない様子だ

「そうだけど、慎重にやればできない事もないんじゃない？」

凌は首を横に振る

「いや、それが難しいんだ。個体差はあるけど超力獣ってそんなに知能は高くない。戦闘に関しては多少考えてくる奴もいるけど、少なくとも常識的な範囲ではね。ホラ、思い出してみてよ」

そう言われて龍我は戦った経験のある超力獣の事を思い出してみた。今までの対戦はほとんどが正面きっての勝負だったので場合の違いはあるが、どいつもこいつも奇声をあげたり、大きな足音を鳴らしたり、とても隠密行動に向きそうではなかった

「そう言えばそうかな。親が『静かにしろ』って命令した所で言う事聞きそうにないね」

「まあ、言う事聞かす方法も無い事は無いんだよ。ただ、それには今現在、超力獣を預かっている『超力獣の親』が強いエナジーを発して超力獣を完璧にコントロール下に置く必要がある」

「強いエナジーを発する人間か…。つまり超力獣の親は超能力者って事だね？」

「ないしは何らかの才能を持った人間だね」

「て言うത്？」

「僕達、超能力者はエナジーを能力の発動なんかに使う訳だけど、普通の人は芸術的な素養や集中力なんかに反映される場合が多いっていうのは君も知ってるよね？」

「うん」

実際それを知ったのはついこの前、フィギュアスケートの事件の時の事だったのだが、龍我はいかにもずっと前から知っていたかのように即答した。

その様子に凌も、それなら大丈夫だとばかりにスラスラ続ける

「だから超能力者でなくても生まれつきエナジーを多く発している人や珍しい性質のエナジーを持っている人は何らかの分野で特殊な才能を発揮する事が多い。よって所謂、天才と呼ばれる人達も超力獣の制御には向いているんだ」

これで先程までの話と今の話が繋がった。龍我は思わず熱っぽくなる

「そっか。中島健吾もある種、天才と呼べる感性を持って…。だから、彼もエナジーの質や量に恵まれてる人間だと考えられる。よって、超力獣のコントロールにも適している。中島健吾にもこの犯行が可能っていうのはそういう事なんだね」

「そう。超力獣を完全に制御できる上に兎に角、敏感な感性の持ち主だからね。彼なら誰にも目撃されないままでの犯行も可能だろう」

「なるほど…」

龍我は一旦は納得してみせるがまたすぐに疑問をぶつけた

「でもそれよりもう一つの方が気になるな。『やりかねない人間かどうか』って奴。聞いてたら中島健吾っていい人そうじゃない？」

凌の旧友で今は正義の弁護士。龍我の耳に入ってきている情報で判断する限り、中島健吾が超力獣を使って人を襲う人物には思えなかったのだ

「僕だって、そう思いたくはない……。でも健吾ならやるよ」
「何で？」

「彼はいい奴だったよ。でもいい奴過ぎる……。潔癖と言える位、正義感が強い。昔の仲間や立場の弱い人を傷つけるような者がいるなら多分容赦する事はないだろう……。そういう人間なんだ」

V S 雑誌型超力獣

中島健吾について凌は噛み締めるように言った。

「凌…」

龍我は凌に何か声をかけようと思った。

だが、龍我が直感したのはその瞬間であった。

この公園、何かいる…！

凌に同情して神妙な面もちになっていた龍我の表情が一瞬にして研ぎ澄まされる。

凌もその変化に気づいたようだ

「龍我…もしかして…」

凌の言いたい事を察して頷く龍我

「うん。超力獣が近くにいます…」

それだけ言って龍我は黙り込んだ。

凌もそんな龍我に話しかけようとはしなかった。

隠れている超力獣が現れて自分達を襲うまではおそらく一瞬だ。

多分、自分の感覚では攻撃を避けきれない。

ならばここは龍我に全てを委ねて指示を待つしかない。

凌はそう思っていた。

龍我も凌の思考はわかっていた。

自分の判断に凌の安全もかかっている。そう思ったから龍我は普段以上に考え、超力獣の動きを見逃さないよう、全ての感覚に注意を払った。

どこだ…？ どこにいる…？

しかし、超力獣の居場所はつかめない。

コレじゃ駄目だ…。

そう思うと身体も心も勝手に動いていた。

目を瞑って視覚を絶ち、周りの音もなるべく聞かないようにした。

そして考えるのもやめた。

自分の最も鋭い感覚である第六感に集中する事にしたのである。

すると、目を開けていた時より視界が広くなり、音を聞いていた時

より、小さな音まで拾えるようになった『感じ』を覚えた。

辺りの様子が手に取るように解る。風が吹いている。そしてその風が公園の木々を揺らしている。絶え間なく動く時計台の秒針と噴水。

それを幾ばくか感じ続けると、龍我は園内に一つ違和感を見つけた。

時計台の脇にある木陰…。あそこだけ木々の音に若干違いがある、『気がする』。

何か隠れてるのかな…？ 何かモノがあるだけかな…？

そうした疑問を感じて龍我は木陰を中心にさらに神経を集中させる。すると感じる、荒い息づかい。

即座にそこにいるモノが生物だと直感した龍我。

そして彼が次の瞬間に感じたのはゾットとするような邪悪な気であった。

確実に悪意の込められた攻撃…！

咄嗟に凌の腕を掴んで右方向に飛ぶ龍我。

その直後、後方でガチャンと大きな音が鳴る。

超力獣の探索の為、視覚を絶っていた龍我はそこでようやく目を開けて音のした方向を確認する。

そこには噴水の淵に突き刺さった何やら平べったい物体

「何だろう？」

沈黙を保っていた凌がそう言葉を発してその物体に軽く触れると、それは思ったよりもずつと簡単にペラツと折れ曲がった

「えっ、紙!？」

二人は目を丸くして攻撃の飛んできた方角を見つめる。

するとガサガサという音をさせながら木陰から超力獣が現れた。

超力獣はダビデ像のような逞しい体つきをしているが顔面部分はパラパラと紙の束なったような形状をしている。

元になったのは本か雑誌…。

紙が安っぽそうなのでおそらく雑誌…写真週刊誌の類だろう。

「あいつか…。どうやら紙を硬化させて飛ばせるみたいだね。あんな

変な格好してなかなか怖いな」

凌はそう分析した後、腕のサイコチエンジャーを掲げる

「行くよ！ 龍我！」

「おう！」

「サイコチエンジャー！」

同時に叫んだ二人。

その身体が激しく発光して、戦士に変わる。

―ヒュン！

二人の耳に空気を切り裂くようなが届いたのは、その直後であった。超力獣は変身の為にとった動作により一瞬できた隙について例の硬化させた紙を飛ばして攻撃きたのだ。

しかし、サイコレンジャーに変身して身体能力の強化された二人にとって真正面からの攻撃を避ける事は難しい事ではなかった。

十分に余裕を持って左右に分かれて飛んだ二人は素早く受け身をとると同時にサイコガンを取り出して超力獣に発砲する。

―バン！ バン！

「ギアアアア！」

銃撃をまともにくらって叫び声をあげる超力獣

「今だ！」

それを好機と見た凌はサイコガンを構えたまま超力獣に駆け寄っていく。

しかし、その瞬間、龍我の脳裏に悪寒が走った。

「凌！ 危ない！」

「えッ!？」

龍我が叫んだ時にはもう遅かった。

超力獣は凌が接近するのを見計らうと例の硬化させた紙をシャワーの水のように広範囲に散りばめて噴射してきたのだ

―スパッ スパッ！

敵の攻撃によって複数箇所に入り傷を負った凌の身体から血が吹き出す

「うわああ！」

地面に倒れた凌がのたうち回る

「凌！ 大丈夫!？」

思わず駆け寄った龍我。

凌がこんなにもまともに攻撃を受けたのを見るのは初めてだった。凌は優しくて繊細な割には他人に対して大胆で自信過剰な所がある。龍我は普段からそう感じていた。

しかし、その一面は読心術という自分の能力への信頼と自信からくるモノであり、読心術の通じない超力獣相手となると話は別だ。

ガチンコの戦闘を不得意とする凌は常に慎重で性懲りもなく敵に突っ込むような事はなかった。

攻撃を受けるにしても強敵相手に万全の準備があつたにも関わらず相手がそれを上回ったとか、他のメンバーが全員やられて自分がやらざるを得ないとか、そんなどうしようもない状況の時だけだった。その凌がこんなに苦しんでいる。

あまりにも格好悪い相手の姿に油断したのだろうか。

いや、たぶん違う。

旧友が事件に関与しているかもしれないという焦りと不安。それが凌に決着を急がせている。

龍我は傷を負った凌の肩を担ぎながら超力獣と距離をとった。

おそらく、今の技は至近距離でないと使えない。そう判断したのだ。

しかし、超力獣は距離を詰めるような事もせず、攻撃準備をとる。

やはりそう来たか。

龍我はそう思った。

きつと、凌を庇いながらでは通常の攻撃すら避けきれない。

あの特技を使うまでもないだろう。

超力獣も本能的にそれに気づいたに違いない。

そんな状況下、凌が龍我に声をかける

「龍我、奴が攻撃してきたら僕を見捨てて逃げるんだ」

「そんなッ！」

「今のは僕のミスだ。君まで巻き込めない……」

拳を握りしめる龍我。

もう駄目なのか…。

二人一緒にやられるか、凌を見捨てるか、どちらか選ぶしかないのか。

そう思った時、聞き覚えのある声が聞こえた

「凌！ 龍我！」

上空にホバリングさせたサイコフライヤーから飛び降りてくるサイコイエロー、グリーン、ピンク。

着地すると同時にエナジーソードを突き立て超力獣をなぎ払う。

「みんな…何で…?」

さつき事務所で話した時には確かについて来るつもりじゃなかったハズなのに。

そういった意味を込めて問いかける凌。

純と雄真、里菜が順に答える

「ムリヤリついて行こうとしても凌はお見通しだろうから、初めは諦めてただけどね…」

「龍我が行ったのを見て、俺達も気が変わったんだ」

「そしてなるべく距離をとるようにサイコバスターで上空からお前たちを監視した。それならいくらお前らでも追跡をキャッチできないだろう?」

既にボロボロでありながら更に肩を落とす凌

「そんな…。一日で全員に能力を破られるなんて、僕の能力ってザルなのかな?」

龍我はそれとは裏腹な口調で三人を責める

「見てたならもつと早く助けてよ！」

「すまなかった。だが、まだ事が核心にまで至っていないようだから。我々としてはもう少し様子を見たかった…。でもお前たちがこうも無惨な姿を晒すものだから出てこざるを得なかった」

口では謝るものの全く悪びれない里菜。

龍我はその様子に思わずイラツとするが、文句を言う暇はなかった。

先ほどの攻撃で一旦はダウンした超力獣が立ち上がった様子を察知したのだ

「ブルアア……！」

奇声をあげながら突進してくる超力獣。

五人はそこへサイコガンを一斉発射する。発射されたレーザービームが超力獣の身体を貫くと超力獣は大爆発した

「くっ……」

凌は変身を解くと傷ついた個所を抑えながら膝をつく

「凌……」

「大丈夫？」

そう叫びながら駆け寄る仲間たちを手のひらを差し出して制止する凌

「ゴメン。ドジったよ……」

皆が心配そうに見守る中、里菜が淡々と発言した

「凌、事がここまでに至った以上、どんな事情であれ単独行動を許す訳にはいかないぞ。話してもらおうか。何もかも」

仕方がない……そんな表情で頷く凌

「そうだね。どうせこの傷だ。今、一人で行動するのは自殺行為だしね」

第十五話 帝都震撼！ 国会大爆破！（中編）
凌の推論

「なるほど。中島健吾：公園の『美化計画』に反対する弁護士か。まあ、立場としては今回の失踪事件の容疑者に挙がってもおかしくない人物ではある…。だが…」

凌は雑誌型超力獣との戦闘の後、一通りこの度の単独行動の動機について一同に説明を行った。

中島健吾との関係、彼の性格、才能について…。

凌の語った中島健吾を事件の犯人だとする仮説は一応、メンバー達を納得させるモノではあった。

だが、一同のまとめ役である里菜は先程の台詞を言うと言に手を当てて口ごもってしまった。

確信が持てないのは他のメンバーも同じだった。

理屈としてはわかるのだが、中島健吾の事を知らない凌以外のメンバーからすれば急に浮上してきた名前だという感が否めない。

そんな人物を犯人だと言われてもピンと来なかった。

昔からの知り合いである凌には感覚的に解るのかもしれないが…。

そんな思いを代表して里菜が言う

「凌、お前、この事件の事、気づいていただろう？ 前から少しずつ調査していなければ、こんな行動はとれないハズだ」

凌は観念したように頷く

「うん、そうだよ」

「何故黙っていた？」

「信じたくなかった…:というか『信じない事にしてた』というのが正しいかな。健吾が反対運動に参加してるのはニュースで知ってた。更にこの美化計画に関わった者に行方不明者が続出してるとって気づいてからは、あとは超力獣さえ調達できれば、彼ならできるし、やるかもしれないとは思った。けど、今までは本当に超力獣が絡んでるかどうかもわからなかったからね。あるのは僕の憶測だけで証拠は何も

ない。動かない理由の方が多かった」

純が首を傾げる

「それなのに何で今度は急に調べる気になっちゃったの？」

不適に微笑む凌

「それは君達がこの事件の存在に気づいたからさ。相手が健吾ならこの事件は僕の事件だ。君達の手を煩わせたくはなかったんだ」

「テメーはなんて独りよがりな考えしてんだよ……」

呆れる雄真に凌は頭を下げる

「うん、わかってる。すまなかった……」

確かに雄真の言う通り、やっている事が滅茶苦茶だ。訳がわからない。

今日の凌を見ていると龍我にもそんな思いが拭えなかった。

しかし、訳がわからなくとも気持ちはわからないでもなかった。

龍我にも友人が超力獣の親だったという経験がある。

あの時は自分もすぐには信じられなかった。

いや、信じたくなかった。これ以上、凌を責めるのは酷だ。

そう考えた龍我は話を先に進める提案をした

「ともかくさ。手がかりが凌の推論しかない以上、そこから調べるしかないんじゃないかな？　ここで揉めてても仕方ないし」

それに渋々頷く雄真と里菜

「まあ、そうだな。できたら証拠になりそうなモノを見つけてサイコメトリーでもしたい所だが……」

『『美化計画』で以前からあったモノはだいたい撤去されているからな』

うまく話の矛先を凌からそらせた龍我は手を叩き張り切ったように言う

「じゃあ決まりだね。早速、中島健吾に会いに行こう。弁護士なんだから、法律事務所を持つてはるはずだよ。そこへ行ってみよう！」

「ちよっと待って……」

龍我の行動を制止したのは凌だった。龍我は不思議そうに聞き返す。

「え？ 何？」

「彼、大手法律事務所の雇われ弁護士だったんだけどさ。反対運動を始める時にその事務所、辞めてるんだ。だから今はこれといって仕事の拠点はないと思う…。弁護士の仕事もしてないかも…」

それを聞いた純はガクツと肩を落とす。

「じゃあ結局、手がかりは何もなしって事なの？」

「いや…」

凌は即座に首を横に振った

「健吾本人がどこにいるかわからなくても、一緒に反対運動に取り組んでいたホームレスがいるはずだ。彼らなら何か知っているかも…」
「でもその人達だっどこへ行ったかなんてわからないよね？」

そんな純に対して凌はまたも首を横に振る。

「大丈夫。経験上、ここにいた人達が移り住みそうな場所はなんとなくわかる。そこを幾つか回ればきつと古い知り合いに会えると思うよ」

荒川区区民公園

5人がやってきたのは東京都荒川区区民公園である。

そこは園内に美術館や博物館といった施設が収容された都内屈指の大きな公園で、周辺住民の行楽スポットとして有名な場所である。イメージとしては今回の探し人達が居そうな所だとは到底思えない。だ

が、凌によると駅に通じる広場に一個所、大規模なスラムが形成されており、住処を追い出されたホームレスの一時避難場所としては最もポピュラーな場所の一つだと言う。

凌の案内で賑やかな公園中心部から段々と人の少ない方向へと向かっていく5人。

しばらく歩くと、明らかにみすばらしい格好をした人の集団が見えてきた。

パツと見ただけでも50〜60人はいる。おそらく、あれが凌の言っていた広場であろう。

そこへ足を一步踏み入れると龍我の鼻を強烈なアンモニア臭が覆った。

「うっ…」

思わず鼻に手をあて声を出した龍我。
しまった。

そう思っで並んで歩くメンバー達の顔色を窺うと、凌以外は皆、一様にしかめっ面をしている。

どうやら凌の手前、口には出さないが里菜、雄真、純の3人は龍我と同じ気持ちならしい。

凌はそれを見てやや苦笑いを浮かべている。たぶん能力で4人の思考がわかってしまったのだろう。

龍我達も凌の前でそういう風に考えれば、それが自動的に彼へ伝わるという事は当然わかっているのだが、この状況で『思う事』まで止めるのはなかなか難しい。

「なあ凌、ここまで来たのはいいが、この中からどうやってお前の知

り合いを探す気だ？ 思ったよりずっと人数多いぜ」

やや鼻の詰まったような声で言う雄真に答える凌。

「大丈夫。アツチから声をかけてくれると思うから」

そんな凌に純は不思議そうに首を傾げる

「そんなに都合よくいくかな？ ちゃんと気づいてくれる？」

「周りを見てみなよ」

凌に言われて辺り一帯を見渡す一同。すると広場に集うホームレス達が皆一様にこちらを不可解そうな面もちで見つめている事に気づいた。

凌が続ける。

「ここでは僕達、目立つんだよ。こんな所、普通の人は気味悪がって近づかないからね。だからきつと気づいてくれる」

「なるほど…」

その説明に純は理解を示したが雄真はまだ納得できないようだ。

「でも気づいても話しかけてくるかどうかはわからないぜ。お前の知り合い達はこの間まで中島健吾と一緒に活動してた訳だからな。悪いけどそいつらが今回の事、知ってて隠してる可能性だってあるしな」

「うん、それどころか、むしろ積極的に協力してるかもしれないしね」

雄真があえて言わなかった事を自ら口にしてから凌は続けた。

「でも相手が気づいてさえくれれば僕の能力で察知できるよ。ここだと人が多くて細かい思考までは探りづらいけど…。知り合いがいればそれぐらいはわかるね」

自信満々といった感じの凌に龍我が釘を刺す

「でも、平気なの？ 一度にたくさんの人を対象に読心術を使ったらパニックしちゃわない？」

苦笑いする凌

「しちゃうね。だからなるべく急ぐつもりだよ」

金さん

一行は凌を先頭に段ボールハウスが建ち並ぶ広場を奥の方へと進んでいく。

途中、物珍しさから数人のホームレスが声をかけてきたが、その中に凌の知り合いはいなかった。

しかし、そのホームレスに尋ねた所、確かにここ最近、余所の公園から移り住んできた者達がいるという。

その情報を元に5人は広場の最北端、大きな木の木陰に辿り着いた。

そこにいたのは鋭い眼光とがっちりとした体格を併せ持ち、ホームレスらしからぬ迫力のある男だった。

何故だか頭に包帯を巻いていてそれに血が滲んでいる。それが彼の厳つさをさらに引き立てている。

凌は懐かしさとこれから起きる事への不安が入り混じったような儂げな笑顔を浮かべながら、彼に語りかける

「やあ、久しぶりだね。金さん」

すると男はやや驚いたように顔をあげる

「その声…。お前…もしかして凌か…？」

「うん」

「うおお！ 本当か！ 随分デカくなったなあ!!」

『金さん』はまるで体当たりするかのように凌に熱烈なハグをした

「うおお！ お前も立派になったなあ！ 本当によかった！ いやあ、本当に！」

『金さん』は再会の喜びを物凄いテンションで表現しているが、大柄な男に力一杯抱きしめられた凌の方はやや苦しそうだ。

「金さん、苦しいよ」

その言葉で正気に戻った。『金さん』は慌てて凌の身体を離す

「ああ、そうだな…。悪い、悪い。でもお前、ある日、ふつといなくなつてその後、足どりも掴めなかったからな。心配してたんだぞ」

凌は苦笑いする。今日の凌はやたらに苦笑いが多い。

「ゴメン、ゴメン。ちょっと訳ありでさ」

そう言うのと凌は里菜の方を見る。

見られた里菜は凌に冷たい視線を送った。

「どうやらその『訳』について二人の間には共通理解があるようだが、それが何なのか龍我にはわからない。」

凌は会話の相手である『金さん』にすら満足に説明せずに続けた「でも去っていく時なんて、みんな、そんな感じだったじゃない？ わざわざ別れを言う必要もないと思ってさ」

今度は『金さん』が苦笑いをした。

「まあ、所詮、俺達、みんな宿無しだからな。確かにみんな、そうだった。なるほど。近くにいた悪い大人の真似をした訳だ」

「そーゆー事」

そうして二人は顔を見合わせて大笑いした。

サイコレンジャーの面々はそれを少し意外な思いで見つめた。凌がこんな風に笑うのは今まで見たことがない。

凌が『金さん』と呼ぶこの男は、きつと自分達よりもっと深い所で通じ合う人物なのだろう。

一通り笑いが収まると『金さん』は一変して真剣な表情になった。

「ところでお前、今日は一体何の用で来たんだ？ まさか会いに来ただけって事はないだろ？ 今まで全く姿を見せなかったお前が。仲間まで引き連れて」

そう言っつて金さんは龍我らサイコレンジャーの面々の顔をしげしげと見渡した。

その表情は凌に対して向けるモノとは打って変わってやや堅い。おそらく余所者への警戒心がそうさせている。表情を強ばらせたのは凌も同じだった。

先程の発言を踏まえて凌は核心に迫った。

「実は健吾の事なんだ…。彼を探してる」

「やっぱりか」

金さんはポツリと言った。

「わかってたんだね」

凌の言葉に頷く金さん。

「なんとなくだがな」

そう言ってから金さんは、あくまで凌と話す体ではありながら一同に説明する。

「俺達だつて一応、世間に関心はあるからな。毎日落ちてる新聞なんかを読んで情報収集するんだ」

「そこで『美化計画』に関わった人物が次々に行方不明になってるのに気づいたんですね？」

急に会話に割り込んできた龍我にやや驚きつつも金さんは頷く。

「そうだ。直感したよ。俺達の仲間の中に奴らを始末してる人間がいるってな」

それを聞いて龍我はさらに突っ込む。

「でもそれだけじゃ中島健吾さんがやってるって根拠にはなりませんよね？」

「まあな。健吾が犯人だつて気づいたのはたった今。凌が訪ねてきたからだ」

「は？」

凌以外の4人が一様に理解できていない様だったので金さんは更に説明する

「ホラよお、誰にも気づかれないで何人もの人が消えてるんだぜ？」

オツムの足りない俺達の中でこんな事できる奴はそういない。俺が思いつくのは3人だけだな」

話が犯人の正体に近づき、里菜が話に食いつく

「ほう。それは誰だ？」

「まずは健吾だな。コイツは公園を出て数年で弁護士になる位に頭がいいし、洞察力がハンパじゃない…。次に次郎さんだ」

「次郎さん？」

いきなり出てきた名前に純が反応したので凌が補足する

「次郎さんは僕らの住んでいた公園で最年長のホームレスだよ。言わば僕らの長老だ…。でも世間的には『火炎瓶の新垣』と言った方が有

名かな？」

「え！ 新垣次郎！」

叫び声をあげた龍我に純が質問する

「有名な人なの？」

龍我は素早く頷いて答える

「うん。元赤軍過激派のテロリストだよ。あだ名は『火炎瓶』だけど作れる爆発物は多種多様。確か、山並重工業工場爆破事件とか北海道での燃料気化爆弾投下脅迫事件にも絡んでるんだよね」龍我の言葉を聞いた金さんは感心したようだった「お前、若いのによく知ってるな」

「一応、大学の先輩ですから」

そう言って舌を出す龍我を見て金さんは目を見開いた

「て、事はお前、東京帝国大学の学生なのか…。そうは見えないな」

「よく言われます…」

恐縮する龍我を余所に純と里菜が話を先に進める。

「そんな人がどうしてホームレスになったの？」

「確か、日本での革命闘争が失敗した後は中東に活動拠点を移したと聞いているが…？」

答えるのは凌。

「どうやらいつの間にか再入国していたようだね。でも正直、理由は僕らにもわからないよ。人の過去に踏み込まないのは公園生活者、暗黙のルールだからさ。まあ、逃亡の末に辿り着いただけかもしれないし、革命家時代に自分が救おうとした貧しい人達と運命を共にしようとしていたのかもしれない」

その問いに関して答えがでないと思っただらしい。凌に続く金さんは強引に話をまとめた。

「兎に角、次郎さんは今回の事件を実行できる人間の一人だって事だ。テロリストとしての技術もあるし、俺達の長老でリーダーだからな」そう断定されてしまうと、凌以外のサイコレンジャー4人は納得するしかない。とりあえず頷く一同。

そして雄真が更に問う。

「で？ 実行犯の可能性があるのは三人いるって言ってたな。最後の

一人は誰なんだ？」

「コイツだよ」

金さんはニヤリと笑いながら凌を指差した。

指された凌は微動だにせず金さんを見つめている。

思考を読んでいたのか、予想通りというような反応だ。

「わかってましたってツラだな」

金さんは自分の言った事に自分で吹き出しながら続ける

「お前は本当に頭のキレる奴だった。そのお陰で助かった事もあればビビらされた事もあったが、お前といるといつも心を読まれてるみたいだったよ。鋭いって点は健吾もだけど、お前の予測力は常軌を逸してたな」

そりやそうだろう。凌は読心術の使い手なのだから。

サイコレンジャー達は顔を見合わせるが金さんはそんな様子には全く気づかない。

「その癖、喧嘩ではエグかった。お前、意外と短気なんだよな。相手の弱点狙って一気に勝負つけるから。次郎さんなんて『中東のテロ教育を受ければ無敵の工作員になれる』とか言って褒めてたよ。」

「それ褒めてるのかなあ？」

自分の過去を色々と暴露された凌は口を尖らせるが金さんは大真面目のようだ

「…と言うか俺はお前がやってると思ってたんだ」

そう言う和金さんは寂しそうな顔をする。

「公園の美化計画が決まると昔の仲間みんな戻ってきてくれた。嬉しかったよ」

そして金さんはタンを切ったように言葉を吐き出す

「でも、その後、都が裏から手を回すと集まった支援団体も弁護士もドンドンなし崩しになっていった。そんな時に弁護士団のリーダーをやっていた健吾が言ったんだ『凌だったら絶対裏切るような事しないのに』ってな…。俺もそう思った。だからお前が帰って来てまた一緒に戦ってくれるのを、反対運動をやってる間中、ずっと期待してたんだ」

「金さん、ごめん…。僕は…」

話を聞いて深刻な顔を見せた凌。金さんはそれに対して手のひらを差し出して制止する

「いや、お前にだって今の生活があるんだ。お前を責めてる訳じゃない。ただ、勝手にコツチが期待しちまっただけだな。だから、俺達を追い出した連中が消されてるって知った時も勝手に『人知れず凌がやってくれてるんじゃないか』って期待しただけなのさ」

そこまで言うと言金さんはより一層目を細めて悲しそうな顔をした
「でも、こうして俺の所まで手がかりを探しに来た以上、どうやらお前の仕業ではなかったみたいだな…」

凌は最早何も言えなかった。そんな彼に代わって里菜と雄真が口を開く

「つまり、凌を除けば、関係者の中で犯行実行能力があるのは新垣次郎と中島健吾だけという事か」

「俺には前科がある分、新垣次郎の方が怪しく思えるな…」

そこへまだ少し重い口調ではあるが確かに意志のこもった声で凌が言う。

「いや、次郎さんじゃない。健吾だ」

「なんでそう言い切れるの？」

不思議そうな純。

その発言をうけて凌は続けた。

「次郎さんが関わっているというなら、今まで一度も爆弾が使われていないというのはおかしいよ。次郎さんはかつて世界を股に掛けたテロリストだった訳だけど、身体能力や感性が特別優れていたという事はない。あの人の最大の武器はやっぱり爆弾の製造技術だから。他にどんな『強力な武器』を持っていたとしても次郎さんが事を起こすんだったら必ずどこかで使ってくるはずだ。それが無いというのはやはりおかしい」

そして凌はここから先を更に強調して言った

「それに…やっぱり、次郎さんは感性が優れている訳じゃないから…。確かに爆発物製造分野における『才能』はあるのかもしれない。でも

それは理工学系の学問を学んだ経験からくるモノで今回の件の実行犯が持っているであろう『才能』とは意味合いが少し違う…」

つまり凌が言いたいのは爆弾より更に『強力な武器』である超力獣を扱う上での問題だろう。

超力獣を自在に操るには超力獣の親が自らのエネルギーで超力獣を支配する事が重要だ。

そしてそれをエスパー以外が実行するには芸術、芸能分野に発揮されるような敏感な感性が必要なのだ。

それを踏まえて今回の件を考えれば爆弾製造のスペシャリスト新垣次郎より優れた推理力を持つ中島健吾の方が犯人像に近い。

凌は金さんの前だったのであえて曖昧な表現に留めたが、サイコロレンジャーの面々にはその意図がしっかりと伝わった。

互いに顔を見て頷き合うサイコロレンジャーの他4人。

金さんはやや事情がわからず一瞬だけ怪訝な顔を見せたが

「まあ、次郎さんも年だから。あれを一人でやるのは難しいよな」

と納得した模様だ。

龍我の見たところ、どうやら細かい事を気にする人ではないらしい。

そして凌は改めて金さんに問いかける

「金さん。みんなの気持ちはわかる。僕も気持ちは同じだ。でも、公園を、僕達の思い出の場所を奪われた時にもう戦いは終わってるんだ。そこから先はもう報復でしかない。大切なモノを奪われたからって、誰かを傷つけていいはずがない。友達だから、仲間だからそんな事をさせられない。僕は健吾を止めるよ」

金さんは静かに首を縦に振る

「そうだな…。わかってる。こんな事していいはずがない」

「だから、金さん。教えてくれ。健吾は今、どこにいる?」

金さんは肩をすぼめていう

「すまない。アイツ、すっかり姿をくらませちまって。どこにいるかわからないんだ。それに健吾だけじゃない。次郎さんも行方が掴めない」

凌はここで初めて動揺したような表情を見せた。

「え？ 次郎さんまで？」

実行犯ではないはずの新垣次郎まで姿を消す理由がわからない。

凌だけでなく、サイコロレンジャー全員が首を傾げた。

「ただ、次郎さんに関してはこちらを預かっている」

戸惑う凌に対して金さんは一通の封筒を差し出す。

凌は何の変哲もない封筒を裏表ひっくり返しながらしげしげと眺める。

「これは？」

凌が聞くと金さんは言った

「俺にもわからん。抵抗運動を解散させる時に次郎さんから預かったんだよ。凌が来たら渡せって言われてな」

珍しく不思議そうにしている凌

「ふーん。次郎さんがこれを金さんに……。僕が金さんの所に来ると分かってたのかな？」

金さんは首を横に振る

「いやいや。いくら次郎さんでも、さすがにそこまでは。次郎さんはお前が誰を訪ねてもいいように、俺達の行き先毎に通ずつ手紙を用意してたんだよ」

「なるほど。次郎さん、相変わらず用意周到だね」

懐かしい。そんな感じで微笑む凌を金さんが急かす

「なあ、早く開けて読んでくれよ。俺も中身知らなくて、ずっと気になってたんだ」

「ハイハイ、仕方ないなあ」

凌はそう言ってから封筒の口の部分を丁寧に切り取り、その中から一枚の紙を取り出した。

紙は明らかに使い古されてヨレヨレになっていて、どこかに落ちていたのを適当に便箋代わりにしたのがわかる。

そこに凌へのメッセージが記されている。書かれていたのはたった一言。

『午前0時 Bポイントにて待つ』

作戦会議

その日の夕方。金さんと別れたサイコレンジャーの面々は一旦、状況を整理する為、事務所に戻ってきていた。

「ふーん。凌の昔の仲間が関わっているかもしれないのね。それは大変な事になったわ…。凌、大丈夫？」

サイコレンジャー、一応の上役であるアスびよんは報告を聞いて、凌を気遣う言葉をかけた。

「平気だよ。調査を始めた時から覚悟はできてる」

凌がそう言ったのを見るとアスびよんも彼は大丈夫だと確信したようだ。

「さすが凌。強いわね」

と一言褒めた後、質問に移った。

内容は勿論、新垣次郎からの手紙に書かれていた事についてである。

「じゃあ早速だけど凌。この手紙、凌には意味がわかる？ 『午前0時にBポイントで待つ』って言葉だけでは私にはさっぱり意味がわからないわ」

すると凌はあっけらかんと答える

「うん、わからないのも当然だろうね。僕にしかわからないように書いてるから」

「て、ことは逆に言うとお前にはわかるって事だな」

雄真が問うと凌が「まあね」と躊躇い無く頷いたので雄真は更に突っ込んで聞く

「じゃあこの『Bポイント』ってのはどこなんだ？」

「僕達の住んでいた公園の東端にトイレがあるんだけど、その裏の細い通路だよ。外からは影になっついて見えにくいから内緒話にはうってつけの場所」

「へえ、そんな場所が…」

雄真はそれで納得したようだが、まだ解けていない疑問は多い。

もう気の済んでしまった雄真に代わって不思議そうに純が言う。

「でも、そこって別にカッコいい場所でも何でもないと思うけど、何でそんな名前がついてるの？」

「大した理由じゃないよ」

急に苦笑いした凌。そう前置きしてから言う。

「実はあの公園、前にも『美化計画』が持ち上がった事があったんだ。その際に僕と健吾でやって来た調査団をやつつける計画を立てて、実際に追い払った…：とかブチのめしたという事があったんだけど。その作戦中、僕達は公園内の至る所に名前をつけていて、例のトイレ裏はBポイントって呼んでたのさ」

「それでBポイント…。それにしても凌は凄いな。今回、みんなが束になっても防げなかった『美化計画』を阻止しちゃうなんて。中島健吾さんや金さんが凌に戻ってきて欲しがっていたのも当然だね」

純が感心したように言うが凌は首を横に振ってそれを否定する

「いやいや。あの時は今回みたいにWSC招致計画とかがあった訳じゃないから、都も本気じゃなかったんだ。てゆーか…：調査に来た都職員の心を読んでわかったんだけど。都の本音としては、撤去とか面倒な事はしたくなかったみたい。周辺住民の苦情で仕方なく来ただけだし」

「あッ！」

そこまで聞くと雄真が思い出したように言う。

「それって俺達と凌が初めて会った時の事件か！ 都職員に対する暴行事件…」

「そうそう」

頷く凌を見て続ける雄真。

「なんかあまりにも都職員の行動が筒抜けだから不自然だってんで、俺達が調査する事になったんだよな。その時の作戦に参加したのは現メンバーじゃ俺と里菜だけか…。言っても、俺もまだ協力者の立場でしかなかったけどな」

「おい、ちょっと待て」

懐かしそうにしみじみ振り返る雄真の横から里菜が強引に会話に割り込む。

「何？」

凌が振り向くと里菜は言った。

「お前、今、『中島健吾と二人でやった』と言ったな？」

「うん、そうだよ」

キョトンとしている凌を見て里菜のテンションは裏腹にヒートアップしていく。

「凌……！ 覚えているか？」

「何を？」

「とぼけるな。私が区職員を襲うお前を捕らえた時の事だ。私はお前に聞いたな『他に仲間はいないのか』と」

「うん、聞いたね」

「そうしたらお前、『自分は単独犯だ』と答えたんだぞ……。貴様、私を騙したな！」

苦し紛れに明るく言う凌

「あれ？ バレたら怖そうだから一生隠しておこうと思ってたのに、口が滑ったな……」

そんな彼を見て里菜はため息をつく

「全く仕方のない奴だ」

呆れる里菜に凌は悪びれもせずに言う。

「でも、その後、僕は『この件に関してこれ以上追及しない』って条件で仲間になったんだからさ。多少隠し事がある事くらいは予想してたでしょ？」

強気な里菜も口喧嘩では凌に勝てそうにない。痛い所を突かれたな……。そんな表情で里菜は頷く

「まあな。お前が仲間を庇ってるんだろうというのは当時から予想していたが……。まさか逃がした仲間がこんな事件を引き起こすとは思わなかったよ」

「だから言ったでしょ『これは僕の事件だ』って」

そんな様子の凌を見て龍我が非難めいた口調で言う

「何だよ！ 凌も俺と同じじゃん！」

龍我が言ったのは自身がサイコレンジャーに加入した当初の凌の

態度の事だった。

サイコレンジャー加入以前の龍我は超能力を使って大儲けをしており、それをサイコレンジャーに咎められた際、ひよんな事から一時的に彼らに協力した。

その後、宝来財閥での協議の結果、その戦闘データからサイコレツドの適任者として選ばれて勧誘を受ける事になるのだが、その時に龍我の犯した罪を一番厳しく糾弾して強引に引き入れたのが、何を隠そう凌なのである。

しかし、今、聞いた所、凌も自分と同じような経緯でサイコレンジャーになっているではないか。

龍我は口を尖らせた。

凌にもその心が伝わったようであるが、彼は相変わらず悪びれない「まあ…。同じような経緯で入っただけにどこを責めれば断り辛いかわかるというか…。でも僕は龍我とは違ってすぐにサイコレンジャーになった訳じゃなくて、その後3〜4年、三門志織さんとかアスピよんみたいな協力者として活動してからサイコレンジャーに加入したんだけどね」

「そうなの？」

「うん、だから正式にサイコレンジャーのメンバーになったのは純の方がかなり早かったよね」

すると話題を振られた純が頷く

「そうだね。私の場合、能力を制御する訓練が終わったらすぐについて感じだったから。まあ、私の能力ってみんなのとは違って戦闘くらいにしか使い道ないし。後方支援には向いてないんだよ」

「へえ、そうなんだ…」

龍我は自分の知らなかった内部事情を聞いた事で思わず感心してしまう。

しめた。

凌がそう思ったかはわからない。

しかし、そう言わんがばかりに彼はその隙を利用して話題を元に戻す。

「まあ、とにかく。僕は次郎さんに会いに行くよ。必ず健吾の件とも繋がりがあるはずだから」

自信満々な凌に純が問いかける

「中島健吾と繋がりがあるって根拠は何？ 手紙は新垣次郎からのモノでしょ？」

「ホラ、言ったよね。5年前の公園防衛計画は僕と健吾で立てたモノ。次郎さんは計画には加わっていないんだ。だいぶ派手にやったから僕らのやらかした事くらいは知ってるだろうケド、少なくともポイントの呼び方とか細かい所までは知らないはずだ」

そこまで聞いて感づいたようだ。里菜が続いて言う

「だから待ち合わせ場所に指定された『Bポイント』というのを知っているのは凌と中島健吾だけという事か」

「そういう事。だから健吾はこの手紙にも何らかのカタチで関わっている。ここから先は推論でしかないんだけど…。もしかしたら、次郎さんは単なるつなぎで、実際に僕を呼んだのは健吾なのかも…」

首を縦に振った凌を見て龍我は次の疑問をぶつける。

「じゃあもう一つ質問」

「何？」

「この手紙には待ち合わせの日時が『午前0時』としか書いていなくて、何日の午前0時なのかがわからないんだけど…。どうやって落ち合うの？」

それを聞いた凌は手の平を大きく動かしながら言う。

「それは全然問題ないよ」

「え!?! どうして!?! 一体、何日待つ気?」

「たぶん、僕の予測が正しければ、健吾は超力獣を見張りに使ったんだ。僕が公園に姿を現して、あの超力獣を倒した事で、少なくとも僕がこの件を調べている事には気づいたはずだから…。今日あたり、もう待ってるんじゃないかな。まあ、健吾と次郎さんどっちが来るかはわからないケド」

そんな風に言う凌に里菜が釘を刺す。

「だが気をつけろよ。勿論、我々も隠れてフォローはするが…。奴ら、

まだ超力獣を持っているぞ」

里菜は凌に言ったのだが、その言葉に反応したのは龍我だった。

「え？ 中島健吾の使っていた超力獣はもう倒したはずでしょ？ また新しく超力獣を生み出したって事？」

里菜が首を横に振る。

「いや、そうじゃない。超力獣を生み出せるのはある程度、強力な超能力者だけだ。凌の話を聞いた限りでは中島健吾に超力獣を生み出すのは無理だな」

「じゃあ何で？」

「我々が倒したあの雑誌型超力獣だが…。あれだけ派手な技を使う超力獣では、いくら親に素質があろうとも今回のように人知れず何人も人間を消すなんて不可能だ」

そこまで聞くと龍我も理解した。

「つまりアイツは囷か！」

頷く里菜

「中島健吾は予め、二匹以上の超力獣を受け取っているはずだ。そしてその内、一匹は暗殺用の超力獣だろう」

新垣次郎

再び、思い出の公園にやってきた凌。

緑道を抜け、噴水のある広場を通り過ぎ、電灯の当たらない草むらへ入り暫く歩くと、目的の場所が見えてきた。

トイレの角を曲がり、暗い通路に入ると真つ白い髭をサンタクロースの様に伸ばした老人の姿が目映る。

老人は暗がりには不似合いな大きな帽子をかぶっていたので、顔に光が当たらず、凌から見るとその人相はよくわからなかった。

しかし、凌は自分が現れた瞬間にふと『凌…!』と名前を呼んだ彼の心の声を聞いて彼が誰なのかを確信した。

「次郎さん、髭。伸びすぎだよ。もしかして最後に会った時から剃つてない？」

まずは軽く世間話から来たか。と、凌の魂胆はわかっていた様だが、懐かしさを抑えきれないといった感じで老人から笑みが零れた。

「まさか。一回位は剃ってるぞ」

「ハハハ…失礼したね」

つられて笑う凌。

その笑いが一旦収まると凌は思い出話を始めた

「僕がここにいたのって2年間位だったかな？」

「ああ」

「ここでの生活は最悪だったよ。汚いし、臭いし。まともな食事もない。人間の住む場所じゃないよ。ここは」

一回だけ相槌をうって以降、無言を貫く新垣次郎を見て凌は話を続ける

「でもここにいた時は毎日楽しかった。ご飯やら酒やらの奪い合いで喧嘩したり、大ボラ吹き合ったり。大して立派な人もいないのに、僕はみんなが大好きだったよ。僕は…」

「俺もだ」

そこまで言うとな垣次郎が語り出したので凌は話すのをやめた

「俺もこの公園での生活は結構長かったが、俺もあの頃が…凌や健吾

：若いのがいた時が一番楽しかったな。年なんか関係なく、あの頃の仲間が人生の中で一番大切な仲間だ」

「本当？ 次郎さんにとつては活動家時代の仲間の方が大切なんじゃないの？ 共に命をかけた同志じゃん？」

凌が言うと新垣は首を横に振った

「いいや。命なんて賭けるモノじゃない。みんな必死になりすぎて。顔も知らない誰かの為に始めた革命なのに、次第に自分の仲間の事すら考えられなくなる。俺達の革命は間違っていたんだ。あの頃の事は思い出したくない」

それを聞いて凌はある事を思い出した。

そう言えば、この人の心には常日頃から触れて来たが革命家時代を回想する様な心の声は一度も聞いた事がない。

次郎さん、本当に思い出したくなかったんだね。

そんな事を考えながら凌は言う

「次郎さん、みんなバラバラになっちゃったね」

「ああ…」

「でもね。僕はこれで良かったんだと思ってる。みんな、一人一人、自分で歩き出さなきゃいけない。そういう時だったんだって…」

「凌…」

新垣が再び凌の言葉を遮った

「健吾の事を探しに来たんだろ？」

「うん…」

静かに頷く凌。

それに対応するような落ち着いたトーンで新垣は言う。

「健吾から話は聞いている。色々信じられない事が起こってるみたいだな」

「健吾に会ったんだね！ 彼に何があつたんだ！ 超力獣を使って招致委員会のメンバーを消してるのはやっぱり健吾なんだろ!？」

凌は大きな声を出す。新垣の様子に大きな変化は見られない

「超力獣…？ あの健吾が連れていた怪物の事か…」

そうボソツと呟いてから言った

「ああ。そうだ。お前も知ってたんだな。怪物の事」

凌は返事をするより先に自分の疑問を口にした

「やっぱり……。でも、なんで健吾がそんなモノ……。どこで手に入れたんだ？」

「健吾は『知らない女にもらった』と言っていた。いかにも今時って感じの姉ちゃんだったな」

「またか……」

おそらく、中野第一学園の事件で加賀谷陸に超力獣を授けたのと同じ人物だろう。凌はそう直感した。

最近続いている、『何者かに超力獣を預けられた一般人が親となつての事件』。今まで多数の超力獣が出現し、それを生み出した超能力者も複数いる事が明らかになっているが、凌はそれを他人事として見るようにしていた。

それは凌が特別に薄情であるという訳ではなく、むしろ悪を激しく憎んでいるからだった。

凌にとって事件を客観視して分析する事は、他人の心を弄ぶ人間を許せない自分を抑える手段だった。

しかし、その魔の手が自らの旧友達へ向かったとなるともう自分の感情を隠しきれなかった。

「健吾はどこにいる！ 次郎さんは健吾の計画を知っていたの!? 知ってたなら何故止めてくれなかったんだ!？」

我を忘れた凌は目の前の恩人に対して叫び声をあげた。

そんな事をしなくても、読心術を知らない新垣次郎には自身の尋問から逃れる術などないのを理解していながら。

むしろ、その能力を生かすには落ち着いて一つ一つ質問を重ねていった方がいい事をわかつていながら。

そして次郎に怒鳴った所で何も解決しない事をわかつていながら。凌は自分を抑えられなかった。

その心情は正に親に対して八つ当たりをする子供の様であった。

それを見た新垣次郎は『仕方がない』とばかりにクスリと笑い、その後、ポツリポツリと語り出す

「初めは俺が健吾に爆弾を預ける。それだけの計画だった」

「爆弾?」

急に飛び出した新垣の発言に驚く凌。その様子を気にする事もなく新垣は語り続ける

「そう。大きな爆弾だ。俺が今まで作ったモノの中でも特別に大きな…」

「そんなモノ、どうするつもりなんだ!」

「知らん」

「はあ?」

凌には彼が何を考えているのか、全くわからなかった。

人の思考を見破る凌にとって、こんなに人がわからないのは初めてだった。

一瞬、正気を疑ってしまったが、落ち着いてみた所、新垣次郎は正気だった。

自分のよく知る人間が正気で喋っている。

それだけにこの人が何故こんな事を言うのか理由ができなかった。

新垣は続ける

「健吾が必要だと言ったんだよ。だから俺は手を貸した。きつと、健吾は何かを変えようとしてるんだ。どういう計画でも健吾なら正しく使ってくれるさ」

やはり主犯は健吾だった。

しかも超力獣で開催委員会のメンバーを人知れず始末するだけでなく、更に爆弾を使って何かを企んでいるらしい…。

そこまで理解した凌だったが、まだ事情については不明な点が多い。凌はもう少し探ってみる事にした。

「それで僕をここに呼んだ理由は?」

それを聞くと新垣は嬉々として語り出す

「そりゃあ、お前に健吾を手伝って貰おうと思ったんだよ。ホラ、健吾とお前が組めばできない事なんてないだろ? お前なら必ず来てくれると思ってたよ。だからみんなに手紙を預けてお前が帰って来るのを待ってたんだ。お前達二人で世界を変えてくれよ!」

会わなかった間、この人に何があったのかはわからない。だが自分の知る限り、この人はこんな現実離れした事を言う人じゃなかった。

この人は夢を生きているんだな…。

凌はそう思った。

自分がかつて抱いた理想。人生で一番楽しかった時の思い出。それらが急速に失われていく中で希望に縋るしかなかったのだろう。

そして新垣次郎の場合、希望とは一番若い仲間である自分と健吾だったのだろう。

凌は全てわかった上であえて冷たいトーンを作って言い放つ

「僕が計画に参加する事、健吾は了解してるの？」

「ああ！ 喜んでくれたよ」

それを聞いて凌は思わず呟いた

「健吾ツ…！」

凌はまだ会ってもいない彼への怒りを抑えきれなかった。

昔の事をこんな後悔している次郎さんにまた爆弾を作らせるなんて、彼がそそのかしたに決まってる。

きっと次郎さんが自分達に対して抱く期待も見透かしてやったんだ。

相手はそこまですなくちやいけない奴らなのか？

何を考えてるんだ…。

そう思うと腸が煮えくり返る気分だった

「次郎さん、ここじゃラチがあかない。悪いけど一緒に来てもらうよ！」

凌がそう言つて素早く次郎の腕を掴もうとした瞬間だった。

「凌、避けて！ 何か来る！」

近くのトイレに身を隠して凌と次郎の様子を窺っていた仲間の一人、龍我から突如、声がかかった。

凌がそれに反応して思わず後ずさりすると、次郎と凌の丁度、中間にあたるの位置の地面がにわかには隆起し出した

「えッ！」

凌がそう叫んだ直後、地中から土を巻き上げながら超力獣が現れた

V Sオオムカデ型超力獣

黒光りするボディーとはさみ型の鋭い牙。そしてニョロニョロと不気味に動く、42本の手足。

見た所、ムカデ型…それも非常に強い毒を持つオオムカデ型超力獣である。

「コイツがッ！」

W S C開催委員会のメンバーを消した超力獣か。

凌はその姿を見て直感した。

地中から現れたという事は相手をそこへに引き吊り込む能力も備えているだろう。更にムカデという肉食の虫を基にしているなら、対象を殺害した後にその死体を食べさせてしまえばいい。

そうすれば人を襲った痕跡も残らない。暗殺には持つて来いの超力獣だ。

「サイコチエンジャー！」

相手の手強さを一瞬で感じ取った凌が即座に変身し、物影からは有事に備えて周囲を見張っていたサイコレンジャーの仲間達が次々に出てきて超力獣と対峙する。

里菜が相手を睨みつけながら呟いた。

「遂に姿を現したか…」

続く雄真は挑戦的に笑う。

「なかなか手応えの有りそうな相手じゃねーか」

それぞれ表現方法は違うが共に闘志剥き出しといった感じだ。

二人を筆頭に完全に戦う気満々で臨戦態勢をとるサイコレンジャー達。

だが、超力獣の狙いは違っていた。

超力獣は目の前の敵には見向きもせず後ろを振り返る。

そして、そこにいた新垣次郎の首もとにハサミ状の牙で噛みついた。

スパッ！

新垣次郎の頭が身体から離れて転がるように地面に落ちる。

「えッ!」

「嘘ッ!」

驚きのあまり身体を硬直させるサイコロンジャー一同。
そうなるのも無理はない。

今までの話の流れからいくと、超力獣を操る中島健吾と新垣次郎は共闘関係にあるはずなのだ。

新垣次郎が殺される理由がわからない。確かに一部で情報を共有していない節もあり、そういう意味では完全なグルではないのかもしれない。

でも爆弾を製造したり、凌を勧誘したりとサポート役としての新垣次郎は十分に中島健吾の役に立っていたはずだ。

そして何より新垣次郎は中島健吾自身とその親友である凌の恩人だ…。

それをこうも簡単に…?

皆が一樣にそんな事を考える中、ただ一人、凌が超力獣に向かっていく。

大切な人を目の前で殺された今の彼には考える余裕すらなかったのだ。

「ウオオオ!!」

凌がそう叫びながら渾身の力を込めたパンチを超力獣の背中にお見舞いすると、超力獣は勢いよく吹っ飛び、トイレの壁に激突した。

ガッシャーン!

—壁が崩れ落ち、超力獣がもがき苦しむ。追い打ちをかけるチャンスだったのだが凌はそうしなかった。

「次郎さんッ!!」

凌はすぐさま新垣次郎の首の無い死体に駆け寄り、それを抱きかかえて嗚咽した。

その姿が剩りに無防備だったので仲間達は急いでその前に出て、超力獣に立ちふさがる。

しかし、その必要はなかったようだ。超力獣は立ち上がると身体を回転させて、地面に穴を掘り始めた。

地中に逃れるつもりだろうことは一目瞭然だ。

「あつ、逃げる！」

「クソっ!!」

純と龍我が慌ててサイコガンを取り出してビームを撃つが、もう遅かった。

超力獣は巻き上げた土煙に紛れて消えていく。

「しまった！ 取り逃がしたか！」

里菜が地団駄を踏んで悔しがる。

唯一の手がかりだった新垣次郎を殺され、もう中島健吾の足取りも掴めなくなってしまう。

「オイ、凌！ 武力行使に出るのは情報を引き出した後にしようって決めたじゃ…」

「雄真君、待って！」

苛立ち紛れに雄真が周りも見ずに凌を責めようとしたが、純はそれを制止した。

「なんだよ？」

雄真が気づかないようなので龍我が凌の方を見るように目で合図しながら言った。

「言いたいことはわかるけど…。今は…」

雄真が指示された方向を見ると、そこには新垣次郎の遺体の傍で動かない凌がいた。

「そうだな…。悪かった」

そんな姿を見せられると雄真も流石に矛を収めざるを得ない。

懐中時計

その場にいた誰もがそんな凌を見たことがなかった。

確かに彼には意外と熱くなり易く、時に自分の感情を抑えきれない一面もある。

でも、それは彼の正義感からくる怒りである場合がほとんどで、こんなに動揺する様子を見せた事はなかった。

しばらく立ち止まった後、心配する仲間達の様子に気づいた凌。

目に溜まった涙を拭うとそれからはもうそんな素振りは見せなかった。

凌はまるで今まで何もなかったかの様に気丈な態度でいう

「ゴメン。さすがに次郎さんの遺体をこのままにしていけないから、ちよつと運ぶの手伝ってくれないかな？」

「ああ」

「わかったよ」

雄真と龍我が進み出た。

宝来財閥に報告すればすぐにでも処理班が来て死体は勿論、全ての後始末をしてくれる。

わかっていたのだが、それでも二人は何も言わずにそれを引き受けた。

たとえ数分でも仲間の恩人をこんな無惨な姿で晒しておく訳にはいかない。

二人が動き出すのを確認すると、凌が何も言わずに新垣次郎の身体から切り離された頭の部分を大切そうに抱きかかえたので、雄真と龍我は自動的に身体の方を担当する事になった。

雄真が足を持ち、龍我は首の部分を持った。

「よし、持ち上げるぞ」

「うん。せーのー！」

二人が呼吸を合わせて遺体を持ち上げると、その瞬間、龍我の抱える遺体の首部分から身体に溜まっていた血がドバツと溢れだした。

「わあー！」

驚いた龍我は思わず死体から手を離しそうになる。

幸い、地面に落ちる事はなかったが、死体が大きくグラついた

「おい。仏さんは大切に扱えよな！」

雄真がすぐさまが注意したが、その時、龍我の注目はもう他の所へと移っていた。

龍我は何やら自身の足下を見て固まっている

「おい！聞いてんのか!!」

雄真が余所見をする龍我に苛立ちつつ、彼の視線の向く方を見ると、そこには古い懐中時計が落ちていた。

「何だ？これ？」

すると、新垣次郎の首を左脇に抱えた凌がそれを右手で掴んだ。

「これ、彼と別れる前に、僕が健吾に渡したモノだ……」

そんな彼の反応に純が首を傾げた

「結構高そうな時計だけど……。よくこんなモノ手に入れられたね」

彼女が疑問を抱くのも無理はなかった。凌が手に持つその時計は公園生活の一文なしが所持するには怪しい程、高そうな代物だった。

その証拠に製造されてから十数年が経っているはずの現在でも時計はチクタクと音をたて、元気に動いている。

凌は時計から目を逸らさず、まるで他人事のように言った。

「拾ったんだよ。その辺で。で、それを健吾が欲しかったからあげたんだよ」

「拾ったモノを人にやったのかよ」

雄真が今にもズッコケそうになりながらツッコむが凌は当然だと
言わんばかりの態度だ

「拾ったモノは自分のモノ。それが公園生活者の基本だからね。プレゼントだってどっかから拾ってくるのさ」

しかし、その後、凌は少し口調を変えた

「でも、なんで次郎さんがこれを……？ 健吾にあげたモノなのに……」

凌の自問に答えを出したのは里菜だった

「おそらく、中島健吾が預けたんだろうな。お前に見せて自身が関わっている事の証拠にするつもりだったんじゃないか？」

凌は疑問に答えが出た事より、違う事に感慨がわいていたようだ
「そうか…。じゃあやつぱりこれは健吾のモノ…。健吾のヤツ、ずっとコレを大切に持っていたんだ…。公園を抜け出して弁護士になった彼ならもつといいモノがいくらでも手に入ったハズなのに…」

そんな凌の肩に手を当てる龍我

「きつと中島健吾は弁護士になってからも凌の事を大切に思っていたんだね…」

そうか、そうだよね…。

凌はそう言いたかった。でも、だとしたら余計にわからない事がある。

何故、自分に黙って私刑じみた事を始めたのか。何故、直接、自分の前に姿を見せないのか。

そして、何故、二人の共通の恩人である新垣次郎を殺害したのか。

凌がそんな事を思っ立ち止まっていると、雄真が凌の右手から徐ろに時計を取り上げた。

「えっ!？」

突然の行動に戸惑う凌に雄真は言った。

「コレをサイコメトリーする。中島健吾の居場所について、きつとヒントが見つかるハズだ」

しかし、龍我はその言葉に疑問を呈した

「でも、だいぶ古い時計だしなあ…。都合よく最近の記憶だけ読み取れるモノなの？」

その問いを受けて立つ雄真は自信を持った態度で言った

「サイコメトリーは記憶を読む能力じゃない。残留思念。つまり、モノに残された人の想いを読みとる力だ。中島健吾がずっと大切に、新垣次郎が死の直前まで持っていた時計だけ。きつと大丈夫だ」

そう言うのと、雄真は時計を地面に置き、その上から右手を覆うようにかざした

サイコメトリー

雄真の脳内に広がる記憶イメージー

倉庫、あるいは地下室だろうか。

窓一つなく、暗く、密閉された室内。

そこで二人の男が深刻な表情で会話をしている。

その内、一人は小汚い格好をした髭面の老人。新垣次郎である。

もう一人はそれとは正反対にお洒落なスーツを着こなした若い男。

印象的なのは胸についた銀色のバッジ。向日葵を型どり、真ん中には

天秤の模様があしらわれている。

テレビなんかで見た事がある。確か、これは弁護士バッジだ。

という事は、おそらく彼が中島健吾。

眼鏡をかけていて、その下からは涼やかな瞳が覗く。

とても元ホームレスとは思えない上品そうな男。

それが雄真が初めて彼を見て抱いた印象だった。

顔を突き合わせる新垣次郎と中島健吾。

その内、先に口を開いたのは中島健吾だった

【次郎さん……。あれから色々考えたんだけど、凌と接触するのは危険

じゃないかな？】

硬い表情をする中島健吾。新垣次郎はそんな彼の様子に首を傾げ

た

【なんでだ？ お前と凌は親友じゃないか。凌とお前が組めばできな

い事なんてない。アイツがいれば百人力だ】

【そりゃ、凌が来てくれれば心強いけど……。やっぱりアイツが今更、俺

達の計画に加わるとは思えないよ。次郎さんも公園で見ただろ？

超力獣が倒される所。なんでだか知らないけど、アイツ、サイコレン

ジャーなんだ。超力獣を倒す立場の人間なんだよ】

中島健吾は眉を下げて、少し困ったような様子だった。

どちらかと言えば健吾より新垣次郎の方が凌の引き込みには積極

的なように見える。

【何言ってるんだ。それは超力獣を操っているのがお前だって知らない

からさ。理由を聞けば必ずコツチに味方してくれる。現にこの前の時だってお前達、二人だけで都の職員を追い払ったじゃないか」

新垣次郎の言う『この前』というのは5年前。前回の『美化計画』の時の事だ。

健吾は懐かしそうに天を仰いだ。

健吾にとつてそれは最早、遠い過去なのかもしれない。

「次郎さん、あれから凌がどう変わったかはわからない。でも、凌だつてもうあの時みたいにガキじゃないはずだ。今の仲間だっているはずだし、あんな無鉄砲な事はしない。反対運動をやっていた時に姿を見せなかったつて事はそういう事だろうか？」

健吾の言い分は実に真つ当なモノだった。

それでも新垣次郎は諦めない。

「でも、会うだけ会つてみればいいじゃないか。そうすればヤツの気も……」

「それだけは絶対にダメだ！」

次郎がそこまで言った所で健吾が大声を出した。

その大きな声で次郎が話すのを止めたのを確認すると、健吾は呟くように繰り返す。

「凌と直接、接触するのはマズい。それはマズい。それだけは、マズい」

持論を伝えるのに夢中になり、根拠を言わない凌に対して次郎は問う。

「何故、そう思うんだ？」

健吾はゆつくり、ハッキリと答えた

「会つたつて必ずしも凌が俺達の計画に同意するとは限らない。それがヤバイ」

「それはわかつてる。たとえ相手が凌でも必要以上の情報はもらさないさ」

新垣次郎は妙に警戒している健吾を不思議そうに見ていた。

新垣次郎は元赤軍派テログループの中心メンバーである。

衰えたとはいえ、こういった陰謀、悪巧み、危険な交渉なら健吾よ

り新垣次郎の本分だ。

お前がそこまで心配する必要はないだろう。

新垣次郎はそう言いたそうであった。

それでも健吾は慎重な姿勢を崩さない

【アイツに会ったら、全部バレる。俺の…俺達の計画も全部バレる】

【一体、どういう事なんだ？】

年齢相応の我慢強さを持つ次郎もさすがに痺れを切らしたようだ。健吾に理由を聞いたです。

健吾は顎に手を当てながら言う。

【アイツならコツチが言わなくても全部わかるはずだ】

【何だって?!】

【たぶん、アイツ、人の心が読めるんだ】

健吾は俄に冷や汗をかいていた。まるで自分に自分で『何言ってるんだ』とでも言いたげであった。

新垣次郎もその言葉に思う所があったようだ。やや顔を強張らせながら言った。

【心が読めるって…。確かにアイツにはそんな風に思わせる所もあった。鋭い奴だからな。でも、それは俺から見ればお前だって一緒だぞ。お前の感覚とは種類が違うモノなのか？】

心当たりはあるが、信じられないといった所だろうか。次郎は健吾の肩を揺する。

それをうけた健吾は自分と凌の違いについて更に深く考察している。

【ああ。そうだね。俺も感性は鋭い方だと思う。短い期間で弁護士として出世できたのもそのお陰だ。でも、それは自分で思うに…推理力の類いだと思う。つまり、根拠がなければ真相には辿り着けない。俺は普通の人間だ。でも、凌は違う。明らかに何の手がかりもないのに、他人の目論みを見抜く。信じられないけど、アイツと一緒にいると、そうだとしか思えない場面がいくつもあった。昔はただ不思議だったけど、『あの女』に会って、超力獣を手に入れた今だからわかる。アイツ、超能力者だ】

次郎は未だにその言葉を素直には飲み込めないようだった。顔を引きつらせ、落ち着きなくウロウロしている。

だが、健吾の真剣な目をみて意を決したようだ

【そうか…。お前は凌の親友だし、そこから辺の分析力は俺より遥かに高い。お前が言うならそうなんだろう…】

そう呟いてから息を飲んで言う

【それが本当なら凄いいじゃないか。凌が仲間になってくれれば必ず俺達の大きな力になる。俺、やっぱり凌に会ってくるよ】

今の会話の流れからは有り得ない回答。

健吾は思わず大声をあげた

【どうしてそうなるんだ！ 次郎さん、それは…】

しかし、次郎は揺るがない。そんな態度を見て、健吾は話すのを止めて、次郎の言葉に聞き入った

【健吾、もしも凌が俺から情報を抜き出すような素振りを見せたら、情報をとられる前に、迷わず俺を殺せ。あのムカデの超力獣を使えばできるはずだ】

【なっ…！】

その言葉に絶句する健吾に次郎は言う

【お前、このまま、美化計画に携わった人間を始末して終わる気じゃないだろ？ まだ何か企んでるんだろ？ そして、それをまだ俺には話していない…】

健吾は肩をギクリと動かした。凶星。

誰がどう見てもそうわかる反応だった。次郎は続ける。

【なら心配いらないだろ？ もし俺が心を読まれたところでお前の本命の計画がバレる事はない】

【でも、危険を冒してまでする事じゃない！】

【健吾。お前が何を考えてるのか俺にはわからない。でもお前がここから更に先に進むつもりなら、それには凌の助けが必要だ。それは俺にもわかる。だから命をかけて、俺はやる。それがテロリスト・新垣次郎、最後の仕事だ】

なるほど…。新垣次郎の死にはそういう経緯があったのか…。雄真は自身のサイコメトリーによって一つの疑問が解けた事に一定の手応えを感じていた。

だが、これだけでは肝心な中島健吾の居場所はわからない。

中島健吾の真の狙いとは何なのか。

雄真はその真相を得る為に更に深く時計に残された思念の糸を辿っていく

次に雄真の頭の中に飛び込んできたのは石でできた西洋風の建物の室内。

部屋の面積はそう広くはないが、上の階まで吹きぬけになっていて、天井まではおそらく30メートルほどはある開放的な空間。床は大理石で出来ている。

見たところ、現代的とは言えないが、歴史と文化を感じさせるかなり豪華な建物だ。

そんな中で特徴的なのは、部屋の隅に立つ三つの石像。

どれも歴史の教科書で見た事のある偉人のはずだが、雄真にはそれが誰だかまでは思い出せない。

服装から言って、近代以降の人物である事はわかるのだが。

不思議なのは四隅の内、あと一つ。そこにだけ像がない事だった。

しかも、上に像を置くべき台座だけはしっかりあるのである。

妙だな。どういう意味があつてこうなっているんだろう。

雄真はそう思ったが、これ以上、探るのは力の限界だった。

時計に残された残留思念が見せる世界から意識が遠退いていく。

「ハア、ハア…！」

現実の世界へ意識の移った雄真。

「雄真！・雄真！」

まだハッキリとしない意識の中、初めに聞こえてきたのは龍我の声。

その声に反応して、顔をあげてみると、仲間達が皆、一様に自分の

顔をのぞき込んでいた。

「大丈夫なの？」

「随分長い間、発動してたけど…」

そう言うのは純と龍我。

二人とも物凄く心配そうに眉間にシワを寄せている。

凌も表情は彼らと同じだが、言葉は発さない。

ただじつとそこに立ち尽くしている。

雄真に無理をさせているのは自分だと、自らを責めているようでもあった。

雄真が彼らの気遣いに黙って首を縦に振ると、里菜が言った。

「雄真、疲れている所で悪いが、早速サイコメトリーの結果を教えてください。一刻も早く中島健吾を追わなくてはならない。時間がないんだ」

「ああ…。わかってる」

雄真はサイコメトリーで見た光景をメンバー達に語りだした。

第十六話 帝都震撼！ 国会大爆破！（後編）
国家公安委員長・宝来祐二

東京都千代田区永田町。

国会議事堂正門前に一台のリムジンが止まると集まったマスコミ関係者達が俄に色めき立つ。

「おっ、あれじゃないか？」

「行け！ 他社に遅れをとるなよ！」

そして、その車から険しい顔で恰幅のいい50代位の男が出てくると、マスコミは一斉に男を取り囲み次々に質問を投げかけた。

「宝来祐二国家公安委員長！」

「今回のスパイ防止法案は宝来委員長のゴリ押しだという噂があります！」

「強行採決をなさるのでしょうか!？」

男は、それらの声に対して無言を貫いた。

カメラとマイクの群れの中をボディガードと秘書に守られながら強引に突破していく。まるで、他の者など存在しないかのように。

しかし、である。

「もしこれがまかり通るなら政友党は次の参院選で惨敗という予測がたっていますよ！」

その言葉を聞いて男は遂に我慢できなくなったようだ。

「ぐっ…。儂だって頑張ってるのに…。ひどいよー！」

そう叫びながら男は走り去っていく。それを追ってボディガードと秘書達も走り出す。

「公安委員会！」

「先生！ お待ちを！」

やっとの思いで参院本館2階の議事堂正面玄関側控室に辿り着いた現国家公安委員長・宝来祐二は部屋の隅のため息をついた。

「何でいつも儂ばかり…」

宝来財閥の礎を築いた偉大なる前会長、宝来治五郎。

その三人の息子のうち、祐二は一番出来が悪かった。

長男の茂一は不真面目で飽きっぽい性格だが、要領がよくどこにいつてもうまくいく人間だった。現在は最大野党・改進黨の幹事長にして最大派閥の長である。

三男の源三は集団をまとめる能力に優れており、いつもみんなに慕われる男だった。父・治五郎が二人の兄を差し置いて宝来財閥次期会長に指名しても異論が全く出なかったのがその証拠だろう。

それにひきかえ、次男・祐二は昔から何の取り柄もない男だった。勉強は茂一に比べて劣ると言われた源三よりもできなかったし、リーダーとしての素質もなかった。

二浪してようやく入った東京帝国大学では自ら社会主義研究会を立ち上げるものの、新垣次郎を中心としたメンバー達が過激な行動を始めると、それを止められず会の主導権を完全に奪われてしまった。

現在は父や兄弟達のコネと成り行きで政府要職についているものの、正直言つて、向いていないのである。

そもそも国会議員になれたのも、サイコレンジャーの活動を支えるために国家とのつながりを欲した治五郎が全面的に支援してくれたからだし、当選してからもずっと治五郎やその後を継いだ源三の操り人形だった。

今回の通常国会で成立させようとしているスパイ防止法案も源三の指示によって提案されたものだ。

政友党公式には政治的に対立する国家やテロリストに政府の機密情報を盗まれないように、情報漏洩に対する罰則を強化する法律。世間一般からは政府にとって都合の悪い事実を全て隠蔽する悪法だとされている、このスパイ防止法案だが、実のところは、戦いが激化するに伴って隠しきれなくなってきたサイコレンジャーに関する情報をシャットアウトする目的で作られたものなのである。

本来なら、こんな強権的な政策は祐二の政治的信条からほど遠い。しかし、祐二は宝来財閥関係者唯一の政権与党閣僚としてこの政策を矢面に立って推し進める役割を背負ってきた。

その結果が、先ほどの国会前での光景である。

宝来財閥の財力を笠に着て強権を振りかざす日本政界きつての悪役としてマスコミによるバッシングをうける日々。

これ以上、耐えられない。

自分は何か罰を受けているのだろうか。

そんな事を思いながら、祐二がため息をつくとき、ちょうどその時、ズボンの右ポケットからけたたましい音がした。

プリッキュア！ プリッキュア！ プリテイでキュアキュア！
ふたりはプリキュア！

なんだ？ この音は？ 携帯の着信音…!?

そうか…。この前、会った時、また明日香がイタズラをして着信音を変えたに違いない。

全く、あの子は普段、雲隠れしてるのをいい事にたまに会うと物凄いイタズラを仕掛けてくる。

あんな孫のような年齢の姪っ子に舐められるとは、さすがにヤキが回ったか。

祐二は周囲にいる若手議員たちの不思議そうな視線を気にしながら携帯を開き、着信元を確認する。

画面に表示されていたのは『宝来勝広』の名。警察官僚を勤める自らの息子である。

もしも自分の人生に功績があるとするとするならこの息子を育てた事か。そう思うくらいに優秀な男である。

昔から親に頼ることなどなく、離れて住むようになってからは滅多に連絡などしてこない息子から、お互い仕事であるはずの真つ昼間に電話。

祐二は奇妙な感覚を覚えていた。

しかもこの後、通常国会が開かれる事は彼も承知しているはず。

余程、急ぎの用だろうか。

そんな思いもあって、祐二は神秘的な面持ちで電話に出た。

「もしもし？ 勝広か？」

「やあ、父さん！」

元々、人あたりのいい活発な男だが、今日はいつもに増して明るい。電話口から聞こえる息子の声に戸惑っていると、勝広は間髪入れずに言ってきた。

「父さん！ 今、ニュースで見たよ！ 『宝来祐二、取材陣の質問に敵前逃亡！』だって！ アハハハハ！」

「どうやら、先ほどの国会前での出来事が、もうテレビで流れているようで、それを見て電話してきたらしい。」

祐二は面目なさそうにか細い声で言った。

「うぬぬ…。また情けない姿を世間に晒してしまった…」

「何言ってるんですか。大手柄ですよ。ああいう人間らしい姿を見せられる所が父さんの政治家としての才能です。普通、あんな凶悪な法案出したらマスコミに潰されますよ」

「でも実際、毎日マスコミに追い回されてるぞ…」

「父さんだからその程度で済んでるんですよ。茂一おじ様は勿論、僕や源三おじ様だったら、もう政治生命剥奪されてます」

「そうだったらいいんだが…」

「そこまで話すと勝広は急に口調を変えた。」

「さて、ここからが本題ですが…。少しマズい事になりました」

「やはりそうか。悪い予感だけは本当によく当たる。」

祐二はそんな自分に嫌気を感じながら息子の言葉に耳を傾ける。

「実は…国会議事堂内にテロリストないしは超力獣が入り込んだ可能性があります。茂一おじ様や他の閣僚と連携して議員の方々の避難とサイコロレンジャーの援護をお願いしたく…」

「なんだと！ もっと詳しく説明してくれ！」

暗殺命令

「龍我、本当にここでいいんだらうな？」

目の前にそびえ立つこの国で最も有名かもしれない建造物を見つめながら問いかける雄真に対して静かに頷く龍我。

「雄真がサイコメトリーで見たって映像……。たぶん国会議事堂中央広間の事だと思うんだ」

「根拠があんのか？」

「雄真の言う所の『髭のおっさん』とか『禿げたおっさん』っていうのが初め、要領を得なくてわからなかったんだけど……。『部屋の四隅に三つの像と一つの台座』っていうので考えるとやっぱりココしか思い浮かばない……」

不思議そうに純が聞く

「随分変わってるけど、それってどういう意味があるの？」

頷いて答える龍我。

「3つの像はそれぞれ、大隈重信、板垣退助、伊藤博文。つまり、国会ができた頃に活躍した偉い政治家の像なんだけどさ」

「台座が一つ空いてるのはなんなの？」

「将来、彼らに匹敵するくらい立派な政治家が出ることを祈って空けてあるんだってさ」

それを聞いて、凌はしみじみ呟いた

『立派な政治家』か……

健吾は自らの計画の最終目標として国会議事堂を選んだ。

ということは当然、ここに集まる政治家達も攻撃対象であるはずだ。

健吾は彼らにどんな感情を抱いてこんな行動を起こしたのだろうか。

知りたい。会えばわかる。僕になら。

でも、健吾は姿を現さない。

やはり、健吾が僕の能力に気づいているからなのか……？

思案を巡らせる凌。

その迷いを察してなのか、里菜が強めの櫓を飛ばす

「今回の相手……。中島健吾は同情の余地のある相手だが、奴が超力獣と爆弾を持っている事を忘れるな。そして、この場所をヤラせたら街も国も大混乱に陥るんだ」

凌はそれを自分自身への言葉だと解釈して大きく頷いた

「わかってる」

それを見て里菜は続ける

「ここで状況を一旦、整理しよう」

里菜は人差し指をたて、それを一同に示した

「まず、一つ。現在、国会内で議会で賊が入り込んだ可能性がある事を知っているのは宝来祐二様と宝来茂一様。そして現役大臣クラスの議員のみ。我々は他の議員や関係者に気づかれないように速やかに国会内に入り込み超力獣を始末する」

それを聞いて、最初に反応したのは純だった。

「えっ、中の人たち、避難させてないの？」

頷く里菜

「ああ。今は通常国会の会期中……。議会を中断させ、関係者たちを避難させるにはそれなりの大義名分が必要だ。サイコバスターを発進させる時のように『自衛隊の演習』程度の言い訳では誤魔化しきれない……」

龍我も心配そうだ

「でも、たくさんの人命がかかっているのに……」

里菜は感情を押し殺すように唇をかみしめた

「雄真のサイコメトリーで得たヒントがあるとはいえ、ここで中島健吾が発見された訳ではない。いわば、今は『超力獣が忍びこんだ可能性がある』という段階に過ぎない。この段階で事を外に漏らす訳にはいかないんだ……」

「そんなっ……!」

「大事になれば、超力獣の存在も我々の存在も世間に知れ渡ってしまう! そうなれば、我々の行動も取りづらくなるし、超能力を悪用しようとする輩も今よりもっと増える事になるぞ!」

「でも…」

躊躇う龍我と純を説得したのは雄真だった

「オイオイ、俺達がここで揉めてても仕方ねーって。この方針だって里菜が決めた訳じゃないんだろ？」

里菜は心苦しそうな表情で頷く

「ああ。私は明日香からの通信で聞いたが、おそらく、勝広様か源三様の決定だろう」

「じゃあ、尚更仕方ない。今の状況の中でやれることやるしかねえよ」
そう言われると、龍我と純も里菜の苦しい立場を理解してやる事しかできなかつた。

里菜は普段、単略的な雄真の意外な発言にやや驚きながらも

「すまないな…」

と仲間達の理解に感謝を示してから続けた。

「議会の中には既に警視庁の出水と田町が潜入している。また、源三様の護衛3人を含めて養成学校の方からも数人、人手を貸してもらえそうさ。それでも合わせて十数人…。」

「国家の存亡をかけた戦いにしては随分心許ない数だな」

「それでもやるしかない！」

里菜は雄真の皮肉に触発されるかのように、抱えていたトランクを勢い良く開けた。

すると、中からは五人分の警備員の制服が出てきた。

「中にはこれを着て潜入する。潜入後、我々は別行動だ。各自、指定されたポイントへ向かい、協力者と合流。二人一組での任務遂行となる。また、中島健吾を発見したとしても必ずしも他チームに報告する必要はない。それぞれが静かに、速やかに確実な方法で対処しろ。『外に情報を漏らさず破壊工作を阻止する事』それが最優先だ」

それを聞いて、一同の表情が一気に凍りついた。

『静かに、速やかに、確実な方法での対処』

それは即ち、中島健吾の暗殺命令であった。

議事堂潜入（1）

レンガで出来た頑丈な壁に囲まれた長い廊下。

そこを歩く頭のハゲ上がった老議員の姿を見て、警備員の制服姿の龍我は姿勢を正して敬礼した。

「ハッ！ 今村大臣！ おはようございます！」

それを受けた老議員は笑顔で話しかけてくる

「君い、元気がいいねえ」

龍我は更に大きな声で言う

「ありがとうございます！ 身に余る光栄であります！」

「ハッハッハ、君、変わってるね。気に入ったよ。頑張りたまえ。」

今村は龍我の背中をポンと叩いて去っていく。

その後ろ姿を見ながら龍我は考える。

「変わってる」か…。

警備員ってこういう体育会系なイメージだったけど、違うのかなあ

…？ もしかして失敗？

潜入したのがバレてなきやいいけど…。

そんな風に龍我が心配していると、不意に後方から声がかかった。

「さすが北神さん、うまいですね」

声に反応して振り向くと、そこには龍我と同じ警備員の制服を着た

一人の青年。

色白でどこか女性的な印象を受ける柔らかな顔立ち。

直接話したことはないが、龍我はその顔に見覚えがあった

「君は源三さんの護衛の…」

「岡元太一です」

そう名乗った青年はペコリと頭を下げてから続ける

「今村文部大臣は大隈大学ラグビー部出身の体育会系ですから、ああいう姿を見せると気に行ってくれれると思いますよ」

「別に気に入られようとしてる訳じゃないんですけど…」

「いえいえ、ご謙遜を。相手の懐に入り込むのは潜入の基本ですからね。さすが、養成学校の過程を経ないでサイコロンジャーに抜擢され

た方です！」

自分が思っているより、かなり高く評価されてしまった龍我は困惑して頭をかく

「えっと……。とりあえず、超力獣と中島健吾さんを探そうか？」

「はい！ 北神さんは超力獣感知のスペシャリストと聞いています！」

そんな方とコンビを組めるなんて、身に余る光栄です！」

「うわあ……」

龍我は先ほどの自分と同じような台詞を聞いて、自分がいかにわざとらしく恥ずかしい事をしていたのか思い知るのだった

国会議事堂御休憩所近くの廊下。

今回の任務のパートナーとの待ち合わせ場所に到着した里菜。

視野を広く保てるように、後ろをとられないように、壁際に寄りかかるように立つと、辺りを睨みつけるように見渡した。

議会の開始直前とあって周囲には慌ただしく行き来する関係者が数多く見受けられるが、その中に怪しい動きをするものはいない。

だが、それでも、里菜は警戒を怠らない。

里菜の心情から言えば、怠れないと言った方が正しいかもしれない。

今まで、手強い敵も数多くいたが、国の中枢を直接狙ってくるような敵はそういなかった。

自分達の働きに一つの国の命運がかかっている。そう思うだけで神経が逆立ってくる。

怪しくないのが、逆に怪しい。どいつもこいつも怪しく思える。こんな感覚久しぶりだな。

まるで、初めての任務を受けた直後のようだ。

里菜はそう思った。

中島健吾の顔は過去、雑誌に載った写真から完全に覚えた。絶対に見逃さない。そんな思いから里菜は更に目を凝らす。

その時、突然、背後から声がかかった

「一色里菜さん、こんには。」

里菜は心臓が飛び出るくらい驚愕した。

なぜなら、自分でも緊張しすぎなのではないかと思うくらいに警戒していたのに、今、声をかけてきた相手の気配は全く感じ取れなかったからだ。

里菜が飛び跳ねるように振り向くと、そこには『宝来警備保障』の制服を着た若い女。

フレームの薄いお洒落な眼鏡をかけているが、そのスタイリッシュさを掻き消すくらい無表情で暗い印象を受ける。

「瀧本樹理です。源三様の護衛をやっています。私、存在感ないから、覚えてないですよね…」

そう自信なさげに言う樹理に対して里菜は苦笑いするしかない。

「いや、よく覚えている」

お世辞でも何でももない事実だった。

忘れられるはずがない。

宝来邸での事件の際も、今と同じようにどこからともなく急に現れて、自分の秘密をさらって行った。

この女が「源三様に報告する」と言っていた自分の体調の事。

あれからその件については音沙汰なしだったので、やや安心していたが、やはり、もう既に伝わっているのだろうか。

もしそうなら、源三や勝広はまた、この女に自分を見張らせようとしているのではないか。

里菜は敵愾心をチラつかせながら語りかける

「また、急に現れたものだな。お前、どこから沸いた？」

「お気づきかと思いますが、これが私の能力です。詳しいことは企業秘密ですが…」

「なるほど…」

そう言っではみたものの、樹理の能力について何かがわかった訳ではない。

わかったのは、樹理にこちらを信用するつもりがないと言う事。自身の能力を明かさないとするのはそういう事だ。

現役サイコロンジャーへのライバル心からなのか、それとも、源三

から見張りの任務を言い渡されているからなのか。

いずれにせよ、厄介だ。

「まあ、いい。任務に移るぞ」

そう言いながら、里菜は拳を握りしめた。

任務の他にも目的ができた。

コイツの能力、必ず見極めてやる。

里菜はそう誓うのだった。

議事堂潜入（2）

国会議事堂中央玄関近くのとある部屋。

静かにドアを開けて素早く中に侵入した雄真。

サイコガンを構えて部屋の中全体を睨みつけるように見渡す。

どうやら、敵の姿はない。

そう確認すると、雄真は身体力を抜いてドアの外へ呼びかけた

「オイ、もう入ってきてもいいぞー！」

それを受け、ドアノブをガチャリと開けて入ってきたのは小麦色の肌をしたスーツ姿の女性。

警視庁特殊犯罪対策科の出水愛である。

「この部屋もダメ…？　ねえ、超力獣は本当にこの国会議事堂内にいるの？」

「さあ？　わかんね」

雄真のぶっきらぼうな回答に出水は思わず熱くなる

「はあ?!　君のサイコメトリーで突き止めたんじゃないの!?　まさか…デタラメ？」

「酷い誤解だな…」

雄真はそう呟いてから続ける。

「中島健吾の時計をサイコメトリーしたら、国会議事堂中央広間の映像が見えたんだ。だから、適当って訳じゃない。でも、それが直接この事件と関係あるかどうかはわからないな。サイコメトリーには自信があるケド、それをどう解釈するかはいつも仲間任せだから」

「はあ?!　なにそれ？　じゃあ根拠はないのね?!」

「だが、可能性はあるだろ！　もしかしたら、もう他のチームが見つけてるかもしれないし…」

雄真が言いかけたのを、出水の冷めた言葉が遮る

「それはないわね」

「なんでそう言い切れんだよ？」

「発見したチームから連絡がないもの」

それを聞いて、雄真は首を傾げる

「は？ 『中島健吾を見つけたら素早く排除、必ずしも連絡する必要はない』 ってのが今回の作戦だろ？」

「そうだけど、本当に『素早い対処』が出来るなら事は一瞬。もう連絡が来ていておかしくないわ」

「じゃあ、超力獣と戦闘になってるんじゃないやねえの？」

「それでも一緒だと思っケド」

「は？」

ますますわからないというような表情の雄真にため息をつく出水

「だって、その為の二人一組（ツーマンセル）でしょ？ どちらか戦闘力の高い方が超力獣を足止めしてる間に、もう片方が仲間を呼べばいいじゃない？ いくら連絡の必要がないっていつても、ねえ？」

「出来るならした方がいい…な…」

「でしょ？ それに、もしも相手が、破壊工作が目的のテロリストならここまで何も起きないのはおかしいよ。議会はまだ始まらないケド、もう標的は集まってるし…」

「うーん、どうなってんだ？」

腕組みして考える雄真の問いに出水は単刀直入な答えを出した

「だから、きつと、ここにはいないのよ。あーあ、なんかバカらしくなってきちゃったなあー」

「お前、本当にやる気ねえなあー！」

「だってえー、兄の友達の勝広さんから誘われてさ。警視庁に入ってエリート刑事としてバラ色の人生が待ってると思ったのに。変な部署に回されて、変な奴らの相手ばかり…」

「悪かったな。変な奴らの一人で！」

雄真が呆れたように半ば無理矢理に謝ると、今度はケロリと態度を変えて出水は言う

「でも、アイツらに比べたら、あなた達、サイコロレンジャーのみんなはまだマシな方ね」

何だ、コイツ？ コロコロとテンションを変えて面倒くさい…。

そんな感情を押し殺して雄真は言う

「ああ…田町の事か？」

「違う。あの人は今更言うまでもないじゃない」

出水が首を横に振ったので雄真は続けて聞いた

「じゃあ、護衛の三人の事か？ 確かに奴らもなかなかだよな。特に樋村透。アイツはとんでもないイヤミ野郎だぜ」

しかし、出水はまたも首を横に振る

「それも違うわよ。もしかして、あなた達、まだ会ってないの？」

「は？ 誰の事言ってるんだ？」

「今回の任務だけど、私達、特殊犯罪対策科と君達、サイコロレンジャー、そして護衛の三人の他にも養成学校から二人、メンバーが加わってるのよ」

「そういうや、里菜がそんな事言ってたな。ソイツら、そんなにヤバイのか？」

「片方、たまたま伝令の関係で会っただけなんだけど…」

出水はそう前置きしてから、鼻で笑いながら吹き出すように言った

「アレはヤバイなんてもんじゃないわよ！」

—————

「ヒヤヒヤヒヤ！ どこだあ！ どこにいやがる敵さんよお！ 出て

こい、出てこい！ 俺と遊んでくれえ！」

そう甲高い声で叫びながら国会議事堂内の廊下を進む、目の釣り上がった青年。

肩まで伸びる長い髪をたなびかせながら小走りする彼を、警備員に扮した純が追いかける

「ちよつと…ちよつと！ 周りをみてよ！ マズイつてば！」

現在、衆議院本会議の開始直前である。

廊下の人通りは多い。

往来する関係者たちは皆、一様にこの意味不明な内容を叫び続ける青年を不審そうな目で凝視している。

純は彼らをさして青年にもう少し慎重な行動をとるようにたしなめたのだが、青年に反省する様子は見られない

「あ？ 何でだよ？ 俺は今、ワクワクしてんだ！ ずっと待ってたんだよおー！ 俺の能力を試せる時をお！」

ダメだ、コイツ…。楽しみに話す青年を見て、そう判断した純は、後ろから青年の腕を掴んで関節を押さえつける

「痛えな！ テメエ、何しやがる！」

青年が反射的に叫ぶが純は構わず、『警備員と不審者』のフリを続けた。

「鈴木太郎！ 連行する！」

勿論、青年は純があえて、周りに知らせるように偽名を叫んだのにも気づかない

「はあ？ 鈴木？ 誰だそれ？ 俺は黒金慶次つてんだよお！」
本当にダメだ。

純は更に強く腕を締め上げ、背中を押して、黒金慶次と名乗った青年を人目につかない所へ連れて行くこうとする

「何すんだ！ お前は俺の味方だろうが！」

「み、味方?! な、な、何を言っている！ お前のような不審者の仲間になった憶えはない！」

「ふざけんなよお！」

「大人しくしろっ！」

激しくもみ合いながら前進していく黒金と純。

そんな小競り合いの中、黒金が純の身体をやや強く押す。

すると、なにやらゴツゴツとした硬いものが純の腹に当たった

「痛いっ！」

黒金はその隙を突いて逃げ出そうとしたが、純はそれでも手を離さなかった

「チッ！」

そう舌打ちして抵抗をやめる黒金。

事態がやや沈静化して落ち着きを取り戻した純。

「今、当たった硬いものは何だったのかな？」

ふと考えて、黒金の身体を見渡してみると、純はそこで、信じられないモノを見た。

それは黒金の左腕に装着された、腕時計大の物体。

純にとっては見慣れたモノだが、それでも自分たち以外が持ってい

るはずはないモノだった
「え、これって、サイコチエンジャー!？」

議事堂潜入（3）

衆議院議場入口前。

次から次へと議場に入出入りする関係者たちを見つめながら、凌は焦りを感じていた。

この場所で合流するはずだったパートナーが来ないのである。

ふと、右上方向にある壁にかけられた時計に目を移すと、時計の短い針が9を刺そうとしている。

つまり、国会突入からは20分程が経った。

パートナーが誰なのかは現場には一切知らされていない。

だが、それが誰であれ、一分一秒が惜しいこの状況でここまで待ち合わせ場所に来ないということは、要するに、来れないということだ。

潜入がバレそうに動けない、あるいは既に戦闘中か。

もしかしたら、もうやられてしまっているのかもしれない。

本来なら、そろそろ持ち場を離れて、捜索にいくべきなのだろう。

しかし、凌はそれに二の足を踏んでいた。

なぜなら、ここは議場の入口。

健吾がこの国会議事堂を狙うなら、最終的には必ずこの付近を狙ってくる。

ここにいる人達を守る為には誰かが必ず、この場に残らなくてはいけない。

それならば、誰かに代わりを頼めばいいのかもしれないが、それもしたくなかった。

今の健吾を止める為には、自分がここにいなくちゃいけない。

自分勝手な判断だとわかっていながら、凌はこの場に留まり続ける事を選んだ。

議場に入っていく議員たち。

同じ党なのか、派閥なのか。

数十人が必ず固まって談笑しながら通り過ぎていく。

中にはテレビ等で見かけた事のある顔が混じったりもしているが、凌は彼らを眺めたりなどしない。

ただ、聞こえてくる心の声に耳を澄ませていた。

健吾は自分の知っている彼とは変わっているかもしれない。

あるいは変装しているかもしれない。

でも、心の声を聞けば、絶対に見分けられる。

凌にはそんな確信があった。

しかし、である

【このジジイ、早く引退しろや。俺は、いつまでペコペコすればいいんだよ?】

【愚かな国民達め…。何も知らずに非難ばかり…。私は選ばれた人材なんだ。お前たちとは違うんだぞ!】

【鈴木さん、失脚しちゃったよ…。次は誰にお世話になろうか?】

【それにしても、昨今の経済危機は過去に前例がない…。まさに未曾有（みぞーゆー）の事態だ!】

次々と聞こえてくる人々の心音。

「くっ…」

凌は思わず、歯を食いしばり、顔をしかめる。

凌の読心術は相手の思考を正確に読み取るが、ある程度までしか「能力をOFF状態にできない」「的を絞れない」という特性上、決して探索に適した能力ではない。

ここまで多くの声が同時に聞こえてくると、頭痛が目眩か。

何とも言い難いが、それに近い、吐き気すら覚えるような悪寒に襲われる。

だが、ここで倒れる訳にはいかない。

うるささに、雑音に耐えるだけではダメなんだ。

余計な音は聞かなくていい。

その中にある、健吾の、その気配だけを掴むんだ。

凌は自らの記憶に残った、健吾の純粋で透明感のある、だけど、それ故に一種の危うさすら感じるような、あの感覚だけを人混みの中からかき分けるように探っていく。

すると、不思議と、聞こえてくる音から余計なモノが少なくなっていく。そして、聞こえてくる心音の一つ一つがよりクリアなモノと

なっていく。

長い間、この力と付き合ってきたが、こんな感覚は初めてだった。もしかしたら、戦いの中で自分の能力は更に強いモノへと開花しようとしているのかもしれない。

そんな予感を感じていた、その時。

凌は遂に探し当てた。

議場へと入っていく議員たちの人波の、その向こう。

大きなリヤカーを押しながら廊下の角を曲がろうとしている清掃員姿の男。

健吾だ！

ハッキリとした心音が聞こえた訳ではないし、視認できたのも後ろ姿だけだったが、凌は確信した。

誰より澄み渡っていないながら、どこか歪で脆そうな、あの感じ。

健吾以外に考えられない。

他の誰かならともかく、彼の事なら間違いようもない。

必ず、ここでケリをつける。

そう決めた凌は曲がり角を曲って自分の視界から姿を消そうとする健吾の事を、議員たちを押しつけるようにして追いかけていく。

—————

一方、国会議事堂中央玄関近く。

「ハア、ハア…」

膝に手を当てて、息を切らす出水愛と、腕を腰に回して何やら考え事をしている雄真。

二人は国会潜入から数十分がたったというのに敵に動きがない事を不審に思い、議事堂内を駆け回りながら事態の収集に努めていたのだが、結局、大した成果も得られず、元いた場所に戻って来てしまっていた。

「やっぱり、妙だな…」

雄真が、ふと呟くとまだ息が整う前だというのに出水はペラペラと喋りだした。

「ハア…、ホラ、ハア…、だから…さつきから言ってるじゃない…？」

きつとこんな所に超力獣なんていないのよ！ 超力獣の親がどんなヤツかよく知らないけど、こんな警備の厳しい所、狙うなんてありえないよ…」

「じゃあ、俺のサイコメトリーは何だったんだ？ 今、見たら像が一つ無いあの部屋、確かにあつたぜ？」

「うーん、サイコメトリーで読みとれるのっていわゆる『残留思念』つてヤツなんでしょ？ 別にここを狙うって訳じゃなくても、強い思い入れがあれば映像が読みとれちゃうこともあるんじゃない？」

「議員でもないのに国会に強い思い入れがあるってどんなヤツなんだよ!? 俺達だつて、そこら辺は全部考慮した上でここが目標地点だつて言つてんだ！」

「じゃあ、何で相手は姿を表さないの？」

「だからそれを考えて…」

雄真がそう言いかけた時、廊下の向こう側から「キャー！」と若い女の悲鳴が聞こえてきた。

「桧垣くん！」

先ほどまでとは表情を一変させて、鋭い目つきで叫んだ出水を見て、雄真は確信した。

「遂に出たか！ 超力獣！」

中央玄関を入つて真つすぐ行つた後、廊下を右側に曲がつた辺り。声の聞えた方向から敵の居場所をそう判断した雄真は陸上選手のような整つたフォームで猛ダッシュを開始する。

会議が始まるまで時間がないからだろうか。

潜入時には人でごつた返していたこの中央玄関周辺にも、もう人が少なくなつてきている。

だから雄真は何にも邪魔されず、走りながらグングンとスピードを上げていく。そして、あつという間に廊下の曲がり角に差し掛かり、そこへそのままのスピードで突つ込んでいく。

ここを曲がれば、もうすぐ、敵の姿も確認できるだろう。

そんな意図を持ちつつ、進行方向を右にかえた瞬間、雄真の腹部に鈍い衝撃がはしつた。

「ぐっ！」

思わず、その声を発しながら後ろに倒れる雄真。

倒れた瞬間、床に打ちつけられた背中にも同様に痛みが走る。

敵の攻撃か!?

素早く立ち上がろうとするが、胴体の辺りで何かが引つかかり、思うように身体が動かない。

疑問に思っただけで仰向けに倒れた体勢のまま下方向を見て自分の腹部を確認してみると、その上には高校の制服をやや派手にしたようなアイドル風の洋服を来た少女が大股を広げ、跨がっていた。

「今、パンツ見ましたよね？ 変態！」

雄真は少女がその声を発した瞬間、乱暴に彼女を身体の上からなぎ払い、後転するような動作で素早く立ち上がった。

「きああー！」

払われた少女はゴロゴロと縦に2周程転がってから壁にぶつかって静止した。

「いったーい！」

そう言いながら打った腰を擦る少女。

少し遅れて雄真について来た出水が、その様子を見かねて、雄真をなだめるように言った。

「松垣くん、ちよつと、いくらなんでも女の子相手に乱暴過ぎるでしょう？ 少し下着が見えたくらいでそんなに慌てないの！ もしかして松垣くんって童……」

雄真は出水が言い終るのを待たずに叫んだ

「違う！ そうじゃない！」

「はいはい、わかった、わかった。でも、そんな必死に否定する事でもないよ。私、ヘタに遊んでる人より、純粋な人の方が好きだなー。てかだいたいみんなそうだと思う」

出水はフォローのつもりで言った。

しかし、その言葉は雄真には届かなかった。

「お前、何者だー！」

出水の言葉を完全に無視して少女を睨みつける雄真。

その様子で出水も雄真に少し遅れて気づいた。

「あっ……」

思わず口を覆った出水の顔を見て、雄真はコクリと頷く。

二人が感じた違和感。

それは、何故こんな格好の少女が国会の中に入れるのかと言う事だった。

今は国会の会期中。見学ツアー等は全て中止になっているはずだ。だからこそ、パスを持たないサイコレンジャーのメンバー達はわざわざ警備員の制服まで用意して潜入している。

それに対して、目の前にいる少女の風体は余りにも場違いだ。

まず第一に若すぎる。特徴的なのはクリクリとした目と白く見るからに柔らかかそうな肌。どこか純にも似た面影を感じさせるが、猫なで声をだしたり、小刻みに身体を動かして乙女チックな雰囲気醸し出す彼女は、純よりも更に若く見える。いついっても、高校は卒業していない程度の年齢だろう。議員だとしても職員だとしても不自然だ。選挙権すら持っていないだろう。

次に服装。

履いているスカートは明るい赤でチェック模様。髪型はいわゆるツインテールで結び目には羽を広げたアゲハ蝶のような大きいリボン。もし、仮に本物のアイドルが外交PRに関わる為に入りに出ているのだと考えても、もう少しマシな格好を選ぶはず。彼女の身なりはこの空間の中で明らかに異質であった。

少女に向かい、臨戦態勢をとる雄真と出水。

少女もその様子を見て、半ば開き直ったのか。

懐からナイフを取り出し、伸ばした左腕の手首にその切っ先をつける様な独特の構えをとる。

やはり只者ではない。

そう判断した雄真と出水が更に警戒を強めると、緊張もピークに達し、お互いの間の空気が一気に張り詰める。

しかし、そんな状況も長くは続かなかった。

「おーい、ちよつと待ってよーう！ 天使くーん！ 天使留架くーん

！」

廊下の奥の方から甲高い男の声が聞こえてくる。

どこかで聞いたことのある声。

雄真がそう思つて、声のした方向に目をやると、背がひよろりと高く、眼鏡をかけた男がコチラへ走つてくるのがわかつた。

出水の上司、警視庁特殊犯罪対策課の田町洋輔である。

田町は3人がいる現場までたどり着くと、膝に手を当てて、「ハア、ハア、ゼエ、ゼエ」と大きく息を吐いた。

余程、長い距離を走ってきたらしい。

「どうしたんですか？ 田町さん？」

出水が聞くと、田町は息も整わない内に話した

「いやあ、どうもこうもないよ、大変だったんだからー。君、ちよつといい加減にしてよ、もうー！」

そう言い、田町は人差し指で派手な格好の少女の事を指した。

少女はいつの間にか、あの独特の構えを見せる方向を雄真らの方から田町の方へと変えている。

どうやら、田町と彼女はここにやってくる前に何かあったようだ。

それを察して雄真は少女に尋ねた。

「なあ、もしかして、このおっさんに何か取り返しのつかない事をされたのか？」

少女はコクリと頷いた

「はい、あの人、変態なんですー！」

出水は少女に同意を示して何度も頷く

「ええ。知っているわ。で、具体的には何を？」

「いやらしい目で見られました」

「他には？」

「それだけですけど…」

「へ？」

「は？」

雄真と出水は互いに顔を見合わせて首を傾げてから一斉に問い詰める。

「それだけ!? 本当か? 何かされたんだろう?」

「もしかして、言いたくないくらい、酷いことをされたの?」

「ええっと…」

少女は人差し指を口元に当てるような仕草でしばらく考えてから言った。

「あつ、そういえば、変な事言われました!」

「どんな事だつ!」

雄真が思わず、叫ぶと少女は田町の甲高い声を真似しながら言う

「ハア、ハア、と息を切らした気持ちの悪い声で『ね、ねえ、き、君の能力はど、どんなモノなのかな? ハア、ハア、で、できたらちよつとでいいから、見せてくれないかなあ…』とか言ってきたんです! そんなの、見せられる訳ないじゃないですかっ! スケベ!」

「…。」

雄真は呆れながらもなんとなく納得した。

おそらく、この少女が今回、養成学校から作戦に加わった内の一人。出水の反応から見るに、まだ彼女とは接触していない方だろう。

怪奇現象マニアな田町の事だから、初対面の超能力者を目の前にして、興奮したのだろう。

能力について掘掘り葉掘り、しつこく聞いたに違いない。

「驚かせて悪かったな。コイツ、変態なんだ。でも、コイツも俺達も敵じゃない。頼むから協力してくんないか?」

少女はそれを聞いても納得できない様子でいじけ気味に頬を膨らませる

「でも、強要されました…」

「何を?」

「コスプレ…」

「えっ!」

雄真と出水が侮蔑の念を込めた視線を送ると、田町は慌てた様子でカバンから変装用の衣装を取り出した。

「違うよう! 僕は『その格好じゃ目立つから警備員に化けるように』って言っただけなんだ。それなのに彼女、誤解して逃げるんだも

の…。困っちゃうよ」

雄真は呆れたように頭をかいてから少女に言った。

「そういう事ならしいぜ」

「そうなんですか？」

キョトンとした表情を見て、雄真は田町に悪い事をしたなと思っただ。一方的に田町が悪いんだとばかり思っていたが、どうやらこの惚けた少女の方にも問題が有りそうだ。

そんな雄真の横で出水がため息をつく。

「ハア。黒金君があんな感じだったから、もう一人も、もしかしたらっと思っただけど…。やっぱりこういう感じかあー」

「やっぱり、もう一人もこんな感じか？」

雄真が不安そうに聞くと、出水はコクリと頷いた。

「うん。てか、もつとヤバイよ」

激突！ 健吾と凌

「やっと見つけたぞ、健吾！ 止まれ！ 止まらなければ撃つ！」
国会議事堂本会議場付近の廊下。

凌はサイコガンを構えながらそう叫んだ。

その銃口が向く方向には作業服を着た青年の後ろ姿。

青年はいかにも清掃員らしくリヤカーを押しながら足早に行動していたが、凌の言葉を聞くと、その場にピタリと立ち止まった。

そして、徐に右手をポケットに突っ込みながら、後ろを振り向く「動くな！」

青年の身体が90°。ほどコチラを向いた段階で、凌はまたしても叫んだ。

相手はポケットに入れた右手に武器を隠し持っている。

即座に気づいて牽制する凌に健吾は苦笑いして舌打ちした。

「バレた？ さすが凌。心を読まれてるみたいだ」

凌は健吾の皮肉に反応すまいと、わざと強い口調で言う。

「手に持つてる物騒なモノ、離してくれるかな？ 爆弾のスイッチだよね、それ」

健吾は凌の警告を無視して身体を完全に凌の方へ向けてから答え
た

「大当たり。でもコイツは渡せないな。俺の最後の武器だからさ」

その瞳は真っ直ぐ前だけを見ている。

健吾は、本気だ。

そう直感した凌は一旦銃を降ろして健吾に静かに問いかける

「健吾。一体、何でこんな事するんだ？ あの公園が…みんなの思い
出の、生活の場所が奪われたから？ こんな事したって、もうあの場
所は返ってこない！ それに、実行委員の主要メンバーはあらかた殺
害し終わっているはずだ。それでいて、まだこんな…」

「俺のターゲットは実行委員だけじゃない。弱い者を犠牲にして利権
を貪った者、全てだ！」

凌は健吾が背負う決意の重さに打ちひしがれる思いがした。

もし、健吾の言う事をそのまま受け取るなら、彼はまだあと何人の人間を殺めなくてはいけないのだろうか。

公園を奪ったのは実行委員や都の職員だとしても、巨大イベントの利権に群がるのは彼らだけではない。

むしろ、本丸は違う所にある。中には純粋な気持ちで協力した者もいるだろうが、国にも財界にも自身の名誉や利益の為に動いた者は多い

「それじゃ、キリがないじゃないか…」

「だから、この作戦なんだ」

凌は健吾の意図が掴めず、首を傾げてみせる。

その様子を見て、健吾は続けた

「逃げろ、凌。超力獣を使って、この建物の地下に爆弾を仕掛けた。あとはボタンを押すだけ…。それで次郎さんの残してくれた特大の爆弾が爆発する！」

「なんだって！ 何言ってるんだ！ これ以上、人を殺して何になるッ！」

思わず、冷静さを失った凌を手のひらを差し出し制して健吾は言う「別に殺して憂さ晴らしをしようって訳じゃない。これはメツセージなんだ」

「メツセージ？」

「ああ。何の後ろ盾もない、俺達がいくら声を大にして叫んだ所で誰も聞いてはくれない。だから、やるしかないんだ！ 俺達はただ従うだけじゃない。虐げられるだけでもない！ その意志を見せつけるんだよ！」

怒りに震える健吾を見て、凌は思う。

「そうか。そうだったのか…。それほど、そうしなくてはならないほど、追い詰められていたのか…。」

あるいは、かろうじて思いとどまっていたところで、思いがけず、力を入れたってしまったのか。

なんにせよ、健吾が、次郎さんが、みんなが戦っていると知った時、僕はみんなの元に戻るべきだった。

僕なら、こうなる前に止められた。それは、僕のミスだ。でも、それでも、どうしても納得できない、許せない事がある。

「それは次郎さんを犠牲にしてまでしなればいけない事なの？」

超力獣を操っているのが健吾なら、あのムカデ型超力獣に新垣次郎の首を撥ねさせたのも、当然、健吾と言う事になる。

弱者の為に、仲間の為にやっているというなら、それは矛盾している。

凌にはそれだけがどうしても納得いかなかった。

「あれは、次郎さんが望んだ事だった」

そう言うと、健吾の視線が初めて揺らいだ。

その表情からも、一瞬だけ覗いた心の声からも、雄真のサイコメトリー通り、あれは本意ではなかったというのが伝わってくる。

「もし、そうだったとしても、僕の知っている中島健吾は…どんな事情があっても仲間を平気で犠牲にできる人間じゃなかったよ」

健吾は変わってしまった訳じゃない。

今だって、仲間が死んで平気な訳がない。

目的の為とはいえ、自ら仲間を殺してしまつて傷ついているはずだ。

凌はわかつていて、そう言った。

でも、こういう風に言えば健吾はきつとムキになる。

表には出さなくても、心の声までは抑えきれないだろう。

先ほどのリアクションを見て、そう判断した。

卑怯な手だと、自分でもそう思った。

でも、どうしても健吾の真意が知りたかった。

その効果は予想以上だった。

健吾は観念したように弱々しく言葉を吐き出した。

「みんなが公園を追い出されて、すぐ、まずは桜子さんが、近くの小学校の校庭の木で首吊つて死んだよ」

「えっ……」

健吾の発言に凌は少なからず衝撃を受けた。

桜子さんというのは、昔のホームレス仲間の一人だ。

借金取りのヤクザから逃れる為に、ホームレス生活をするようになった人で、年は当時、20代半ばだったから、今、生きていたら30代前半くらいだろう。

若い女性ホームレスというのは珍しい。

他の土地で暮らしていた頃には随分、酷い目にもあったようで、色々な場所を転々としていたそう。

だが、凌たちの住む公園にやって来てからは、そういった事もなくなって、定住するようになった。

ホームレスに身を窶しながら女性らしい優しさを忘れない人で、当時の凌にとっては母親のような人だった。

きつと、生活に満足はしていなかっただろうが、未だに住処を移動していなかったという事を考えると、彼女にとってはあの公園だけが安心して暮らせる場所だったのかもしれない。

あそこを追い出されたら、借金取りに見つかっても守ってくれる人は誰もいない。

それに、また、他の浮浪者に酷い事をされるかもしれない。

今更、他の所では暮らせない。

そう思っただけで彼女は自ら命を断つたのだろう。

凌は彼女の心境を想像しただけで胸が苦しくなって呼吸が出来なくなっていくような感覚を覚えた。

凌が絶句している間に健吾は続ける。

「富山さんは、荒川の河川敷に住み着いたんだけど、ある日、川が増水して、その日以来、行方不明…。たぶん、あの人、足が悪かったから逃げ遅れたんだ…。探してくれるよう、消防にも要請したんだけど、まともには探してもらえなかった。」

「そんな…何で…?」

「元々が住所不定なんだから、『家』に帰って来なくても別に不自然ではないって判断だろうね」

たて続いて知ったかつての仲間の死に肩を落とす凌に健吾は畳み掛けるように続ける

「上野の公園に移り住んだ金さんは、ゴミ箱漁ってたら、先住者に空き

瓶で頭殴られて病院送りに……。しかも、治療費の払えない浮浪者を受け入れてくれる病院なんてほとんどなくて……。奇跡的に受け入れ先が見つかって助かったけど、金さん、病院たらい回しにされて、救急車の中で死ぬ所だったんだ……！」

健吾に言われて、凌は上野の公園で金さんに会った時の事を思い出す。

確かに彼は頭に血の滲んだ包帯を巻いていた。

ホームレス社会では喧嘩など、よくある事だから、そこまで気にしていなかったが、そんなに酷かったとは……。

そして、健吾は叫ぶ

「みんな、今まで通りに暮らせてたらこんな事にはならなかったんだ。そりゃあ、みんな、人生に挫折してあそこにやってきて、お世辞にも立派な人ではなかったよ！ でも、でも！ それでも！ あの人達が、みんなが、死ななきゃいけないほどの何をしたっていうんだ！ 人の、ささやかな居場所すら守れないのかよ！ 世の中は……！ 仮にもしその不条理が、一部の人間の利益や見栄の為に見逃されてるのなら、俺はそれが許せない！」

そして、全力で叫んだ健吾は、最後の力を振り絞るように静かに言う。

「だから、俺は世間にメッセージを送るんだ。そろそろ、マスコミ各社に爆破予告状が届く頃。事件が公になれば、それが読み上げられる。無視され続けた俺達の声が、ようやく届く……。失ったものはもう戻らないけど……。でも、もし、これで、少しでも、誰かが考えてくれるなら……。社会が少しでもいい方向に進むなら、俺は、それで……」

やっぱり、僕もアチラ側の人間なんだな……。

事情を聞いてしまうと、やっぱり彼を敵だとは思えない。

むしろ、心情的には肩入れしたくなってしまう。

そんな自分に対して凌はそう思った。

もし、立場が多少違えば、アチラに加担していたかもしれない。

そうとすら思う。

だが、それでも。

凌は余計な考えを振り払うように再びサイコガンを構えた。

凌を突き動かしているのは、戦士としての使命ではなく、共に国会議事堂に潜入した仲間の存在だった。

彼らはサイコレンジャーだ。

命を賭してこの破壊行為の阻止にあたっている。

もし仮に現在の切羽詰まった状況を知らせても、逃げ出す者などいないはず。

つまり、健吾の計画成功は、それ即ち仲間の死なのだ。

確かに、今回の件では昔の仲間の多くが居場所を失い、中には死に至る者すらいた。

間接的とはいえ、その原因を作った奴らが許せないのは凌も同じだ。

でも、だからといって、超能力者としての自分に居場所を作ってくれた、今の仲間を犠牲になんてできない。

健吾も言っていたように、失ってしまったものは、もう二度と元には戻らない。

ならば、今の凌にできる最大限は、この場で健吾を止めてサイコレンジャーの仲間たちを守る事、そして、できる事なら健吾を説得して無事に連れ帰る事だった。

「やっぱり、間違ってるよ。健吾。本当に社会を変えたいなら、たとえ何年かかったとしても、正しい方法で戦うべきだったんだ！一度、裁判で負けたからなんだっていうんだ？手を变えて何度でも訴えを起こせばいい！裁判がダメなら、政治家になって法律自体変えてしまえばいい！そうやって、社会に訴えかけていけばよかつたじゃないか！君ならそれができたはずなのに！」

「それまでにどれだけ時間がかかる…？ どれだけの人間が犠牲になる…？ 俺にはこれしかなかつたんだよ！」

首を必死に横に振り叫ぶ健吾の声を覆い隠すように、凌は更に激しい口調で言う

「甘えるな！君に超力獣を与えたのが誰なのかわからないけど、君はその誰かにそそのかされて楽な道を選んだんだ！違うのか!？」

核心を突かれたという事だろうか、その言葉を聞いた健吾はその場に片膝をつき、踞るような格好になってしまった。

そんな彼に凌は慰めるように言う

「君の想いが偽物だったとは思わない。でも、きっと、少しだけ、急ぎすぎたんだ…。」

観念した様に微笑む健吾。

それを見て凌も思わずホツと一息つく。

だが、

「ああ、そうだな…」

と一言呟くと、再び爆弾のボタンを取り出して構えた。

「えっ?」

フザケているのか…?

一瞬、そう思ったが、そうではない。

健吾の心の声がそう言っていた。

「バカなことはヤメロ! 頼むからスイッチをこっちに渡してくれ!」

凌の言葉は健吾には届かない。

開き直ったのか、あるいはそうでもないかと正気を保てないのか。

先ほど見せた健吾は笑みを浮かべたまま言う。

「凌の言った事も正しい。そうだと思う。だけど、ゴメン。もう止まらない。ここに来るまでに味方も敵も犠牲にし過ぎてしまった…。たとえば、間違った行為の為でも、彼らの死を無駄にする事なんてできないんだよ!」

ドシンー!

健吾が言い終わった瞬間、そう大きな音がなり、地面が激しく揺れた。

これは、まさか!

凌の思考を察したのか健吾は語りだす

「やっと、動き出したか…」

「健吾…。一体、何をした…!?!」

「俺が使っていたムカデの超力獣…。あれを巨大化させて、この永田

町に放った！」

「何て事をー！」

今すぐ掴みかかりたかったが、爆弾のスイッチを目の前に構えられ、身動きがとれない。

悔しさを歯を噛みしめる凌に健吾は追い打ちをかける

「早く行かないと街が滅茶苦茶だ。サイコロンジャーには巨大化した超力獣を倒すロボット兵器があるんだろ？ 俺に超力獣をくれた女が言ってたぞ。ここを離脱して迎え撃った方がいいんじゃないか？」

凌はそう言い放つ健吾を激しく睨みつけた。

だが、それは憎しみや敵意からではない。

ただ単純にある一つの思いからだった。

手強いー！

今までも、今回と同じようなケース、つまり、他人から与えられた超力獣で行う犯罪は何度か扱ってきたが、目の前にいる旧友は、これまでの相手とは全くもって異質な存在だった。

明確な目的意識を持った人間が計画的に超力獣を使うと、こんなに手強いものなのか…。甘かったのはコツチの方だ…。

凌の胸に後悔の念が込みあげる。

そんな思いを知ってか知らずか、健吾は自身の胸を示しながら言う「さあ、どうする凌?! 俺が本当に間違ってるっていうなら、今すぐに俺を撃ちぬいてみる！」

挑発的な言葉ではあった。

でも、凌にはわかった。

健吾は僕を信用している。

凌はそう感じた。

おそらく、健吾は今も迷っている。

迷いながら、もう止まれない所まで来てしまった。

自分のやっている事が正しいのか、間違っているのかわからない。だから、健吾は僕に判断を委ねた。

『もし、自分のしている事が本当に間違っている事だったなら。凌は自分を殺してでも止めてくれる』

そう信じて…。

「ずるいよ、健吾…」

今まで昔の仲間たちを無視していた事への後ろめたさ、サイコレンジャーとしての使命感、健吾への友情、今守りたい人の事、色々な想いを込めて凌はその言葉を吐き出した。

健吾は

「ごめん…」

と笑顔で呟いてから大きく息を吸って言った

「凌、お前が今から10秒以内に俺の視界から消えてくれなければ、俺は、スイッチを押す。もう警告はしない。絶対だ。だから、後はお前の判断次第だ…ここから逃げるのも、俺を殺すのも好きにしろ。」

どうしたらいい…？ 何て言って止めればいい？

凌がそう考えている内に健吾はカウントダウンを始めた

「10…9…」

そんな健吾を見て「交渉は失敗だ…。彼を止めなきゃ！」と判断し、凌も慌ててサイコガンを構え直すのが、不思議と指に力が入らない。

「6…5…」

私情は挟むな、殺らなきゃ殺られる、こういう事もありえるって覚悟してたはずじゃないか！

健吾の数えている数字が段々と小さい数になっていく中で必死にそう言い聞かせようとしたが、それでも引鉄を引けない。

「3…2…」

何で！ どうして！ 今まで何度も撃ってきたのに…。

どうしても彼を撃てない…！

みんな、ごめん…。

凌が心の中でそう叫び、膝から床へ崩れ落ちた瞬間だった。

パンッー！

乾いた音が廊下に響き渡った。

何が起きた!? これは銃声か!?

凌が状況を確認する為に頭を上げてみると、目の前にいる健吾が胴体から血を流すと同時に口から激しく吐血していた。

健吾は凌が撃ったモノと思つたらしい。

ゲホツ、ゲホツと咳き込みながら

「凌…、あ…ありが…と…う…」

と力なく言つて前のめりに倒れた。

やや呆然としながらも、フラフラと健吾に駆け寄つた凌。

腹から血が噴き出していたので、おそらく彼の後方からの射撃だ。

そう思つて廊下の奥を見てみると、そこに一人の青年がいる。

凌と同じく、『宝来警備保障』の制服を着ていたので、共に潜入した仲間の内の誰かなのはすぐわかつた。

そして、青年が近づいてくるにしたがい、その姿がハッキリと見え
てきた。

スラリと背が高く、俳優のようにクツキリと整つた顔立ち。

やや長め髪をなびかせながら堂々とコチラへ歩いてくる。

間違いない。

宝来財閥会長・宝来源三のボディガード。緋村透だ。

「いやあ、すいません。なんか手こずっていたようだったので、お手伝い
をと思つて撃つてしまいました。余計でした？」

「何故、集合場所にこなかつた…？」

凌は透が一人で現れたのを見て、本来自分とコンビを組むはずだつたのがこの男だと気づき、そう問うた

「道に迷っちゃつてっ☆」

冗談めかした言い方をする透を無言で睨みつけると、彼は

「あれ？　そういうテンションじゃなかつたかな？」

と頭をかいた

「そういえば、風祭さんに嘘ついても無駄なんでしたね…。なら、仕方が
ない。ホラ、犯人が風祭さんと知り合いかもつて情報は事前に入つて
ましたから。普通に二人で探すより、風祭さんを餌にした方が、獲
物が釣れるかなーって…」

「何故、殺した？」

「は？」

「超力獣や爆弾の入手経路、渡した人間がいるならソイツの人相や能

力……。殺す前に聞かなきゃならない事はいくらでもあっただろうがッ！」

多分に私情混じりではあるが、凌がいつになく激しく怒りを示したので、透はやや怯んだようだ。

少しだけ出た冷や汗を拭いながら言い訳する

「だって、今、殺らなかつたら、この人、ボタン押してたでしょ？ なのに風祭さん、なかなか撃たないから……。知り合いだと殺りづらいのなあって思って代わりに撃つたんですけど……」

透の意見は全くの正論であったのだが、凌には彼の浮かべる苦笑いがニタニタ笑いにしか見えず、気に食わなかった。

読心術で、彼に馬鹿にするような意図がないのはわかっていたが、それでも顔が気に食わない。

ヤツあたりできれば誰でもよかつたのかもしれない。

凌は無言で透の事を更に激しく睨みつけた。

ドシン！ ドシン！

その間にも巨大化した超力獣が国会の外で暴れまわっている音が聞こえてくる。

その音を聞いて、透は大袈裟に言った

「さあ、さあ！ まだ事件は終わっていませんよ！ 一刻も早く超力獣を倒さなければ被害は広がるばかりです……。ここは僕に任せて、早くサイコバスターを出撃させて下さい！」

凌の怒りから身をかかわそうとしての発言なのはミエミエだったが、同時に正論でもあった。

「くそっ！」

凌は軽く地団駄を踏んでから国会議事堂正面玄関方面へと走り出した。

そこへ飛行モードのサイコバスター5機は編隊を組んで正面から近づいていった。

まず、はじめにレッド機がミサイルを発射。

すると、弾は「チュドーン！」と大きな音をたてながら超力獣の4本ある足の内の1本の付け根に命中した。

超力獣の足が身体から離れて、「ドシン！」と地面に落下する。

「よし、いいぞ、このまま攻撃を続けて奴の機動力を削る！」

イエロー機の里菜から出された指示に従って各機は編隊を崩し、超力獣に対して、一気に襲いかかった。

各機がそれぞれアクロバット飛行を繰り返し、超力獣を攪乱した後、まずブルー機が超力獣の斜め右後方から攻撃を仕掛ける。

機体の両翼に備え付けられた射出ポッドから発射されたミサイルが敵の足に命中。

超力獣にダメージを与えたのを確認するとブルー機は急速上昇し、再び攪乱の為のアクロバット飛行を開始する。

続いてグリーン機、ピンク機、イエロー機、そして再びレッド機：そうして攻撃を繰り返して、超力獣の足の数を半分ほどに削ったのち、イエロー機から里菜が号令をかけた

「よし、合体だ！ 一気にケリをつけるぞ！」

「おう！」

その指示に従い、龍我がレッド機内の合体用レバーをひく。

すると、5機のマシンが折り重なり、たちまち巨大なロボットが現れた

「合体！ サイコバスター！」

サイコバスターが完成すると、早速、純が手元の操縦桿をグツと力一杯、手許に引き寄せた

すると、サイコバスターの右足が急速に上がり、丁度、超力獣の身体を蹴飛ばすようなカタチになった。

攻撃を受けた超力獣は宙を舞い「ドッシーン！」と思いつきり道路に打ちつけられる。

かなりのダメージを与えたはずだが、超力獣はそれで目が覚めたの

か、素早く立ち上がると、不格好な走り方で再び、サイコバスターに向かってきた。

サイコバスターは超力獣の猛烈な突進を受けるが、凌と雄真はタイミングを合わせて巧みにサイコバスターの腕を動かし、超力獣の身体をガシツと抱え込んだ

「龍我、今だ！」

凌が叫ぶと龍我はコクリと頷いて操縦桿の先端につけられた赤いボタンを押した

「エナジーフラッシュャー！」

すると、サイコバスターの胸についたビーム発射口が開き、赤い光線が発射される。

「キシエエエー！」

超力獣が苦しみ奇声をあげる。

次の瞬間、ビームは超力獣の土手腹を貫き、空へと昇っていく。

「よし、エナジーソードDX！」

凌が叫ぶと、サイコバスターの手元に剣が出現。

それを一気に振り下ろすと、超力獣の身体は真つ二つに裂け、爆発。四散した。

記憶破壊（メモリーブレイク）

国会議事堂本会議場内。

仏頂面で押し黙るベテラン議員、不安そうに周りをキョロキョロする若手議員、今にも泣き出しそうな女性議員…。

皆、表情はそれぞれでも、言葉を発する者はいない。空間を冷たく張り詰めた空気が支配する。

議会は銃を持った7人の男女に占拠されていた。

7人の内、二人は警視庁特殊犯罪対策課の出水と田町。

議会中央演説台の両脇を固める。

そして、宝来源三護衛部隊の三人、緋村透、瀧本樹里、岡元太一と養成学校から任務に参加した天使留架、黒金慶次が幾つかある出入口を塞ぐ。

7人は超力獣への対策をサイコロレンジャーの5人に任せた後、国会議事堂を武力制圧。

関係者、議員一同を本会議場内に軟禁していた。

そんな中、演説台に一人の議員が上ってくる。

恰幅のいい中年議員。その男の登場に会議場は俄にざわめき出す。

確かに、宝来財閥の権力をバックにもつ政界きつての悪者とされている人物…。だが、ここまでの事をできる人間のはずでは…。

一同がそんな思いを抱く中、宝来祐二は演説台の頂点まで辿りつく。そして、台に手をつき、何か言おうとしたところで、誰かの叫び声が響いた。

「宝来祐二！ 貴様が首謀者なのか！ 失望したぞ！」

祐二が声のした方向を見ると、一人の老議員が目を血眼にしながら立ち上がっていた。

現国会の最左派党、日本革命党の長老、徳大寺孫市である。

活動家としての経歴もあり、その時代には「戦争すら辞さない過激な平和主義者」と言われた危険人物だが、この切迫した状況下、堂々と発言できる人物がいるとしたら、この男だけであった。

「祐二！ 私はなあ、立場は違えど、今まで貴様がやってきた事は、こ

の国のことを貴様なりに考えての事だろうと思つてきた……！　だが、自由と議論の場たる国会を武力で制圧するとは何事ぞ！　今すぐ武装を解け！　さもなくば理由を説明しろ！　我々が納得いく理由をだ！」

現在の立場は違えど、学生時代、左派活動に参加した事もある祐二にとつて徳大寺は師匠のような存在だ。

彼からの罵倒は祐二の心かなりのダメージを与えた。

更に、「そうだ！　そうだ！」説明責任を果たせ！」「さっきから外が騒がしいがそれもお前の仕業か！　怪しい奴を見たつて人もいるぞ！」と徳大寺の激に勇気づけられたのか、今まで黙っていた議員たちも次々と追求のヤジを飛ばしてくる。

それにつられて、祐二もつい感情的になる

「うるさい、うるさい、うるさい！　ワシだって本当はこんな事したくないんだ！　だが、仕方があるまい！　今、こうしなければ国は大混乱だ！」

祐二は多分に本音の入り混じった言い訳をしたが、その場にいる若手議員たちには訳がわからない

「どういう事だ！」

「そんなのが説明になるか！」

若手議員たちは再びヤジを飛ばすが、徳大寺は祐二の叫びから彼らとは違ったモノを感じ取ったようだ。

徳大寺は最大野党である改進黨の議席に向つて叫んだ

「茂一！　まさか、貴様の指示ではあるまいな！」

徳大寺が呼んだのは祐二の兄で改進黨党首の宝来茂一の名であった。

祐二とは違い、カリスマ性のある政界のやり手。

現在、祐二とは、お互いに対立政党の幹部同士であり、普通なら二人が手をとるとは考え辛い。

だが、この国を影で支配しているとすらされている、宝来財閥の意思が働いているとしたらどうか。

茂一が指示をだし、国家公安委員長として国の暴力装置の一つを握

る祐二が計画を実行することはありえるのではないか。

徳大寺の意図はこの辺りにあったのだろう。

しかし、徳大寺の発言に対して、改進黨側は沈黙を貫いた。

正確にいうと、一部の若手議員が情景反射的に反論しようとしたのだが、与党時代に閣僚を経験した党の中核を担う議員たちが押し黙ったままだったので、若手たちも彼らに倣ってしまった。

「ごらー！ 茂一！ 恥ずかしくないのか！ 他人に汚れ役を全て押し付けて貴様自身はダンマリか！」

改進黨の沈黙を責任逃れととった徳大寺は更に激しく茂一を攻め立てる。

祐二からすれば、政治の師匠たる徳大寺が自分の意を察しようとしてくれるのは嬉しくもあったが、これは計画の邪魔でしかなかった。

「黙れ！」

祐二は演説台からこれ以上ない剣幕で叫んだ。

普段、『政界の悪者』というイメージとは裏腹に議会での自己主張が少ないこの男の怒鳴り声によって、議会には再び沈黙が流れ出した。

祐二はそれを確認すると、静かに言った

「いいか、ワシがあなた方にする要求は一つだけだ。今から現れる人物の言うことをよく聞け。それだけ守ればあなた方は即刻、開放される」

それだけ言い残し、祐二は演説台を降りた。

議会はまだ沈黙している。

祐二の言う『今から現れる人物』というのが誰なのか、どんな人間なのか、一同が固唾を飲んで見守っていた。

ギイツつと緋村透が守る会議場前方のドアが開き、一人の小柄な女性が入ってきた。

一同はこの女性の登場に対して、大いに戸惑った。

彼女が首謀者なのだろうか。

宝来財閥を従え、このテロ行為を主導しているのだとしたら、あまりに若い。誰がどう見ても、20代より上には見えない。

そんな彼女がニコニコと満面の笑みを浮かべながら、演説台上

がってくる。

彼女の笑顔はいかにも柔らかい、女性らしい安心感のある笑みだが、今、ここでこの笑顔を正体のわからない不気味な女性が浮かべているとなると、それがなんとも気持ち悪い。

これは、祐二や茂一、あるいは他の閣僚級の政治家など超能力関連の真実を知る者以外、この場にいる全ての人が共有している思いだったであろう。

演説台上がった女性は独特の間の抜けたリズムで手短かに話した

「議会の皆さまあーん、こんにちはあー。私は三門志織といいまあーす。宝来財閥で働いていまあーす。私から、皆さんに、お願いがありまあーす！」

そう自己紹介すると、“記憶の破壊者（メモリーブレイカー）”と三門志織は自身の両目を両方の人差し指で示した

「皆さん、今から5秒間、私の目をジツーツと見てください。それが終わったら皆さんは無事に開放されますからっ」

国の中枢を武力制圧において、要求はそれだけ…？

集まった議員や関係者たちの内のほとんどが、自分の耳を疑い、状況をより正しく把握する為、身を乗り出すようにして志織を見つめた。

そんな中、茂一、祐二を始めとする二大政党、政友党と改進黨の閣僚経験者たちは彼女の要求には従わず、固く目を閉じていた。

三門志織やメディアを使い、超能力に関する情報規制を敷いてきた閣僚経験者たちは、この女性の持つ能力・「記憶破壊（メモリーブレイク）」の恐ろしさを十二分に知っていた。

「皆さん、準備はいいですね？ さあ、始めます！」

そう言い、三門志織は目をカッと見開いた

国会議事堂中央玄関前。

超力獣との戦いを終えたサイコロレンジャーの5人はここに集合していた。

5人の間に会話は無い。

今回の件の首謀者、中島健吾の死が、彼らの間に流れる空気を重苦しいモノにしていた。

そんな5人の前に、ツカツカと革靴の音を鳴らしながら、一人の男が現れる。

初対面の龍我はその人物の顔を見て、思わず「あ、本物だ！」と声を出した。

議事堂内から出てきたその男は政界の悪者こと現国家公安委員長・宝来祐二であった。

「祐二さん、議会の様子は？」

祐二が何か言う前に、凌がまず話しかけた。

自身が招いたこの事態。事後処理に関してもかなり心配しているように龍我には見えた。

祐二はそんな凌の心情を察してか、彼の肩に手を乗せて彼を安心させるようにゆっくり言った。

「なんだか随分親しげだ。」

「気にするな。計画は全て順調だ。お前たちがサイコバスターを出撃させる前に、議事堂内の人間は全て確保した。その後、戦闘が始まって外の様子の変化にも気づいたが、超力獣を直接見た者は少なかった。いちおう、全員に対して、『記憶破壊（メモリーブレイク）』を使用した。比較的軽いモノで済んだ」

しかし、凌の表情は未だ晴れない

「でも、外の人はどうするんですか？ 場所柄、近くにTVカメラなんかもいたかもしれない…。戦闘がカメラに写ってるかも…。」

「それも心配ない。各種報道機関には報道規制をしく」

「でも、政友党本部も一部半壊しているし、目撃者は消しきれません。いつもみたいに、『自衛隊の演習』程度のミエミエな言い訳じゃ、そろそろ誤魔化しきれないですよ…。」

「それに関しても…対策がある…いわば、最後の手段ではあるが…」

祐二が口ごもったので、里菜が補足した

「国全体を『記憶破壊』する…。そうですね？」

祐二が、コクリと頷くと、丁度、国会議事堂の近くに備え付けられ

た緊急放送用のスピーカーから『ピンポンパンポン』と音がして、放送が流れ出した。

「日本国民の皆さん、日本政府です。皆さんに政府から緊急のお知らせがあります。皆さん、どうかお近くのテレビをつけてお待ちください。」

ピンポンパンポンと、再び音がして放送は終わる

「これ、どういう事ですか？」

まだ状況がイマイチ掴めない龍我が上を指差しながら質問すると、雄真が自身の携帯電話を手渡してきた。

「ほれ、見てみるよ。」

電話はテレビモードになっていて、画面には放送が映し出されている。電話はテレビモードになっている。

セットされた放送局は関東地方を中心とした放送をしている『首都圏テレビ』である。

この局は他の局が特番一辺倒になるような大事件でも、滅多な事では通常の放送を中断しない事で有名だ。

現在はバラエティ番組の再放送中のように、龍我にとってはお馴染み芸能人がバカ騒ぎを繰り返している。

やっぱり、チャンネルを国営放送に変えないとダメかな…？

と思った、その時、いきなりブチツと放送が切り替わり、国会議事堂本会議場をバックに、やけにこやかな女の顔が映し出された。

「記憶の破壊者（メモリーブレイカー）」三門志織である。

「国民の皆さん、こんにちわ。三門志織です！」

誰だよ…。

と、多くの人はそう思いつつ見ているはずだ。

龍我はそんな事を考えつつ、画面の中の志織の言葉に耳を傾ける

「国民の皆さん、私から皆さんにお願いがあります。今から5秒間、私の目をジーンと見て下さい。少しの間だけでいいですから、ジーンと、ジーンと見て下さいねっ！」

何が起きるんだろう？

疑問に思った龍我は思わず画面の中の志織を見つめ返してしまう

が、そうしていると、後ろから誰かが寄ってきて龍我の目を両手で覆ってしまおう。

「ちよっと、純？ 何やってるの？」

「見なくてもわかるんだ…」

純は姿を見るまでもなく自分が誰なのかを判別した龍我の第六感に驚いていたが、しばらくすると、お説教をするような口調で龍我に注意した。

「龍我君、絶対見ちゃダメだよ。彼女がどうやって記憶を消去してるのか知らないけど、今、彼女の言うとおりにしたら絶対消されちゃうよ」

さつき里菜が言っていた『国全体を “記憶破壊” する』って、こういう事だったのか。

じゃあ、今、まともにテレビを見ている人は全員、今日の記憶を消されてしまう訳か…。

やっと理解した龍我の耳に “記憶の破壊者（メモリーブレイカー）” 三門志織の声が聞こえてくる

「さあ、皆さん、始めますよ。私の目をジューっと見て下さいね…」

第十七話 サイコロンジャー暗殺計画 (前編) プロローグ

国生らがアジトにしている高級マンション。

玄関近くの暗い部屋に集められた6人の男女の顔を青白い間接照明が照らしている。

横並びになった6人を入口の近くから順に見ていくと、まず一人目はロマンスグレーのよく似合う老紳士。

年は70近いくらいだろうが、足腰はピンと伸びていて実に健康的な身体つきをしている。シルクハットと英国風のスーツが印象的なファッションと合わせて年齢を全く感じさせない。

二人目は茶色がかった髪と青色の目を持つハーフ風の女。スラリと高い背とは裏腹に肉感的なプロポーションがやはり西洋人の身体を彷彿とさせる。

次が、頭にバンダナを巻いた若い男。

年は二十代前半から中盤くらいか。なんだかウキウキとした表情で目をキラキラとさせている。

更に見ていくと、4人目は七三分けに眼鏡をかけたサラリーマン風の男がいる。

アメリカのドラマに日本人役として出てくる日本人のような典型的日本人顔をしている。

そして、その横にそれと全く同じ顔をした男がいる。

こうして二人並ぶと誰が見ても双子であることがハッキリとわかる。

最後に真っ黒いロングヘアをしたチャイナドレスの女。

ほっそりとした体型でドレスがよく似合っている。目つきはやや鋭く、強気そうな印象が際立っている。

そして、そんな彼らの真正面にある椅子で彼らと向かい合うように座っている二人が、国生一派の少年、真鍋翔太と巫女姿の小柄な女性、早乙女神楽である。

集められた6人はそれぞれ身体をウズウズと動かしたり、部屋の中をウロウロしたり。表現方法は様々だが、一様に正面に座る二人の話が始まるのを待ちわびている様子だった。

もう、待ちきれない。

そんな彼らの想いを代表して入口から最も近い位置にいる老紳士が、翔太と神楽、二人に尋ねた。

「今日ほどの様なご用件で我々をお呼びになられたのでしょうか？」

国生様より『神の力』についてお聞きしてから数ヶ月……。何の音沙汰もないので、私、心配しておりました」

そんな老紳士に対して、翔太は右の手のひらを見せて慌てないように、と促した

「まあまあ。力には使い時つてもものがあるから。僕達は待っていたのさ。みんなの力をフルに活かせる時をね」

「と、いうことは……つまり……」

目を輝かせる老紳士に翔太は深く頷いた

「そう。その時が来た。だから今日、みんなをここに呼んだのさ」

「やった！ これで俺達も一人前の能力者だ！」

「遂に我々の力が活かせるんですね！」

集められた者の多くが口々に喜びを表す中、ドアから最も遠い位置にいるチャイナドレスの女がただ一人、冷静に問いかける。その格好とは裏腹にネイティブと変わらない非常に流暢な日本語だった

「で？ その『力の使い道』ってなんなワケ？ 私たちに何させようつての？」

その質問に対しては、神楽が何か悪戯を思いついた時のように口元を緩ませて答える

「今回、皆さんにお願いしたいのはサイコレンジャーの抹殺です。あなた方6人と今回は来ていない地方組の4人を合わせて10名でサイコレンジャー暗殺部隊を結成していただきたいのです！」

「えっ？ 抹殺……!？」

「暗殺……!？」

その穏やかでない単語に一同がざわめく。

そんな中、一番初めに思いを口に出したのは頭にバンダナを巻いた男だった。

「サイコレンジャーって、あの俺達の活動を邪魔しようっていう悪者の事だろ?」

「ええ」

頷く神楽にバンダナの男が更に聞く

「なんで俺達がそんな事やんなきゃなんねえんだ? 俺達みたいな新入りがやるよりアンタ達がやった方が仕事が早いんじゃないのか?」

「私達はあなた方に期待しているんです…」

「は?」

首を傾げるバンダナの男に翔太が言う

「草薙さん、察しが悪いなあ…」

「あ?」

未だに話が読めないバンダナの男、草薙に翔太は懇切丁寧に説明する

「いいかい、アンタはいったい何の為に僕達の仲間になったワケ?」

「そりゃあ…神の力を得る為だろ…」

何でそんな聞くんだとばかりに答える草薙。

その回答にハーフ風の女が付け足す

「もつとと言うと、その神の力を使って迷える人類を正しく導く為ですよね」

頷く翔太

「そう言う事。要するに、僕らは確かめたいんだ。アナタ達が神の力を得た後、人類を導いていく覚悟と実力があるかどうか…。サイコレンジャーを倒す事でそれを証明して欲しい」

「そんな! そもそもアンタ達は俺の実力を認めて仲間にしてくれたんじゃないのかよ! やってらんねえ! なあ、徳山さん!」

草薙は後方にいる老紳士に同意を求めると、彼は迷いなく即答した
「いいえ、私はやりますよ」

「へ?」

老紳士・徳山のつれない返事に思わず変な声を出す草薙。

その草薙に徳山が熱弁する

「私達としても正式に仲間になる前に自らの力を示す場が必要ではありませんか？ 例えぼもしアナタがそこにいる神楽さんや翔太さんより強かった場合、いつまでも命令に従っているのはおかしいでしょう？」

「それは…そうかももしれないけど…」

草薙はまだ完全には納得しない様子だが徳山は続ける

「草薙さんがどうするかは自由ですよ。でも私は是非ともやらせてもらいます」

「え…マジかよ…」

戸惑いを隠せない草薙。

だが部屋に集められたメンバー達は

「私もやります！」

「私も！」

などと言い口々にサイコレンジャー抹殺計画への参加を表明していく

「あ…え…えっと…マジか。じゃ、じゃあ俺もやろうかな…」

周囲を見渡し、ぼそりと言った草薙。

それを聞くと神楽は満面の笑みを浮かべる

「皆さん、賛同してくださいませぬ。ありがとうございます。それではまず草薙さんに作戦を実行して頂きましょう！」

雰囲気の流れされて賛成しただけなのに真っ先に指名を受けてしまった草薙は身体を前方につんのめらせて驚きを表現した

「あ、え…。俺かよ…！」

そんな彼に神楽は容赦ない

「え、嫌なんですか？ 草薙さんも計画に賛成してくれるんですけどよね？」

「あ…、その…。わかったよ…。で、でも、そうだ！ サイコレンジャーが今、どこにいるかなんてわからないし…。実行はそれがわかってからでもいいんじゃないかなあー」

草薙は最後の抵抗を試みたが、それも無駄だった。

翔太がはき捨てるように言う

「ああ。それなら大丈夫。超力獣を一体貸してあげるからさ。ソイツでなるべく目立つように大暴れしとけばアッチから寄ってくるさ」
「う、あ、そんなっ…」

これ以上言葉の出てこない草薙に神楽が一つ御守りを手渡した。

「何だ、これ？」

首をかしげる草薙に神楽は言った

「必勝祈願の御守りですよ。私の念が隠っていますからね。戦っている最中は絶対ポケットに入れておいてください。約束ですよ」

そんなものもらっても、気休めにはならない。

満面の笑みで言う神楽とは裏腹に草薙は苦笑いを浮かべるしかなかった。

松岡医院

東京都板橋区某所、松岡医院。

ここは東京と埼玉の境目に位置する住宅街のど真ん中にある中規模医院だ。

所謂、「街の病院」としては設備も揃っているし、僅かながら入院施設もある。

更に言えば、この医院を開業した松岡忠臣医師は、一流大学の大学病院に勤めた後、海外各地戦場での医療活動を経て、この地に自らの医院を持ったという異色の経歴の持ち主で、腕前に関しても人柄に関しても文句のつけようがない人物だ。

本来ならば地域住民にもっと重宝されていいはずの病院なのだが、この病院の受診者は8年ほど前から急に激減している。

それは、その時期に発生した失踪事件が関連している。

医師、看護師、患者どの立場の者もだが、この医院に関わった人間が何の前触れもなく、次々と行方不明になったその事件。

当初は警察の調査でも全く手がかりが掴めず、お蔵入りも囁かれた。

事件はその後、警視庁特殊犯罪対策課により、超能力者の仕業と判明。サイコレンジャーの手で人知れず解決されているが、「人知れず」というのがよくなかった。

松岡医院に対する悪い噂は払拭されず、それ以来、すっかり人が寄りつかなくなってしまうた。

本来ならもうここをたたんでしまった方がいいのかもしれない。

元々、途上国や戦災地で医療を受けられない人々を助ける活動の資金集めの為に作った医院。

その目的を達成出来そうにないなら、また、旅に出て、自ら戦場で医療活動に参加する方がいい。

松岡医院の主、松岡忠臣は今でもそう思う事がある。

地獄のような戦場とそこで生きる人々を知る松岡にとって、自分だけがこんな生活水準の整った場所で暮らすことは万死に値する罪で

すらあった。

それでもこの病院を続けて来てしまったのは、事件以来、サイコレンジャーや宝来財閥と妙な繋がりが出来てしまったからであった。

腕のいい医者がある、人の寄り付かない医院。

人目を忍んで危険な任務を続ける彼らにとつて、ここは医療施設として最適の場所であったのだ。

そして、松岡自身もそんな彼らを捨てていくことなんてできない。

確かに、サイコレンジャーはたった5人の精鋭部隊で、数で言えば戦地の方が治さなくてはならない患者は圧倒的に多い。

だが、それを行う医者は心ある者なら自分以外でもかまわないはず。

サイコレンジャーを治すことはおそらく自分にしかできないのだ。

しかし、そのお陰で不思議なケースに頭を悩ませる機会も多くなつてしまった。

「相手の妙な能力で腕が『消滅』した」とか「エネルギー弾で腹に穴が空いた」とか。

彼らに関わるようになる前でも、助けられなかった命はたくさんあったが、そんな理解不能なケースを持つてこられると、医師としての自分の限界を感じてしまう。

そして、今日の患者もそんな厄介なケースの一つ。

一色里菜。

今、自分が請け負っている受診者の中で最も付き合いが長く、かつ頑固な患者だ。

ベテラン戦士故のジレンマをかかえる彼女にどうやって自分の病状を理解、納得させるか。

全く、本当に気が重い。

松岡忠臣は無精髭の生えた顎を掻きむしりながらため息をついた。

松岡がガラガラツとドアの音をさせて診察室に入っていくと、里菜は既にそこにいた。

身体の前で固く腕組みをしながら、受診者用の丸椅子に腰を掛けている。ドアの音を聞くなり、コチラを睨みつけてきた彼女の眼差しが

らは自分に対する明らかな警戒心を感じる。

その様子から察するに、彼女自身もこれからどんな話をされるのか、なんとなく勘付いているようだ。

松岡は黙ってレントゲン室から持ってきた里菜の内臓写真を数枚、椅子の横の机に備え付けられたボードに差し込み示す。

「里菜、これを見てどう思う？」

「わからないな。私は医者じゃない。」

里菜はそう言っ頭を振るが、わからないはずはない。

彼女の身体に表れつつある変化は前回の診察でも十分過ぎるほどに説明した。

賢い彼女がそれを忘れているワケはない。

ソツチがそういうつもりなら、また一から説明してそんな風に言えなくしてやるだけだ。

松岡は白衣の襟を直して里菜の顔をじっと見る

「里菜、まず始めに一つ聞こう。お前、煙草や酒はやらないな？」

「勿論だ。お前も知っているだろう？」

「単刀直入に言おう」

そして、松岡は数枚あるレントゲン写真の内の一枚を左手で指差した

「里菜、お前の臓器、ボロボロだぞ。特に肺は結核患者並みの症状だ。ウイルスの反応や神経の異常もない、酒も煙草もやらないお前の臓器がここまでの状態になっているのは、超能力使用の影響だと思えない」

それを聞いた里菜の表情には特別驚いた様子もなかった。

「それがどうした？」

力強い、挑戦的ともとれるような口調だった。

コイツはいつもこんな感じだ。

松岡はやや呆れつつも、なるべく感情を抑えて冷静に言った

「自覚しろ。お前の能力はとてつもなく大きい。大きい力を使うって事はリスクも高いってことだ。そうだな、俺が医者としてお前に言えるのは、お前はもう戦わない方がいいし、サイコキネシスも使わない

方がいいって事だ。じゃないと、本当に死ぬぞ?」

「かまわない。サイコロレンジャーとして敵と戦うという事はそういう事だ。覚悟はとつくにできている」

「じゃあ、苦痛はないのか? この状態だと普通、相当辛いはずだ。戦闘にも支障をきたすレベルだと思うがな…」

「それは、ない。全くない」

里菜は断言する。

「どうやら、これは強がりなどではなく本当らしい。」

松岡の目にもそう見えた。

「そうして、里菜は自己の分析を始める」

「おそらく、私の中で超能力者として鍛えられたエネルギーが苦痛を和らげているのではないか?」

エネルギー。

人間の中にある生体エネルギーのことだ。

それを持ち出されると、松岡にとっては専門外なのでなんともコメントし辛い。

だが、超能力者が能力を発動するときにも使用する神秘的なエネルギーだという点から考えれば、それが物理的法則を無視して里菜の身体を守る役割を果たすことが全くないとは言い切れない。

「だが、それはいい事だとは言えないぞ。お前の身体や心が弱った時、一気に反動が来ないとも限らない」

「わかってる。でも、私は戦う」

「死ぬかもしれないんだぞ? いや、断言するぞ…。痛みを感じていようがいまいが、このまま症状が進行すれば、お前の身体は必ず生体機能を維持できなくなる。時間の問題だ。それでもか?」

「当然だ。戦うことは…サイコロレンジャーは、私の全てだ!」

本当に意固地なヤツ。松岡は思わず椅子から立ち上がった

「何でお前はいつもそうなんだ! なぜ、そんなに死に急ぐ!? お前が死んだところでミーシャも計も帰っては来ないし、喜びもしないんだぞ!」

それを聞くと、里菜は拳で机を「ドンツ!」と叩き、松岡よりも更

に大きな声で叫んだ。

「お前に何がわかる！ 計もミハも他の仲間たちも、一番長く一緒に戦ってきたのは私なんだ！ お前が彼らを語るな！」

里菜は椅子から立ち上がると、松岡に背中を向けて診察室を出ていこうとする。松岡はその背中に向かって呟くように言った。

「里菜、俺はお前に命を無駄にして欲しくない。だから止めた。でも、医者としてクライアントの意思は尊重するよ」

背を向けたまま、立ち止まって聞いていた里菜はボソリと言う

「わかってくれ、とは言えないが……。すまない、ありがとう。」

そして、松岡は里菜に対して最後の譲歩をした。

「里菜。今はこのままでいい。だが、吐血の症状が出たら、もうダメだ。お前を前線には送れない。その時は正直に言ってくれ」

ルシヤ・クレシツチ

東京都と山梨県の県境から程近くにある宝来財閥会長・宝来源三の邸宅。

山一つという広大な敷地のド真ん中にあたる位置。そこに宝来源三の執務室がある。

さて、宝来一族の一員で、現・国家公安委員長でもある宝来祐二はこの日、弟の源三に呼び出されてその執務室へと向かっていた。

最も信頼できる運転手に車の運転を任せ、他は特に護衛も付けず、邸宅の前までやってくると、そこでその運転手とも別れた。

祐二は家の門をくぐり、玄関を通過し、執務室までの長い廊下を歩いていく。

祐二は源三から今日、呼び出された理由を特に聞いていなかったが、要件はなんとなくわかっていた。

先日起きた、弁護士・中島健吾による国会議事堂爆破未遂事件。おそらく、その総括、反省、あるいは今後、同様の犯行が起きた際の対策が話し合われる事になるだろう。

呼ばれたのは、自分だけではないはずだ。

長兄で最大野党・改進黨党首の宝来茂一、自身の息子で警察官僚の宝来勝広…。

あとはどうだろうか？

宝来財閥には「養成学校」や「超常現象研究所」など、いくつか超能力に関するセクションがあり、その数と同じだけ責任者もいる。本来なら彼らの内の何人かがいてもおかしくはないが、きつと今日は誰もいないだろう。

それが祐二の見解だった。

これだけの重大案件。

まずは一族の者に話を通してから、というのが慎重な源三のやり方だろう。

そんなことを考えながら、祐二は執務室の前まで辿り着く。

ドアを3回ノックしてからノブに手をかけて「ガチャリ」と部屋の

中に入っていくと、そこには既にやや恰幅がよくなった50代の男といかにもエリート風に黒いスーツを着こなす30代前後の男がいた。

この部屋の主である宝来源三と祐二の息子・宝来勝広であった。

「兄貴はまだ来ていないのか？」

部屋に入って第一声、祐二がそう言うと、源三は

「もう敷地内にはいるみたいだよ。さっき使用人から連絡があったから。間もなく、始められます」

と敬語と普通の口調を交えて答えた。

あと、茂一が来れば始められるということは、やはり、この会合に参加するメンバーは予想通り一族の者だけのようだ。祐二はその言葉で確信した。

ならば、遠慮はいらない。あとは待つだけ。

祐二はその時間を利用して源三に一つ、自身が気になっていた事を質問することにした。

「源三、『記憶の破壊者(メモリーブレイカー)』の…志織の様子はどうだ？」

「能力の使用直後は言葉も忘れて茫然自失といった様子だったが、今は比較的落ち着いているよ…。例の如く、記憶の一部に欠落がある以外は正常です。心配ありません」

心配ない。

言葉ではそう言うが、源三の深刻そうな表情は発動直後の志織がどれだけ酷い状態だったかを如実に示していた

「あれだけ広範囲で能力を使ったのは初めてでしたからね。覚悟はしていましたか…。酷いことをしました」

勝広がうなだれると、源三はそれを見て頷いた。

「ああ。これからはなるべく志織に頼らない方法を考えなくては…」

そんな話をしていると、そこへちようどドアをノックする音が聞こえた。

どうやら茂一が到着したようだ。祐二はそう思った

「どうぞ」

源三がそう部屋の外へ声をかけると、ゆっくりドアが開く。

これからこの部屋にやってくるのは茂一のみという、祐二の解釈とは裏腹にそこから姿を現したのは二人の男女だった。

一人は眉間のシワと鋭い目つきがいかに悪人ヅラな60代前後の男。宝来茂一。

そして、もう一人は腰まで伸びる金色の髪と碧眼を持つ絵に書いたような西洋美人だった。

「ルシヤ・クレシツチ…」

勝広も祐二同様、彼女の登場が予想外だったようだ。

キョトンとした表情でその美女の名前を呟いた。

祐二はそれを聞いて久しく顔を合わせていなかった彼女について思い出す。元はクロアチア軍所属、バルカン半島出身の超能力者。宝来財閥の「養成学校」創設にあたって計画を主導した茂一にヘッドハンティングされて、その最高責任者に就任した。

確かに宝来財閥の対超能力政策の重要人物ではある。

だが、養成学校の役割は超能力者の育成、あるいは罪を侵した能力者の更生で、この問題に直接関わるセクションという訳でもない。他にも幹部がいる中で、彼女だけを特別扱いして、この極秘会談に参加させる理由がわからない。

「源三、お前が呼んだのか？」

祐二は振り返って問いかけるが、その源三も首を横に振った。

つまり、この金髪碧眼の美女、養成学校最高責任者、ルシヤ・クレシツチを連れてきたのは茂一独自の判断ということだ。

「茂一兄さん、どういうことですか？」

茂一は源三の質問に答えるよりも早く、執務室中央にあるソファ―に腰掛けて葉巻を吸い出した。

それにつられて、ルシヤ、祐二、勝広も順にソファ―に腰掛ける。

部屋奥の作業机に座る源三以外の全員が同じ机を囲むカタチになった。その場の全員が茂一が次に発する言葉に注目し、視線を彼に集中させる。

そんな中、茂一は口から煙を吐き出しながら言う。

「源三、逆に聞きたいんだが、今日、俺達をここに呼んだ理由は何だ？」

茂一の意図が掴めない源三は険しい表情を見せながらも、彼の質問に丁寧に応えた。

「お察しかとは思いますが、国会議事堂の件が発端です。あの件では、最後、〃記憶の破壊者（メモリーブレイカー）〃に大きな負担をかける結果になってしまいました。確かに現状、〃記憶破壊（メモリーブレイク）〃は情報を守る上で一番簡単で確実な方法ではありません。ですが、その重要さ故に我々としては、〃記憶の破壊者（メモリーブレイカー）〃を失う訳にはいきません。つまり、今後も彼女にこのような負担をかけ続けるのはリスクが高い。ですから、今後の情報保護の体制について皆さんと話し合いたいと…」

「見直さなくてはならないのは情報保護の体制だけか？」

茂一は源三が言い終る前に口を開き、問いかけた。

源三は「やっぱりきたか」とでも言いたげに口元に力を入れて押し黙る。

茂一はこれ幸いと話を続けた

「確かに希少価値と重要性の高い能力者である、〃記憶の破壊者〃を守ることが必要だ。だが、そこまでしなくてはならなくなった原因は何だ？」

茂一は源三のいる方向を見て言っているのだが、当の源三は押し黙ったままその質問に答えようとしない。

見かねたのか、茂一の隣で足を組みながら座っているルシヤ・クレシッチが茂一が望んでいるであろう回答を口にした

「重要拠点が狙われた際の対策案欠如、サイコレンジャーの人員不足、他組織との連携不足…。あと、今回に限って言えばサイコブルー・風祭凌の独断専行、または、彼と親しいメンバー達が彼の意思を最大限尊重してしまった結果とも言えますね」

ルシヤは茂一の方を見ながらニカリと笑った。

私、役に立ったでしょうとでも言いたげだ。

茂一は彼女の流れるような日本語に

「その通り」

と力強く頷いた。

「今のままでは、超能力者によるテロ攻撃に対して我々は余りにも無防備……。今回は運が良かったが、再度、議会や原発などの重要地点が狙われた際、守りきれるとは限らない。よって私はサイコレンジャー運用方針の抜本的見直しが必要だと考える！」

「それはつまり……」

祐二が言葉を詰まらせながら恐る恐る口を開くと、茂一はその場に立ち上がり、半分怒鳴るような口調で宣言した

「今こそ、私が何年も前から訴えている『あの計画』を実行する時がきたのだ！」

茂一にはサイコレンジャー創設当初から将来の青写真として、コトあるごとに提案してきた持論があった。

それはサイコレンジャー創設者である先代会長・宝来治五郎に否定され続けた案。

だが、彼のそこにかかる情熱は凄まじい。

信念だと言ってもいいだろう。

父親や兄弟の反発を受けて、最近はずんずん口に出す事もなくなっていたが、やはりこういつた問題が起きると持ち出してくる。祐二は事をそこまでに至らせてしまったという悔しさと奥歯を噛みしめながら、それを口にした

「超能力者の大量生産とサイコレンジャーの軍隊化……」

他の者の懸念などモノともせず、茂一は更に熱弁し続ける

「……最近では超能力犯罪にも組織犯の傾向が出てきたと聞く。そうだな？」

それに答えるのは勝広だ。やや下を向き気まずそうにしている。

「それは事実です。超力獣を生み出せる能力者……。所謂レベル2か、それより上位にあたる超能力者ですが……。そうした能力者が下位の能力者に超力獣を与え、彼らの望みを叶える手助けをする代わりに自身は吸収したエナジーを得る、というケースが多発しています」

そして、勝広は説明を省いたが、その犯人で存在が確認されているのは今のところ3人。大学での事件の際、実行犯の大学生・田中利保に超力獣を与えた『長身オールバックの男』、サイコレンジャーが築地

で対戦した『10代の少年』、そして今回の国会議事堂爆破未遂事件で弁護士・中島健吾に超力獣を与えた『若い女』。この女は第一中野学園事件の際の犯人と同一人物だと思われる。

「では、奴らが次に狙うことは何だと思う？」

茂一が立て続けに鋭く問うと、勝広は沈んだ表情のまま答える

「現状はわかりませんが、超力獣を与えた能力者は複数存在することが判明していますが、彼ら自体、組織犯なのかも、それぞれ単独犯なのかも不明です。ただ、超力獣を使ってエナジーを集めているということは、今はまだ通過点。強くなった力を使ってまだ他の何かを狙っていることは間違いないでしょう。」

茂一は

「何もかもわからない事だらけだな…」

と呟いてから、更に力を込めて言う

「勝広の言う通り、奴らの目的が何かは知らん。だが、今回、明白になったのは、一部の超能力者はその気になれば今すぐにも国家の中樞を破壊するだけの知能と力を有しているということだ。それを踏まえて、サイコレンジャーは今のままでいいと言えるのか？ 5人だけの少数精鋭部隊といえば聞こえはいいが、それで日本全土をカバーできるのか？ 現場のメンバー個々の意見を尊重するといえれば聞こえはいいが、それは馴れ合いではないのか？ 今回の事件はその結果が招いたモノではないのか？ 本来ならサイコレンジャー個人の責任も追求されるべきではないのか？」

そこまで聞いて、祐二は頭に血が登った。

茂一がサイコレンジャーのメンバー個人の責任にまで踏み込んだからだ。

拳で机をダンツと叩いて立ちあがる

「兄貴は今回の件を凌のせいだと思っているのか！」

茂一は祐二をなだめるように手の甲をヒラヒラと動かしながら答える

「そう熱くなるな。責任の一端くらいはあると思っているが、全ておっ被せようとなんて思っていない」

昔から謀をさせたら右に出る者はいない兄の言葉を信じる事ができず、祐二はそのままの勢いで怒鳴り続ける。

「凌はベストを尽くした！ 最初、事件を報告しなかったのは組織全体の捜査を混乱させない為だ！ それに奴の読心術はサイコロنجャーの活動に欠かせない。多少の事では懲戒だの謹慎だのにできる人材じゃないんだっ！」

その叫びは祐二による精一杯の抵抗であったのだが、茂一が待つていたのはその言葉だった。

飛んで火にいる夏の虫とばかりに

「そうだ、それがいけないのだ！」

と祐二を指差して言う

「私は風祭凌の処分をどうするかを問題にしているのではない。何らかの処分に値するミスをした者がいるというのに、人員不足で満足に追求もできない、現行のシステムが問題だと言っているのだ」

何か企んでいるらしいが、とりあえず、自身の提案が受け入れられさえすれば、これ以上、個人責任を追求する気はないらしい。そう判断してやや安心した勝広が聞いた

「では、その事について、具体的にどんな解決案が…？」

「その為に今日、彼女を連れてきた」

茂一から指名を受けた養成学校最高責任者、ルシヤ・クレシッチ。

静かに椅子を引いて立ちあがると、自らの主張を語り始めた

「私は、現在のサイコロنجャーに必要なのは、各作戦の厳格な組織化と欠員補充のシステム化であると考えます。私は、それを一足飛びに実現させる実験を提案したいと思っています。」

「その方法は？」

源三がおそるおそる問うと、ルシヤは沈んだ瞳で静かに答えた

「サイコロنجャー第二部隊の試験的な創設です」

イエローVSバイク型超力獣

東京都板橋区。

一色里菜は松岡医院の最寄り駅近くにある交差点にさしかかり、赤信号につかまっているところだった。

今日は、松岡医師の診察があることをサイコレンジャーのメンバー達には言わず、黙って事務所を出てきていた。

サイコレンジャーのメンバーには定期検診もあるから、別に診察があること事態黙っている必要はないのだが、なんとなく言い出せず、メンバー用の車に乗ることもなく、公共交通機関を使ってここまで来ていた。

きつと今頃、他のメンバー達は、自分がどこへ行ったのか気にしているだろう。もしかしたら、そろそろ心配し出しているかもしれない。

だが、もし帰ったところで、それを問いただされることもないだろう、と里菜は確信していた。

プライベートや個々の行動に関してあまり深くは突っ込まない。サイコレンジャーのメンバーの間ではそんな暗黙の了解があった。

仲間として信頼していないという訳ではない。

だが、人に知られたくない、もしくは知られていたとしてもイチイチつつかれたくない。

そんな経験をしてきたメンバー達だから、自然にそんな関係になっってしまった。

身体の異変のことを隠すなら、警戒しなくてはならないのは凌の読心術だが、幸いなことに彼こそ最もその特性が強い人物だ。

国会議事堂の事件以降、その傾向は更に増しているようにも思える。

凌の読心術は相手がその時考えていることしか読み取れない。

今までの任務では、相手に質問を投げ掛けたり、隠れて不意をつくことによつて、相手の本心をあぶり出してきた凌だが、おそらく今の彼が仲間にそこまでする気はないだろう。

あとは、新入りの龍我が聞いてきそうなくらいか…。

そんな風に考えていると信号が青に変わり、里菜は歩き出す。それと同時に同じく信号待ちをしていた人の群れも動き出す。

仲間に居場所も知らせず、人混みの中に身をさらすのはサイコレンジャーのメンバーとして賢い行為ではない。

その自覚があつたので、里菜はいつもより神経を尖らせ周囲を警戒しながら歩いていった。

そんな時である。

ドン！

里菜の耳に大きな衝突音が聞こえた。

その方向に目を向けてみると、車道の真ん中にフロント部分がペシャンコになった乗用車が2台。双方共に道の端へ向かい回転しながら停止するところだった。

交通事故…？

里菜は首をひねった。

2台の車が双方共にフロント部分を大きく凹ませているところを見るとかなり激しく正面衝突した模様だが、そこは駅前の交差点に程近い広くて見晴らしのよい道路である。

例えばどちらかがスピードを出しすぎたり、飲酒や居眠りで暴走していたとしても、相手が避けようとするれば、こんなぶつかり方にはならないはずだ。

疑問には思ったが、とにかく先に事故に遭った人の無事を確保しなくては、と里菜はそちらの方に思考をよせた。

まだ、どちらの車も中から運転手は出てきていない。気を失っているのか、ケガなどしてあるけないのか。

それより気になるのは、ペシャンコになった2台の車の内の1台。白い軽自動車の中から少しだが黒い煙が出始めていることだった。

何か車のなかに煙草などの火元があつたのか、事故の影響で機械のどこかが加熱してしまったのか。

定かではないが、車内部のガソリンに引火すれば大火災になり、中

の人間はひとたまりもないだろう。

派手な事故だったので、交通は完全にストップし、2台の車の周りには騒ぎを聞きつけた野次馬の人だかりができてはじめている。

あまり自分が出ていきたい状況ではないが、事は一刻を争うし、こればかりは仕方がない。

里菜が事故現場に足を向けた瞬間、今度は頭の中に語りかける声が聞こえた。

アスぴよんである。

「みんな、超力獣が出現したわ。里菜、貴方が一番近い場所にいるから急行して」

よりによってこんな時にか…。

里菜は舌打ちした。

だが、再び事故現場に目を向けてみると誰かが里菜と同じことに気づいてくれたのか、幸いにも運転手の救助が始まっているようだった。

4〜5人の男が集まり、車の中から頭にバンダナを巻いた20代くらいの男を引っ張り出している。

よかった。

これで安心して超力獣の方へ向かえる。

里菜は胸に手をあて、アスぴよんに問いかける

「明日香、詳しい場所は？」

すると、慌てたような早口でアスぴよんから言葉が返ってきた

「里菜、超力獣は今、あなたの目の前よ！」

「何!?!」

そして次の瞬間、事故現場に集まった野次馬の中から聞こえる悲鳴。車道の反対側に向かって走り出す人の群れ。事故車の救助をしていた人達も怪我人を放り出し、一目散に逃げていく。

一通り人だかりが消えた後、車の陰から里菜の視界に姿を現したのは、バイク型超力獣だった。

バイクの後輪を上にして垂直に立てて、そこに手足と顔を無理矢理くっつけたようなふぎけた格好をしたヤツだったが、恐ろしいこと

に、そのバイク型超力獣はゆつくりと白い事故車の方向に足を進めていた。

恐らく、狙いは事故車の中にいる救助を放り出された運転手。

男が超力獣にとつてどれだけよいエサなのかはわからない。

だが、どんな人間にもエナジーはある。

全く無抵抗の人間がそこにいるなら獲物にして損はないだろう。

里菜は改めて周囲を見渡す。

あれだけいた野次馬も、みんな逃げたみたいで、もう一人もいない。それを確認してから里菜は叫んだ。

「サイコチェンジャー！」

サイコイエローに変身した里菜は超力獣に向かって猛ダッシュを開始。そしてその勢いを利用して、事故車の男性を襲おうとしているバイク型超力獣に飛び蹴りを食らわせた。

「ギーー」と鳴き声をあげて10メートル程吹っ飛ばされる超力獣。アスファルトに激しく叩きつけられのたうち回る。

モロに入った！

チャンスと見た里菜はすぐさまサイコガンを用意して銃撃に入ろうとした。

しかし、そこで里菜は足首の辺りに妙な感触を覚えた。

見てみると、事故車の男性が地に這いつくばりながら里菜の足首を必死に掴んでいた。

「何だよ、あれ…？ アンタは味方なのか…？ 助けて、助けてくれよお！」

先ほど救助されている時はピクリとも動かなかったので、てっきり気絶しているものだと思っていたが、男性はいつの間にか目を覚ましていたらしい。

事故を起こし気絶して起きてみたら眼前に化け物が迫っていた訳だから無理もないが、相当なパニック状態みたいだ。

足首を掴むだけでは安心できず、

「怖い！ 死にたくない！」

と叫びながら里菜の太ももから腰回りに抱きつくようにして助け

を求めた。

いいから離せっ！

里菜は叫びたかった。

助けたいのは山々だが、これでは上手く戦えない。

振り払うにも、変身し強化スーツを身に纏っている今の状態で無理矢理行くと、彼の身体を傷つける可能性がある。

「くっー！」

仕方がないのでそのままの状態でサイコガンを打つ里菜。

しかし、男性に構っている間に隙ができてしまったらしい。

超力獣はギリギリのところまで体勢を立て直し銃撃をかわした。

そして背中についたタイヤをとり外し、フリスビーの様に飛ばしてきた。

里菜は避けようとしたが、事故車の男性が邪魔で上手く避けられない。身体を捻るように反転させ、なんとか致命傷は防いだが、脇腹を挟るようにタイヤが里菜にヒットする。

「ぐわあー！」

反動で飛ばされる里菜。

その勢いで男性の手が身体から離れたのは良かったが、ダメージもかなり大きい。

動こうとすると脇腹に痛みが走る。素早くは動けそうにない。

バイク型超力獣は、勝ち誇ったように雄叫びを上げている。

今は仲間もいないし、こちらは傷を負った。

目の前に守る対象もいるので一旦逃げるといいう手も使えない。

確かに、状況はあちらが有利だ。

だが、それで勝ったつもりか!?

里菜は心の中で叫んだ。

超力獣の侮ったような態度が彼女の戦士としてのプライドを刺激したのだ。

お前が何者なのかは知らないが、所詮は超力獣。

命を与えられて数日も経っていない。

こっちは何年も命をかけて戦ってきたんだ！

この程度の状況、覆す手段は持っている！

里菜は超力獣と十分に距離をとり立て膝のまま、サイコガンで超力獣の足下を連射。

里菜が素早く動けないと悟り接近戦を挑もうと足を進めていた超力獣の足止めをした。

そうになると、超力獣は飛び道具を使うしかない。

再び先ほどのタイヤfrisビーを里菜に向かって投げつけてきた。

「かかったなっ！」

そう叫ぶ里菜。

里菜のように経験のある戦士から言えば、超力獣のこの攻撃はかなり迂闊だった。

機動力を失った相手が足下を執拗に攻撃してきたら、相手は一定以上距離を取ろうとしていると考えるべきだ。

それはただ接近戦を嫌がっているだけの時もあるが、相手が手練れであれば手練れであるほど、その線は捨てなければならぬ。

そして、自分が既に遠距離攻撃の手段を相手に曝していることに考えを至らせるべきだった。

相手はその攻撃で傷を負ってすらいる。

普通、自分が傷を負った攻撃をもう一度撃たせたいと思う人間はいない。

と、いうことは。

相手はその攻撃に対して攻略法を見いだしており、少なくとも接近戦よりマシ、撃たせて構わないと思っっているということだ。

いや、殊に戦闘という一つの判断が命取りになる状況においてはもっと慎重に、最悪の状況を考えて動くべきだった。

つまり、相手はその攻撃を”誘っている”と。

一度見た攻撃なので、弾速を予測して身を屈めることは難しくはなかった。

そして、里菜の身体のある位置を通りすぎ、やや勢いを失ったタイヤfrisビーに対して、里菜は手をかざし、サイコキネシスを発動した。

フリスビーの速度が落ちきらない内に軌道を反転させる。

ブーメランのような進路を通ったフリスビーが不意を突かれたタイヤ型超力獣のどてっ腹にヒットする。

「ギャアアー！」

倒れこむ超力獣。

全く無防備な状態で攻撃をうけた超力獣は里菜より遥かにダメー
ジを負っている。

そして、超力獣にとっては更に状況を悪くする出来事が起こった。

「里菜！ 大丈夫か！」

上空にホバリングさせたサイコバスターから、それぞれサイコレツ
ドとサイコグリーンに変身した龍我と雄真が降りてきたのだ。

援軍の到着である。

先程からの苦労を知らない雄真は致命傷を負った超力獣を見て拍
子抜けしたように言った。

「なんだ、里菜が先に戦い始めたから急いできたのに。ほとんど一人
で倒しちゃまってるじゃねーか！」

「まあ、こんなものだ」

強がりつつも、やや脇腹を気にしながら立ち上がる里菜に龍我が
言った

「里菜、ケガしてるの？」

里菜は言う

「何、かすり傷だ。それより、トドメを！」

「おう！」

3人はサイコガンをビームモードに入れ、超力獣に向かって一斉に
発射。

超力獣は断末魔をあげながら爆散した。

磁力（マグネティックフォース）

戦闘が終わり、変身を解く龍我、里菜、雄真の3人

「純はどうした？」

里菜は一緒に来るだろうと思っていたメンバーが見あたらないので気になって尋ねた。

凌は中島健吾の件で活動自粛中なのでわかるのだが、純は居場所がわからない。

「丁度、買い物に行くって出ていったところに召集がかかったから、俺たちより少し遅れてるんだ。超力獣を倒した知らせはいつてるだろうから、もう引き返してるんじゃないか？」

買い物とか言ってたけど、本当は里菜の姿が見えないから、様子を見に行ったんじゃないか…？

と推測はしていたが、雄真はあえてそれ以上言わなかった。

しかし、龍我はそんなことお構い無しだ。

「てゆうかさあ。里菜が黙っていなくなるから、探しに行ったんじゃないかな、純」

「そうか。」

里菜はなるべく無関心を装い平然と言った。

そして、思い付いたように次の話を始める。

「そうだ、あの事故車の近くにまだ人がいるんだ」

まるで忘れていたかのような口振りはいつもの里菜らしいものではなかったが、いち早く救助が必要な場面であることもあり、龍我も雄真もそこまで気にすることなく従った。

負傷した里菜に変わって二人が率先して動く。

龍我は先程、戦闘中の里菜に助けを求めた頭にバンダナを巻いたの男が乗っていた白い車の方へ、雄真はもう1台の赤い車の方へ向かう。

龍我は車の中や周囲を一つ一つ確かめるながら覗きこむが、そこに人影はない。

「誰もいないよー!？」

龍我の叫び声を聞いて里菜は首を傾げた。
龍我が見ている白い車。

そこには先程確かに男が一人いたはずだ。
戦闘中の里菜にしがみついて助けを求めたバンドナの男。
あの怯えよう、そう遠くには行けなさそうだった……。
自力で逃げたのだろうか。

「雄真、そっちはどうだ？」

里菜が聞くと、赤い車の近くにいる雄真も首を横に振りながら言っ
た

「誰も、いないぞっ。」

そちらの車からはまだ誰も出てきていない。

車は運転手がいなければ、当然、動かないので最低一人は人が残っ
ているはずなのだが。

「そんなバカな……」

里菜は目を丸くした。

「ハアハア……」

東京都板橋区。

先程事件を起こした駅前の大通りから10分程を走って裏路地に
差し掛かる。

必死に駆け抜けてきたが、普段から運動はするほうじゃない。
さすがに息がきれてきた。少しだけ、休憩しよう。

サイコロンジャー暗殺部隊、最初の仕事を請け負った男、草薙新は
トレッドマークのバンドナを自分の頭から乱暴に剥ぎ取り膝に手を
ついた。

ボサボサの長髪が露になる。

立ち止まれば楽になると思っただが、そうでもない。
身体が酸素の補給を求めて更に呼吸が大きくなる。

「ゼエゼエ……」

そこから、2、3分がたった。

呼吸も通常のリズムに戻ってきた。

やっと、まともに動き出せそうだ。

現場からだいぶ離れたとはいえ、まだ油断はできない。

自分の能力を活かすためにも、更に遠くへ行かなければ。

そう考え、ゆつくりと歩きだした草薙だったが、一度落ち着いてしまったせいだろうか。

先程までのように切羽詰まった気持ちにはなれなかった。

「フーン」

とほくそ笑んでポケットから一枚のシートを取り出した。

シートには丸型の絆創膏のようなテープが数枚張りついているが、そのテープの中央にそれぞれ小さな突起がある。

その突起が、テープはただの絆創膏ではなく、肩こりなどの治療に使う磁気シールであることを示している。

更に、シートの上部に何カ所か空いたスペースがあり、シールを何枚か使用した後であるとわかる。

一見普通の磁気シールだろう。

だが、草薙はそれを見るとニヤニヤとした笑いが止まらなくなつた。

そして、こう呟く

「どうなることかと思つたが、これで勝つたも同然だ……！」

国生一派がアジトにしているマンションの一室。

巫女装束に身を包んだ女、早乙女神楽は机の上に水晶玉をのせ、そこに念をかけることにより、映像を映し出している。

映っているのは、サイコロンジャー暗殺を任せた草薙新の姿。長い距離を走つてさすがに疲れたのか、細い路地をヨタヨタ歩いている。

それを、横から同じく一派の真鍋翔太、砂川響子が覗き込む。

「あれえー、アイツ大丈夫なのー？ 超力獣倒されてすぐ逃げ出しちゃったけどー？」

水晶に映つた草薙の姿を見ながら、響子がやや挑発的に言う。響子には草薙が無様に敗走しているようにしか見えなかった。

サイコロレンジャーとやり合うことに積極的ではなかった響子。

過激派の二人、特に普段からいさかいの絶えない翔太に対しては、そら見たことか、という態度だ。

しかし翔太はいつものように過剰反応しない。

余裕がある落ちついたトーンで言う。

「だいたい計画通りだよ。でも、超力獣を失ったのは痛いかな…。仕方ない、折角のチャンスだし、手助けしてあげようかな。」

そして翔太は部屋を出ていった。

「何アイツ、全然面白くない。」

口を尖らせる響子。神楽は呆れた様子だ。

「やっぱりいつも面白いから突っかかっているんですね。」

「まあねー」

と悪びれない響子。続けざまに言う。

「でも、翔太のヤツ。言い返して来ないところを見ると、本当にまだ手があるみたいだねー。一体何考えてるのおー?」

「そもそも草薙さんは、今の戦いでサイコロレンジャーを倒すつもりはなかったんです」

「え? 何それ。アイツ、全然やる気ないじゃん」

神楽は首を横に振る

「そうではありません。さつき草薙さん、磁気シール持っていたでしょう?」

「ああ、あのエレキバンみたいなヤツ」

「先程の戦いは混乱に乗じてサイコロレンジャーにあの磁気シールを貼るために仕掛けたものなんですよ」

なぜそんな事をするのか、響子にはピンとこなかった。

サイコロレンジャーの肩こりでも治すつもりだろうか。

そんな顔をしてしまったらしい。

特に何か質問があった訳ではないが、神楽は先読みして答えた

「それが、草薙さんの能力”マグネティックフォース磁 力”の発動条件なんです」

狙われたイエロー（1）

先程、バイク型超力獣を倒したサイコレンジャーの3人。

龍我、里菜、雄真はそれから20分程が過ぎようとしている今もまだ事件現場に残留していた。

超力獣が現れる直前に起こった事故。

その最低2人はいるはずの負傷者がどこを探してもいないのである。

「妙だな…」

考え込む里菜に雄真が言う

「戦闘中に避難したんじゃないのか？」

「ふむ…」

確かに、一対一の状況でこれ以上ないほど相手に集中していたのは確かだ。

でも、さすがに他に人が出てくれば気づく位は周囲に気を配っているのだが…。

しかし、考えられるのはその位か。

里菜は頷いた。

「そうだな。それしかないか…。」

未だ不思議そうな里菜に対して雄真は言う

「まあ、自力で歩いて逃げれる程度のケガってことだ。だいたい、車に乗ってた人達は、超力獣に襲われてケガしたんじゃないやなくて、その直前に事故が起きてケガしたんだろ？ 里菜の言う通りなら、ここから先は警察の仕事じゃんかよ。捜索は任せて俺たちは帰ろうぜ。早くしないと野次馬が戻ってくるぞ」

「里菜のケガも心配だしね」

龍我は余計な事を言ってしまった。

松岡医院での出来事もあり、その発言は里菜の神経を逆撫でした。

「こんなのかすり傷だ！ 私の事はいいから目撃者を探すんだ、ケガは大したことないかもしれんが、写真か何かとってないとも…」

ドンッ！

里菜がそこまで言ったところで龍我が里菜の身体を強く押しした。いつも敵に対しては誰よりも勇ましい里菜だが、仲間の全く予想外の行為に

「キャッー」

と珍しく高い声を出して尻餅をつく。

やられた里菜は勿論、横で見えていた雄真も面食らった。

確かに心配してくれている相手に対して里菜の言い方は良くないが、急に手を出す程怒るやり取りじゃないだろう。

と、どうかそんな突然怒るようなヤツだったっけ？

雄真はそんな風に思っていたが、次の瞬間、龍我の行動の真意を理解した。

ヒュンツと風を切るような音をさせ、どこからともなく鉄製ナイフが飛んできたのだ。

ナイフは雄真の目の前を通り、龍我に突き飛ばされるまで里菜のいた辺りへむかう。そして、アスファルトを砕き、地面にガシャンと突き刺さる。

おそらく、龍我が突き飛ばさなかったらナイフは里菜に命中していた。

龍我はその優れた第六感で攻撃をいち早く感知し里菜を回避させたのだった。

一同はナイフの飛んできた方向を見るが、そこに人の姿はない。そのことから、今の攻撃がかなり遠距離からのものであると窺い知ることがができる。

「すまない、助かったぞ、龍我」

そう言っ立ち上がる里菜。そこで彼女は油断した。

松岡医師との出来事、戦闘での疲労とダメージ、助けられたことへの安堵感と申し訳なさ、思わず高い声を出してしまった気恥ずかしさ。

超力獣との戦闘では経験の違いを見せた里菜だったが、小さな事から大きな事まで、今、彼女の中に渦巻く様々な要素がそうさせたのだった。

里菜は相手の攻撃の正体を掴みたいと思った。
敵の姿が見えない以上、それには相手が放った得物を確かめるしかない。

地面に突き刺さったナイフに里菜が一步近づいた瞬間、龍我が叫ぶ。

「危ない！」

そして突然、地面に突き刺さったナイフが独りでに浮き上がり、里菜の太もも目掛けて宙を舞い動き出した。

ナイフが里菜の太ももにグサリと突き刺さる。

「ぐあああ！」

勢い良く刺さった為、周囲に血が飛び散った。

里菜は負傷箇所を押さえ悶絶する。

指の隙間からは血がドクドクと流れ続けていた。

狙われたイエロー（2）

「里菜！」

龍我は倒れ込んだ里菜に駆け寄り患部を見た。ナイフはかなり深く突き刺さっているようだ。しまったな、と龍我は思った。

先程と同じく攻撃を察知はしていたが、今度の攻撃は至近距離からだったので身体の反応が追いつかず防ぐ事ができなかった。

一体、何が起きてるんだろう…。

攻撃を受けているという事実以外の状況が全く掴めない龍我は必死に考える。

しかし、答えが出る前に彼の第六感はず再び警告を発した。

何か、近づいてくる…敵意を持って…！

龍我は先程ナイフが飛んで来た方向を見る。

すると、鉄製ナイフや包丁が5〜6本、こちらに刃を向けて猛スピードで空中を突き進んで来ていた。

「また飛んできてる！…今度はたくさん！」

龍我の叫びを聞いた雄真は脚を負傷し機動力を失った里菜の肩を抱えて刃物の軌道から逃れようとする。

しかし、刃物は自動追尾弾のように二人が逃げた方向に進路を変え襲いかかってきた。

「マジかよッ…！」

雄真は予想外の事態に絶句する。

絶体絶命という状況の中、龍我はサイコチェンジャーを起動した

「サイコチェンジャー！」

龍我の身体を光が包み、サイコレッドが姿を現す。

直後、サイコガンを取り出し里菜と雄真目掛けて飛んでいく刃物のそれぞれに対して弾を発射した。

強化スーツの機能により動体視力が強化された龍我は弾の全てを的中させる。刃物はそれぞれ音をたてて粉々になった。

龍我は先ほどの回避行動によりやや距離の離れた二人に

「二人とも！ 変身して！」
と言った。

相手の攻撃を避けるにしても、迎撃するにしても、動体視力や身体能力の強化が必要だ。

そして何より生身で攻撃を受けるのを避けたい、という判断からの発言だった。

二人とも龍我の狙いをすぐさま理解し叫ぶ。

「サイコチェンジャー！」

里菜がサイコイエロー、雄真がグリーンに姿を変える。

「ヨツシヤア、来い！」

迎撃体制の整った雄真は気合い十分で雄叫びをあげる。

そして次に飛んできた4、5本の刃物は得意のパンチで全て打ち落とすとした。

刃物は全て地面に落ちる

「どんなもんだ！」

雄真は胸を張ったが、刃物はまた再び浮かび上がり、里菜の方へ向かった

「しまったー！」

と雄真は叫んだが、里菜は雄真が攻撃に対応している間にすっかりサイコガンを準備しており、銃撃で刃物を全て粉碎した。

これでひとまず攻撃を防ぐ手だてが見つかった。

あとは防御で時間を稼ぎながら、相手を発見し倒す方法を考えるだけだ。

一同、そう思い始めたところだったが、相手の対応の方が早かった。

また、相手の攻撃が来る。

そう直感し、冷静に対処しようとする龍我。

しかし、すぐに次の攻撃が今までの攻撃と気配の違うものであることに気がついた。

そして、攻撃が目視できる範囲まで来ると里菜、雄真も同様に危機を感じ驚愕した。

飛んで来るのは先程までと同じく鉄製ナイフや包丁などの刃物。だが、数が違った。正確に数えることは出来ないが、10や20ではない。100近くはあろうかという刃物が一斉にこちらへ向かってきていたのだ。

里菜は立ち上がれないまでもサイコガンを構え迎撃の姿勢をとる。その前方、雄真と龍我が彼女の盾になるように立った。そしてサイコガンを連射する3人。

一つ一つ破壊していくが、全部は撃ち落とせそうにない。

里菜の機動力が落ちていている事を承知している雄真が叫ぶ

「俺と龍我が時間を稼ぐ！ 里菜は早めに避ける！」

「くっ、すまない！」

里菜も悔しそうではあったが同意し早めの避難を始め、脚を引きずるように移動を開始する。

龍我と雄真は攻撃がヒットするギリギリまで銃撃を続けたが、やはり全ては撃ち落としきれない。

2、3本のナイフが龍我と雄真の眼前に迫ってきた。

龍我が

「ダメか……くそッ……」

と呟き回避に移ろうとしたその時だった。

ナイフが進行方向を転換した。

そして、少し先に逃げた里菜のいる方へ向かっていく。

「そんなッ！」

龍我は慌てたが、里菜は少し冷めたようなため息をつき、逃げるのをやめた。

里菜が飛んで来る刃物に向かって手をかざすと刃物は空中で動作を停止。続いてかざした手のひらをグッと握りしめると刃物は粉々に碎け散った。

「なるほど、その手があったんだあ」

と龍我は胸を撫で下ろす。

里菜は彼女の持つ能力、サイコキネシスで相手の攻撃を止めたのだった。

しかし、龍我がホツとしたのも束の間。サイコキネシスを使用した里菜が激しく咳き込み、喀血したのである。

「里菜―」

龍我と雄真が同時に叫ぶ。

どういふことだろう…？

龍我は混乱した。今の攻撃は里菜が全て防いだはず。何か、別の方法でダメージを与えられたのだろうか。

里菜自身も驚いたような様子だったが、すぐ冷静に言った

「先程、超力獣と交戦した時に、脇腹をやられた。肺かどこか、痛めているかもしれない…。今のは、その後、動き回った代償だろうな。心配するな、別に相手の攻撃じゃない…」

「本当、なんだな…。大丈夫なんだよな？」

雄真がちよつと不思議なくらい辿々しく聞いた。

里菜は

「ああ。」

と軽く返事をして続ける。

「それより、何度か攻撃を受けてわかった事がある」

「わかったこと？」

首をかしげる龍我に里菜が説明する

「相手の能力の事だ」

雄真は里菜が話している間も相手の攻撃が来ないか警戒を怠らなかつた。目線は攻撃が来る方向をしっかりと見ながら耳だけで話を聞いている。

それとは逆に龍我は里菜の話に集中していた。龍我は元来警戒心の薄い青年だ。

とはいえ、この状況でこれほどまでに警戒を解いてしまうのは、何かあつたら勘でわかるという確信があるからだつた。

正確に言えば、それすらない。生来、人並み外れ優れた第六感を備えていた彼にとっては視力より聴力より信頼できる感覚がそれであり、そうすることがごく自然なのであつた。

「まず、相手の狙いだが…」

少し溜めた後、里菜は言った

「私だな。」

「それは、里菜がケガしてるからトドメをさそうとして？ それとも相手に心当たりがあるの？」

「と、言うより私しか狙えないと言った方が正しいのかもしれない」

と言い里菜は手のひらを開いて見せた。

そこにあるのは肩こりに貼る磁気テープである

「何だこれ？ 肩こりに貼るヤツじゃん。里菜、肩こりなの？」

龍我が聞くと里菜が答える。

「ふむ…さっきの攻撃から逃げようとしていたときに、腰と足首に貼られているのに気がついた。おそらく、超力獣と戦っている時に貼られたのだと思う」

「超力獣に？」

と龍我は首をかしげた。

目の前の相手にやられたら流石に気づきそうなものだ

「いや、さっきお前たちに探してもらっていた交通事故の被害者にだ。戦闘中、助けを求めて抱きついてきたからな。そのドサクサに紛れてやったのだろう」

「で、これが何なの？ 普通のエレキバンにしか見えないけど…」

「わざわざ私に近づくりスクを冒して付けにきた事を考えると、このシールが相手の能力発動に大きく関わっているのは間違いないだろう…。始めは念力で一本一本刃物を操っているのかと思っていたが、そうではないな。それだと、今さっきの攻撃みたいに100本近くの刃物を見えない距離から一度に動かすのは至難だ。仮にそれができる能力者ならこんなチマチマ攻撃しなくても、直接私を殺しに来た方が早い」

そして少し何か考えてから続ける

「まあ、私がそれに近い威力のサイコキネシスを持っていることを敵が知っていれば話は別か…。ただ、状況から言っただけでもないか。おそらく、もう少し仕組みとしては簡単な能力で、磁気シールが発信器

のような役割をして相手を追い回すようになっていいるのだろう。それなら今まで起きたこと全てに説明がつく」

「じゃあ！・磁気シール剥がしたからもう大丈夫なんだね！」

龍我はガッツポーズしかけたが、里菜は首を横に振った

「いや、今持っているのは腰についていた物で、足首の物は遠くに投げたみたのだが、今の攻撃はソチラには一つも行かず、迷わず私を狙ってきた。一定時間なのか、ずっとなのかわからないが、一度貼られると技の効力が残ってしまうらしい。」

「何だよ、じゃあ防ぎようがないじゃないかあ！」

龍我は頭を抱えるが、里菜は冷静だ。

「いや、防ぎようはある」

「そんな方法があるの!?!」

龍我はこの状況を一気に打開する魔法のような手段を連想したが、里菜の説明はその期待からは外れていた

「防ぐにはおそらく、刃物を破壊するしかない。これを見てくれ」

里菜は自身の太ももを示す。

先程、攻撃を受けた箇所ので、変身して強化スーツを身に纏った今もまだその上からナイフが突き刺さるカタチになっている

「さっきから試しているんだが、このナイフ、全く抜けないんだ。つまり、私に命中した後も、このナイフには何らかの力が働いていると言うことだ。先程、アスファルトに刺さった時や雄真がパンチで打ち落とされた時も力を失わず、また襲いかかってきた。要するに人間の身体に当たっても物に当たっても止まらない。止められたのは銃やサイコキネシスで破壊した時だけだ。」

里菜の分析は的確なものだったが、それだけでは意味がない

「でも、さっきみたいに一度に何発も撃ってこられたら防ぎきれないじゃない」

里菜は

「そうだな……」

と龍我に同意したが、勿論諦めた訳ではない

「攻撃を完全に防ぐのは不可能だ。だから相手を叩くしかない」

「どうやって?」

里菜は遠くを指差して言う

「今までの攻撃は全部、アチラの方からしか飛んできていない」

「あ、そうか」

と龍我もそこまで言われて気づいた

「攻撃が来た道を辿ってアツチの方に行けば、敵がいるわけか。」

「そうだ、だから龍我、雄真! 残念だが、私は動けないからここに残る。二人で行って敵を叩いてくれ!」

しかし

「いや、ダメだ。お前を残しては行けない」

と雄真が里菜の作戦を拒否した。

「里菜、お前、相手の的になってるんだぞ。俺たちがアツチに向かってから、敵が撃ってきたらどうするんだ? あの追尾を、今のお前かわしきれるのかよ? 言っとくが、変身したからもうナイフが当たっても大丈夫何て事はないはずだぜ? そこら辺は敵さんも考えてるよ。さっきのあれはおそらく相手の気が通って殺傷力が増していた」

「お前、見ていなかったのか? 私なら、サイコキネシスで全て防げる」

自信満々といった様子の里菜に対して、雄真は呆れたという風にため息をついてから言った。

「ハア? 全部か? 相手は一度に100発くらい撃てるんだぞ。お前、何回サイコキネシス使う気だよ?」

「その何が問題だ?」

「そりゃあ、お前、能力使いすぎたら…」

「使いすぎたら、何なんだ?」

そう言われて雄真は考え込んでしまった。何か思うところがあるようだが、龍我にはさっぱりわからない。なので、直接思っていることを口に出してみた

「サイコキネシスで防ぐのはいいけど、使いすぎたらパンクしちゃうんじゃないの?」

里菜が答える

「私の能力は、どれだけ使ってもパンクしない」
すると

「そうだよな！」

と雄真が叫ぶ。

「そういうえば、里菜がパンクしてるの見たことねえ！」

雄真は驚いた様子だったが、しばらくして冷静に言う

「里菜、今の、本当か？」

「ああ。本当だ。」

「でも、お前のサイコネシス、あの威力だぞ…？ 何かリスクがあるんじゃないのか？」

里菜は少し口ごもった

「…。知らん」

「知らねえって、おい！」

「だが、今まで乱発しても気を失ったりした事は1度もない。せいぜい息がきれる程度だ。だから、私に構わず早く行け！」

雄真は少し迷ったようだが、決断した。

「里菜、やっぱりお前一人には出来ないな」

「だが、それでは敵を倒せない！」

雄真は里菜の言葉に直接は答えず龍我に語りかけた

「龍我！ 敵のところには俺一人でいく！ お前はここに残って里菜を守れ！」

第十八話 サイコロレンジャー暗殺計画（後編） 超能力者・草薙新の災難

東京都板橋区にあるとあるビルの屋上。

頭にズキズキとした痛みを感じた草薙新は

「くうっ…」

と唸り声をあげた。

そして、バンドナを巻き直した頭を思わず押さえて片ひぎをつく。こうした感覚は超能力での戦闘経験がない草薙にとっては初めてのものだった。先程の刃物を100本近く放った攻撃でエナジーを多量に消費してしまったらしい。

これが、真鍋翔太や早乙女神楽の言っていた「能力のパンク」というヤツなのか…。

この症状が更に進行すると、気を失うなどして戦闘不能になるらしい。サイコロレンジャー…翔太たちが何度か交戦して倒せなかったというだけあって、やはり手強い。

俺は、このまま負けてしまうのだろうか。そう思うと、草薙の胸に今までの記憶が蘇ってきた。

世の中には「機械に嫌われる人間」が存在する。

単に機械音痴な人のことを言う時もあるが、それとは別にその人が使うと何故か機械の調子が悪くなってしまふ、という人がいる。

多くの場合、その呼び名はそういった人を指して使われる。

草薙新は、そうだった。

幼い頃はお気に入りゲームがすぐに壊れてしまったりと、やや不便していたが、そんなに気にしてはいなかった。

草薙が自分の中にある不思議な力に自覚を持ち始めたのは中学時代。いつものごとく、授業に使うパソコンの調子が悪く、課題に苦戦していた時のことだった。

「また壊したのかよ、お前、変な電磁波でもだしてんじゃねえの？」

と友人にからかわれた時の事であった。

草薙はもしかしたら、そうかもしれないと思った。

そんなに本気だった訳じゃない。でも、所謂中二病というヤツだろうか。思春期特有のやや子どもっぽさをはらんだ自意識。そんな心理が草薙に行動を起こさせた。

その日の放課後。

自分の部屋に帰って、家族にも見られないようにドアに鍵を閉める。そして、半分バカバカしいと思いながら、半分期待しながら。右人差し指に神経を集中させ、部屋の壁に貼った当時の人気アイドルのポスターに向かって真っ直ぐ突き出した。

俺はあらゆる機械を狂わせる電波人間だ！ いけ、ビームか何か出ろっ！

そんな風に考えていると不思議な事が起こった。だがそれは、草薙が期待していた程派手な現象ではなかった。

ポスターを壁に留めている画ビヨウの一つ。右上のやや外れかかった画ビヨウがフワフワと宙を舞って草薙が突きだした右人差し指にくっついたのである。当時人気絶頂だったアイドルの眩しい笑顔を歪んだ珍妙な表情に変えつつ、ポスターの右上端がペロリと剥がれ落ちる。

始めは特に何の感慨もわかなかった。

でも、「何だ、これ？」とは思ったので、何度か他のものも指にくっつくのか試してみた。すると、自分が念じている間、右人差し指は釘やハサミなどを引き付けた。要するに鉄製の物。

どうやら、指が磁石のような性質を持ったらしい、ということがわかった。

これはすごい。

草薙はそう思つてすぐに家族や友人に見せて回った。当然、みんな驚きの声をあげる。だが、それだけだった。別に自分や他人の役に立つ訳ではない。『びつくり人間ショー』に出られるほど画的な派手さがある訳でもない。友人も家族も2、3回見たら飽きた。

何だか、そういう特異体質らしい。

と、いうことで自分も納得した。時々思い出した様に一人遊びで使っていたが、人に見せることは長年なかった。

そんな無駄な特技を持った草薙だったが、20代に入ると、その能力が実生活に役立ち始める。

大学を卒業してすぐに就いた賃貸住宅の営業の仕事は半年で辞めた。営業成績が悪かった訳じゃない。社交的な性格なので、営業職自体はむしろ向いていたくらいだ。

何が嫌だったのかと言うと、事務作業が嫌だった。営業という仕事は契約をとつたら自分でその契約の契約書類を作ったり、売上をデータ入力しなければならぬが、その時のパソコン作業が草薙にとっては堪らなく苦痛だった。

例の機械に嫌われる体質からパソコン作業の遅さは折り紙付き。営業で頑張つて契約件数を増やせば増やすほど比例して増大する大嫌いな事務作業。頑張つた成果が苦痛だなんて、草薙には耐えられなかった。

その後の草薙の主な収入源はパチンコだった。

賭事で生活費のほとんどを賄うなんて無謀かと思われるかもしれないが、草薙に言わせれば、そんな事はない。ここで草薙の持つ力が、ようやく役に立つのである。

パチンコ玉は鉄で出来ている。つまり、磁石に反応する物体だ。指に磁力を集めれば盤面の外からでもパチンコ玉を操作できるので、遊戯を有利な方向に進められる。草薙はその手口で収入を増やしていった。パチンコ業界用語でいうところの磁石ゴトに近い行為で、本物の磁石を使って行った場合には犯罪となるが、いくら儲けようと磁石など持っていないのだから、捕まえようがない。

実際、過去に2、3度磁力を強く使いすぎ、パチンコ台の磁気センサーを作動させてしまったことがあるが、証拠が見つからず特にそれ以上追及されることはなかった。

この力さえあれば、一生食うのに困りはしない。

そう思ったが、それと同時にこれからずっと自分はクソみたいな人生を歩むのだらうとも思った。

本当は再就職したいが、それは出来ない。パソコンはもううんざりだが、今時、パソコンないし精密機械を扱わない仕事なんてほとんどないからだ。だから、パチンコで稼いでいくしかない。でも、今の仕事じゃ、信頼できる仲間なんて出来ない。結婚どころか恋人も出来ないし、恥ずかしくて親戚や昔の友達にも会えない。

誰とも関わらず、寝て食って打つ。それだけをずっと繰り返して生きていくのだろう。

そんな生活を続けて3年程経ったある日のことだった。

それは半年ほど前。よく晴れた冬の日。

いつものようにパチンコで獲得した賞品を換金し、家に帰ろうとしたところだった。

「ねえ、ちよつといいかな?」

と背後から何者かに話しかけられたのである。

しまったな。今日、勝ちすぎたかな?

と草薙は思った。

草薙のようなパチプロと呼ばれる人種の人間にとっては、勿論賞金は多ければ多い程よいのだが、あまりに勝ちすぎるのにも問題があった。

所謂、ゴト行為。不正行為を疑われてしまうからだ。まあ、実際にそれに近いことはしているのだが。

もし仮にゴト行為を疑われてしまった場合、退店後、怖い風体の男たちに絡まれることがある。それは、行為の証拠は掴めないまでも確信を持った店側がソイツがもう来ないよう脅すため雇ったチンピラだったり、店の経営が傾いてその店舗でもう稼げなくなることや危惧した他のパチプロやゴト師だったりする訳だが、何にせよ、あまり穏やかな連中ではない。

とにかく、素直に刺激しない態度でいこう。

「ああつと、何ですかねえ?」

とペコペコ振り向くと、そこにいたのは、厳つい大男ではなく、一人の少年だった。

背は低いが、小学生には見えない。中学生くらいだろうか。何とな

く、頭のいい私立校に行っていそうな印象。紺色の制服の胸に大きく校章の刺繍がある。まるで、金持ち校に行っているを自慢しているみたいな制服だ。髪型は坊っちゃん刈りに近い。本当は伸ばしたいのかもしれないが、校則なのか親に言われてるのか、仕方なく目や耳にかかるところだけ刈り込んだ感じだ。

少年は唐突に言った

「おじさん、超能力者でしょ？ 僕たち、仲間を集めてるんだ。一緒に来ない？」

超能力？ 何の事だ？ て言うか、おじさんじゃねえ、お兄さんだ！ まだ俺は20代半ばだぞ！

と多少言いたいこともあったが、草薙はなんとなく少年についていくことにした。

チンピラに脅されると思っていたのに、話しかけてきたのが正反対のお坊っちゃんだったので、安心してしまったのかもしれない。

少年はとあるアパートの一室に草薙を案内した。

少年の仲間たちのアジト、という訳ではないらしく、少年が個人的に所有しているものらしい。それもただ密談をするときのスペースとして。

少年は

「僕は真鍋翔太。中学生。まあ翔太でいいよ。僕の方が先輩だけど、草薙さん、一応年上だしね。」

と自己紹介した後、超能力のことについて話し出した。

草薙の持つ指先に磁力を持たせる力が超能力の一つであるということ。長年悩まされた機械に嫌われる体質が、超能力の副作用…自分でコントロール出来ない磁力が精密機械を狂わせていたのかもしれないということ。翔太たちの仲間になれば、能力のコントロールやより適した使用法を教えてくれるということ。

そして何より、エナジーの質や量を高めていけばより強力な力が手に入り、最終的にはこの世の全てを見通し思うがままにできる、まるで神のような力が手に入るとのこと…。

草薙はすぐに少年たちの仲間になることにした。

何だか怪しげな集団であることは承知の上だった。でも、このクソみたいな人生から脱却し逆転するにはこれしかない。草薙にはそう思えた。

それからは一派の仲間で組織の内部担当だという、早乙女神楽による厳しい修行を受けてきた。

そして訪れた、この機会。サイコレンジャーの暗殺指令。

できればサイコレンジャーの戦い方を一度見てから挑戦できれば良かったが、トップで順番が回ってきてしまった。でも、こうなったらやるしかない。修行もしてきたし、能力を活かした戦い方も考えできた。サイコレンジャーを倒して、幹部に食い込み、神の力を手に入れるんだ！

草薙は心にそう誓っていた。

草薙が並々ならぬ思いで始めた戦闘。

超力獣を使い、そのドサクサに紛れて相手に磁気テープを貼る。そこまで完璧だった。そうすれば、相手の身体にS極の性質を持たせることができる。更に自分がエナジーを込めて強いN極の性質へと磁化させた金属を投げつければ、S極の性質を持った相手に物凄い勢いで飛んでいき、地獄の果てまで追いかける。

つまり、見つからない離れた場所から追尾弾を撃てると考えてよい。自分は安全で相手は回避不能。

なんて素晴らしい能力、なんて素晴らしい作戦なんだ！

そう自画自賛していたが、現実には思ったより厳しい。相手は強いし、体力の消耗も想像以上だ。

でも、絶対に神の力を手に入れてみせる。

草薙は屋上の手すり近くに設置した望遠鏡で標的の様子を改めて観察した。

そこには、磁気テープを張りつけ、ターゲットにしたサイコイエロー。そして後から登場したサイコレッドとグリーンの姿がある。何やら3人で話した後、グリーンがその場から離脱。レッドがイエローを守るように寄り添う。

グリーンはおそらくコチラへ向かってくるだろう。シミュレーション通りだな。

草薙はそう思った。

草薙の能力・磁力（マグネティックフォース）は一度シールを貼られてしまえば、回避不能の攻撃。だから、それを止めたければ放っている敵を倒すしかない。

また、磁力（マグネティックフォース）は遠距離攻撃故に同じ方角からしか攻撃できない。草薙のいる方向を推測することは簡単だ。だから、相手はなんとか距離をつめ接近戦に持ち込むことを考えるだろう。

能力の長所も短所もひっくりくるめて、草薙に戦闘シミュレーションの講師をした早乙女神楽はそう予想していた。

あいつの言った通り。変な奴らだが、やはりそういうところは幹部らしい。

草薙は感心した。

だが、ここで一つ誤算だったのは先程の戦闘で超力獣を倒されてしまったことだ。本当は追ってきたサイコレンジャーを超力獣で足止めしつつ、用意した「切り札」を使って磁気シールを貼ったメンバーにトドメをさすつもりだった。

だが、今、それは出来ない。先程の戦闘で、欲をかきすぎたせいだ。

概ね5人で行動するサイコレンジャーが何故かイエロー単独で現れたので、これはチャンスと超力獣で倒しに行ってしまった。結果、イエローは倒せず、時間をかけすぎた為に援軍もやってきて、超力獣も失った。

大失敗。

と、なると今できるのは、追いかけてくるサイコグリーンがこちらに来る前に逃げることに。

草薙は荷物をまとめ、その場から離脱。

そして「切り札」を隠した方へ向かって移動を始めた。

走りながら、草薙は左腕につけた時計で時刻を確認する。

サイコイエローに磁気テープを貼って、剥がすまで。かかった時間

が30分程度か……。まあ、十分だろう。

草薙はそう思った。

あの磁気テープは貼っている時間が長ければ長い程、貼られた人間の磁化の度合いは高くなる。今までは自分がエナジーを込めて磁化させ惹かれ合うようコントロールした金属を投げつけていたが、30分もたてば、その度合いは強くなり、周囲にある金属全てがヤツを襲うだろう。

そうすればきつと、用意した切り札を使う条件の整った場所へヤツらは勝手に移動してくれる。

事は概ね狙い通りに進んでいる。

だが、まだ油断するな。

草薙は普段から調子に乗りやすい自分に言い聞かせて、息を切らしながらも走り続けた。

V S包丁型超力獣

【雄真、敵が移動を始めたわ。たぶん、逃げるつもりだと思う】

まだ見ぬ敵の追跡を続けアスファルト上を全速力で駆け抜ける雄真。その耳にテレパシーでアスぴよんの声が聞こえてくる。

ある程度の方角さえ掴めば、千里眼を持つ彼女にとって敵の姿をとらえることは容易い。アスぴよんは敵の様子を雄真に逐一報告していた。

「そうか。でも大丈夫。もうすぐ、追いつけるはずだ！」

雄真は力強く宣言した。

アスぴよんからの情報によると相手は生身。自分に変身して強化スーツを着用しているし、元々サイコロンジャーの中でも随一の肉体派。雄真には必ず追いつけるという自信があった。

順調に走行を続ける雄真。その目の前を、右方向から一本の包丁が飛んできて猛スピードで通りすぎる。雄真は視界の端で包丁の陰をとらえた瞬間に走行を停止。身を仰け反るようにして包丁をかわした。仰け反った勢いでバランスを崩し腰を地面に打ち付けたが、痛がっている場合ではない。

さつき里菜を襲っていたのと同種の攻撃であることを警戒した雄真。

追尾してくるか…？

と、しばらく包丁の軌道を見守っていたが、包丁は遥か彼方に飛んで行った。

やはり、追尾できるのは磁気シールを貼った相手だけか…。

それとも、今追いかけている敵がいるのと違う方向からの攻撃ということは、攻撃している相手自体が違うのか。

答えは後者だった。

攻撃が飛んできた右方向を見ると、そこには細長い身体を持ち両腕に大きな刃物をつけた超力獣：おそらく包丁型の超力獣の姿。そして、その脇に中学生くらいだろうか、小柄な少年。坊っちゃんがりのヘアスタイルと、紺色の制服が特徴的だ。

雄真はその少年に見覚えがあった。弁当屋の事件の時に築地で戦った少年だ。

「お前、前にも会ったことあるよな？」

「へえ、覚えていてくれたんだ。嬉しいな。」

皮肉ではなく、少年は本当に嬉しそうだ。

「今、俺の仲間を攻撃してた超能力者は、お前の子分か？」

雄真が問うと少年は何やら考え始めた。

「子分？　そういう風にかのかな？　国生さんはよく『みんな対等』って言うけど。僕らの関係性：考えたことなかったな。でも、分かっていい響きだね。自分が偉くなったみたいでさ。」

よくわからない。質問を煙に巻こうとしているのか、こういう語り口をしたヤツなのか。

とりあえず、里菜を攻撃した能力者と何らかの繋がりはあるらしい。と、いうことは。

この少年の目的はおそらく足止めだろう。
戦って倒すしかない。

だが、これはまずい展開だ。直接相手になるのは超力獣一体だけだが、少年も何らかの超能力は持っているはずだ。里菜を罠に嵌めたように何か準備しているかもしれない。

雄真は警戒を強めた。

「相手の攻撃、止まったね。やっぱり、あの磁気シール剥がしたからかな？」

龍我は身体の数ヶ所から血を流しひざまずく里菜に言った。里菜はケガの痛みを堪えているからか、やや息を切らしながら答える

「そうかもしれない…。だが、まだ油断はできないぞ」

「でも、アスピョンがさつき、相手は逃走中って言ってたじゃん。もう俺達と戦う気ないんじゃないの？」

「逃げ切ったら、また攻撃してくるかもしれない」

里菜の言葉がピンと来ず、龍我は首を傾げた。その様子を察してだ

ろう、里菜は更に詳しく説明してくれた。

「もし、相手の能力が磁気シールを剥がされると効力を失う類いのものなら、龍我の言った通り、敵は戦意を喪失して逃げ出したのかもしれない。もう、攻撃手段がない訳だからな。だが、そうでない場合もあり得る」

「そんなことあるの？」

「勿論だ。超能力なんて、人間の持つ科学で証明できない力の総称みたいなものだからな。ある程度、統計的に常識のようなものはあるが、時たまそれを超える強力なものや特殊なものもある」

「そんな反則みたいなのアリ？」

改めて超能力というモノの滅茶苦茶さ加減に驚かされる龍我に里菜は

「だから『超』能力なんだよ」

と前置きして続けた

「今回の場合、相手には『標的に接触して磁気シールを貼る』という能力の発動条件があった訳だ。雄真が追いかけたらすぐ逃げたところから推察するに、肉弾戦に自信がある相手だとは思えない。私に直接シールを貼るのはかなり危険だったはずだ。でも敵はリスクを冒して発動条件を満たしに来た。つまり、相手にとって相応のリターンが見込まれる行為だったと考えていい。」

「シール剥がされて終わりじゃ割に合わないってこと？」

里菜は頷く

「そうだな。相手の能力がある程度強力なものでも私は驚かない。特に今回の相手は遠距離攻撃が得意なタイプだからな。逃げたって、戦いを放棄したとは必ずしもいえない。逃げ切れば私を倒せる自信があるのかもしれないな。例えばシールを剥がしても効果が永久に続くのだとしたら？」

里菜の問いかけに対する答えを想像し言葉を詰まらせる龍我。里菜は続けた。

「相手は時たま、気が向いたときになんとなく刃物を投げれば、ずっと私の命を狙い続けられる。私はオチオチ睡眠をとったり、風呂に入っ

たりすることも出来なくなる訳だ」

里菜はやや自嘲気味だった。まるで何か諦めてしまったように龍我には見えた。サイコロレンジャーとして任務を遂行する時にはリーダーとして強靱な意思を見せる彼女が、自らの命が危険に晒された途端にこうも変わるものだから、龍我には不思議に思えた。

それも、怯えるとか怒るとかそういう感じではなく、何かそれを受け入れてしまっているような。

里菜でも弱気になることってあるのかな？

そりゃあ、あるよね。リーダーでも、ヒーローでも、人間だもの。彼女の真意はよく分からないまま龍我は里菜を励ますことにした。「でも、そうはならないよ！ 雄真が相手を追ってくれてるし、純も向かってる。絶対相手を捕まえられるよ！ 俺もそれまで絶対里菜を守る！」

里菜は少しの間、沈黙した。何か引つ掛かったみたいなお様子だったが、しばらくしてから明るい声を作って言う

「そうだな…。まあ、そう悪い方に決まった訳じゃない…。」

里菜は少しふらつきながらも立ち上がる。

「大丈夫？」

心配する龍我

「ああ。それより、ここから離れよう。どれ程効果があるかはわからないが、少しくらい動いた方が敵への攪乱になるだろう」

里菜がそう言い、足を引きずりながら歩きだそうとした時だった。後ろ方向に停まっていた車がフワリと宙に浮き、二人のいる方向へ向かってきた。

龍我は例のごとくそれを察知する。いち早く車が飛んでくるコース上にポジションをとると両方の掌でそれを受け止めた。車はやはり里菜に向かっているようで、押さえようとしても、強い力でズリズリと近づこうとする。龍我は腕にドンドン疲労が溜まってくるのを感じた。

このままじゃじり貧、そのうち押し負ける。

そう思った龍我は

「フーン！」

と唸り声をあげながら腕に精一杯の力を込め車を投げ飛ばす。勿論、車はまたすぐ里菜と龍我のいる方向に向かって来た。しかし、龍我は車を投げ飛ばした事で生まれた衝突までの時間を利用し、サイコガンを取り出す。そして車に向かって銃撃。中のガソリンに引火したのか、車は爆発音をたてて四散する。

「な、何だよ、今のー！」

龍我は驚きの声をあげる。

今のも相手が放った弾なのか？

先程までの攻撃は相手のいる方角からしか向かってきていなかったが、今度は道に駐車してあった車が独りでに飛んできた。

今までとは明らかに異質な攻撃。新手の敵か、それとも相手の能力への認識が間違っていたか。

龍我も里菜も警戒を強めて辺りを見渡す。

すると、龍我の背筋に悪寒が走る。

「まずいー！」

龍我は事が起きる前に叫び声を上げて対応しようとしたが、間に合わない。辺り一帯に乗り捨てられていた10台以上はあろうかという数の車が一齐に二人の方へ向かってきた。

刃物のように突き刺さる訳ではないが、四方から迫ってくるので、このまま行けば圧死は免れない。

龍我はサイコガンを使って迎え撃つも、引き金にかけた指の動きが追い付かない。2、3台を破壊するのが精一杯。

ダメだ、やられる！

龍我はそう思ったが、身体の近くまで来たところで、全ての車が独りでに爆発した。

火の粉が身体に降りかかり龍我は

「熱ッー！」

と声を上げたがとにかく助かった。

でも、どういうこと？ これも敵の仕業？ 衝突寸前で爆破するつもりが、タイミングを謝ったのかな？

と思い、里菜に解説を求めようと、彼女を見ると、里菜は手をかざした格好で激しく息切れを起こしていた。

「大丈夫!？」

「ああ…」

里菜はそれ以上言わなかった。たぶん、息切れが激しく言えなかったのだろう。でもその様子から、今の爆発は彼女がサイコキネシスを使って起こしたものでろうとは龍我にも推測できた。

里菜は喘息の発作の後みたいヒューヒュー音をたて呼吸をしていた。

彼女の話によれば、普段、里菜に「能力のパンク」と呼べるような症状は表れないらしいが、これがそうでなければなんなのか。「短距離を走ったようにはなる」と言っていたが、何キロもペースを考えずに全力で走り続けたみたいになっている。

もしかしたら、今のは爆破した数が多すぎたのかもしれないし、さつきから戦闘で能力を酷使しているからかもしれない。とにかく、サイコキネシスで全ての攻撃を防ぎ続けるのは無理だ。

「里菜！ 逃げよう！ できれば、街から離れて、森か山か…そういう場所がいい…!？」

龍我が言うのと里菜が聞き返す

「どういうことだ?？」

今度は龍我の方が先に相手の能力の正体に勘づいていた

「たぶん、里菜の身体、今、磁石みたいになってるんだ!？」

「何だど?？」

「さつきのナイフや車も鉄が主な原料だから里菜に引き寄せられたんだ。だから街中だと危ない！ 金属の少ない場所に行かないと!？」

包丁型超力獣とその親であろう少年。

それに対峙する、サイコグリーンに変身した雄真。その上空にサイコバスターのピンク機が到着し、既にサイコピンクに変身した純が降り立つ。

「ごめん、遅れた。大丈夫?？」

謝る純に雄真はやや含みを持って答えた。

「大丈夫だ。俺はな…」

その様子を見て、少年は舌打ちした。

「なんだ、一人になっちゃったか…。じゃあ、後は頼んだよ」

少年は超力獣に声をかけて走り去る。

「あ、待てー！」

雄真が追いかけてしようとしたが、その前に超力獣が立ちふさがる。

「この野郎…！」

気がはやっている様子の雄真に純は冷静に言った

「雄真くん、今は彼を追うより、里菜を狙っている能力者を倒さないと

…」

「くっ…」

と息を漏らし悔しがる雄真は

「どちらにせよ、アイツをとっと倒さなきゃいけないんだなっ！」

と八つ当たるように超力獣へ突進した。

そして得意の右ストレートを見舞おうとしたが、超力獣はそれに反応して右手についた包丁を振り下ろしてきた。ボクシング経験者特有の優れた動体視力で攻撃を察知した雄真はパンチを中断し、後方に飛び退いた。

僅かに包丁に触れた強化スーツの指先部分に切れ込みが入る。

それを見た雄真は

「マジかよ…」

と息を飲んだ。

攻撃は完全に見切った。

なのに、ほんの少し触れただけでこの切れ味。肉弾戦で挑むは無謀であると悟るのに時間はかからなかった。

超力獣は

「ハハハ、どうだ、この鋭さ！ 俺の右手は出刃包丁！ どんな硬いものでも三枚おろしだ！」

と誇らしげだ。

「ならばー！」

と雄真と純は一斉にサイコガンによる銃撃を開始。超力獣には避けようとする様子がなく、弾は全弾ボディに直撃するが、全て弾き飛ばされてしまい、通用しないようだった。

「ハハハ、俺のボディは鉄製だから、柔なステンレス製とはひと味違うぞー！」

超力獣はまたも誇らしげに胸を張るが、純はそれを聞くと、やや冷たく、でも嬉しそうに言った

「へえ…いいこと聞いたな…」

そして超力獣に向かって手をかざし、パイロキネシスを発動させた。超力獣の身体を燃え盛る炎が包む。

超力獣は

「ギヤアアア！」

と声を発しながらのたうちまわった。

「やっぱり…鉄だから、熱には弱いんだね…」

能力の解放による快感に息を漏らしながら、純はそう言った。徐々に赤みをおび、変形していく包丁型超力獣の身体。

「よし、今だ！」

雄真と純は弱った超力獣に対し同時にサイコガンを発射。超力獣は爆散した。

しかし、今の二人に勝利の余韻に浸る暇はない。超力獣の最期を確認すると、すぐさま里菜を攻撃している能力者のいる方向へ走り出した。

切り札

「ハア、ハア……」

階段を15階まで上がり、暗い通路を抜けると、そこには青空が広がっている。

必死の逃亡を続ける草薙新は、目的地だった、とあるビルの屋上まで遂に辿り着いた。

今日、一体何メートル、いや、何キロ走っただろうか。こんなに必死に走ったのは生まれて初めてかもしれない。苦しかった、本当に苦しかった。でも、それももうすぐ終わる。

この場所も先程のビルと同じく、磁気シールを貼り標的にしたサイコレンジャーを攻撃するために用意したスポットだ。

他にも数ヶ所同じような場所を用意しており、そのいずれにも相手を見張るための望遠鏡や食料数日分、弾になる金属製品などを隠していたが、今回この場所のみを目標しまっしぐらに向かってきたのは、一つ訳がある。

ここには、サイコレンジャーにトドメを刺すための切り札を用意してあった。それは屋上のご真ん中に停まった1台のタンクローリー。タンクには可燃性液体プロピレンがいっぱいにつまっている。これを弾にしてサイコレンジャーにぶつけようと言う訳だ。

ナイフ類とは違い、これはたった一発だけ、とっておきの弾である。神楽や翔太のツテがなければ手に入らなかつただろう。無駄にする訳にはいかない。だから、用意した場所の中でも一番高い場所である、この廃ビルに停めておいた。

ここは都内だが、下町情緒の残るやや古びた街である。

ここからなら、他の建物に導線を遮られることもほとんどない。必ず命中させられる。

タンクローリーにエナジーを注入し磁化させる作業に移る前に草薙は周囲を見渡した。追手の姿は見えない。

うまく撒くことができたのだろうか。それともまだ追い付いて来ていないだけか。どちらでもいい。どうせ、この攻撃が失敗したら

う勝つ術はない。作業に集中しよう。

追手のサイコグリーンが来る前にこのタンクローリーを弾にして放ち、サイコイエローを、あわよくば一緒にいるサイコレッドも、もろとも始末するんだ。

草薙はまず、屋上端に設置した望遠鏡で先程、サイコレッドとイエローがいた辺りを覗き込む。しかし、そこにサイコレンジャーの姿は見えない。もう既に移動したらしい。

周りの車がなくなり、辺りに屑鉄や何かの燃えカスが散乱していることから、サイコイエローの身体がある程度まで磁化したことにより、車や周囲の金属がが奴等を襲い始めたと考えられる。

奴等が俺の能力のカラクリに気づいていたら都合がいい。

草薙はそう思った。

そうすれば、金属のある場所を嫌がり、彼らは街から離れていくはず。しかし、街から離れば離れる程、射線を遮る高い建物も周囲から少なくなる。こちらが放つ弾の命中率は上がる訳だ。

ただ、これからの作業には骨が折れるなど思った。相手の場所が掴めないのも、多少離れていてもしつかりサイコイエローを追跡出来るようタンクローリーには多量のエネルギーを込めなくてはならない。

草薙は車のドアを開き、中からアタツシケースを取り出した。この中には、これまた翔太たちのツテを使って手にいれた散弾銃が入っている。

この銃の弾は特別仕様で、鉄製。更にその弾は放たれた後、しばらく経ってから内蔵の火薬でバラバラになって対象物に飛んでいく仕組みになっている。直接の殺傷力はそんなに高くない。だが、弾が鉄製なので草薙の能力によって磁化させられることと、火薬が入っているのでタンクを爆発させる際の種火にできる所がこの作戦に使うには適していた。

草薙はその散弾銃を左手に持ち、右手でタンクローリーのタンクに触れた。目を瞑り神経を集中。自らの中にあるエネルギーを一気に流し込む。体力もエナジーも限界に近いレベルまで消耗したと思っていたが、作業は驚くほどスムーズに進んだ。

もしかしたら、戦いの中で自分の能力は進化していつているのかもしれない。そしてこれが翔太たちの言う「神の力」に近づくことなのかもしれない。

草薙はそう思った。

弾は予想以上に早く出来上がった。草薙はタンクローリーの後方部分に磁気シールを貼る。そして「いけっ！」と言いタンクローリーを押し出した。フワツと浮き上がり、方向転換をするタンクローリー。車体は草薙が押し出した方向から見て右側に旋回。徐々にスピードを上げながら飛んでいく。

そつちにいたか。

それによってターゲットのいる方向を認識した草薙は望遠鏡を移動させ、今度はそちらを覗きこんだ。そして彼らの姿を発見する。そこまで遠くへは行っていない。彼らは街中から程近い木々に囲まれた自然公園に身を隠していた。

思ったよりイエローの身体の磁化は弱いみたいだ。最大限まで身体の磁化が進めば半径3〜4キロの金属全てを引き付けるはずだから、そんなところにはいられない。

やはり早めにシールを剥がされてしまったのが祟っている。さすがサイコロレンジャーだ、と草薙は感心した。でも、そのマイナスは能力の進化が補ってくれた。

相手の身体の磁化が多少弱くてもタンクローリーの方に込めたエナジーが弾を相手のいる場所へ導く。

草薙は木々の隙間から覗く相手の姿の間抜けさを嘲笑った。

相手はこちらが飛ばしてくる弾をナイフなどの小物類だけだと思っただけか。木々で射線を遮れば防げると思っていないか。俺の能力は進化した。ついさっきまでの俺とは違う。こんなに巨大なモノにこれだけのパワーを込めて放つことが出来るんだ。そんな木の十本や二十本へし折っていくぞ！

タンクローリーは草薙の展望通り、公園の木々をへし折りながら二人のサイコロレンジャーへと向かっていく。

サイコロッドは誰かから通信を受けているのか、余程勘がいいの

か。いち早く反応しイエローの肩を抱え回避の姿勢に移るが、もう遅い。

草薙は左手に持っていた散弾銃を両手に持ち替えて引き金を引いた。

銃弾はタンクローリー後方部分に貼られた磁気シール目掛けて飛んで行き、直撃する。

ドカン！

と、とんでもなく大きな爆発音が発せられると共に公園全体が炎に包まれる。

【そこを右に曲がって、そこからずっとまっすぐ。そうしたら高いビルが見えるから。その屋上に相手がいるわ】

敵の追跡を続ける雄真と純。その耳にアスびよんからのテレパシーが聞こえている。

超力獣との戦闘には勝利したものの、かなり時間を稼がれてしまい、敵との距離はかなり離れてしまった。それでもアスびよんからの情報を頼りにやっと近くまでやってきた。

「よし、これで相手を捕まえられる…。待ってるよ、里菜、龍我！」
敵が潜んでいるというビルが見える位置までたどり着き、雄真がその気合いを入れ直した時だった。

再びアスびよんから通信が入る。

【雄真、純！ 急いで！ 相手が、タンクローリーに念を込め始めたわ！ たぶん、あれも弾にして飛ばすつもりよ！】

「えっ！ 嘘！」

「何イ！ そんなもんまで飛ばせるのかよ！」

二人は同時に声をあげた。

タンクの中身が何なのかは知らないが、危険物質なのは間違いない。それで里菜にトドメを刺すつもりだ。

何とか、間に合ってくれ。

二人はそう思いながら走るが、願いは届かなかった。

二人の目にビルの屋上から徐々にスピードを上げながら飛んでい

くタンクローリーの姿が映り込んでくる。

「くっ！」

純が足を止め、タンクローリーを撃ち落とそうとサイコガンを構えるが

「ダメだっ！」

と雄真が制止した

「気持ちにはわかるが…それはダメだ…。いくら何でも街の上空で破壊は出来ない…。」

タンクの中身が何なのか、雄真たちは知らない。もし破壊したら大爆発するかもしれないし、街に毒性の物質が降り注ぐかもしれない。雄真はそれを見越して言った。純は泣きそうな声を出した。

「でもっ！ 里菜がッ！ 龍我くんがッ！」

純の様には出来ないが、止めた雄真だつて気持ちは同じだ。

雄真はサイコチェンジャーを使い、龍我にメッセージを送る。

「龍我！ 逃げろ！ 逃げるんだ！」

タンクが迫っているという知らせはアスびよんから行っているだろうし、相手の攻撃を察知するという点に関して龍我はスペシャリストだ。雄真が大声を出してもしつこいだけで、意味はない。

そんなことは雄真本人もわかっていた。

それでも叫ばずにはいられなかった。

龍我からの応答はない。当たり前だ。

どんな状況であれ、龍我と里菜は今、必死に攻撃から逃れようとしている所だろう。雄真の通信に付き合う暇はないはずだ。

ビルから飛んで行ったタンクローリーの姿は遠くへ向かっていき、建物の陰に消えた。二人にはもう事の行方を見守ることもできない。

「くそ、何とか言ってくれよ…」

通信は繋がったままだ。

雄真と純は祈るような気持ちでサイコチェンジャーから聞こえてくる音を聞く。

しばらくすると、ドカン！

という大きな音を残して通信が切断された。

そして、タンクが向かっていった方向にあるビルの谷間から爆煙が上がっているのが見える。雄真も純も状況は理解できた。

おそらく、タンクには可燃性の物質が入っていて、それが爆発した。爆煙がここからでも確認できることを考えると、かなり巨大な爆発が起きたのだろう。サイコロレンジャーのスーツで身体が強化されているようが、ともに食らっていれば二人は助からない。敵の攻撃の特性から考えると、二人が生きている可能性は限りなく低く思われた。

純はその場にへたれこんだ。

「そんな…そんな…里菜…龍我くん…嫌ッ…！」

雄真は絶望する純に向かって怒鳴る。

「純、オイ、バカッ！ 泣くんじゃねえ！ まだ死んだって決まった訳じゃねえし…てか、アイツらが、アイツらがそう簡単に死ぬ訳ねえんだよ！」

言葉は純に向かっていたが、本当は自分に言い聞かせていた。

そうだ、あの二人…一人はサイコロレンジャーがメンバーの死によって次々入れ替わっていく中で唯一創設時から生き残る百戦錬磨の戦士。もう一人はキャリアは浅いがどんなピンチもケロツと笑って切り抜ける憎たらしいくらい能天気な男。殺したって死にそうにない奴らじゃないか。

「里菜も龍我也生きてる！ 絶対、負けたりなんかしないんだ！」

雄真はサイコチェンジャーに向かって再び叫ぶ

「龍我！ 龍我！ 応答してくれ！」

絶体絶命

龍我と里菜は、先程、バイク型超力獣と戦った現場から5〜6キロ離れた板橋区自然公園に身を隠していた。

自然公園というだけあって、辺りに遊具等はなく、ただ木々に囲まれた広場：というより手入れもあまりされていない様なのでイメージとしては住宅街にポツンとできた雑木林に近い。

あまり人も寄り付きそうになく、誰が何のために作ったのかわからない様な所だが、今の二人にとっては都合がよかった。里菜の身体が磁化してしまっているのは相変わらずで、ここに来るまでも引き寄せられてきた鉄製品をいくつ破壊したかわからないくらい破壊している。

ただ、そうしながら移動してくる内に、里菜に引き付けられる金属はせいぜい半径200〜300メートル程の近きにあるものだけで、相手が直接飛ばしてきた刃物類と比べると、かなり範囲が限られることもわかった。

この公園ならある程度、規模があり、余計な遊具等もないので、街や凶器になりうる金属から十分に距離をとれる。また、木々に囲まれているので、遠距離攻撃に対しては視線も遮る事もできる。

どうせ、相手の能力から完全に逃れるには、雄真と純が敵能力者を倒すのを待つしかない。ならば、遠くへ移動するよりリスクの少ないこの場所で身を隠していた方が良いだろう。

それが龍我の判断だった。

純と雄真が、少年の放った超力獣と交戦し、それを撃破したという情報はアスビよんのテレパシーを通して里菜と龍我にも知らされていた。

相手の親玉の超力獣を攻略したということとは、足止めはもうないだろう。龍我は良い知らせを期待しながら待っていた。

里菜はそれとは反対に神妙にしている。ケガの痛みもあるだろうが、彼女は今までの経験上、こういった複雑な能力の使い手の恐ろしさを龍我よりずっとよく知っていた。

念力（サイコキネシス）や発火能力（パイロキネシス）のような直接的な能力とは違い、意図の掴めない動きから予期しない攻撃がくる。今、相手にしている能力者の力は、そういった防ぐ側にとって難しいタイプの能力なのだ。

尤も、発動条件など色々な制約があるから能力を使う方も苦勞するのだが。

龍我に里菜のその感覚はわからない。戦闘経験の少なさはあるが、どちらかといえば、彼の性格による面が大きい。

龍我はこれから起きる悪いことについて考える意識が人一倍希薄だった。生まれつき鋭い勘を持つ彼はイチイチ考えなくても危機が迫れば「何となく…」で回避することが出来ていた。戦いの中での話だけでなく、幼い頃からずっとだ。

つまり、嫌な思いをした、痛い思いをしたという失敗経験の少なさが、彼の人格形成から不安という要素を奪い去り、彼を異様にポジティブな人間にしていた。

そこが戦士としての経験を一番の武器とし人格の基にするサイコイエロー・一色里菜と感覚の人であるサイコロッド・北神龍我の決定的な意識の差であった。

だから、アスびよんから

【敵が大きなタンクローリーを放ってきたわ！ たぶん、あれも敵の弾…追いかけてくるわよ！ 中身はわからないけど、危険物質がつまってるはず…！ 早く逃げてー！】

とテレパシーで通信が入った時にも対応方法が分かれた。

龍我は直感的にかなりマズイことになったとは感じつつも、二人共に生き残ることを考えた。

「よし、早く逃げなきゃー！」

と里菜の肩を担ごうとしたが

「いや、いい」と里菜はそれを振りほどいた。

「敵の的は私だ。龍我、お前は一人で逃げろ」

「里菜はどうするのさ!?!」

「ここに残る。下手に動いてタンクに追い付かれたらマズイ。この公

園を一步出たら住宅街だ。爆発でもしてみろ。たくさんの人を巻き添えにすることになる」

「わかるけど…。だから、里菜はどうやって脱出するの？」

龍我は未だに出血を続ける里菜の傷口を見ながら言った。

タンクローリーはおそらく先程の刃物と同じ様に里菜を追いかけってくるのだ。その足でどうやって逃げ切るのか。龍我はそういった意味で聞いた。

里菜はその質問に答えなかった。

「これからの話だが…。龍我、お前は凌を守れ」

「へ？」

龍我は思わず首をひねった。何で急に凌の話をするのか。誰かに命令された訳ではないが、彼は今、国会議事堂での事件の件で活動自粛中だ。緊急事態なら出てくるかもしれないが、今のところ、この戦いに参加しているという情報はない。何か、今、彼の身に起きているのだろうか。あるいは、そこに何かこの局面を乗り切るヒントがあるのだろうか。

真意を汲み取る為、龍我は更に深く里菜の言葉に耳を傾けるが、どちらでもなさそうだった。

「宝来財閥は一枚岩じゃない。宝来茂一様やその一党は今のサイコロンジャーのあり方を良しとはしていないんだ。だから、中島健吾の事件の事で落ち度のある凌はこれから彼らに攻撃されるだろう。謹慎や脱退を命じられるかもしれない。」

「うん…？」

タンクが来るまで時間がない中、なんでそんな話になるのか龍我にはわからない。

「でも、サイコロンジャーにはアイツが必要だ。みんなそれぞれ特徴があるが、全体の事を一番把握できるのは凌だ。次のリーダーはアイツがいいだろう。」

「え？ 次のリーダー？」

「ああ。お前は前向きでリーダーにも向いていると思うがさすがに経験が浅すぎる。純は気が利いて優しいが少々危なっかしい。年長は

雄真だが、性格的に気のいい兄貴分位の方が合っているだろう。」

「ちよつと！ ちよつと待ってよ！ リーダーは里菜だろ!？」

サイコレンジャーには役職がある訳ではないのだが、断トツの古株なので、ほとんどの場面で里菜が指揮を執っている。

つまり、実質リーダー。二人はその共通理解に立って話をした。

それにしても、この場で次のリーダーを指命するというのはどういう事だろうか。龍我は嫌な予感がした。それをかき消したくて思わず叫んだが、里菜の答えはこうだった。

「仕方がないだろう。相手の能力は回避不可能だ。危険な物質が詰まっている可能性が高い以上、こちらに来る前に街の上空でタンクを破壊するということも出来ない。戦いを続けていく以上、いつかこうなると覚悟は出来ていた。とにかく、お前まで死ぬな。逃げろ。」

言葉の通り、覚悟はできている様だった。もう運命に抵抗する気がないといった感じで妙に落ち着いている。何か切腹する前の侍の様な一見立派に見える態度だったが、その姿を見ると、龍我の腹に何か込み上げてくるものがあった。そして龍我は言った。

「よし、決めた。俺もここに残るよ。」

「お前、何を言っている!？」

今度は里菜が叫んだ。

「今日の里菜、ムカつくんだ」

龍我の言葉を聞いて里菜はギョツとした様だった。

能天気なこの青年は普段その様なことを決して言わないから、彼を知る者なら当然の反応だろう。

龍我は自分でも自分らしくない言葉を吐いてしまったな、と思つたが取り繕って話す余裕もないので続けた。

「何でそんな簡単に諦めるんだよ！ 最後まで俺と、みんなと一緒に戦ってくれよ！」

「諦める？ そうじゃないだろう！ ここから逃げればたくさんの方が巻き添えになるかもしれないんだぞ！ 危険な超能力者や超力獣から人々を守るのがサイコレンジャーの役目だ、私一人の為にそんな危険は犯せない！ 私が囿になつてタンクはここで処分する。敵の

能力者は残ったお前たちが倒してくれればいい。それが今出来るベストなんだ！」

「そんな訳ない！ 里菜が犠牲になることがベストな訳がない！」

「龍我、落ち着いて考えろ！ とにかく逃げるんだ！」

「落ち着いてるよ！ でも、サイコロレンジャーの使命がみんなを守ることなら、里菜は生きなきゃ！ 里菜はこれまでも長い間たくさんの人を救って来たんだ！ ここを乗り切れば、これからだって！ だから里菜は生き残ることを、絶対諦めちゃいけないんだ！ それが使命なんだ！」

「だが、これしか手がないだろう…」

「もし里菜が諦めるつもりなら、俺が絶対諦めない！」

二人の議論に答えは出なかった。それよりも先に危機が迫ってきた。周囲の木々がミシミシと音をたて始める。相手の放ったタンクローリーが木をなぎ倒しながら近づいてくる音だ。

「くそっ！」

龍我は吐き捨てた。

里菜には感情的に啖呵をきつたが、対抗策など勿論用意していない。俗にいう走馬灯というヤツだろうか。タンクローリーが迫る中、龍我は様々考える。

何か、ないか。逃げるのはたぶんムダだ。先程の刃物の様に追尾してくる可能性が高いから。

じゃあ、今までと同じようにサイコガンで破壊する？

それもダメだ。タンクの中が可燃性の物質だと爆発する恐れがある。と、いうか相手がこの攻撃で自分たちにトドメをさそうとしているなら、その可能性はかなり高い。あるいは毒ガスの類いか。どちらにせよ、タンクは破壊せずに済ませたい。

じゃあいつそ、あれを自分が受け止めて、その内に里菜を逃がしたらどうか。でも今の里菜の足では逃げるのに時間がかかる。

サイコフライヤーを使えばどうだろう？

それもよした方がいい。今の里菜の身体は強力な磁力を放っている。乗り込んだら機械が狂ってしまうかもしれないし、そもそもサイ

コフライヤーって何で出来ているんだろう？

鉄が使われていたりしたら、里菜の身体がくつついて逆に身動きが取れなくなってしまうかもしれない。ていうか、あれだけ大きい車を俺、受け止められるだろうか。

更によれば、そもそも、相手はタンクの中身の物質で攻撃を仕掛けるつもりなはず。と、いうことは、時限装置がついてるとか、何らかの方法でタンクを破壊する方法は用意しているだろう。

ダメじゃん。里菜は逃がせるかもしれないけど、受けとめてる間にそれされたら俺死ぬじゃん。

里菜に自分を犠牲にするなど言っておいて、自分がそれは出来ないな…。

「よしー！」

龍我は決断し、里菜の身体をおんぶする様なカタチで背負う

「何をする気だ!？」

里菜の問いに龍我は答えた

「えつと…わかんない！ とりあえず逃げよう！」

「だから言わんこつちやないだろう！ 今からでも私を置いて逃げるおお！ 龍我あー！」

龍我の背中の上でジタバタ暴れる里菜。

龍我は

「いやだああ！ 意地でも助けるんだああ！」

とそれを押さえつけようとする。

龍我の腕についたサイコチェンジャーから雄真の応答を求める声が聞こえているが、それに回答する暇も惜しんで揉み合う二人。無益な争いを続けている間にもタンクは迫ってくる。そして終局は訪れた。

二人の身体に4〜5メートルと迫ったところでタンクローリーが眩い光を放つ。

そして

「ドカンッ！」

と大きな音がすると同時に火炎が二人を一気に包んだ。

どうやら相手がタンクを起爆させたらしい。

これは逃げられない。先程から抵抗を続けていた龍我にもすぐわかる巨大な爆発だった。

ついさっきまでコントみたいなのヤリトリをしていて、ピンチだと思いつつも死ぬ気なんて微塵も感じてなかったのに。

「死」って意外とこういう滑稽なモノなのかもしれない。

龍我はそんなことを考えながら気を失った。

サイコゴールド

「やったあああ！」

草薙新はビルの屋上から望遠鏡で自らが放ったタンクの向かった先を改めて確認し、雄叫びを上げる。

サイコレッド、サイコイエローの隠れていた公園全体を炎が覆っている。黒煙はモクモクと立ち上ぼり、まるで火山の噴火の様だ。

あれだけの大爆発を至近距離で受けたんだ。二人ともさすがに生きてはいまい。正直言つて、ここまでの戦果は期待していなかった。翔太や他の国生一派幹部連中が何度も交戦し倒せなかったというサイコレンジャー。まさか二人も殺れるとは。これで神の力に近づいた。

目を瞑り歓喜に酔う草薙だが、しばらくして、首元にひんやりとした感覚を覚えた。

何だ、これ？

目を開いて見てみると、首に長い刃物が突きつけられていた。どう見てもナイフや包丁ではない。剣と言つていい長さだろう。更にその刃物の先を確認していくと、そこには草薙がまだ目にしていない青色の戦士の姿があった。

サイコブルー、風祭凌である。

草薙は血の気が引いていくのを感じた。あまりにタイミングが悪い相手の援軍。

とりあえず、しらばつくれるくらいしか手が思いつかなかった。

「な、な、何すか？ この剣。本物？ 怖いなあ、止めてくださいよー」

しかし、サイコブルーは冷淡に言った

「しらばつくれようとしてるでしょ？ 君の魂胆くらいはわかる」

そもそも通用すると思つた訳ではないが、言つていて恥ずかしくなるくらい見事に見破られていた。

なら、攻撃して隙をついて逃げるしかないか。まあ、この距離だと磁気による攻撃は難しいので殴りかかるくらいしか出来ないが…。

そう草薙が考え行動に移ろうとすると、サイコブルーは草薙が動か

そうとした右腕を軽く捻って草薙の身体を地面に押さえつけた。

「だから、僕にはわかるんだよ。君の悪だくみが。」

「くっそお…そんな…」

さすがに観念しようとした時だった。

草薙は身体に異変を覚えた。右の太腿のあたりから、何か熱さと痛み、震えがいつしよくたになった様な感覚が伝わってきて、それがたちまち身体中に広がっていく。喉の方まで来ると、呼吸が困難になってきた。

何とか息を吸い込もうと必死に喉を広げるが、震えの間隔が段々と短くなり「んあああ…！」とうなり声が出るだけだ。

何が起きている？

それを把握するため、謎の感覚の発端である太腿に震える手で触れてみる。すると、ズボンのポケットに何か四角いモノが入っていることに気づいた。

草薙は思い出し、そして理解した。

ポケットの中にあるのはサイコロンジャーとの戦闘に入る前に、神楽がくれた御守りである。

「御守りなんて気休めにもならない」

なんて思いつつも、自分の知らなかった奇跡の様な力を教えてくれた彼女のこと。もしかしたら何か考えがあるのかと思い、言う通りに戦闘中もずっとポケットの中に入れていた。

しかし、彼女の考えは、草薙の想像よりもずっと恐ろしいものだった。草薙は御守りというモノのイメージから自分がピンチに陥った時、彼女の込めた念が自分を救ってくれるのではないか、といった事を期待していた。だが、御守りというのは、要するに呪符の一種である。神楽がこの呪符に込めた念は、草薙が敵に捕らえられそうになった時に、口封じに彼を始末する為のモノだったのだ。

草薙もそれに気づいたが、もう事は本人にはどうにもならないところまで至っていた。

「くっぞお… あああ！ かぐららアアア！」

力を振り絞ってその言葉を吐いたが、気持ちも身体も楽にはならな

い。全身が痙攣をおこし、口から泡が吹き出してきた。

「オイ、君！ 大丈夫か!？」

さっきまで自分の身体を押さえつけていたサイコブルーまでもが心配しているのを見て、草薙は自分の状態の悪さを悟った。

もうダメだ。クソみたいな人生から抜け出せると思ったのに。結局俺はいらぬモノとして処分されるんだ。

草薙はそう思った。

そして次第に意識はブラックアウトしていく。

眩い閃光とけたたましい爆発音。

その記憶を残して意識を失っていた龍我は硬いアスファルトの上で目を覚ました。

あれ、死んでない。

と、龍我は驚いて辺りを見渡す。

横に里菜がいる。里菜は龍我より早く気がついていた様で既に膝立ちで何か見つめている。いや、よく見ると睨み付いているという感じの鋭い眼光を何かにぶつけている。

また、敵か!?

龍我は里菜の視線の先を追った。

すると、そこには全身金色の戦闘用スーツを纏った男の姿があった。紛れもなく、自分達がいつも使っているサイコレンジャーの戦闘用スーツだ。

ただ、色が違う。言うまでもないが、サイコレンジャーはレッドの龍我、ブルーの凌、イエローの里菜、グリーンの雄真、ピンクの純で構成されている。

この金色の戦士の正体は何なのか？

龍我は疑問に思っていたが、里菜は感づいていたようだ。

「瞬間移動か…?」

里菜がそう言葉を発すると金色の戦士は自慢げに言った

「その通り。危ないところでしたねえ。僕がテレポートで助けてな

「かつたらお二人とも死んでましたよ」

感謝しろ、と言わんばかりの口振りだ。龍我はそのやや嫌味な語り口に覚えがあつた。

「あ、樋村透くん!？」

宝来邸での事件の時に会った超能力者養成学校卒だという若い男。宝来源三の三人いた護衛の一人だ。この前の国会議事堂の事件で中島健吾を仕留めたのもこの青年だ。

「おや、覚えていてくれました?」

透は何だか楽しそうに話しているが、里菜は問い質すように言う

「お前、何故来た? 緊急時以外サイコチェンジャーの使用は禁止されてるだろう」

「今、緊急時じゃないんですか?」

「そもそもここに来ているのがおかしいだろう。お前の任務は護衛なのだから」

「護衛、辞めました」

「何?」

話が見えていない里菜に、透は改めて楽しげに言った

「今日から僕はサイコレンジャー第二部隊のサイコゴールド。樋村透です。」